A 6号住居址出土土器

A 8号住居址出土土器

松本市文化財調査報告 No.20

松本市内田雨堀遺跡

―緊急発掘調査報告書―

1981.3

松本市教育委員会

序

雨堀遺跡は松本市の東南端にあり、崖の湯の登り口に位置します。この雨堀遺跡のある内田地区周辺の東山山麓は、古くは縄文時代から中・近世に至るまでの多くの遺跡が残され，隣接する塩尻市片丘地区とともに、早くから識者の注目するところとなっていた場所でもあります。

しかしながら，近年この地区に土地改良総合整備事業が計画され，通称「あんぼり」と呼ばれている堀を埋め立て、周辺一帯を畑作地として整備を行うことになりました。そのため本市教育委員会では文化財保護の立場から、事業予定地内の遺跡の発掘調査を行い、記録保存をすることとし、日本考古学協会員大久保知巳氏に団長をお願いして、雨堀遺跡調査団を編成し調査しました。

調査は炎暑の下、2ヶ月にわたり、団長、各調査員・調査補助員の非常な熱意と地元整備委員会史談会、老人クラブ有志、その他多くの皆様方のご協力により無事終了し、予期以上の成果をあげることができました。その詳しい経過・結果は本書に記したとおりであります。

ここに紹介する資料が今後の文化財保護と、地域の人々の歴史を考えていく上で何らかの参考になれば幸甚に存じます。

最後に今回の調査にあたりまして、多大なご理解・ご協力を下さいました関係各位に心からなる謝意を表して序といたします。

昭和56年3月

松本市教育委員会教育長　中　島　俊　彦

例　　言

1. 本書は1980年7月20日から9月23日にわたって行われた、松本市内田雨堀(あんぼり)遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2. 本調査は松本市が雨堀遺跡調査団（団長　大久保知巳）に委託をして行ったものである。

3. 本書の執筆は調査員・調査補助員が分担して行い、文責は文末に記した。

4. 遺物の整理・製図、遺構の製図は原則として執筆担当者が行ったが、作業の過程で次の方々の協力を得た。

   竹原　学、小口妙子、滝沢智恵子

5. 本書の編集は、熊谷康治・直井雅尚の協力を得て事務局が行った。

6. 遺構の水平基準線上の数字は海抜標高を示している。

7. 出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目　　次

序
例　言
目　次
第1章　調査経過
第1節　調査に至るまでの経過 …… 1
第2節　調査日誌 …… 2
第2章　遺跡とその環境
第1節　遺跡付近の自然環境 …… 8
1. 位置と地形 …… 8
2. 遺跡周辺の地質 …… 9
3. 遺跡の岩石と地層 …… 11
4. 地形の形成 …… 12
5. まとめ …… 15
第2節　周辺遺跡 …… 16
第3章　調査結果
第1節　住居址 …… 21
1. A1号住居址 …… 21
2. A2号住居址 …… 26
3. A3号住居址 …… 31
4. A4号住居址 …… 37
5. A5号住居址 …… 44
6. A6号住居址 …… 48
7. A7号住居址 …… 55
8. A8号住居址 …… 56
9. A9号住居址 …… 65
10. A10号住居址 …… 71
11. A11号住居址 …… 79
12. A12号住居址 …… 81
13. A13号住居址 …… 83

14. A14号住居址 …… 87
15. A15号住居址 …… 93
16. A16号住居址 …… 97
17. A17号住居址 …… 99
18. B 1 号住居址 …… 102
19. B 2 号住居址 …… 105
第2節　配石址 …… 109
第3節　列石状遺構 …… 110
第4節　遺構外出土の遺物 …… 112
1. 0地点出土品 …… 112
2. A地区出土品 …… 112
3. B地区出土品 …… 115
第5節　雨堀遺跡出土の骨類について …… 118
第4章　結　語 …… 120

付　「雨堀を訪ねて」　明善中学校　3年1組　感想文 …… 139

図　目　次

第1図　遺跡の位置及び周辺遺跡 …… 7
2　遺跡の地層断面 …… 10
3　雨堀両岸の地層断面 …… 14
4　発掘調査区及びグリット設定 …… 18
5　A地区グリット設定及び遺構分布 …… 20
6　A1・2号住居址上部集石 …… 21
7　A1・2号住居址 …… 22
8　A1号住居址出土土器(1) …… 24
9　〃　(2) …… 25
10　〃　出土石器 …… 26
11　A2号住居址出土土器(1)・土製品 …… 28
12　〃　(2) …… 29
13　〃　出土石器 …… 30
14　A3号住居址 …… 32
15　〃　出土土器(1) …… 34
16　〃　出土土器(2) …… 35
17　〃　出土石器 …… 36
18　A4号住居址・ロームマウンド …… 38
19　A4号住居址出土土器(1) …… 39
20　〃　(2) …… 40
21　〃　(3) …… 41
22　〃　(4) …… 42
23　〃　出土石器 …… 43
24　A5号住居址 …… 45
25　〃　出土土器 …… 46
26　A5・6号住居址出土石器 …… 47
27　A6号住居址 …… 49
28　〃　遺物出土状態 …… 50
29　〃　出土土器(1) …… 52
30　〃　〃　(2) …… 53
31　A7号住居址上層集石(上)・A7号住居址(下) …… 54
32　A7号住居址出土石器 …… 55
33　A8号住居址 …… 57
34　〃　遺物出土状態 …… 58
35　〃　出土土器(1) …… 60
36　〃　出土土器(2) …… 61
37　〃　出土土器(3) …… 62
38　〃　出土石器(1) …… 63
39　〃　出土石器(2) …… 64
40　〃　出土石器(3) …… 65
41　A9号住居址 …… 66
第42図　A9～15号住居址出土土器(1) …… 67
43　〃　(2) …… 68
44　A9号住居址出土土器 …… 69
45　〃　出土石器 …… 70
46　A10号住居址 …… 72
47　〃　出土土器(1) …… 74
48　〃　〃　(2) …… 75
49　〃　〃　(3) …… 76
50　〃　出土石器 …… 77
51　A11・16号住居址 …… 78
52　A11・12号住居址出土土器 …… 79
53　A11号住居址出土石器 …… 80
54　A12号住居址 …… 82
55　A12号住居址出土石器 …… 82
56　A13号住居址 …… 84
57　〃　出土土器 …… 85
58　〃　出土石器 …… 86
59　A14号住居址 …… 88
60　〃　出土土器 …… 90
61　〃　出土石器(1) …… 91
62　〃　出土石器(2) …… 92
63　A7～14号住居址出土土製品 …… 93
64　A15号住居址 …… 94
65　〃　出土土器 …… 96
66　〃　出土石器 …… 97
67　A16号住居址出土土器・土製品 …… 98
68　〃　出土石器 …… 98
69　A17号住居址 …… 100
70　A17号住居址出土土器・土製品 …… 101
71　B1・2号住居址 …… 102
72　B1号住居址出土土器 …… 103
73　B2号　〃 …… 106
74　B1号・2号住居址出土及び表採石器 107
75　配石・配石出土土器 …… 108
76　配石・列石出土石器 …… 109
77　列石遺構実測図 …… 111
78　0地点出土土器(1) …… 113
79　〃　(2) …… 114
80　〃　出土石器 …… 115
81　表採石器(1) …… 116
82　〃　(2) …… 117
83　遺構外出土土製品 …… 117

表　目　次

第1表　鉢伏山地西ろくのたい積層と地形面 …… 9
2　塩沢川・舟沢川複合扇状地（上流）地形面の対比〔比高は現河床より〕 …… 12
3　雨堀遺跡出土石器一覧表 …… 125

図　版　目　次

第1図版　調査地
2　A1・2号住居址
3　A2号住居址遺物出土状態
4　A3号住居址
5　A3号住居址炉址・埋甕
6　A4・5号住居址
7　A7号住居址
8　A6号住居址
9　A6号住居址遺物出土状態
10　A17号住居址
11　A8号住居址
12　A8号住居址土器出土状態
13　A8号住居址土器出土状態
14　A9～16号住居址
15　A10・13・15号住居址
16　A9～11・14号住居址炉址
17　A9～15号住居址土器出土状態
18　B1号住居址
19　配石、列石
20　遺物出土状態
21　出土土器(1)
22　〃　(2)
23　〃　(3)
24　〃　(4)
25　〃　(5)
第26図版　出土土器(6)
27　〃　(7)
28　〃　(8)
29　〃　(9)
30　土器細部
31　出土石器(1)
32　〃　(2)
33　〃　(3)
34　〃　(4)
35　〃　(5)
36　〃　(6)
37　〃　(7)
38　〃　(8)
39　〃　(9)
40　〃　(10)
41　〃　(11)
42　〃　(12)
43　〃　(13)
44　〃　(14)
45　表採石器
46　出土、表採石器
47　出土土製品
48　調査地（A地区）近景
49　調査スナップ

第1章　調　査　経　過

第1節　調査に至るまでの経過

雨堀遺跡は以前より土器片や石鏃が表面採集されていた遺跡で、周知の遺跡であるが、この遺跡範囲内をも含めて、昭和54年度より56年度にわたって約30haを対象に市単独事業による構造改善事業が行われることとなりそれに先立って、遺跡の発掘調査を行うこととなったものである。

調査にあたって市では独自に調査を行えないため、大久保知巳氏に調査を依頼し、業務委託契約を7月20日に結んだ。

発掘調査団を下記のように編成し、高校クラブおよび地元より協力を得た。

調　査　団

団　　長	大久保知巳（日本考古学協会員	国鉄職員）
調査員・調査補助員	三村　　肇（長野県考古学会員	会社員）
	山越　正義（長野県考古学会員	旭町中学校教諭）
	浅輪　俊行（長野県考古学会員	松本社会保険事務所職員）
	太田　守夫（	元小学校長）
	小林　康男（日本考古学協会員	平出考古博物館学芸員）
	山田　瑞穂（日本考古学協会員	三郷小学校教諭）
	西沢　寿晃（日本考古学協会員	信州大学医学部助手）
	熊谷　康治（長野県考古学会員	松本市立博物館職員）
	山本　紀之（長野県考古学会員	会社員）
	平林　　彰（長野県考古学会員	日本大学学生）
	臼居　直之（長野県考古学会員	中央大学学生）
	篠宮　　正（長野県考古学会員	奈良大学学生）
	丸山正一郎（	独協大学学生）

協　力　者

吉沢酉巳、瀬川長広、大出六郎、小林せつ子、山田　隆、村松国豊、大塚　豊、青木良一、柴田

尚子、飯田澄子、米山佳代子(あがた考古会)高野健介、赤羽千鶴、古屋人兄、古屋梅夫、花村源三、清水千春、戸田大学、百瀬洗三、白川皓夫、白川良昭、横前良市、上条国雄、百瀬修平、(寿史談会)春日源市、森山さつき、林　博樹、百瀬幸子、丸山愛子、神谷かめみ(内田史談会、老人クラブ)横田作重、百瀬泰隆、松下弘介、浅村　晋、武井保典、輿　茂幸、山田　正、堀内俊男、中島啓介、大沢健二郎、盛田　豊、高木　勝、松田　勝、西沢　徹、中沢久満、柳沢朝子、百瀬民子、百瀬郷子、中田美智子、甕　国成、甕　恵以子、甕　隆博、市田尚宏、平松岩一、中島熊雄、百瀬正子、森　泰生、森　達生、篠崎光江、三村　泉、手塚寿美礼、大池恵津子、高野昌英、板橋明範、板橋英司、久保村正英、中野　誠、寺崎秀彦、小沢　等、中田朱美、中堀雅英、野口浩男、山下泰永、田村秀則、斉藤好子、小口妙子、塩原正子、百瀬浩子、百瀬佳代子、松沢秀和、飯沼富夫、三村竜一、降籏勇一、桜井義浩、三沢理子、竹原　学、中山玲子、安塚弘明、塩原博之、丸山　広、小平　靖、長瀬　真(県ケ丘高校風土研究部)

明善中、広丘小学校生徒

事　務　局

田堂　明(社会教育課長)神沢昌二郎(社会教育課文化係長)大日向栄一(同　主事)原田美幸(同　臨時)古屋晶敏(内田公民館主事)

第2節　調　査　日　誌

昭和55年7月15日(火)晴　　大久保知巳、倉科明正氏地元関係者、市農政部及び市教育委員会担当職員により現地調査をし、発掘箇所を決定する。東西に走る堀をへだてて南をA地点、北をB地点とし、堀の中を0地点とする。

7月19日(土)晴　　大久保団長と市教委により遺跡の範囲確認のため表面採集に歩く。遺物は法船寺南辺よりA地点東辺まで多少の差はあっても広範囲にわたって採集されている。縄文中期が中心である。

7月20日(日)晴　　本日より調査開始。三村、山越、浅輪調査員らにより再度周辺地域の調査に歩く堀中(0地点)に遺物が散乱している箇所があり、そこに5×5mのグリットを設けて調査する。遺構の確認はならなかったが縄文中期中半より後半の遺物を検出。この堀が近世の洪水で掘られたものでないことを伺わせる。一方堀の東方の小段丘で2×2mを試掘する。縄文中期土器片1片を検出。

7月21日(月)晴　　ブルドーザーによりAB両地点の表土除土。A地点は当初50cmあまりをはぐ予定であったが浅い箇所から遺物が検出されたため10～20cmの除土で終らせる。B地点は表面採集で

一番濃密だった地点の西隣に設定し表土をはぐ。浅く10〜30㎝除土したが遺物は見当らない。

7月22日(火)晴　　A地点グリット設定。数ケ所の遺物検出地点のうち濃密な南側よりグリットをあける。4－10、4－11の－40㎝あたりより礫が出はじめ遺物も曽利Ⅳ式が出る。

7月23日(水)晴　　A地点3－10、3－11、5－10、6－13等のグリットを掘る。3－10、3－11の－40㎝あたりで礫と土器検出。一部落込みを感じる。6－13よりは弥生に似た条痕文土器片検出。

7月24日(木)雨　　作業休み

7月25日(金)雨　　〃

7月26日(土)晴　　3－10を中心とする礫と落込み追究のほか4－13、14、16、17、5－16、17等を掘る。全般的に土器片の出土が多い。4－14では－20㎝の黒褐色土層中に焼土が1m程の範囲であり、4－16では落込みがある。午後4時雨のため作業中止。

7月27日(日)晴　　3－14、15を中心としたあたりが一つの住居址になるらしい。

3－10周辺の礫群は第1号集石と名付け実測をはじめる。他に6－10、11、8－14等掘り下げ。

7月28日(月)晴　　夕方雨降る。第1号集石の実測のほか前日に引き続き作業を進める。遺物は多く、また黒色土層中に礫の多い地点がある。昼休みに大久保団長他で南内田赤津7104－2　横山実雄氏宅へ伺い、雨堀0地点採集の土器、石器を拝見する。石器は石鏃、乳棒状磨石斧、凹石等があり、土器は縄文中期中半が多い。

7月29日(火)曇　　前日の継続。6－15で土偶首部出土他石鏃出土多し。2〜6－12、4〜7－9、4〜6－15等を掘りすゝむ。

7月30日(水)雨　　作業中止

7月31日(木)曇　　3－9、3－12、6－12、13、7－12、8－12、13、9・10－15等の掘りこみ。10－15より蛇紋岩製磨石斧出土。

8月1日(金)曇　　前日の継続作業

8月2日(土)曇　　前日の継続および3－17、4－14等を新たに掘る。3－7より土偶脚部出土。

8月3日(日)雨　　作業休み、本日をもって第一次調査の作業を終了させる。

8月4日(月)薄曇り　　4－13、5－13、16、17、8－13、17、9－17等をセクションを取りながら掘り下げる。特に5－13では、サイドスクレーパー状の石器を検出、5－17では土偶の胸部を検出した。他2号住居址を追求し、ほぼ直径5mの円形プランを確認する。

8月5日(火)晴　　1－12〜13、6－17、7－13、8－13等を掘り込む。また、A2住居址東半分を掘り込む。7－13、8－13においては敷石状集石を検出する。6－17において黒褐色土層で土偶を検出した。B地点においては11〜14－1〜6を掘る。遺物僅少である。

8月6日(水)薄曇り　　2－11、3－15を掘り下げ、4－15では土手をとり掘り下げる。敷石状集石より小型土器、小型磨石斧、石錐等出土。

8月7日(木)曇　　A2号住居址、中央集石、南側集石等、A地点において継続、測量、掘り下げを行なう。B地点11～14－1～6の表土をはぐが遺物はない。

8月8日(金)晴　　A2住東西のセクションをとり、同じく東部分を拡張する。A3号住居址の土手をとる。

8月9日(土)　　1－11、2－11、A2住、3住、4住をセクションを取りながら継続、8－14、15の配石、A2住において埋甕を出土。

8月10日(日)晴　　A2～4住、6、7住居址、継続調査、第5号集石

8月11日(月)晴　　作業休み。

8月12日(火)晴　　A2号住の測量を行ない3～7住の掘り込みを行なう。

8月13日(水)晴　　A2～4住の測量およびセクションをとりながら、A6～7住の測量および掘り込み行なう。なお、A2住、3住で埋甕を検出し、A3住のベルト地点で伏せ甕を検出。

8月14日(木)曇　　A2住の埋甕掘り込み、A3住の土器をあげ測量、A4住の焼土（5－12）を実測調査する。

8月15日(金)　　作業休み。

8月16日(土)　　〃

8月17日(日)小雨、曇　　6－20、7－20、20㎝掘り下げ、4住および6住のセクションをとる。

8月18日(月)曇　　12－5、7、14－6、8、15－5、7等を掘り込む。A2、4、8住の掘り込み、および測量を行なう。なお、10－13で埋甕検出。また、4号住は炉址はあったが、床がわからず、結局掘り下げる。12－5他の全体作業を行なう。14－7、9、10、15－6、8、16－7のグリットを新たにあける。3住の炉址内土器を検出し、A7住の実測及び土手をとる。

8月19日(火)晴　　第5、8集石の土手をとり、測量を行なう。7－21、12－8、9、14－8、16－8を掘り下げ。3住の№2の上部伏せ甕の土出しを行なう。また、第8集石の炉址出る。なお9住の北にもう一つ同じレベルで、石囲炉出るので、10住とする。

8月20日(水)小雨　　A4、6、10住等の土手とりと掘り込み行なう。11－13、12－13、13－13の掘り込みを行なう。A4住については、炉の西に80×80の石囲炉がある。

8月21日(木)曇のち晴　　4住の西、6住、7、9住の測量と掘り込みを行なう。4－18、19、5－18、19の遺物をとりあげる。

8月22日(金)小雨のち曇　　A地点12－10、12～15のグリットを新しくあける。B地点は16－11、12、17－11、12、の表土を剥ぐ。

8月23日(土)雨のち曇　　午前中土器を洗う12－12、13－12、16－2を掘り下げた後、A3住の土器をあげる。

8月24日(日)晴　　A3住の床面清掃ののちA7住の南半分を掘り込むと遺物検出。A10住のサブ

トレンチを改定し、第16Gを掘り込み、B地点では、10－14、10－16を掘り下げ。

8月25日(月)晴のち曇　　A6住の実測及び清掃を行ない、A11住においては、A10住の上の埋甕を中心とした作業を行なう。

8月26日(火)　　作業休み、A地点において、7号、13号を掘り下げ、B地点において、レベル調査と、1号住の平板とり及びセクションどりを行なう。

8月28日(木)晴　　B地点において1号住の掘り下げ、A地点において4、7、10号住の清掃および掘り下げを行なう。

8月29日(金)曇　　A地点において、7号住の清掃および10～13号住の継続作業。
B地点において1住の測量および掘り下げ2号住のセクションをとる。

8月30日(土)曇　　A地点の10号・13号に埋甕を検出し、B地点で2住の土手をはずしながら掘り込む。

8月31日(日)雨　　A地点北側の石の土手取りを行なう。

9月1日(月)　　A地点では、A4号住居址の西及びA8～13号住居址の掘り下げを行なう。10号住の南西に大型石鏃（8－15）、7－20より小型磨石斧検出。

9月2日(火)曇　　A地点継続、A13号住居址東壁より曽利Ⅱ式に相当する深鉢出土。他に5～7－20より打斧、石鏃　6－21より打斧出土。

9月3日(水)曇　　A8住の掘り込みの後、10号～14号住の掘り込みを行なう。

9月4日(木)晴　　A地点14住の掘り込みを行なったところ、土偶を出土する。B地点では測量を行なう。

9月5日(金)薄曇り　　A地点では、まず8号住の土手取りを行なった後、9住を拡張その中で埋甕検出、14－15住にて測量行なう。また、B地点においては、B2号住の炉を断ち切る。

9月6日(土)曇時折小雨　　A8号住の掘り下げを行ない、9～14号住の測量を行なう。

9月7日(日)曇時折小雨　　朝、写真撮影のため、全域の清掃を行ないその後、3住及び9～15住のエレベーションを行ない、8住を拡張し、集石を測量する。

9月8日(月)雨　　雨のため、テント内において土器洗い、及び道具を整理し、遺跡の打合せ会を開く。

9月9日(火)小雨のち曇　　列石の実測及びレベルよみを行ない、8住において土器を掘りあげる。

9月10日(水)曇　　第8号住のレベルをとる。

9月11日(木)曇　　台風13号の接近により、テントをはずす。A8号住の掘り下げを行なう。

9月12日(金)晴　　A8号住の集石測量を行ない、掘り下げを行なう。

9月13日(土)晴　　A8号住の継続

9月14日(日)晴　　A8号住の炉を撮影、No.54の下に甕検出

9月15日(月)晴　　A9号住の埋甕及び10号住炉址調査及び11号住炉址撮影、後レベルとり

9月16日(火)晴　　A14住及び15住のレベルとりを行ない、14住は写真撮影

9月17日(水)晴　　A8住のエレベーションをとり、その後、A15住の平板測量を行なう。ポイント6より埋甕2個掘りあげ。

9月18日(木)曇　　午前は土器洗いを行ない午後、A4及び9、12住の炉のレベルとりを行ない、第15住の埋甕をとりあげる。

9月19日(金)晴　　A4住の実測、及び14住、15住の地床炉掘り下げを行なう。

9月20日(土)雨　　全体の清掃を行なう。

9月21日(日)晴　　A地点の全体測量を行なう。

9月22日(火)薄曇　　A地点の土坑より土偶をとりあげ、8住西側上面より一括土器をとりあげ、A15住エレベーションをとり、B地点の全体測量を行なう。

(事務局)

1 : 25,000

500 0 500 1000 1500

1. 五斗林遺跡
2. 宮ノ下 〃
3. 長泉寺 〃
4. くねの内 〃
5. 駅迦堂 〃
6. エリ穴遺跡
7. 野石 〃
8. 赤木山 〃
9. 原度前 〃
10. 清水林 〃
11. 三経塚遺跡
12. 石行 〃
13. 北潤 〃
14. 横山城 〃
15. 北原 〃
16. 松山遺跡
17. 小池 〃
18. 野口 〃
19. 白川 〃
20. 百瀬 〃
21. 棚峯遺跡
22. 大久保 〃
23. 坪の内 〃
向畑古墳群

第1図　遺跡の位置及び周辺遺跡

第2章　遺跡とその環境

第1節　遺跡付近の自然環境

1　位置と地形

雨堀遺跡は鉢伏山地（鉢伏山・横峯・高ボッチ）の西山ろくに発達した、塩沢川の扇状地の扇央（海抜810～820m）に位置し、欠の湯へ上るバス道路に沿った河岸段丘面上にある。

鉢伏山地の西山ろく（寿・北内田・南内田・熊井等）は小河川による複合扇状地がよく発達し、急傾斜をもって盆地中央に接している。牛伏川・塩沢川による扇状地は、これらの中では規模の大きなものであるが、いずれも小河流と複合の形式をもっている。

塩沢川は舟沢川と複合し、左岸は南内田のとうね沢に、右岸は舟沢川をもって牛伏川扇状地に接する、広範囲の扇状地を展開している。舟沢川・とうね沢は，かつて塩沢川と複合扇状地を形成した河流であるが、現在舟沢川は牛伏川扇状地、とうね沢は小場沢川を主とする扇状地との縫合線上のくぼ地を流れている。またこれらの扇状地面は起伏に富み、はん濫原の形成に働いた旧河床や、乱流の跡を残している。塩沢川の扇状地でも、左岸の南唐沢・北唐沢はもともとかれ沢であり、右岸の雨堀と呼ばれるかれ谷は、規模の大きな旧河床である。雨堀の北の斜面にも、舟沢川による浅い谷が二つある。

遺跡の面は、この雨堀と浸食を復活した塩沢川の谷とに、はさまれた河岸段丘面として存在している。この段丘面は、塩沢川との比高6m、雨堀の谷との比高3mで、傾斜1000分の100（扇頂付近海抜850～750m）、1000分の60（750～690m）、北西の方向（N40° W）を示す相当急な斜面形である。塩沢川・雨堀の傾斜・方向もほぼ同様である。

また塩沢川は浸食を復活するにあたり、流れを北から南へ移動させたため、右岸に数段にわたる階段状地形をつくった。この階段状地形（河岸段丘）は谷の浸食が進むにつれ出来上がったもので上流の高所にあるもの程古く、中下流の谷沿いのものほど新しいといえる。なお特徴的なのは、流れを南へ移動するに当り、旧河床の頭を切っていることが多く、雨堀などは明りょうな截（さい）頭川である。

次に見落とせない地形面として、欠の湯の出口から海抜800m付近の間、左右に明りょうな段丘

状の地形が見られる。この稜（りょう）線は雨堀遺跡近くまで達していて、扇状地の地形面を深く刻み，谷地形をつくっている。一時河岸段丘と考えられたことがあったが、左右の稜（りょう）線が平行していて明りょうである、谷底が平坦なこと、この形成に働いたと考えられる営力の河流や堆（たい）積物がない、上流が不安な地層であることなどから、掃流による崖（がけ）と谷であろうとされている。谷の深さは、上流で６～８ｍ、下流で１ｍ程である。その形成の時期は、周辺のローム層を切っていることや、塩沢川の段丘地形に影響を与えていることなどから、新しいものと考えられる。土地の人は歴史時代の現象のようにいっている。（明治14年の山崩れと押出し）

2　遺跡周辺の地質

鉢伏山地西ろくの複合扇状地は、いずれも河床礫の堆（たい）積層に覆われているが、その下部については、露出が極めて少ないので、一部を除いてははっきりしない。現在、確認・推定等により考察できる堆（たい）積状況を、模式的に示すと第１表のようになる。

第　1　表　　鉢伏山地西ろくのたい積層と地形面

たい積層	地形面
新扇状地れき層	新扇状地面
ローム層	ローム層面
山ろく旧扇状地れき層	山ろく旧扇状地面 （ロームに覆われている）
赤木層 （赤木山層）	大久保山、赤木山面
牛伏川高位段丘れき層	牛伏川高位段丘面
第三紀層 （守屋・内村累層）	ケイト山面 1000～1200（海抜）面 高ボッチ面

第三紀層（守屋累層）

砂岩・れき岩・けつ岩（でい岩）・緑色凝灰岩（グリーンタフ）からなり、鉢伏山地の山頂部を取り巻いている。これに貫入または迸（へい）入したひん岩や石英閃（せん）緑岩が、1500ｍから山脚までに及ぶ広い範囲に分布している。また石英閃（せん）緑岩の貫入に伴い、砂岩・れき岩が熱変質をうけ、砂岩・れき岩ホルンフェルスとなり、白っぽいもの、堅いもの、ち密なもの、黒褐色のもの等に変っている。ひん岩も同様にち密で堅い、ひん岩ホルンフェルスとなっているものがある。塩沢川はこれらのすべての岩石帯、舟沢川は流域が狭小なため石英閃（せん）緑岩帯を主として流下している。

牛伏川高位段丘面れき層

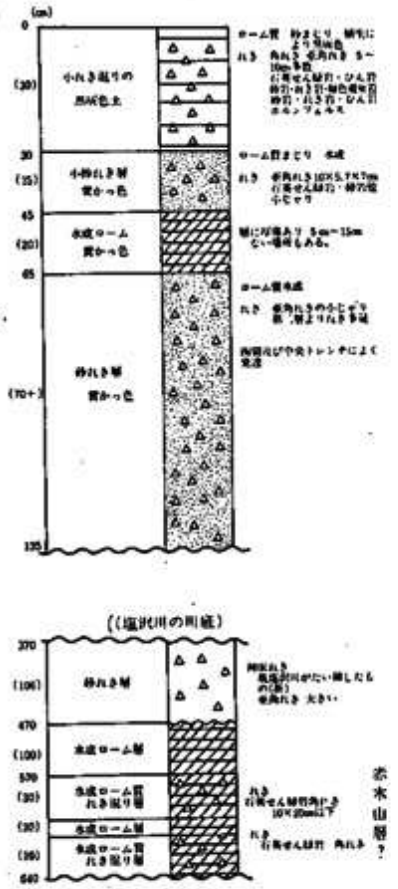
牛伏川左岸、右岸参道（900－1000m）の高位にある段丘面で、角れきからなりロームに覆われている。恐らく現在の河川の浸食期に入る前に堆（たい）積された地層（盆地では埋没頂面）で、浸食の復活により高位段丘面となったものと考えられる。

赤木山層

赤木山の下部層に見られるもので、ローム質水成角れき層で、亜角れきを含んでいる。上部のローム層の間に浮石質を挟さむ水成ロームである。遺跡南の塩沢川の川底に露出する水成ロームと角れき層は、地層の高度差から見て、これに当るものと考えられる。（第２図）

山ろく旧扇状地れき層

現在の河流による堆（たい）積でない地層がローム層に覆われて分布している。山脚からその延長は海抜８００m付近に及んでいる。ローム層の分布で追うと、小場沢川の両岸では７２０m付近に達する。



第２図　　遺跡の地層断面

塩沢川の右岸では、ローム層に覆われた欠の湯の谷の両岸、雨堀左岸より舟沢川沿いに及ぶ。その延長は八幡社に達している。左岸でローム層に覆われている地域は山脚近くであるが、大宮八幡社のローム層などから考えて、やはり７２０m付近に達していると思われる。

このれき層は複合扇状地の原形を形成したもので、河流は上流に浸食面としての高位段丘面をつくるとともに、赤木山層を覆ったものである。従って現在の堆（たい）積物とは、ローム層を挟んで不整合に分布したり、あるいはローム層が浸食されたため、不整合に重っていることになる。

ローム層

いわゆる波田ロームと呼ばれる新期ロームである。山ろく旧扇状地れき層を広く覆っているものである。山脚近くに厚く（２m以上）、小場沢川の両岸では新扇状地れき層の間に、帯状に延び、大宮八幡社・八幡社では台地状に存在している。これは河流の浸食の復活により、段丘状、あるいは台地上に残されたか、新扇状地れき層が埋め尽

されなかったかであろう。

塩沢川扇状地のローム層は前に述べたとおりであるが、特に遺跡のある右岸の地形形成にとって、大事な鍵（かぎ）層である。

新扇状地れき層

新期ローム降下後、浸食期に入った各河流は、上流部のローム層や旧扇状地れき層を浸食し、谷や堆（たい）積面をつくった。浸食が進むにつれて、両岸に次つぎに河岸段丘を形成した。表面にローム層をもたない河床れき層、ローム混りの砂れき層がこの堆（たい）積物である。

塩沢川右岸では、遺跡ののった河岸段丘面と現河床、下流の８００m以下田川沿いまでの地域が新河床れき層である。

3　遺跡の岩石と地層

1）トレンチ内の岩石

ほとんどが角れきか亜角礫であって、いずれも上流の山地の地層から運ばれたものである。

石英閃（せん）緑岩：最も数が多く、トレンチ内の岩石の３分の２以上を占めている。大きいものは、径６５×３８㎝、４５×３５㎝もある。小れきは風化しやすく、くずれて石英粒を主とする砂になっている。斜長石・角閃（せん）石・石英を主成分とする粗粒石英閃（せん）緑岩質である。黒雲母（も）をわずかに含む。黒雲母（も）・カリ長石が増大すると、花こう閃（せん）緑岩になる。岩石中に黄鉄鉱・黄銅鉱・モリブデンを含むので、岩石が分解されると砂の中で光って見える。

ひん岩・ひん岩ホルンフェルス：大小の角れき・亜角れきとして散在している。径６５×４５㎝のものから小片に至るまで堅硬な岩石である。斑（はん）晶として斜長石・輝石・角閃（せん）石が認められる。石基のち密な半深成岩である。この岩石のホルンフェルスは、黒味がかった青色をし、極めて硬いものである。トレンチ内にも、径６０㎝前後の金属音を出す石が見られる。かいて石ふなどに利用される。

れき岩：炉石に利用されているものもあり、焼かれている。径７０×７２㎝の大きさのものもあるが、トレンチ内のじゃり層として存在する。長石や石英の目立つ花こう質れき岩、古生層起源のチャート・石英・硬砂岩・花こう岩の円れきを含む、れき岩が見られる。ホルンフエルス化されたれき岩は、ち密なもの、堅いもの、あるいは黒褐色、白っぽい色等に変化している。

砂岩：粗粒砂岩が多く、石英・長石が多い。トレンチ内ではれき岩と同じ径のものから、小れきまで存在する。やはり炉石に利用されている。粘板岩の破片や結晶片岩・緑色凝灰岩の亜円礫を含むものもある。ホルンフェルス化されて、ち密で堅い岩石になったり、黒褐色、白っぽい色等に変化している。石ふの材料になっている。

緑色凝灰岩（グリーンタフ）：全体が緑色をし、緑泥（でい）化作用を受けている。トレンチ内

ではわずかに見られる。

以上の岩石は、いずれも塩沢川・舟沢川の上流にあるもので、河流によって運搬されたものである。

2) 遺跡の地層

遺跡の住居趾は前に述べたように、１０００分の１０.０の傾斜をもつ塩沢川の河岸段丘面を掘り下げたものである。従って東の部分の住居趾と、西の部分の住居趾の高度差は、見かけ上であって、地形面及び地層からは同じ深さにあるといえる。第２図は住居趾の地層を模式的に示したものである。

これによると、明らかに全体が河床れき層で、堆（たい）積に働いた河流は現河床よりも緩やかであったと考えられる。このことは３００ｍ下った、海抜７９０ｍ地点の雨堀構造改善事業の土層の、切取り場の露頭からも考察できる。また各層ともローム質混りであることから、堆（たい）積時は浸食の復活の初頭で、上流のローム層をけずって運んだものか、あるいはロームの降下中の出来事かいずれかである。大れき（径５０㎝）は層内にも点在するので、河流によって運ばれた可能性もあるが、炉などに利用しているものは、他の場所（当時の河流など）から運び込まれたものであろう。北東隅のトレンチに並べられたようにある大れき（石英せん緑岩が多数）も、やはり運び込まれたと見るのが適当であろう。住居趾はこうした状況のもとに、１－1.５ｍ程度の深さに掘り下げてつくられた。

4 地形の形成

1) 地形面の対比

塩沢川・舟沢川の複合扇状地は、浸食の復活により開析され、多くの地形面をつくっている。特に塩沢川の右岸では、谷が側方浸食を受け、下流へ向って階段状に開析されている。遺跡付近でも既に谷底が深く、遺跡の面、バス道路の面など段丘面が形成されている。舟沢川では、ゴルフ場下

第 2 表　塩沢川・舟沢川複合扇状地（上流）地形面の対比〔比高は現河床より〕

	塩沢川			舟沢川		
時階	左岸	比高	右岸	左岸	比高	ローム有無
1	海抜850～950ｍ面（山ろく面）	10ｍ	850～950ｍ面（山ろく面）	850～950ｍ面（山ろく面）	8ｍ	有
2	〃 800～850ｍ面（大口面）	8	800～850ｍ面（中原面）	800～850ｍ面（中原面）	8	有
3	大口下面	6	小原面	舟沢川沿い面	5	無
4	原村面	4～5	荒井面（バス道路面）	荒井面（荒井原）	2	無
5	現河床上面	1	現河床上面	現河床上面	1	無

の左岸に段丘地形を残している。海抜８００－８５０ｍ間は５ｍに近い浸食谷となるが、その下流は塩沢川と同様、階段状に開析され段丘面を形成している。

これらの中流域の地形面を整理してみると、第２表のような対比が考えられる。もちろん現在、ロームを除いては、その地質年代がはっきりしないので、勢い段丘を利用することになる。新期ロームの堆（たい）積状態から、この地形の堆（たい）積層や地形面は洪積世末期以後の形成と考えられる。その形成は時階１から５の順序で進んだものといえよう。

これに働いた営力は河流だけでなく、浸食の復活を起すために、当然地質上の構造運動も考えなければならない。しかし地層の露頭が乏しいため、断層崖・かれ谷・先行流路・地形異常等の、地形上の特徴より判断するしかないが、フォッサ・マグナの糸魚川静岡構造線上にある地域であるから、構造運動があって当然である。

現在、中山・大久保山の地形上から、中山－欠の湯断層が指摘され（降旗和夫氏資料）、また赤木山の東側に地形異常が報告されている。（東筑摩郡・松本市誌第１巻自然篇地形・地質）いずれも地質年代を洪積世中期以後としている。

2）遺跡周辺の地形面

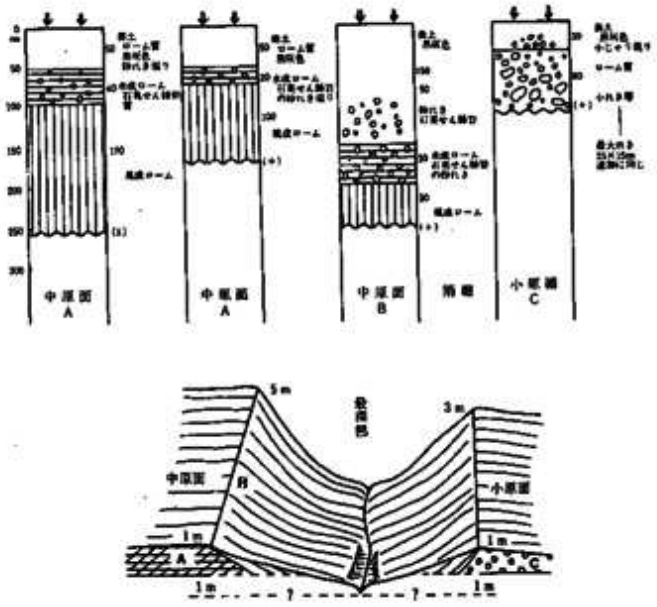
さて遺跡と関係をもつ地形面は、小原面（遺跡のある面）・荒井面（バス道路の面）・中原面（８００－８５０ｍ）と雨堀の谷であり、河流は塩沢川と舟沢川であるが、地形面の形成を述べる前に、各地形面の状態を説明しておく。

中原面：山ろく面に当る海抜８５０－９００ｍ面に続く、破壊されない厚いローム層をもつ地形面（８００－８５０ｍ面）で八幡社付近に及ぶ。塩沢川の右岸、舟沢川の左岸に当るが、現在見るところでは舟沢川の影響が大きい。地形面上には、雨堀の下流と交差する二つの浅い谷が見られるが、ローム層に覆われているので、初生はローム堆（たい）積前の谷であろう。また地表面や層内（風成ローム層上）に、石英閃（せん）緑岩の崩壊した砂や小れきが見られる部分があるが、これはローム堆（たい）積後の舟沢川の緩やかな影響であろう。雨堀遺跡の北の中原面の遺跡の地質は、この石英閃（せん）緑岩の崩壊物である。

小原面：遺跡ののる面で、中原面との比高は２ｍ程低い。遺跡のトレンチの断面（第２図）や、第３図に見るように、ローム混りの砂礫層である。雨堀の側が高く荒井面へ傾斜している。また末端は、雨堀によって運ばれた堆（たい）積物につながる。ローム層に覆われたか不明である。

荒井面：バス道路の面で、小原面より１ｍ程低い。上流で欠の湯の掃流地形に連続し、小原面や雨堀を截（さい）頭している。下流では荒井地籍一帯へ合成扇状地状に広がっている。

雨堀：土地の人はこの谷を雨堀川と呼び、古い川の跡だといっている。しかし水源・水量については確かでない。現存する堀（旧河床）は、全長７００ｍ、幅３０ｍ程度で、深さ（比高）は中原面より５ｍ、小原面より３ｍ、下流で１ｍである。現在の流路は上流部では既に耕地化し、最凹所



第３図　　雨堀両岸の地層断面

とし認められるに過ぎない。中流部では幅５０㎝以下、深さ５０㎝前後である。下流部になると幅５０－１００㎝、深さ５０－７０㎝で左右に段丘面をつくっている。最下流部（海抜770ｍの線）は既に構造改善事業で埋められているが、中流部位の河流跡だったという。

川と呼んだが、特に流水を見ていないという。しかし中－下流部に「川よし」が群生している、湿地性の跡がある、小段丘をもつなどから雨水が流れたり、場所によっては滞留したと考えられる。

現在、中央を貫く流路の左は中原面のローム層の崩れ、右は小原面の表土の崩れによって覆われ、斜面形をつくっている。従ってまだ雨堀の地層の露出は発見できないし、中原面（層）と小原面（層）の接点も不明である。ただ最近構造改善事業により、海抜７９０ｍ付近の中原面－雨堀－小原面を切ったので、雨堀の両側の面の地層がわかって来た。（第３図）しかし両面の地層の接点や雨堀の川底の状態は依然不明である。

3）地形面の形成

前に述べたように、資料が不十分のため推定の域を出ないが、以上の観察や考察により、地形面の形成と対比とを概観したい。

遺跡周辺の地形面形成地質年代は、中原面・大口面のローム層によって、洪積世末期以後と考えた。塩沢川は浸食の復活に当り、この二地形面の間を開析し、多くの地形面をつくった。従って遺跡周辺では中原面・大口面は、最も古い地形面で、以下小原面・荒井面・雨堀との相互関係を見れば地形面形成の過程を知ることが出来る。また雨堀が先行河性の旧河床であることは、観察の上から

も十分認められる。

しかし雨堀の地質資料が十分でないため、すべて仮定から出発せざるを得ない。

① 雨堀がローム層堆（たい）積前に形成され、上流は截（さい）頭されたとすれば、中原面・小原面は旧河床の両岸となり、ロームの堆（たい）積を受けた。従って雨堀の地層にもこのローム層があることになる。この場合、雨堀の地層や小原面の砂れき層の下に、ローム層が存在するか、また高度差のある小原面の砂れき層との関係を、どう考えるかの問題が残る。

② 雨堀が当時截（さい）頭されなかったとすれば河流の規模に関係をもつが、雨堀の地層はローム混りの砂礫層と部分的なロームの堆（たい）積をみるはずである。この場合も、高度差のある小原面の砂れき層との関係を、どうみるかの問題が残る。

③ 雨堀がロームの降下中、塩沢川の乱流の影響により、小原面とともに形成された後、成長して、本流ともいえる下方浸食を受けた。やがて頭部浸食が上流部に及ばないうちに、截（さい）頭されかれ谷（旧河床）となり、河流は南へ移動した。従って中原面は塩沢川の最右岸となり、小原面との関係が説明出来る。また荒井原の堆（たい）積物がローム混りの砂礫であることは、浸食による堆（たい）積物が下流のここに広げられ、合成扇状地状の地形となったと考察される。しかし、雨堀の地層がローム混りの砂れきであることを前提とする。この場合部分的にローム層の存在の可能性が出てくる。

④ 雨堀がローム堆（たい）積後に形成されたとすれば、３と同様の経過をたどることになるが、時代が沖積世初頭に入る。考古学上では、雨堀内の遺跡・遺物の存在が意味をもってくる。いずれにしても、雨堀が旧河床で、中原面－小原面－雨堀の過程をもって、形成されて来たことには相違ない。ただ年代決定において、今後の資料に待つことが大きい。

5 まとめ

以上を総括すると、次のようにまとめることができよう。

1. 雨堀遺跡は塩沢川・舟沢川の複合扇状地の扇央（海抜８１０－８２０ｍ）に位置し、小原面と呼ぶ開析によって出来た河岸段丘上にある。
2. 扇状地層は斜面の原形をつくった山ろく旧扇状地れき層と、これを覆うローム層、更に浸食の復活に伴い堆（たい）積した新扇状地れき層からなっている。
3. 扇状地は合成扇状地状に開析され、下流では階段状の地形面となる。開析された地形面は、高度・段丘崖（がい）・段丘の比高・ロームの有無等により、５つの時階（第２表）に別けられる。
4. 地層の露頭が乏しいため、ローム層（新期ローム）は対比、年代決定に、現在ただ一つの鍵（かぎ）層である。
5. 遺跡に関係をもつ地形面は、現河床（塩沢川）・小原面（ローム混りの砂れき層）・雨堀（か

れ谷）・中原面（厚いローム層をもつ）であり、その地形形成は、最も破壊の少ない中原面、砂れき層の小原面、かれ谷の雨堀の順である。形成の時期は、洪積世末期のロームの堆（たい）積中の出来事とするのが現在の知識である。

6. 遺跡のトレンチ内の岩石は、角れきか亜角れきで、石英閃（せん）緑岩・ひん岩・ひん岩ホルンフェルスなどの火成岩と、第三紀層の砂岩・れき岩・砂岩やれき岩のホルンフエルス・緑色凝灰岩である。いずれも東の山地から運ばれたものである。

7. その量は石英閃（せん）緑岩が最も多く、次いでひん岩・れき岩・砂岩である。径は７０×７２㎝・６５×３８㎝の大きさから小れきに及ぶ。大れきは現河床のものとほとんど同じで、トレンチ内の地層から見て、外から運び込まれた可能性が強い。炉石には砂岩が利用されている。

8. 遺跡の地層は、上記の岩石の角れき、亜角れきの小れきを含む砂れき層で、ローム混りである。水成ロームの薄い層を挟む。

9. 遺跡の斜面は１０００分の１００の急傾斜（西北方向Ｎ４０°Ｗ）であるから、東部分のトレンチも西部分のトレンチも、地表面からの深さは同じであり、地層は連続すると考える。

10. 中原面・小原面・雨堀は、縄文期には既に河流から離れ、遺跡としての可能性をもつ。

11. 雨堀は、導水路の発見がない限りかれ谷で、現在の状況から雨水による流れ、滞留はあったと考えられる。

（太田守夫）

第２節　周辺遺跡

雨堀遺跡は松本市の東南端にあるため周辺遺跡としては隣接の塩尻市に所在するものが多い。

塩尻峠より高ボッチ・鉢伏山の西麓には西流する小河川にはさまれた段丘があり、それらには縄文期を中心とした遺跡が存在する。

先土器時代は本遺跡より西方３㎞あまりの寿・赤木山で有舌尖頭器が発見されており、その僅か西南の田川左岸台地の塩尻市広丘高出遺跡では尖頭器、ナイフ形石器、掻器、石刃、敲石、彫刻器、礫器等が発掘調査により出土している。

縄文時代早期では本遺跡より一つ北の舟沢川右岸に内田五斗林遺跡があり、押型文土器、局部磨製敲石、どんぐりなどが出土している。平地に下って内田運動場近くの釈迦堂遺跡でも楕円押型文土器が発見されている。(1)

縄文前期では隣接の塩尻市内の山麓に多数の遺跡があり舟屋敷、中原、狙原、竹ノ花、小丸山、八幡原、大林、富士塚、境沢遺跡などがあげられる。特に舟屋敷遺跡では二度にわたる発掘調査で前期前半の神ノ木式の頃より末葉の下島式の時期まで継続して生活が営まれており有尾式の土器片も大量に出土している。

中期では中原遺跡、小丸山遺跡他があり、中原遺跡では中期中半から後半の住居址4個を、小丸山遺跡からも同様時期の住居址7個土師期の住居址1個を検出している。松本市内では内田地区で本址より1～1.5㎞西下した現在の集落内には、宮ノ下、長泉寺、くねの内等の遺跡があり、特にくねの内遺跡範囲内の内田保育園敷地では工事の際に縄文中期土器片と共に焼土を検出したというが、縄文期の炉址ではないかと思われる。集落の西側水田を隔てて直線距離で2.5㎞西方に独立丘陵の赤木山があり、ここには木下、前田、原度前など中期中半を主とする遺跡が連なっており、土器、石器類が多量に出土している。本遺跡北東3㎞の中山南中島でも発掘調査によって中期後葉の埋甕をともなう住居址の検出をみている。

後、晩期になると遺跡は少なく、晩期では石冠を単独出土した原度前、その西方300mあまりの石行、塩沢川右岸のエリ穴遺跡程度である。原度前遺跡は前記のように縄文中期が主体であるが石行遺跡は夥しい量の晩期後半に属する土器片を出土しており、エリ穴遺跡は三次にわたる発掘調査によって晩期前半に属すると思われる竪穴住居址1個と、多数の晩期前半に属する縄文土器、石鏃、土偶、耳輪などが検出されている。

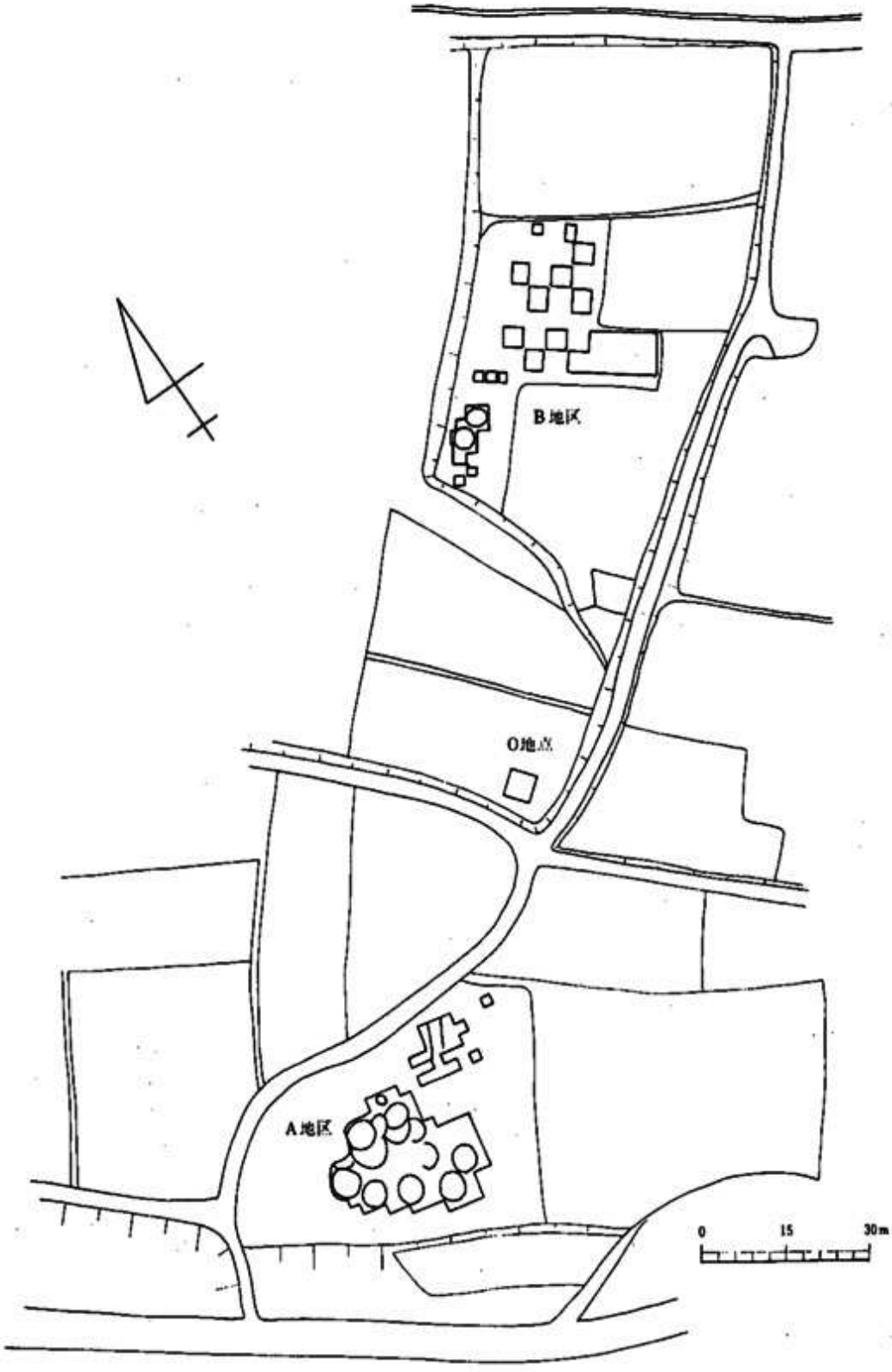
弥生時代では原度前遺跡の谷一つ北側に横山城遺跡があり中期前半の土器片を出土している。他に高出第5地点では後期弥生土器を伴う竪穴住居址1個が発見され、本遺跡より北西に直線距離4㎞に中期後半に属する住居址と土器を検出した百瀬遺跡がある。

古墳時代に入ると、中山地区では後期の横穴式古墳が多数あるが、寿、内田地区では寿百瀬遺跡の僅か東に百瀬耳塚古墳がある。

奈良、平安時代に入ると、本遺跡の東方1㎞ほど登った崖ノ湯（標高約９７０ｍ）で土師器片が出ており、赤木山でも東側の水田に接する山麓から南北1㎞あまりにわたって土師器、須恵器片が採集されている。

（神沢昌二郎）

(1) 藤沢宗平「日本考古学年報」12 1956 P86、この他「東筑摩郡・松本市・塩尻市誌」第二巻を参照した。



第4図　発掘調査区及びグリット設定

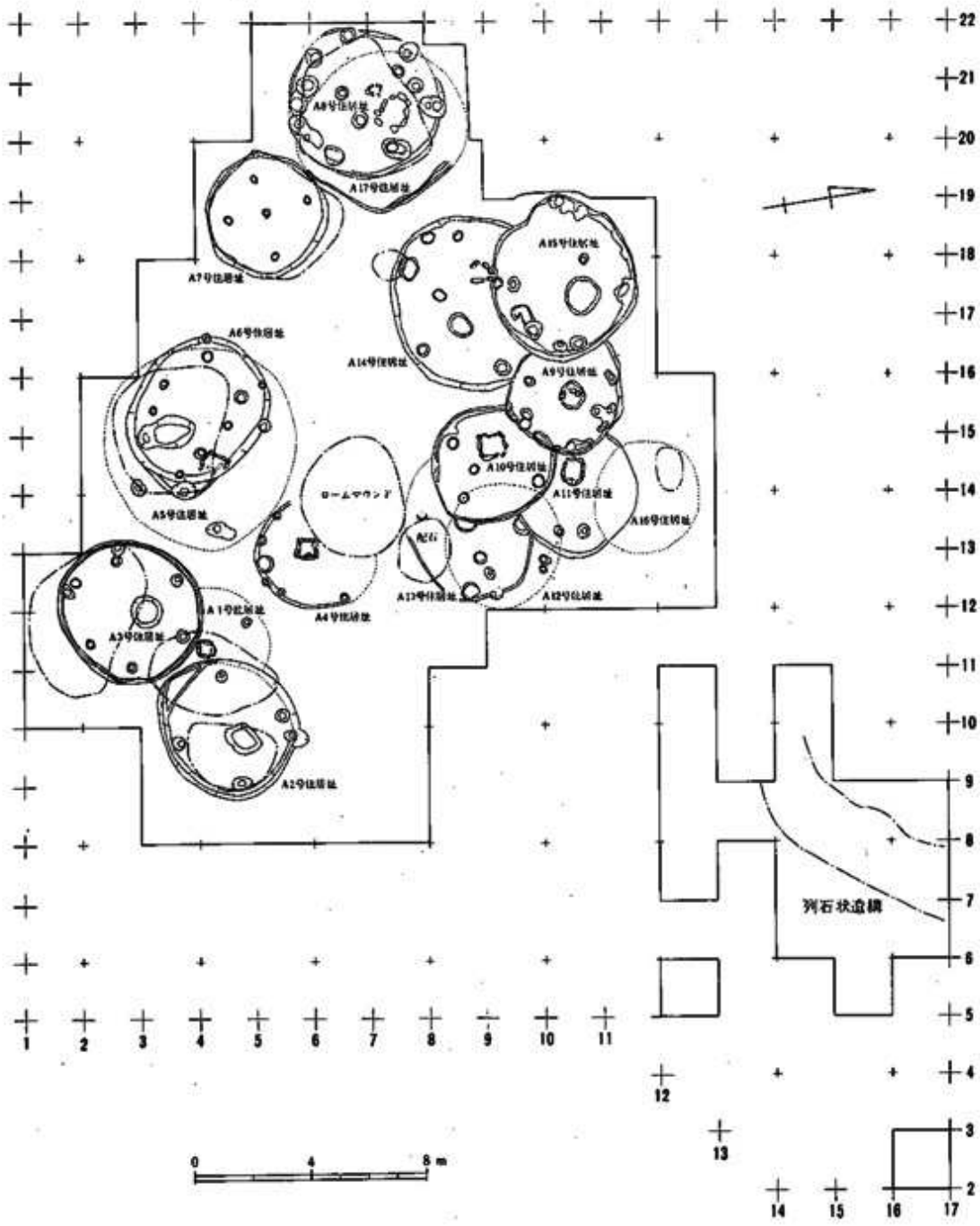
第3章　調　査　結　果

調査の概要

雨堀遺跡の発掘調査については、当初その調査地の選定について事前の踏査がなされ、いわゆる雨堀の地名語源となった、大きなU字状の、自然形成溝の北側が有望視された。然も該所は、かねてより石器類の出土が顕著に知られ、伴出する土器片も縄文前期末～縄文中期初頭形式類似のものが認められていた。依って、調査の本拠地として内定したが、同地の畑は農作物の計画栽培の関係もあり、調査が不可能であることが決定する。従って、最終的には雨堀溝の南側の丘陵地帯で、農作物には何等支障のない休耕地の畑が選ばれ、該所をA地区とし、又、前記雨堀溝北側の有望地隣接地帯の休耕畑を、B地区として発掘することになる。このため、遺物、遺構の面からは、踏査や表採の結果からして、恵まれるものは少く、稀薄であろうことが予測された。

A地区には1グリットが2m方形となるトレンチが設定された。これは、東部が高く西部が低所となる地形の、南東部を基点として、南より北に向けて、2m間隔に1～17トレンチが設定され、東西方向に伸びる各トレンチを2m間隔に区切って、東より西へ向けて1～22区と命名した。トレンチ設定後、遺物濃度が比較的多かった、4、5トレンチの各9、10区の発掘から調査が開始された。これが結果的には、数多の遺構や遺物を検出する端緒となり、成功するところとなった。雨堀の場合は、遺構が密集した関係で、結局は面的な調査が必要となり、順次、隣接地を発掘して拡大したが、その面積は432平米に及んだ。その各トレンチと区の内訳は、1トレンチの10～12区。2トレンチの10～15区。3トレンチの8～17区。4トレンチの8～19区。5・6・7各トレンチの各8～21区。8トレンチの11～20区。9・10・11各トレンチの各12～18区。12トレンチの12～15区の計108区である。これら432平米の範囲からは、別項詳述の遺構として、縄文中期中葉の藤内期前後と判断される竪穴住居址が3軒、縄文中期後半の、曽利期相当の竪穴住居址が14軒、1部切合状態を示しながらそれぞれ検出され、各住居址内に多量の集石を伴いながら、遺物として、破片あるいは完形の土器類、各種石器等々が混在して発見される。その他、土偶、土鈴、埋甕、釣手土器など特殊なものも検出される。又、7、8トレンチの12、13区に、配石遺構とみられるものが、破壊されながらも1部残存しており、前記、面的な発掘箇所の別地点に、72平米にわたる発掘がなされた。これに関係したトレンチと区は、12トレンチの5、7～10区。13トレンチの8区。14トレンチの6～10区。15トレンチの5～8区。16トレンチの2、6～8区の以上で、ここからは、性格のやや不鮮明な列石遺構のはしりが、未掘部分にわたって検出される。

B地区では、当初、最も有望視された場所が発掘できなくなり、その中心からはずれた地帯とい



第5図　A地区グリット設定及び遺構分布

うこともあって、296平米の発掘面積にもかかわらず、期待された成果はおさめられなかった。然し、縄文中期初頭に所属されるであろう土器等、遺物を伴なった竪穴住居址が2軒検出される。いづれも直径が4m未満の、小形円形プランを示すものであった。

その他、雨堀溝の北側で、B地区より東方高所にトレンチを入れ、発掘調査したが、該所からの遺物、遺構は皆無に等しい状態であった。

（大久保知巳）

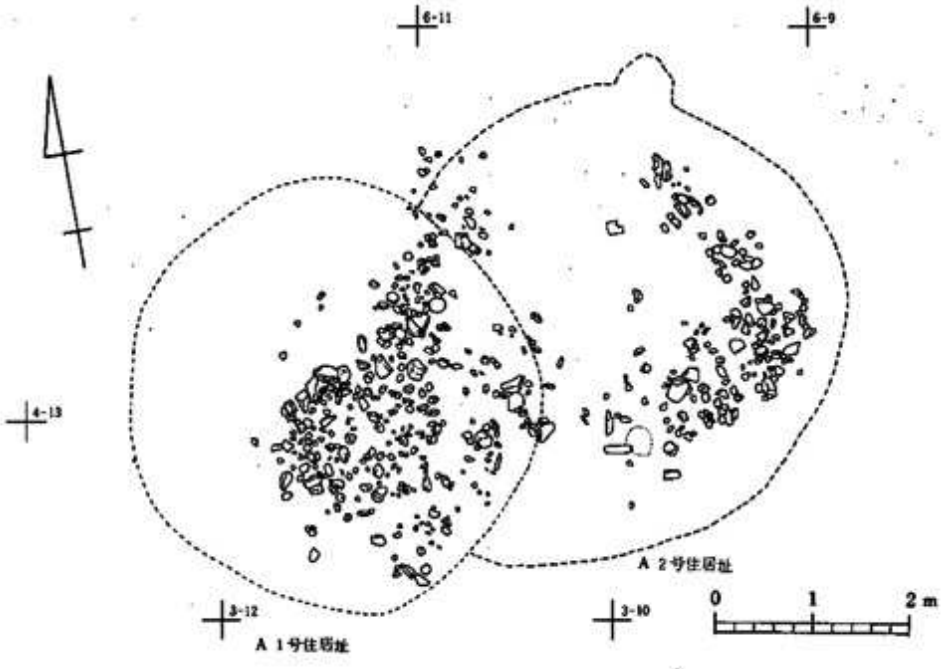
第1節　住居址

1　A1号住居址（第6図～第10図）

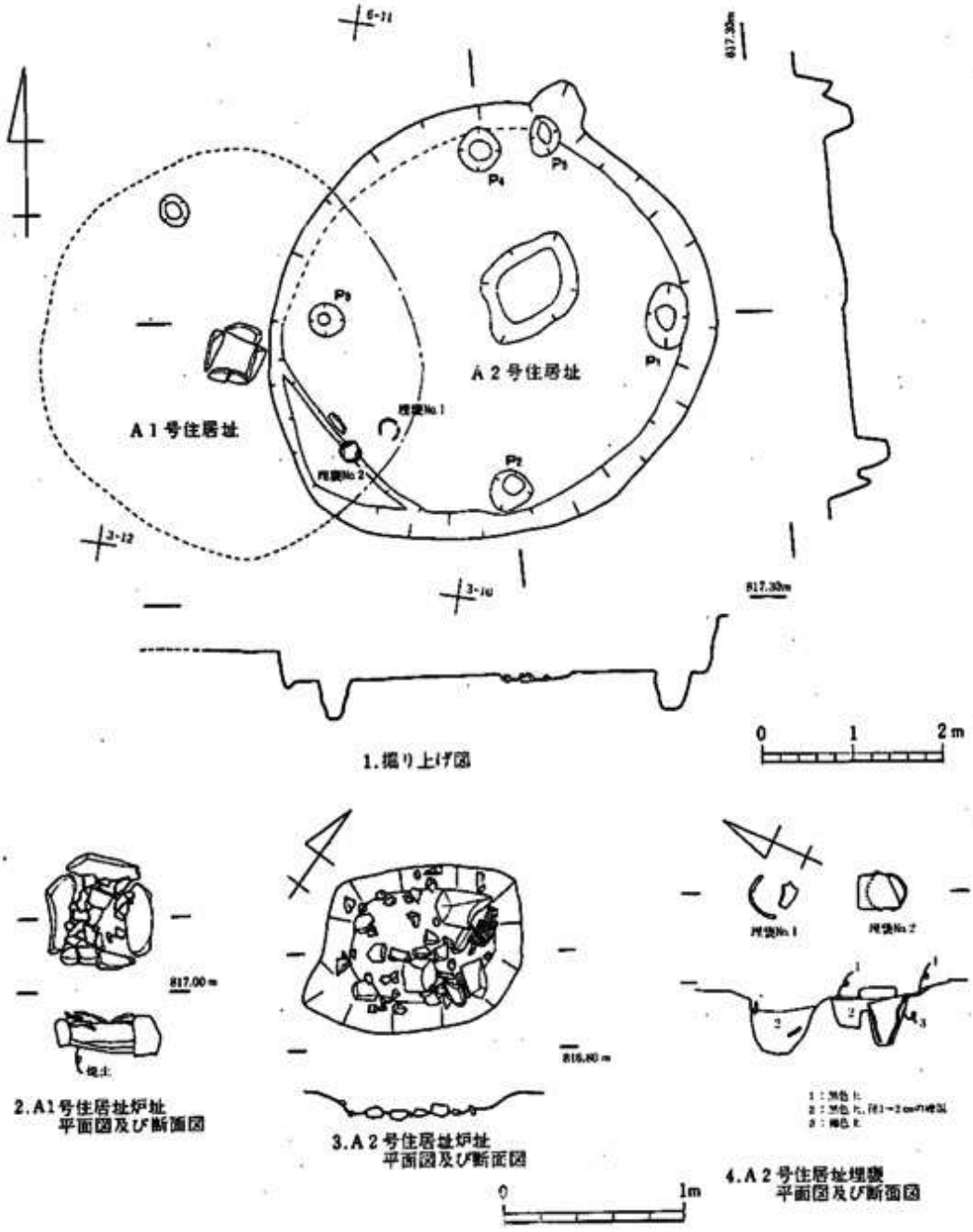
遺構　A地区2・3・4－10・11・12グリッドに位置する。東側においてA2号住居址を、南側においてA3号住居址を貼っているものと考えられる。しかし第1号集石とほぼ同レベル乃至は本址が若干低レベルに位置する程度であるためほとんど破壊されており，貼り床を正確にとらえることができなかった。従って、炉・柱穴及び僅かに残存した床面を手懸りに範囲を推定した。

平面形は、東西推定4.4m、南北推定4.4mの円形を呈する。

炉は、径81×76㎝の方形を呈し周囲に長さ40㎝内外の礫（花崗岩）4個を巡らした方形石囲炉である。深さは5㎝と浅く、炉底はほぼ平坦である。



第6図　　A1・2号住居址上部集石



1.掘り上げ図

2.A1号住居址炉址
平面図及び断面図

3.A 2 号住居址炉址
平面図及び断面図

4.A 2 号住居址埋甕
平面図及び断面図

第７図　　A1･2号住居址

柱穴は１本検出される。径３５×４０㎝深さ２０㎝である。調査では検出されなかったが、主柱穴は推定４本乃至５本かと思われる。

遺物　Ａ１号住居址は前述のとおり住居址の範囲を正確に把握することが困難なため、炉内及び炉周辺の遺物を中心に取り上げる。土器と石器がある。

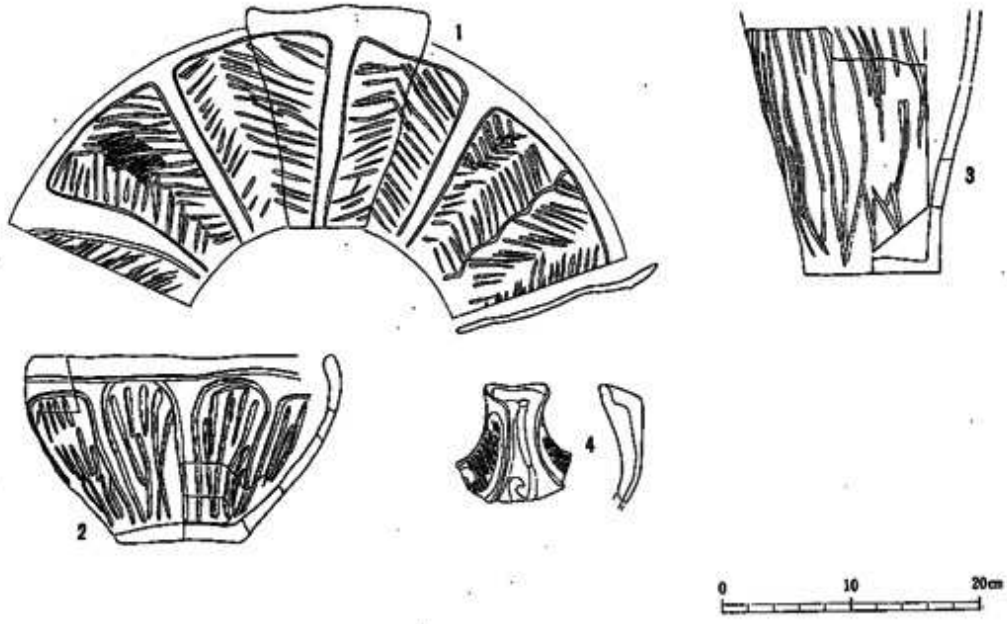
第８図１は炉の僅か東側床面より出土する。口径２７.６、器高３３.６㎝の大形深鉢形土器である。器形は底部から口縁に向かってゆっくり開き口唇に至って内曲する。口縁は小波状を呈す。整形は粗雑であり器胴部に歪みがみられる。文様は底部から口縁部にかけて隆帯による逆Ｕ字形の区画を施している。区画内は棒状施文具によって雑然とした綾杉文を施す。しかし、地文に一部縄文（縦方向・ＲＬ）を施文しているもの、或いは隆帯による蛇行懸垂を配しているものがあり、４単位とはいえ全てが一様ではない。暗褐色で焼成はよい。２は炉の北側床面より出土する。口径20.7器高１４.５㎝の鉢形である。器形は底部から胴部にかけて外に開き口縁に至って内曲する。器全体が所謂キャリパー状を呈する。文様は、口縁に棒状施文具による浅い沈線が、口唇部と胴部とを分かつが如く横走する。胴部は逆Ｕ字形の沈線で区画され、区画内には縦位に雑然と沈線が配される。色調は茶褐色で胴部及び口唇の一部に煤の付着がみられる。焼成は良好である。３は本址炉内より出土する。口縁部が欠損しているため全体の器形は不明であるが、おそらく口縁部に向かって単純に開く深鉢であろう。文様は器面全体を棒状施文具による不規則な縦走する浅い沈線が覆っている。茶褐色で焼成は良好である。４は炉の北側床面より５㎝程浮いた状態で出土する。従って確実に本址出土の土器と断定できない。突起部のみの出土であるため全体の器形は判別し難いが、荒海渡遺跡第１号配石址出土土器、同第１２号小竪穴出土土器、熊久保遺跡出土土器等、松本平における加曽利Ｅ系終末の特徴とみられる角状突起をもつ深鉢形土器と類似するものと考えられる。文様は地文に縄文ＬＲを施し、これを包むかの様にわらび手状の沈線を配す。沈線の外は丁寧に研磨されている。土器片は文様にある程度特徴のあるものを選んだ。第９図１は胴部器面に二条の隆線で縦位の渦巻を描き、空間を太い棒状施文具により縦走する沈線で埋めている。２は口縁部である。口唇に二条の隆線を横走させ、隆線直下には逆「の」の字状刺突を巡らせている。胴部は１と同様に大形渦巻文と縦走する沈線を施している。３は斜方向の沈線を施し、二本の隆線を垂下させている。４は雨垂れ状の刺突で器面を覆い、大形渦巻文を配している。５・６は２と類似する。但し、５は沈線に太い棒状施文具を用いているのに対し、６はペン先状の細い施文具を使っている。大形渦巻文の有無については、本資料からは判別できない。７は口唇が内曲する器形である。口縁下は斜向する沈線が施される。８は二本の隆帯が垂下し、１５本前後の櫛歯状施文具で綾杉状に刺突している。９～１２は加曽利Ｅ系土器である。９は結節縄文を施し、沈線を垂下させている。１０はＲＬ縄文を地文とし、わらび手状沈線を配す。１１は口縁部に太い沈線を横走させ、胴部は細い沈線で区画した中をＬＲ縄文で充填している。１３は逆Ｕ字形の沈線内に「ノ」の字状の沈線を施して

いる。１４・１５・１６は本址に直接関係のある遺物とは思われない。おそらく流れ込みによるものであろうが、床面直上より出土したためここに掲げておく。１４は隆帯により三角形の区画をし区画にジグザグの沈線を横走させる。隆帯の両側には、半截竹管による押し引き文(キャタピラ文)を施している。新道式に比定される。１５は半截竹管による刻目を有する隆帯を貼付し、その中を縦走する沈線で埋めている。井戸尻Ⅲ式に比定される。１６は器厚が３～４㎜と薄く黒褐色を呈し内外面ともよく研磨されている。文様は横位に棒状施文具で沈線を施している。おそらく晩期終末氷Ⅱ式に比定できるであろう。

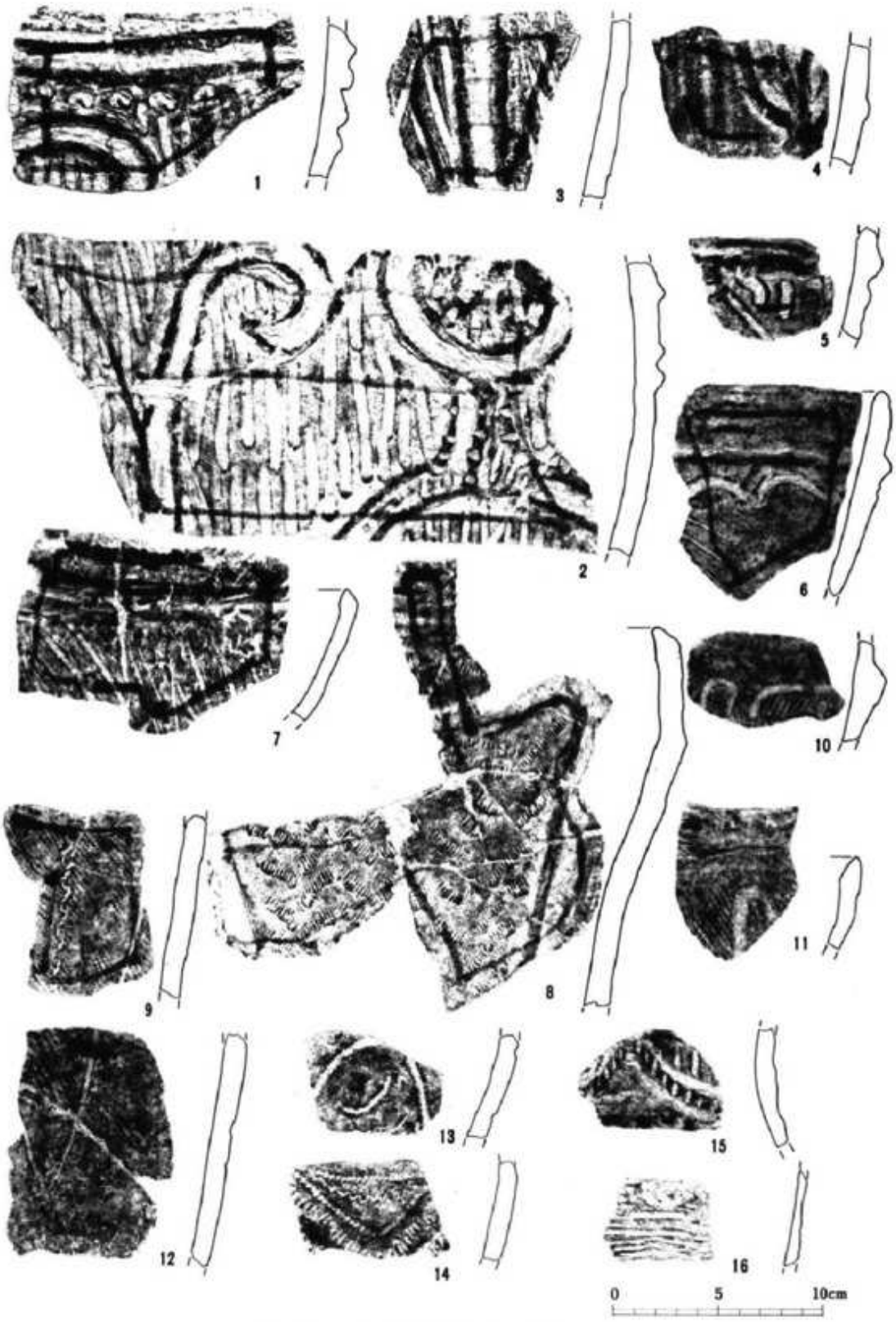
以上により、本址は曽利Ⅴ式の古い段階に所属すると考えられる。尚、唐草文系土器・加曽利E系土器・曽利系類似土器の混在を見逃がすことはできない。

石器には、石鏃、石錐、横刃型石器、打製石斧、凹石がある。

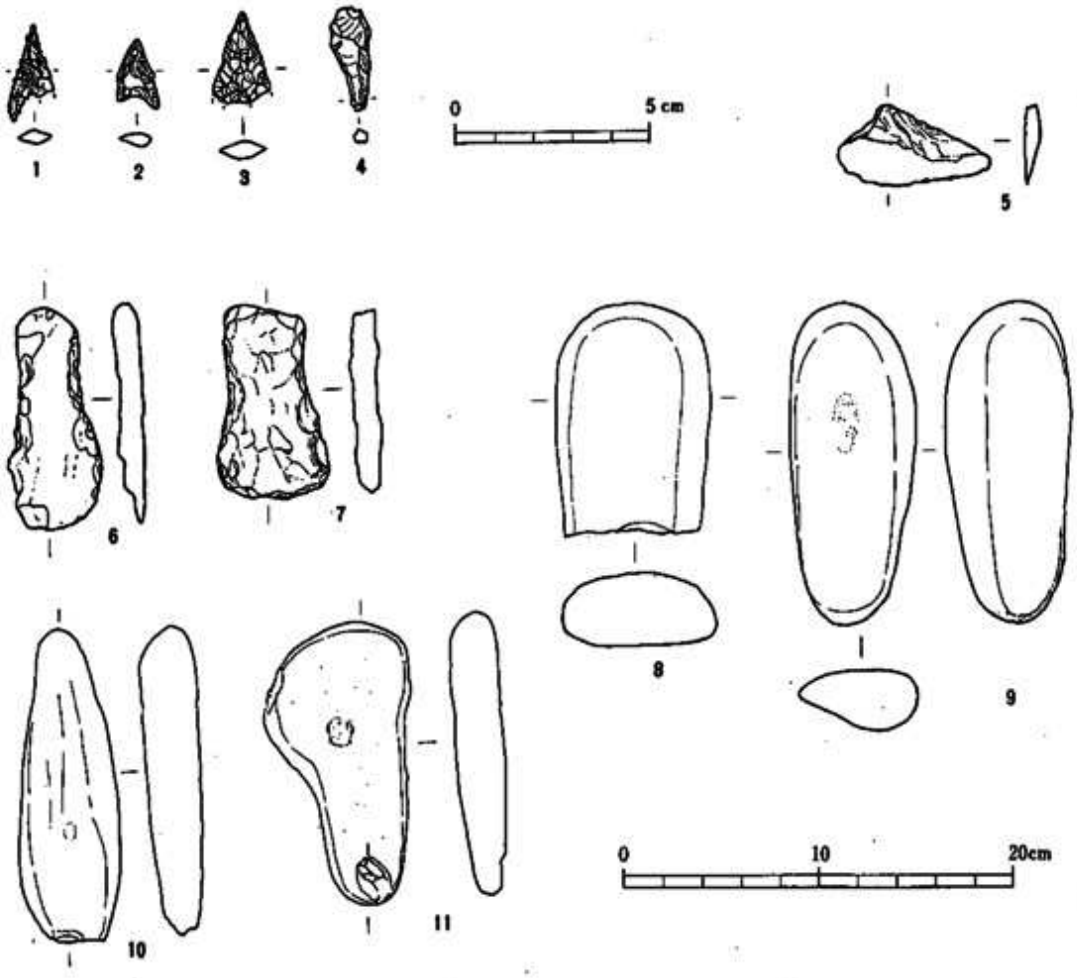
（平林　彰）



第８図　　Ａ１号住居址 出土土器(1)（1のみ1/12，他は1/6）



第９図　A1号住居址出土土器(2)



第10図　　A１号住居址出土石器

2.　A２号住居址（第６図、第７図、第11図～第13図）

遺構　A地区２・３・４－10・11・12グリッドに位置する。西側においてA１号住居址に貼られる。

平面形は，東西4.9ｍ南北4.7ｍの円形を呈し北側に張り出し部を有す。主軸はN－４７°－Eである。

壁面の残存状態は良好であり，垂直に立ち上がる。落ち込み面からの壁高は、北側中央部で３０㎝、南側中央部で３８㎝である。

周溝は、北西部で不明のほかはほぼ全周する。幅は約１０乃至１５㎝、深さは約７㎝である。南西部では二重になっており、内側の周溝は埋甕№２（第７図１）によって切られている。これは建て替えの痕跡を留めたものと考えられる。

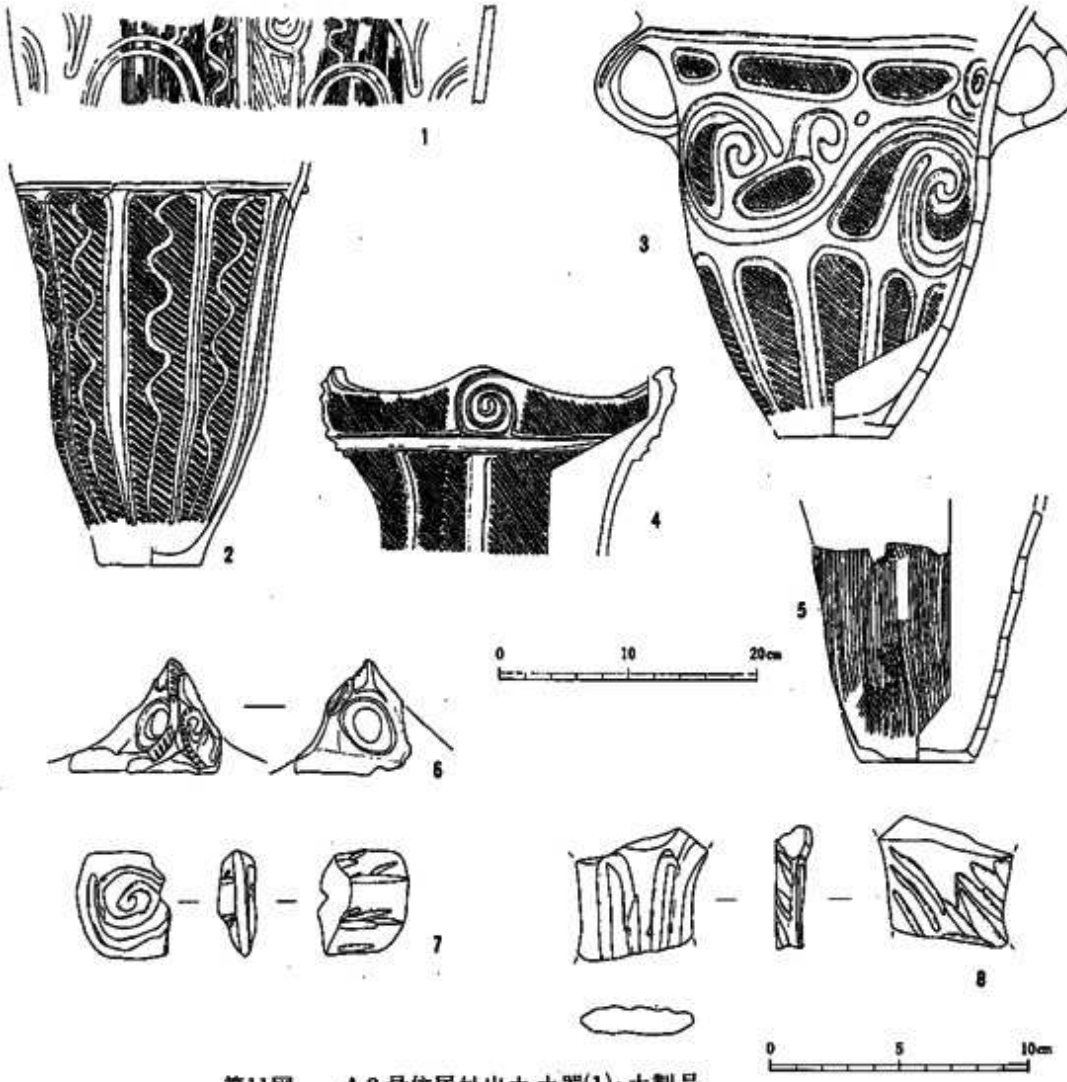
床面は比較的平坦であるが、軟弱な砂礫混りのロームのため若干凹凸がある。

炉はやや奥壁よりに位置する。径１１０×９０㎝の隅丸方形を呈する。炉内には焼石を含む大小５０余個の角礫が混在し、土器片及びカーボンが検出する。これを炉の縁石として使用されていた礫が炉内に落ち込んだと考えたが、縁石存在の痕跡が確認されず、また炉内に混在する礫があまりに多いため或いは集石炉かとも考えられる。「炉底には小さな変成岩と花崗岩を敷きつめて湿気を防ぐように工夫をこらしている」（小池正美　１９６２）という見解には傾聴する必要があろう。炉の深さは約２３㎝であり、炉底は凹凸がかなり激しい。

柱穴は、P_1（７０×４３、－４３㎝）、P_2（４６×４３、－３３㎝）、P_3（３８×３９、−405㎝）、P_4（４５×４４、－４４㎝）の４個検出する。北側張り出し部で検出されたP_5（４４×34、－３３㎝）の性格は不明である。或いは、建て替えの後補助柱として使用したものであろうか。

埋甕はNo.１とNo.２の２個検出する（第７図１・４）本址構築時もしくは使用時にNo.１を埋設し、更に、おそらくは家族構成員の増加に伴う住居建て替えによって、新たにNo.２を埋甕したものと考えられる。No.１は正位・口縁部及び胴下半部欠損、No.２は正位・口縁部欠損である。

遺物　第11図１は埋甕No.１である。本埋甕はＡ２号住居址の南西床面にNo.２と並んで埋められていたもので、高さ約８㎝の胴部片である。地文は縦の細い条痕文で、それに唐草文様の太い沈線と隆帯が施されている。色調は茶褐色で、胎土焼成は普通である。胴径３８㎝を測る大型土器で、曽利Ⅲに比定される。２は埋甕No.２である。本資料は内側の周溝を切って埋設してあるため、住居建て替えの際新たに設けたのであろうことは前述のとおりである。口縁部は欠損している。これは従来の埋甕にみられるように、故意に打ち欠いたものであるのか、あるいは欠損後二次的に利用したものであるのかは不明である。但し、石蓋がされていたこと、同一器体の破片が出土しなかったことを考えあわすと、埋設後破損したものではないであろう。器形は底部から口縁部に向かってゆるく開き、口縁部はおそらくキャリパー状を呈する深鉢形であろう。非常にスマートなプロポーションである。文様は口縁部に隆帯を横走させ文様帯を明確に分けている。胴部は逆Ｕ字形の沈線で区画し区画内にＬＲ縄文を施している。さらに、棒状施文具による蛇行懸垂文を施す。色調は茶褐色で焼成は良好である。３は炉の北西に接する様な地点の床面直上より出土する。口縁部が欠損しているため全体の器形は不明であるが、両耳深鉢（Ｘ把手付土器）の形態をなすものと考えられる。文様は胴上部に横位の楕円区画文を棒状施文具によって描きＲＬ縄文を充塡させる。区画文連続の倦きから開放するためか、区画文の間にところどころ渦巻文を配す。胴中位は太い棒状施文具で横位のＳ字状文を描き、空間をＬＲ縄文が埋める。胴下半部は逆Ｕ字状沈線で区画し、その中をＬＲ縄文で施文する。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。４はP_4南東側床面直上より出土する。胴下半が欠損しているため全体の器形は把握できないが、口縁部はキャリパー状を呈し口縁は小波状（４単位）をなす。文様は口縁部文様帯と胴部文様帯に二分される。口縁部文様帯は波頂部

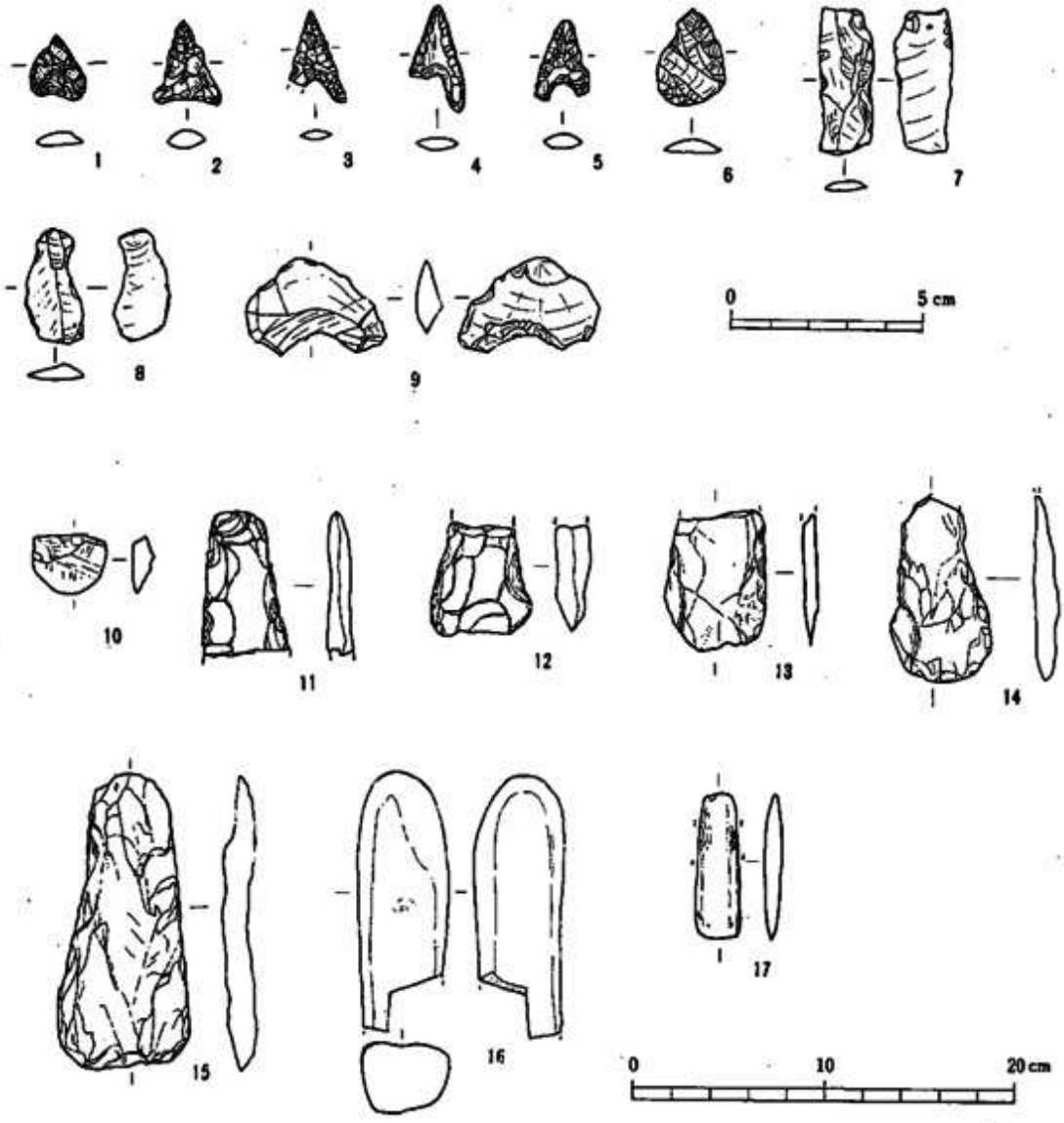


第11図　　A２号住居址出土 土器(1)・土製品

に隆帯渦巻文を施し、渦巻文間にＲＬ縄文を施文する。頸部に一条の隆帯を横走させ、胴部はＲＬ縄文を地文とし、二条の沈線を垂下させる。沈線間の縄文は丁寧に磨消している。色調は赤褐色で焼成は良い。５はP_3の東側床面直上より出土する。胴上半部及び底部を欠損する。器形は底部から口縁に向かって単純に開くものと考えられる。文様は９本歯の櫛状施文具により基本的には縦方向に沈線を施している。色調は茶褐色を呈する。６は本址覆土中より出土する。把手部のみの出土であるため全体の器形は不明である。把手の形態より本址に属するものではなく流れ込みによって覆

第12図　　A２号住居址出土土器(2)

土中に混在したものと考えられる。形態は三角形で、把手の左側及び内側に穴（貫通していない）がみられる。文様は、中央部に半截竹管による刻目を有す隆帯が施されているのみである。第12図１は口縁部にＲＬ縄文を施し，横走するキャタピラ文を境に胴部は刻目を有す隆帯とキャタピラ文で抽象的な文様を描いている。藤内Ｉ式に比定される。２～４は中期後半加曽利Ｅ系土器に属する。口縁部文様帯は隆帯で渦巻文を配しその間を縄文（ＬＲ）が埋める。頸部には一条の隆帯が横走し，胴部は地文に縄文（３はＲＬ・４はＬＲ）を施し二条の沈線を垂下させている（４はＨ字状



第13図　　A２号住居址出土石器

懸垂文）。5～11は曽利系類似土器あるいは唐草文系土器である。5は頸部に二条の隆帯を横走させ、直下には二本の沈線で渦巻文を表出させている。胴部には縦方向に太い条線が走る。6は口縁部は無文で直下に隆帯で横位の連続S字状文を施文している。7・9・10は深鉢の胴部破片である。綾杉文と隆帯による懸垂文及び蛇行懸垂文を施している。8は大形渦巻文を描き綾杉文を施文している。12は口縁に隆帯で鉤手状の文様を貼付する。時期的には若干下り中期終末のものと考えられる。

石器は石鏃6点、スクレイパー2点、打製石斧5点、磨製石斧1点等がある。計17点を図示し得た。詳しくは一覧表に譲る。

第11図7・8は土偶破片である。8は胴部にあたる。表面は沈線で逆V字状文を描き淡褐色を呈し、若干煤の付着が看取される。裏面は斜向する沈線を施す。茶褐色を呈す。7は左腕部にあたる。表面は沈線で渦巻文を描き、暗褐色を呈す。煤の付着がみられる。裏面は横走する刺突状の沈線を施す。茶褐色を呈する。

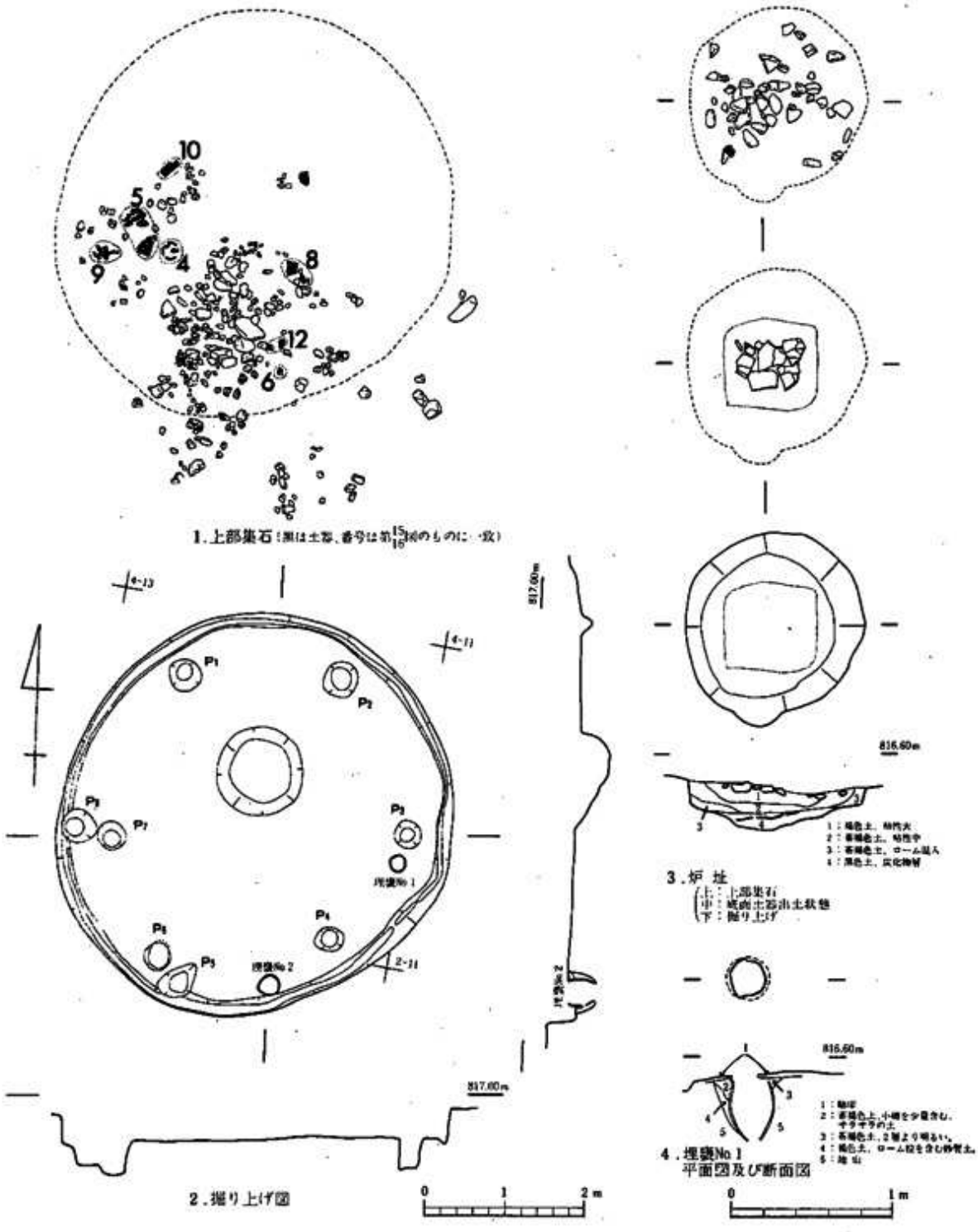
以上により、本址は曽利Ⅲ式（新しい段階）に属するものと考えられる。

（平林　彰）

3. A3号住居址（第14図～第17図）

遺構　A地区1・2・3－10・11・12・13グリットにかかる。北東部をA1号住居址に貼られている。平面形は、径4.9mの円形を呈する。壁は、A1号住居址と重複する北東部分が殆ど残っていないが、他は良く残っている。傾きはほぼ垂直で、壁高は各部とも約40cmを測る。周溝は壁下に全周しており、断面形は深さ10～15cm位の逆三角形乃至逆梯形である。床面は平坦で堅く、北西へ緩傾している。炉は床面中央の北寄りに位置する径1.1mの円形の地床炉である。1段をもって底面に至る、2段底の断面形を呈す。更に炉内最上部には集石があり、1段目と同レベルの中央部に同一個体の土器片がすべて裏を上にして敷かれているという特殊な炉址であった。焼土は全くなく、敷かれていた土器の下部に炭化物の層がみられるのみである。深さは最深部で床面下、約50cmを測る。ピットはP_1～P_8まで検出された。いづれも径35～40cm程の円形を呈すが、P_5がやや不整形になる。深さはP_1：42cm、P_2：31cm、P_3：35cm、P_4：33cm、P_5：16cm、P_6：35cm、P_7：41cm、P_8：31cmをそれぞれ測る。主柱穴は六角形に配列されていたと考えられ、P_5とP_6、P_7とP_8はそれぞれ住居の拡張等に伴う一連のものであろう。埋甕は東側壁寄り（No.1）と南側壁寄り（No.2）に、計2ケ発見された。No.1は口縁部を欠損するだけだが、上面一部を貼り床で覆われ、壁よりやや内部に存する。No.2は口縁部及び底部を欠き、一部が周溝にかかる。

本址上層には南半部を中心に礫群があり、その中や下部から一括土器が出土した。覆土中の集石と考えられる。



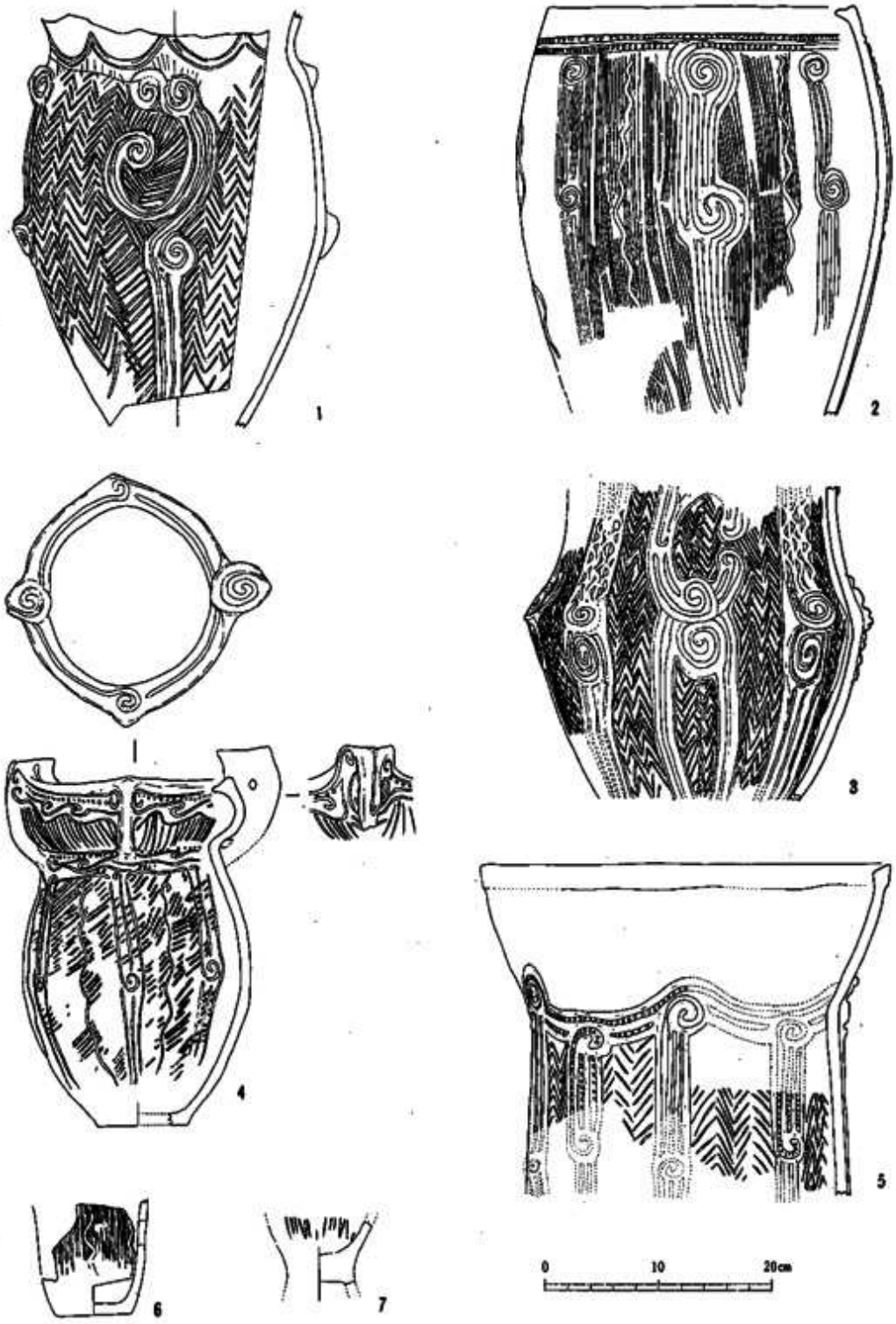
第14図　　A３号住居址

遺物　覆土中、覆土内礫群、及び床上から多量に出土している。土器と石器がある。

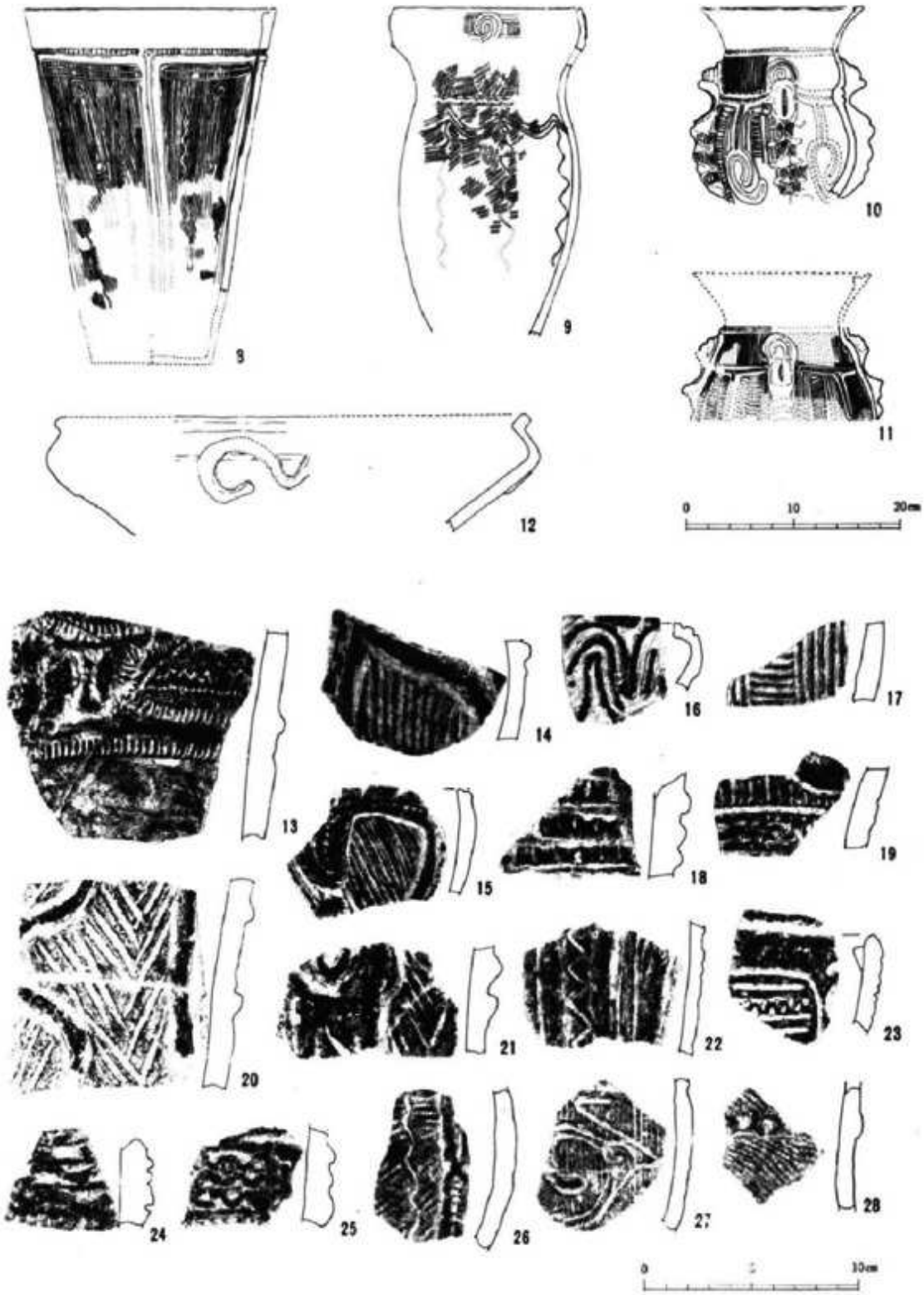
土器は、覆土内礫群中、及び炉内から一括品が、また覆土及び床面付近から小破片が多く得られた。埋甕は2ヶ検出されている。1はP_3付近に埋設されていた埋甕である。口頸部と底部を欠く深鉢形土器で、唐草文風の隆帯を4単位で配し、間隙は整然とした綾杉文で埋めている。2もP_4とP_5間の周溝際から発見された埋甕で底部付近を著しく欠損している。隆帯の腕骨文を4単位で配し、さらにその間を沈線の腕骨文と波状懸垂で縦位に区切っている。地文は櫛歯状工具で縦の条線が引かれる。3は、炉内1段目に土器内面を上に向けて敷かれていたものである。口縁及び底部周辺をすべて欠損している。胴部中位が「く」の字形に屈曲する特徴的な器形で、腕骨文等を縦位に配し間に綾杉沈線を充塡している。4は、覆土内礫群中より出土した土器で、ほぼ完形品である。頸部がくびれ、口頸部が短く内湾する器形を呈し、一対の大きな把手があがる。文様は、口頸部に縦沈線、胴部には縄文地文の上に腕骨文状及び波状懸垂、頸部と口縁部付近に特徴的な渦巻をもつ沈線を横位に描いている。5は覆土内礫群及びその下部から破片で出土した大形の深鉢形土器で胴部下半を全く欠いている。口頸部を大きく無文帯にし、胴部は腕骨文で縦に8分割して、その間に綾杉文を満たしている。6は小形の深鉢形土器の胴部下半及び底部、7はやはり小形の台付土器の破片である。いずれも櫛歯状工具で縦の沈線が引かれている。8は覆土内礫群出土で、底部から口縁部まで直線的に外開する器形の深鉢形土器である。2本ずつ垂下される隆帯により器面は縦に4分割され、地文に櫛歯状工具で細かい縦沈線を埋めた後、腕骨文や波状懸垂を沈線で刻んでいる。9は覆土及び覆土内礫群出土で、破損が著しい。頸部以下全面に縄文を施文し、頸部に交互刺突を1段その下部に三本重ねの山型沈線をめぐらし、山型の頂部下側から波状懸垂をおろしている。10・11はいずれも礫群中から出土したもので、器形・文様ともによく似る。大きくラッパ状に開く口頸部は無文で、頸部以下に各種の文様が集中し、大きな突起が4単位で附される。12は破片からの復元実測であるが、浅鉢形土器とみられる。太い隆帯が貼りつけられ、内面はよく研磨されている。13～28は、主に覆土中から出土した小破片の拓影である。13は楕円をつらねる横位文様帯に連続爪形文が伴うもので、本址の時期より古く、混入であろう。20は、若干新しいものと思われる。

石器は石鏃、石錐、石匙、打製石斧、凹石、石皿等が総計26点出土している。覆土、覆土中礫群等からの出土が殆どであるが、26の石皿は炉内からである。

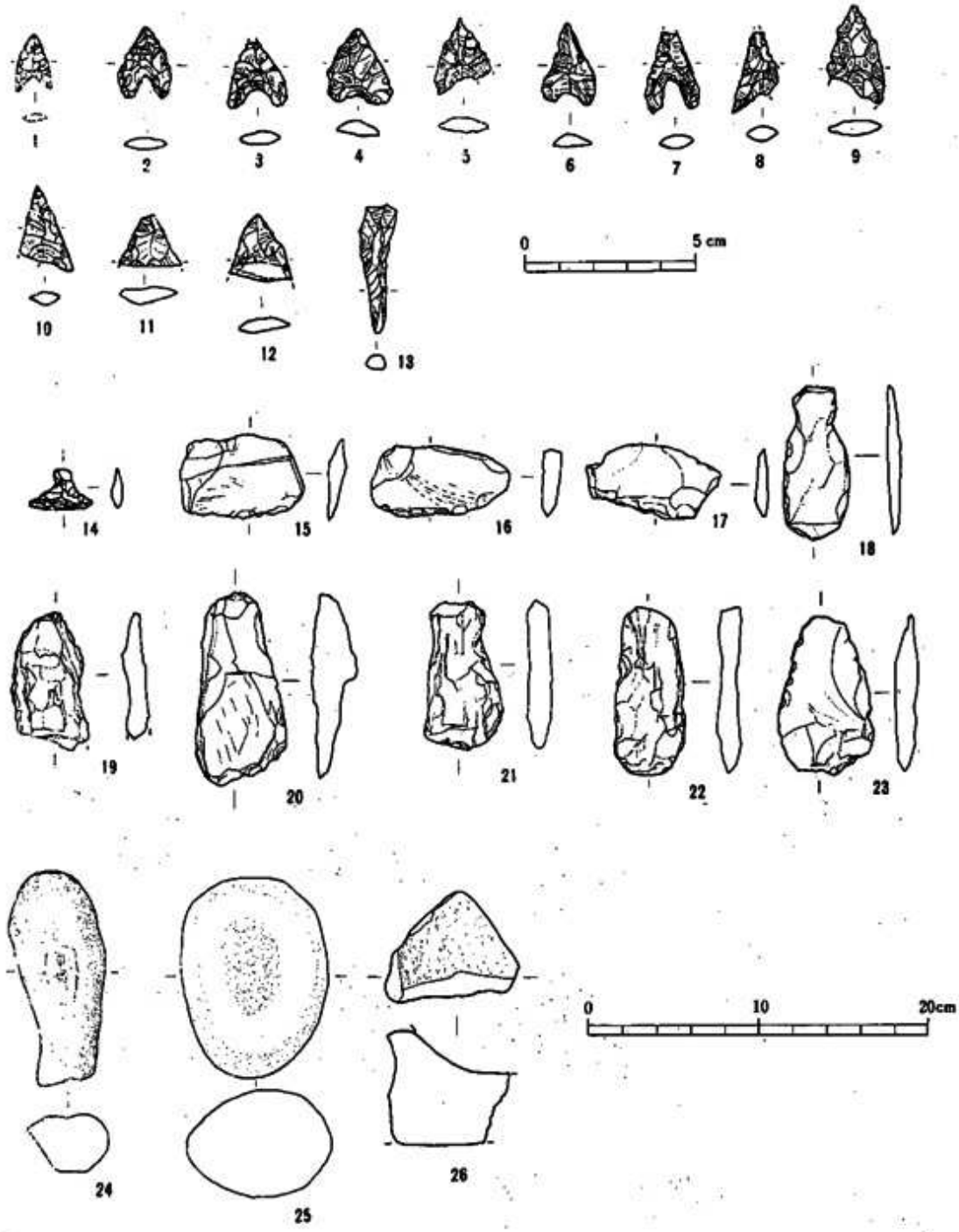
（臼居直之）



第15図　A３号住居址出土土器(1)



第16図　A３号住居址 出土土器(2)



第17図　　A３号住居址出土石器

4. A４号住居址（第18図～第23図）

遺構　A地区５・６・７－12・13グリットに位置するが周囲にロームマウントや配石址があり全形は不明瞭である。平面形は残存部から推定すると、径４m強の円形を呈すものと思われる。壁は部分的に良好な形で捉えられ、壁高20～30㎝、傾きはかなり急である。床面は平坦で堅く良好なものであるが南半分しか残っていない。炉は、本址中央部やや西寄りにあたると思われる位置にある。長楕円の大石４ケにより１辺60～70㎝のほぼ正方形につくられ、平らな炉底は炉縁石の頂部より深さ40㎝程である。炉内には木炭粉を含む黒色土が充満し、小礫や焼石・土器の大形破片が存していた。ピットは径30㎝位のものが５ケ、径60㎝位のものが１ケ確認された。深さはいづれも30㎝内外である。柱穴として積極的に認定できるものはない。

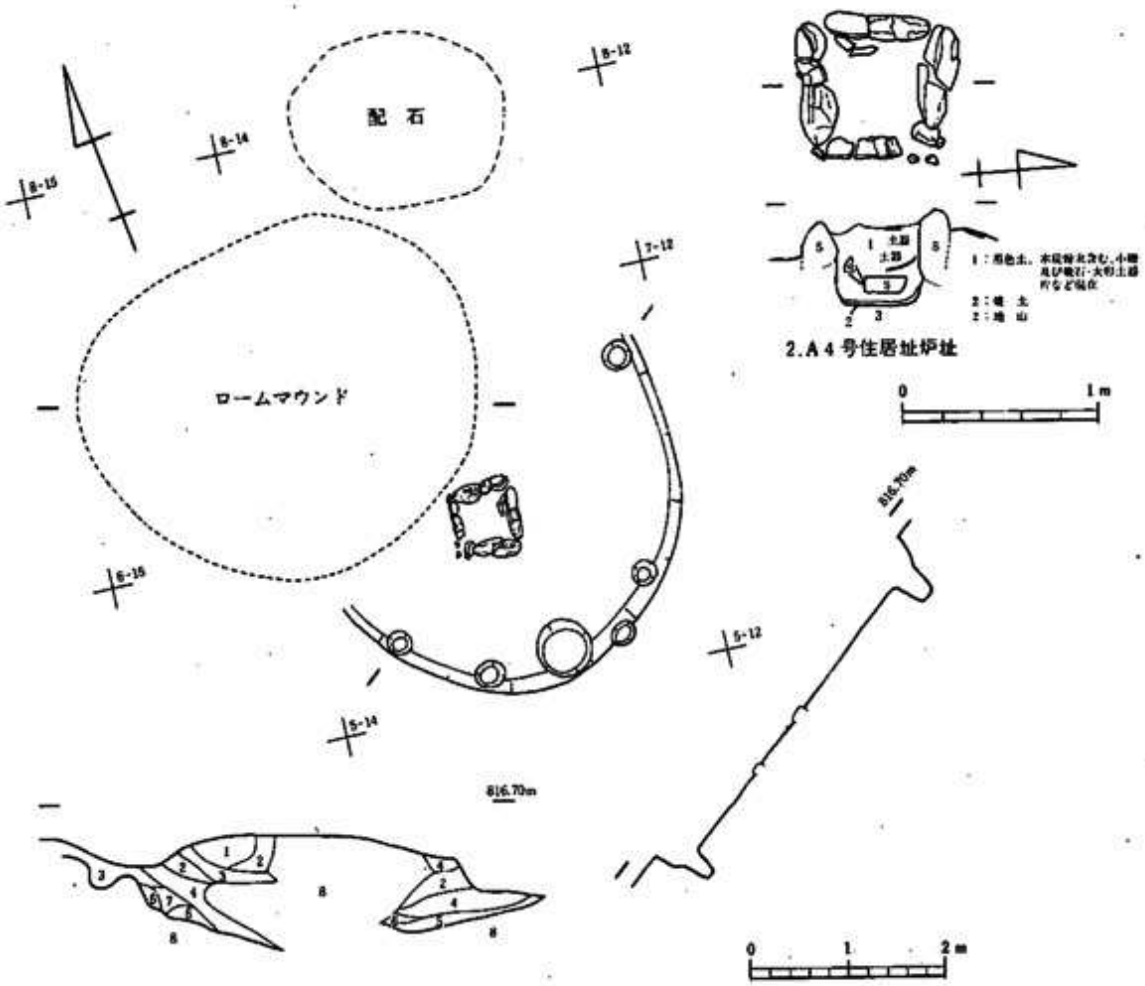
本址の北側に隣接して、ロームマウンドがある。地山である黄色土と同じ土が、不規則にもち上がって周辺に黒褐色土等を伴なっている遺構で、はたしてロームマウンドという名称を用いてよいか疑問も残る。遺構であるかどうかすら疑うむきもある。範囲は南北3.4m×東西4.1m程の楕円形となる。

遺物　本址覆土及び周辺からは多量の遺物が出土している。ただし、本址付近に、ロームマウンドや配石址があり、それらに附随するもの等が雑多に出土した観がある。土器と石器がある。

土器は図化、拓影合わせて75点を提示した。時期的に３～４群に分かれるものと思われる。１～３は縄文中期中葉に属するもので、この時期の土器は少い。４～10・16・17・59等は中期後葉でも比較的古い段階のものであろう。５は、大きな突起をもち著しく内湾する口縁部、６・７も口縁部付近で、粘土紐の張りつけにより重弧文をつくっている。11～15・18～58・60～65は中期後葉の後半にかかるものである。綾杉文やそれが退化した雑な縦沈線の地文の上に隆帯や沈線で唐草文が描かれるもの、区画内に縄文が施されるものに大別される。特殊なものとしては、波状に懸垂する隆帯が貼られ横位の沈線が引かれる35、単純な口縁部から長めの縦沈線が引かれる42、円形の窪みが２列で横位に連続する57、等がみられる。23も一対の耳状の把手をもち、口縁端部に向って閉じていく珍しい器形を呈し、欠損する胴部は大きく張るものと推定される。61は拓影では不明瞭だが、細かい複節縄文と観察される。66～75は底部である。網代痕が明瞭に観察できるものが多い。

石器の説明は一覧表に譲る。

（三村　肇）



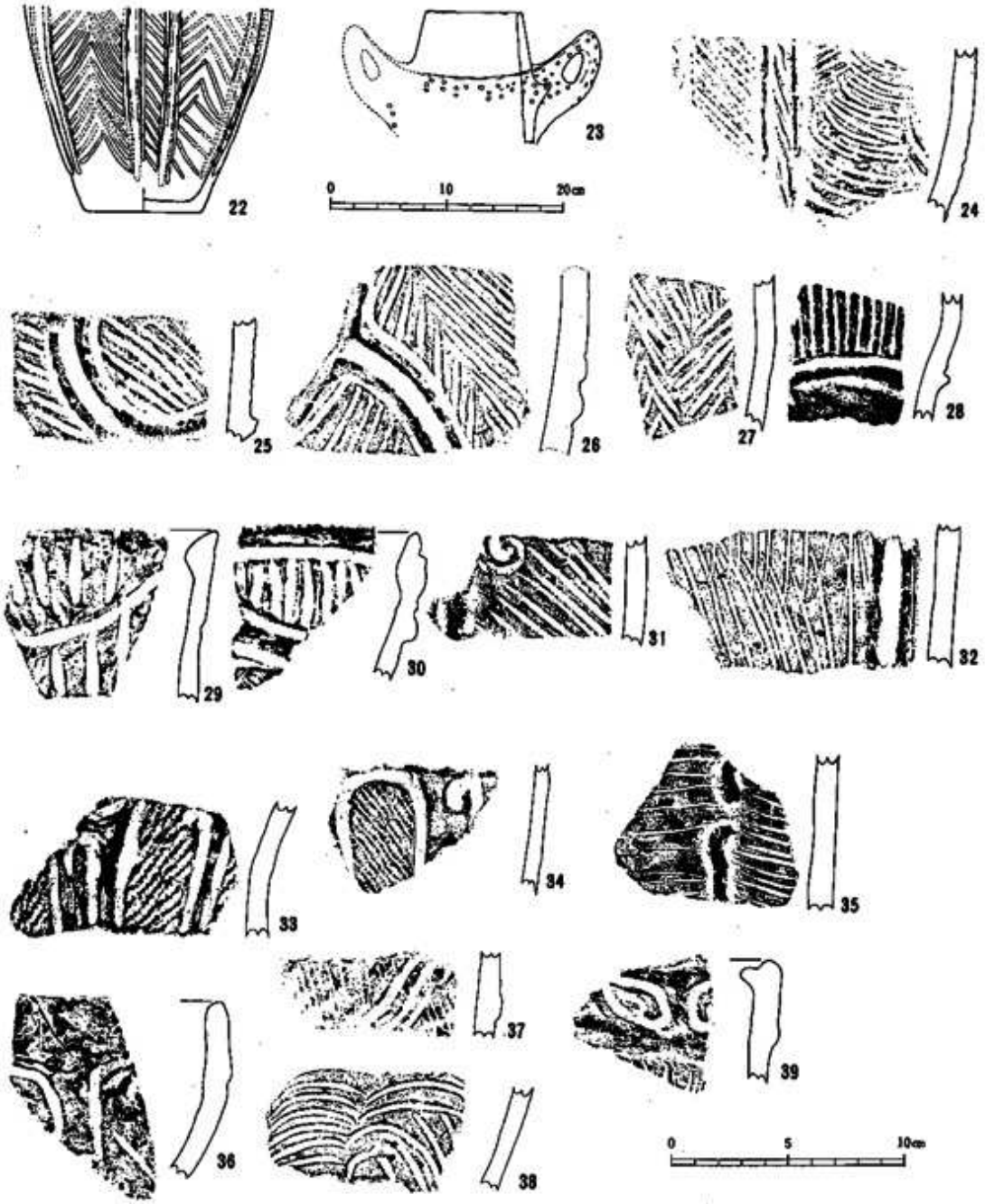
2.A4号住居址炉址

2.A4号住居址・ローマウンド

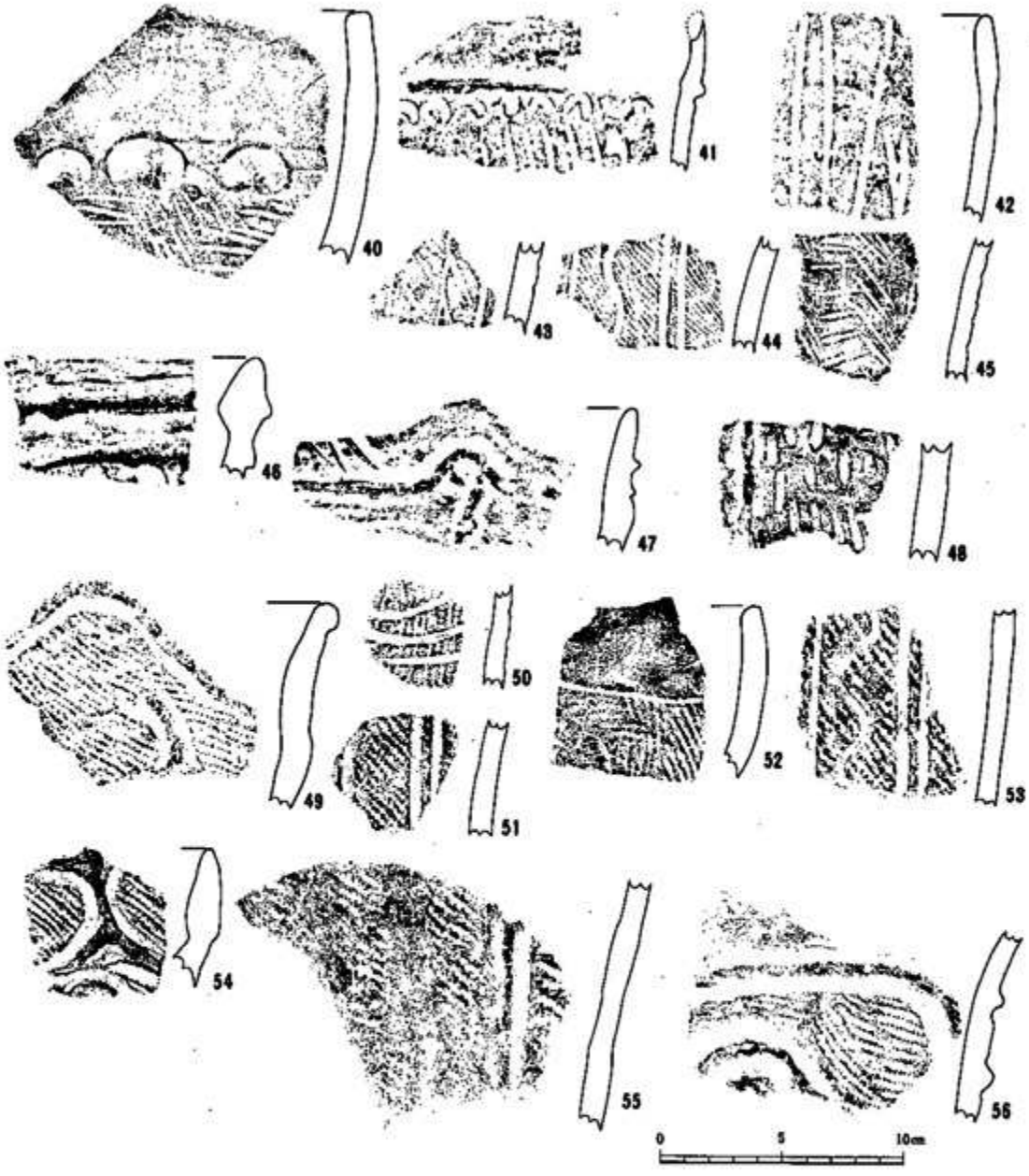
1：暗色土、ローマブロック、ローム粒を多量に含む、地山より明るい砂質土。
2：　〃　、ローム粒を多く含む、1層より黒い。
3：黒褐色土、焼土粒を含み、小礫を全く含まない、粘性あり。
4：　〃　、粘性ややあり、小礫を若干含む、砂質。
5：茶褐色土、粘性ややあり、カーボン粒を若干含む。
6：黄褐色土、ローマブロックを多量に含み、地山に近い。
7：茶褐色土、カーボン粒、焼土粒を含む、砂質土。
8：地山（黄色土）

第18図　A4号住居址・ローマウンド

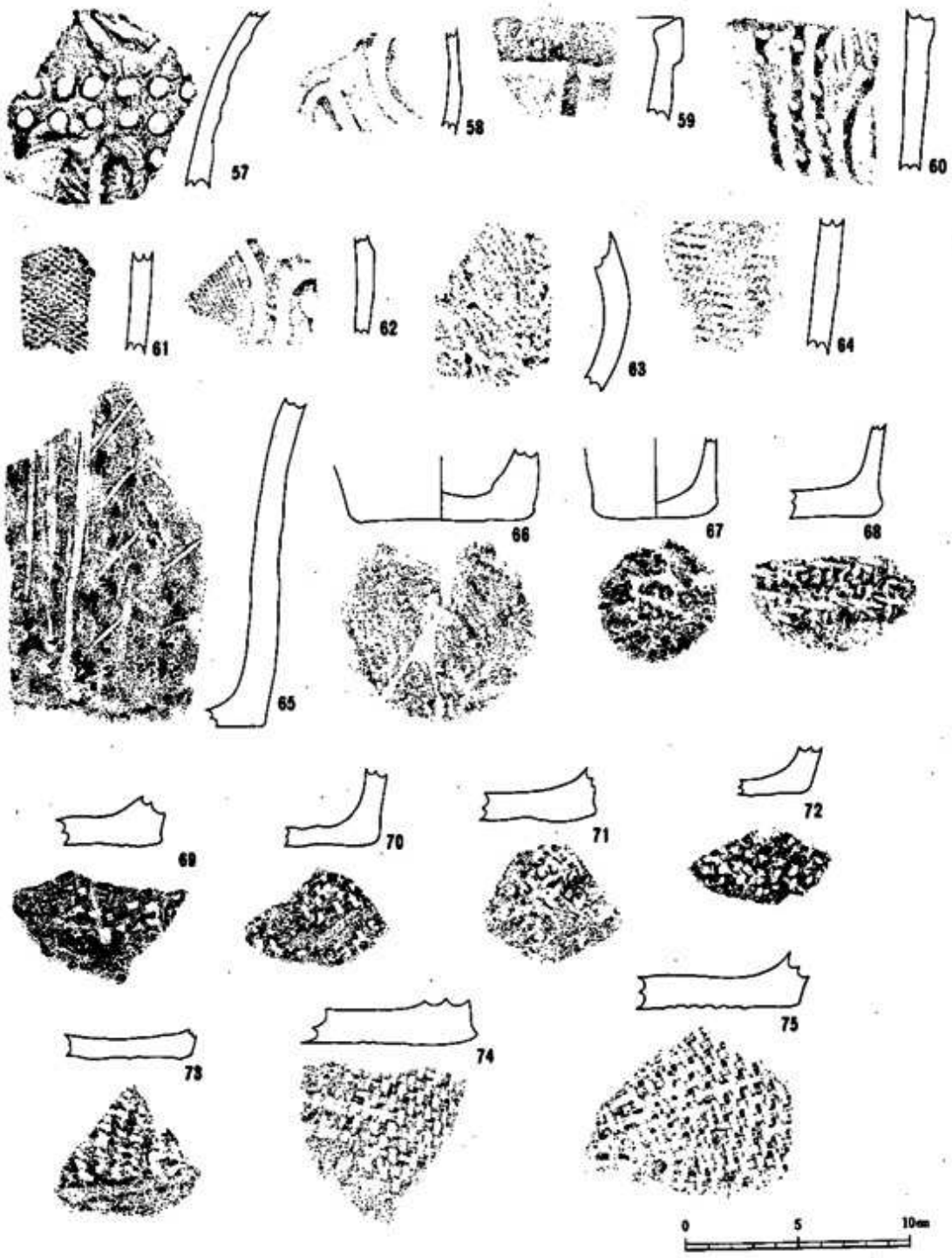
第19図　　A 4号住居址 出土土器(1)



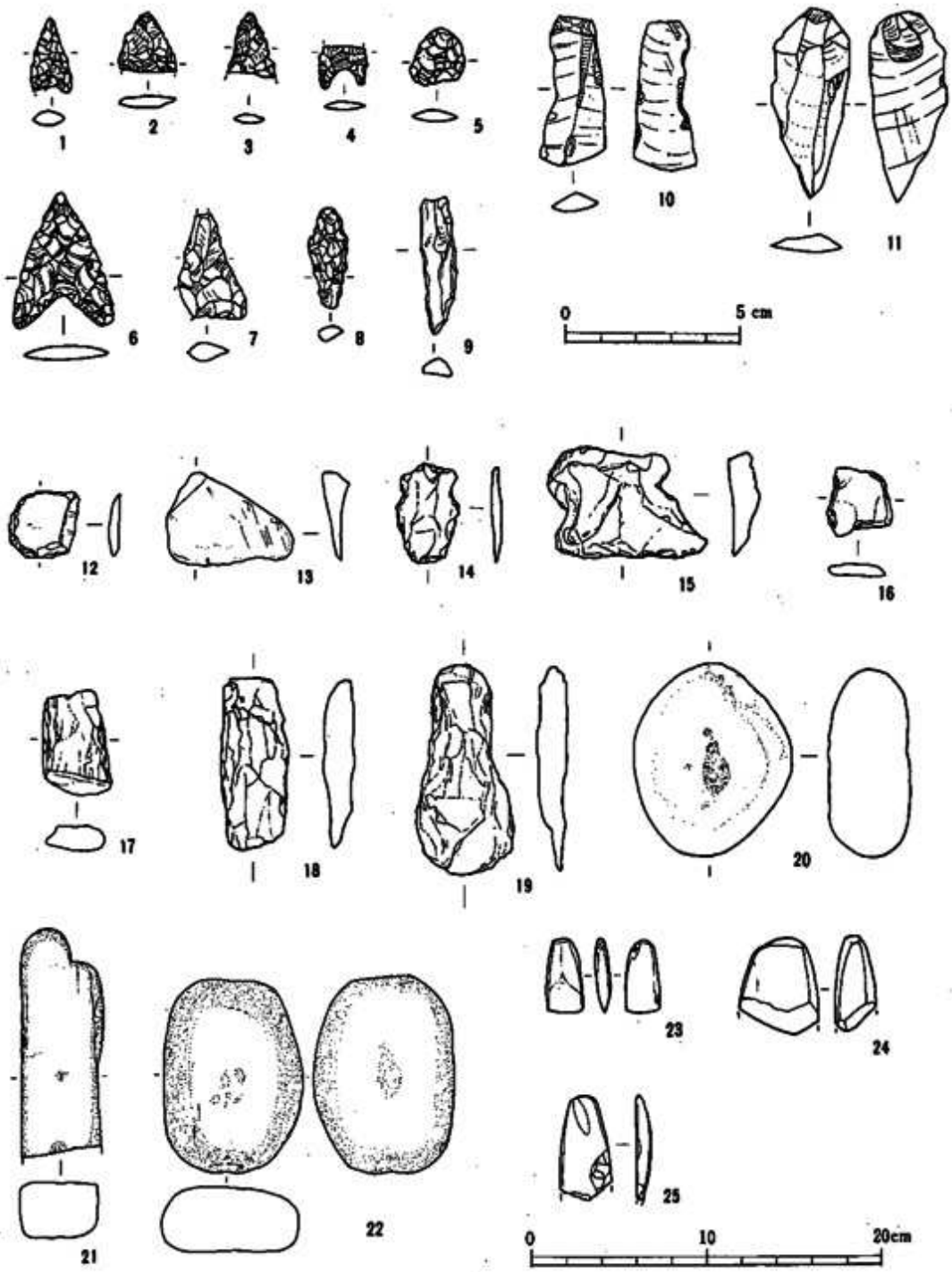
第20図　A４号住居址出土土器(2)



第21図　　A 4 号住居址出土土器(3)



第22図　　A 4号住居址 出土土器(4)



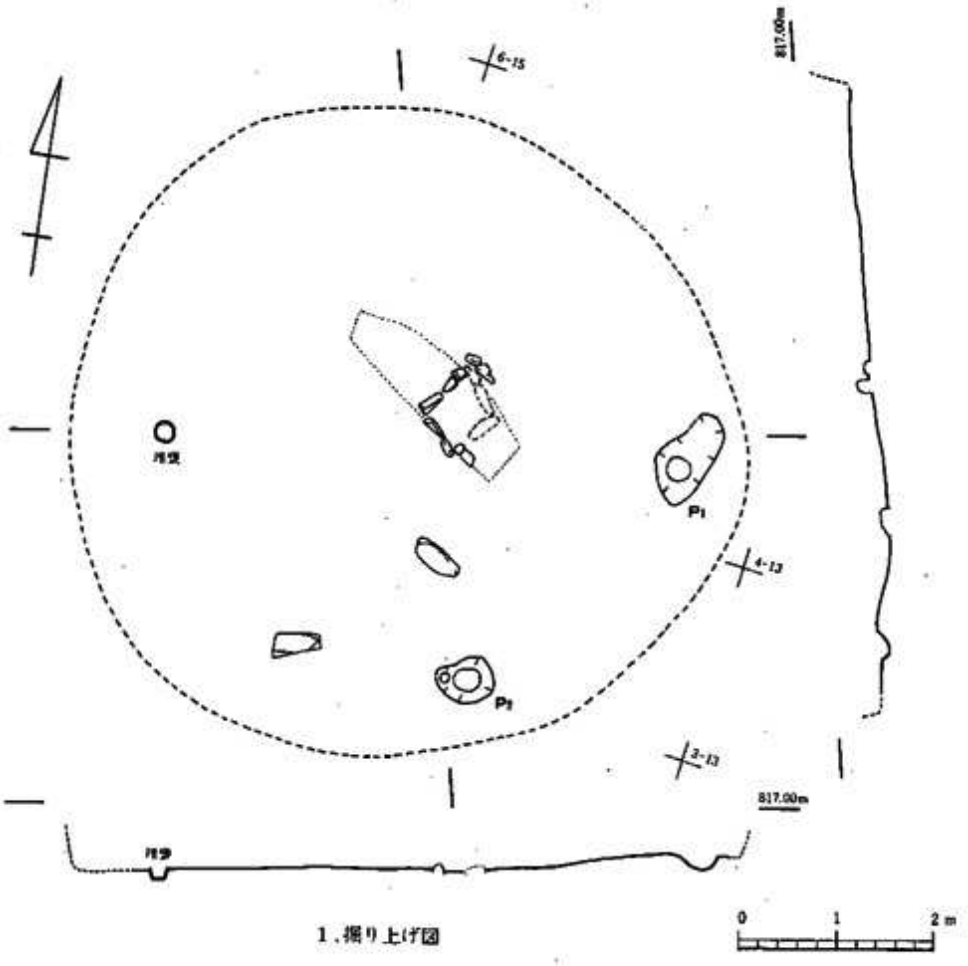
第23図　　A 4号住居址出土石器

5. A５号住居址（第24図～第26図）

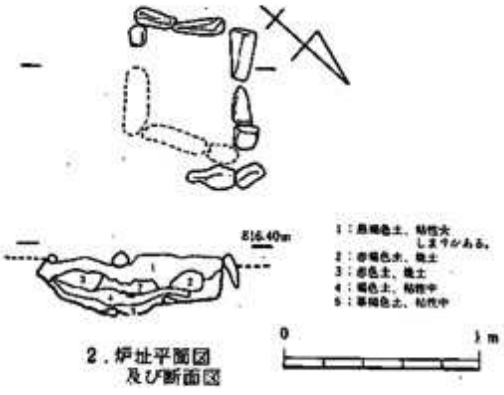
遺構　A５号住居址発見の経緯は、当初、４トレンチ14区の、－20㎝の黒土層内に焼灰を認めたことからはじまる。この焼灰の分布は約70㎝円形で、下層への調査が進行し、その堆積約15㎝面に石囲炉が検出され、住居址に附随するものとして確認されたことによる。然し石囲炉は、炉址そのもののみが、単純な状態で出現したものでなく、焼土に包まれた炉内外や、その周辺に石礫が混在する中で、石囲炉の方形のはしりを確認し、後、精査する中で、明確なものとされたものである。所在した地点は、最終的にはA６号住居址の、東北壁の上層部にあたっている。石囲炉は方形でその規模は、外郭では南北方向の二辺が各60㎝、東西方向の二辺が各65㎝、内径は南北44×東西51㎝で、やや東西方向に長いつくりであった。石囲に使用された縁石は、その上面径が12×12㎝から、50×13㎝程度の石が使用配列されており、東側の縁石は１部引抜かれた後をのこしていた。石囲炉の西には、同面上に東西方向に長く、120×50㎝、厚さ２～５㎝の帯状の焼灰分布も認める。石囲炉の下には、更に拡大する地床炉（竪穴炉）と判断される遺構があり、複雑さを増すが、その規模は100×70㎝で、焼灰の堆積は30㎝を記録する。炉址内の遺物としては、縄文中期初頭を中心とする各種土器片が検出された。これら重複する炉址の前後関係を考察するとき、A５号住居址の当初の炉は地床炉で、長年月活用された後、後年何等かの事情でその上面に石囲炉を設置し、移行したものと思われる。床面は、貼床によるものと思われるが、表土下の浅い耕土内や、それに近い地層に構築されていたためか、削剥されて追求できず、従って住居址のプラン、周壁、周溝等の遺構も明確にはつかみ得なかった。柱穴は推定４箇所とみられるが、その中、２箇所のみ検出される。P_1は100×51㎝、深さ21㎝。P_2は62×48㎝、深さ22㎝であった。炉址に近く、同面上に大きな石（50×25㎝）があり、何らかの関係をもつものとみられる。又、A５号住居址は、A４号住居址と切合関係にあるが、A４号住居址の輪郭も明確でないため、その前後関係など明らかにし得なかった。炉址と同面上の周辺遺物で、A５号住居址に附属すると判断される遺物としては、縄文中期土器片や、打製石斧、石鏃等が挙げられる。

遺物　本址は、縄文中期中葉の土器を伴う時代と中期後葉の遺構の重複が推察され、前者の遺物は主として地床炉から、後者の遺物は主として石囲炉とこれに附随する床面の出土である。量はいづれも多くない。

土器は提示できたものが24点、１～23は拓影、24が実測図である。１～４は微隆線による区画帯があり、その隆線沿いに竹管による連続爪形文・押引き文が施されるもので、１～３は深鉢形土器の胴部、４は浅鉢の口縁部である。５～８は縄文が多用される深鉢形土器片で、同一個体と思われる７・８には磨消部がみられる。９～11はヘラ描きの沈線及び隆線で文様が構成されるが、いづれも大柄な感じが強い。12は内湾する平口縁部で、やや太い隆帯が垂下し、一見無と思われる擦痕が



1．掘り上げ図



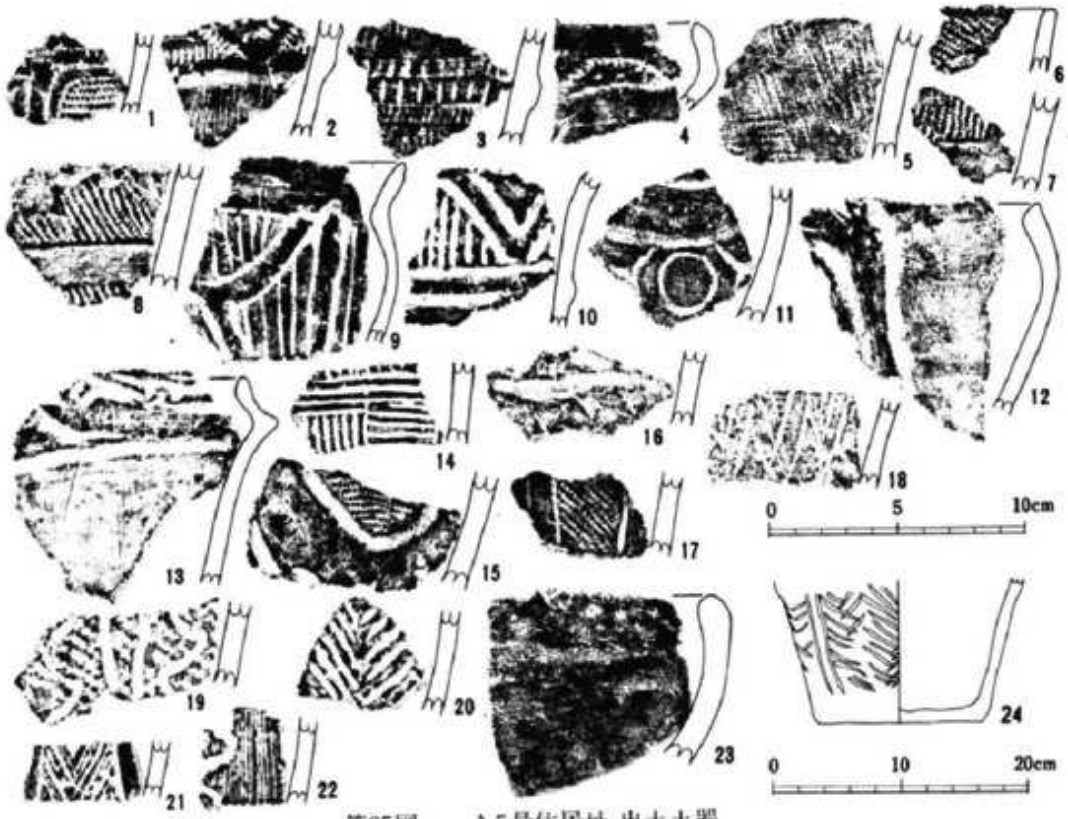
2．炉址平面図
及び断面図

第24図　　A５号住居址

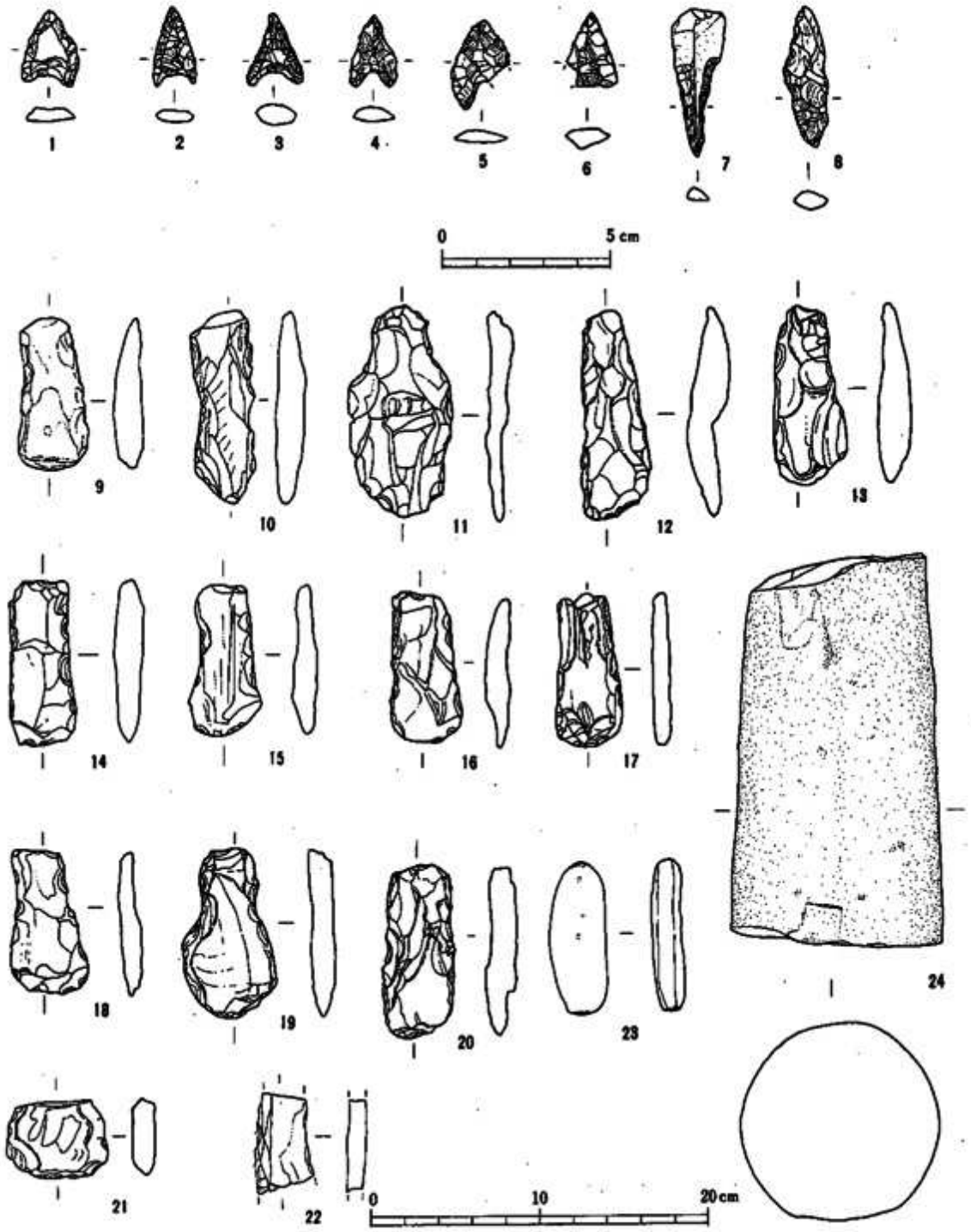
その左右に横位に密に施される。13は「く」の字形の屈折をした後、胴部へ続く、深鉢形土器の口縁部破片で、文様は口唇部の立ちあがりに帯状に施されるだけで、他は無文である。14は器厚0.7㎝、茶褐色の胴部破片で、半截竹管による整った平行沈線を縦横に密に施文している。15は沈線と巾広い無文帯区画内に縄文を残す。16は、無文地に細い4本歯の櫛状工具で横位の断続的な短沈線をしるす。17・19は縄文が用いられるもので、17は縦沈線間に細かい縄文が施文され、19は粗大な縄文地の上に太目の沈線及び蛇行沈線が垂下している。18・20・21は、精粗はあるが、ヘラ描きの綾杉文をもつものである。22は細い縦条線の地文に沈線の波状懸垂をもつもので、器厚0.7㎝を測る。23は椀状の曲線をもつ厚手の口縁部である。24は床面の埋甕で、胴上半部を欠いており、底径13㎝、器厚は1.1㎝と厚手である。胎土に多量の砂粒を含み、器面調整はあまりよくない。底面に不鮮明な網代痕を残し、文様はやや雑な綾杉状沈線が2本の平行する縦沈線に切られながら全周する。

以上のうち1～13・15が縄文中期中葉、16～22・24が後葉の土器である。14は中期初頭のものとも考えられるが、23とともに時期不明としておく。

石器は、調査の経緯から本址と重複するA6号住居址に属するものとの区別がつけ難い。石鏃・打製石斧等があり、詳しくは一覧表に譲る。　　（大久保知巳）



第25図　　A5号住居址 出土土器



第26図　　A５・６号住居址出土石器

6. A６号住居址（第26図～第30図）

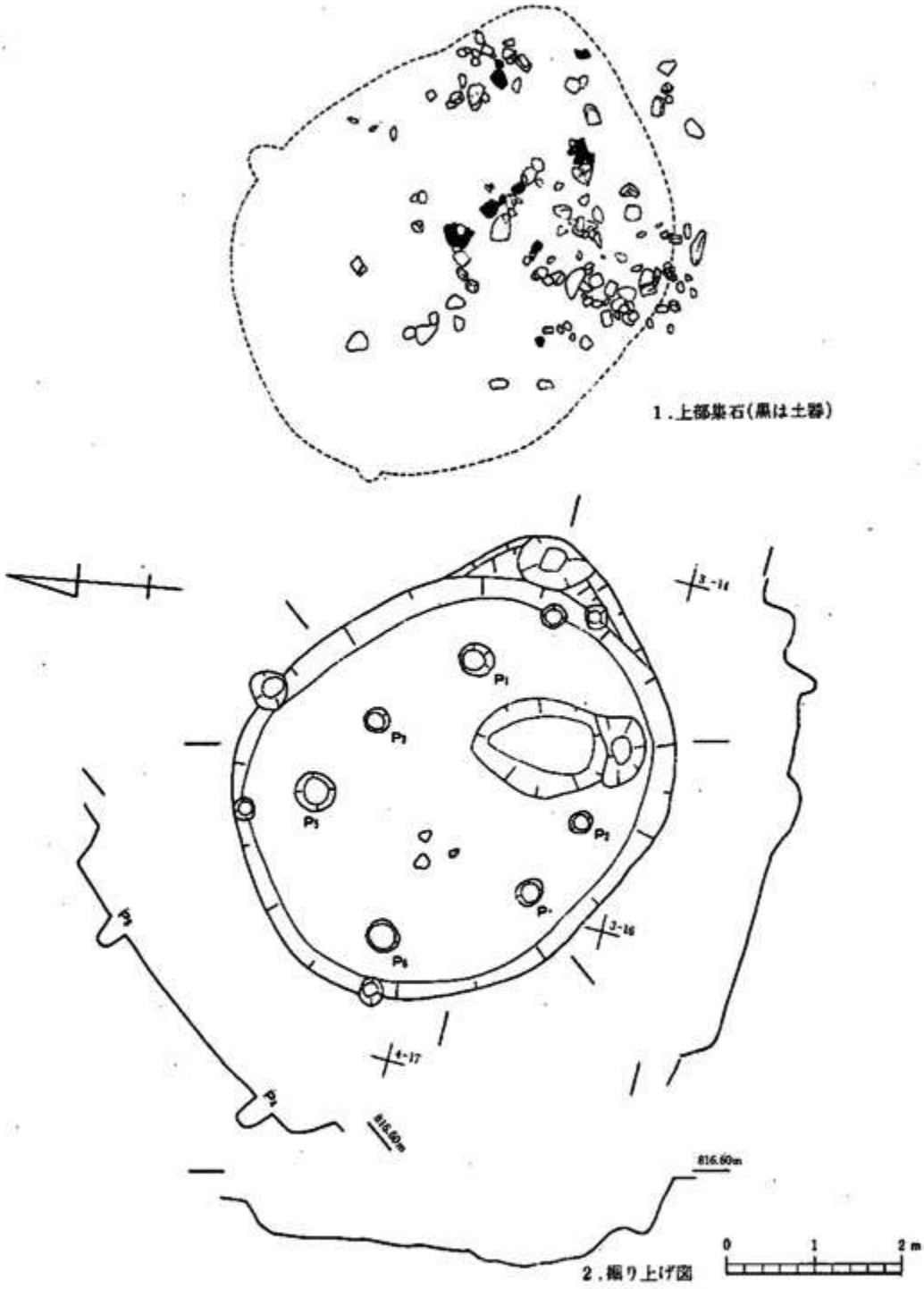
遺構　A６号住居址は、３、４、５各トレンチの各14、15、16区の範囲に検出され、４トレンチの15区がその中心をしめていた。表土下約100㎝に本址の床面を認めたが、その約50㎝の上層部には、A５号住居址が重複し、炉址等の遺構が所在した。当初－35㎝面に、A５号住居址の炉址を認めたが、同址の床面は農耕等により攪乱されて追求できず、むしろ、朝方の地に水気を含むとき、A６号住居址の上部輪郭線が微妙な色あいの相異でつかむことができ、以降、竪穴の発掘調査がなされる。竪穴を埋める覆土はかなり固いものを覚えたが、木炭粉末や火焼骨の粉末などが散見され、掘り下げが進むにつれて、南部に石棒の欠損品を含む不整然とした集石が、徐々に姿をあらわし、西北部の床面直上に個体のまとまった土器類が検出され、それらに混じて址内全般より、土器片や打製石斧、磨製石斧、石鏃等の石器類が出土する。又、個体のまとまった土器を包含した本址の床面直上の覆土は、黒色濃度が強く光沢をさえ帯びていた。

A６号住居址は、その規模が上面径、東西約608㎝、南北約538㎝、底部径東西約560㎝、南北約520㎝の、やや楕円状を呈するプランを示す。址内に、柱穴状のピットが６箇所、そして周壁部に２箇所確認され、南東部に南北約155㎝、東西約105㎝、深さ約20㎝前後の、浅く窪む楕円形のピットが認められた。柱穴は、P_1が上面径41×38㎝、深さ－44㎝。P_2が同25×29㎝、－26㎝。P_3が同29×30㎝、－28㎝。P_4が同28×34㎝、－35㎝。P_5が同45×44㎝、－26㎝。P_6が同39×34㎝、－35㎝の数値を示し、配列はほぼ良好であった。床面は、小礫を含む地山のロームで、凹凸が激しく平坦ではないが、床面全体が西側より東側へ向けて、ゆるやかな勾配がつけられており、固い仕上げであった。又、石囲炉、地床炉等の、明確な炉址と認められる施設が、攪乱による破壊のため煙滅したものか詳わず、その点、他の住居址に比し特異なつくりであった。然も柱穴がせまい範囲に多数集中的であるのも、注意されるところであった。竪穴を形成する周壁は概して高く、西壁約36㎝、北壁約43㎝、東壁約65㎝、南壁約62㎝で、上面より床面への壁は垂直に近い状態であった。周溝、埋甕等の施設はなかった。

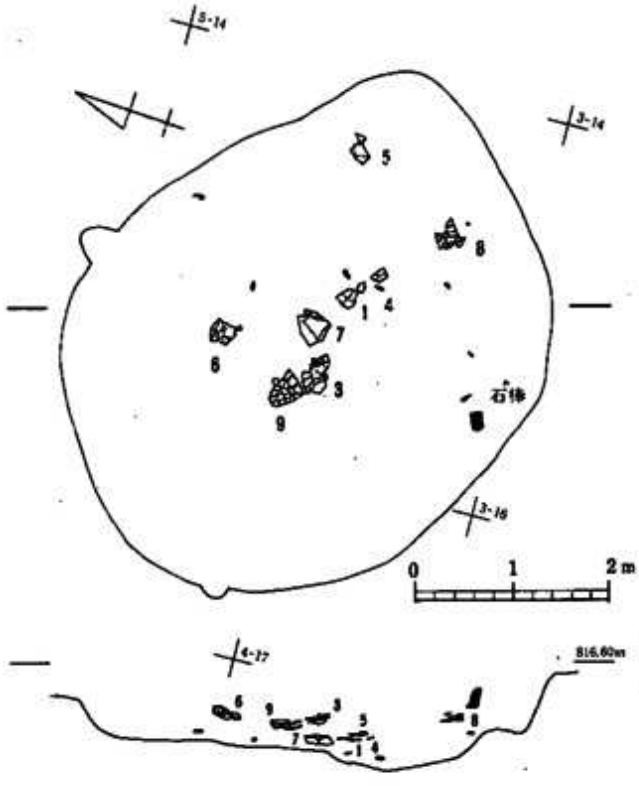
遺物　本址からの出土遺物は、完形に近い一括品を含む多くの土器片、石器類であり、床面直上及び覆土から大量に出土した。

土器は図示できたもの９点、拓影21点であるが、拓影の中には同一個体と思われる破片を多くもつものが３点程ある。土器片の総量は多く、時期的にも、一括土器で代表される本址の時期より後出的なものもかなりみられるが、それらは特徴をよく示すものに絞り提示した。

１～９は本址床面上及び覆土中から得られたもので、特に３・６・９は覆土中より一括出土したものである。１は爪形の刻みをもつ隆起線で方形乃至長方形の区画をつくり、その内部を沈線や結節沈線で埋めるという文様をもつ深鉢形土器の胴下部である。器面は荒れて、薄橙色を呈している。２～４は縄文が用いられるもので、いづれも1/2程欠損している。２は丈のつまった深鉢形を呈し、



第27図　　A６号住居址



第28図　　A６号住居址遺物出土状態

外面全てをＲＬ縄文で覆った上に、２ケの円形及びそれらを結ぶ横倒しの「Ｓ」字状の磨り消しを、３単位乃至４単位で配す文様をもつ。３は、器形が幾分歪むが、やはり全面に細かいＲＬ縄文を施したのち横位に何段か磨り消して文様を構成しており、口唇部にも、７～10ケの爪形を１単位として、およそ６単位を一定間隔をおき刻みつけている。４は、胴部が外反気味、口頸部が内湾気味に開く器形を呈す深鉢形土器で、口縁におそらくここ１ケ所だけに附されるであろう渦巻状の小把手をもち、口頸部に連続爪形文を伴う隆線で三角形と半円形を交互に連ねて１段の横位文様帯をつくって、それ以下はＬＲ縄文がやや疎に施されるという文様構成をとっている。５も口頸部の文様構成は４にやや似るが、胴部の外反度の強さ、口頸部の著しい内湾に器形の特徴がある。口頸部以下の文様は、１の如く隆線による長方形区画がつくられていると推定される。残存部は$1/3$程で、口縁の突起が対になるのか不明である。６は覆土中からの出土で、口縁・底部のごく一部を僅かに欠くだけの完形品である。器高２５.２㎝を測り、胴下部で一旦「く」の字状に張り、胴上部でくびれた後、口縁へ向って開く器形を呈す。文様は半隆起の平行線で描かれた縦方向の長方形区画文を中心とし、図示した面を表とすると裏面は全く対称となる２単位構成である。内外面とも暗

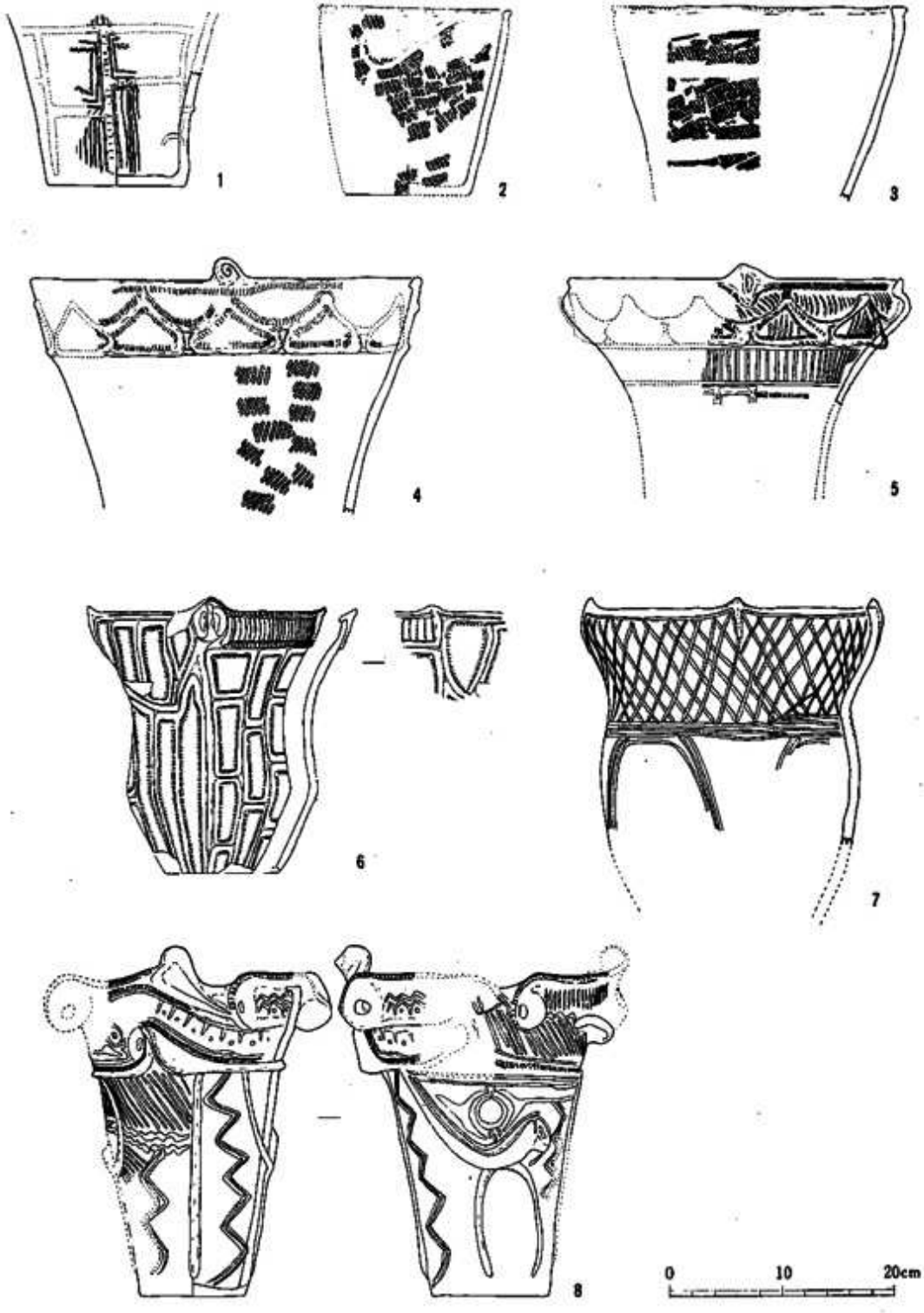
赤褐色を呈し、胎土には砂と大粒の黒雲母が含まれている。7も床面上から出土したもので、胴下部を欠くが他は完存している。口縁部に4単位の小突起をもち、頸部でややくびれる器形をとるが全体的に丸味が感じられる。施文は、4ケの突起下部に僅かな貼りつけがある他は、先端が平らで細い施文具により、くびれ部以上に斜めの格子目を3本の横線で区切られるくびれ部以下に「∩」形を描いている。この土器は施文具が半截竹管と認定できかねるが、器形及び文様のモチーフがいわゆる平出三類A系に通じるものと思われる。8は口縁部の約$^1/_4$を欠く深鉢形土器で、底部から直線的に開く器形をとり、口縁部に大小の把手が付される。文様は、口頸部に連続爪形文、楔形文が巡り、胴部には抽象文風の隆帯、鋸歯状に垂下する並列沈線、玉抱き三叉文等が配される。色調は赤褐色を呈し、非常に粗いが等粒状の特徴的な胎土をもつ。9は覆土中より一括出土したもので、ほぼ完形である。胴部がごく僅かに張りながら外開する深鉢形土器で、器高33㎝を測る。口頸部は、ドーナツ形や長方形の磨り消しをもち、結節沈線の斜行線や上下端の縁どりを施される縄文帯、胴部は隆帯・キャタピラ文・三叉文・結節沈線により2単位の抽象文を配している。焼成はきわめて良好で、胎土には石英の小粒を含んでいる。

10〜30は床面上及び覆土中から出土した土器片の拓影である。10はヒダ状圧痕文の顕著な深鉢形土器の口縁部片である。本破片と同一個体と思われる口縁、胴部破片が他に10片程あり、いづれも床面付近出土である。11〜14は縄文が施されるもので、いづれもＲＬ縄文が用いられている。このうち13・14は覆土からの出土で、同一個体と思われ、また類似する破片が更に数片ある。15・17は浅鉢形土器の口縁部片で、15は口縁外面、17は口唇に施文がある。16・18〜21はヘラ状施文具により鋸歯状沈線や自由な直線・曲線の描かれるもので、18は微隆帯上に指頭圧痕をもつ。19・20は同一個体であろう。22〜24は連続爪形文、キャタピラ文がみられるものである。特に24は焼成のよい堅緻な土器で、三叉文や半截竹管の連続刺突も観察できる。25は太い隆線による大柄な渦巻文をつくっている。26・28は縄文が用いられるもので、縄文地の上に太めの沈線で26は楕円の区画とワラビ手状懸垂が、28は波状懸垂が描かれる。27・29は覆土中層出土で、綾杉沈線が地文となるものである。器厚0.8㎝を測る。30は覆土中層出土で、器厚は1㎝と厚手となる。頂部が急に細く突出する波状の口縁部片で、微隆線により楕円形が描かれ、間隙に微細な縄文が施されている。本破片に類似する文様のモチーフをもつ破片も10数点出土している。

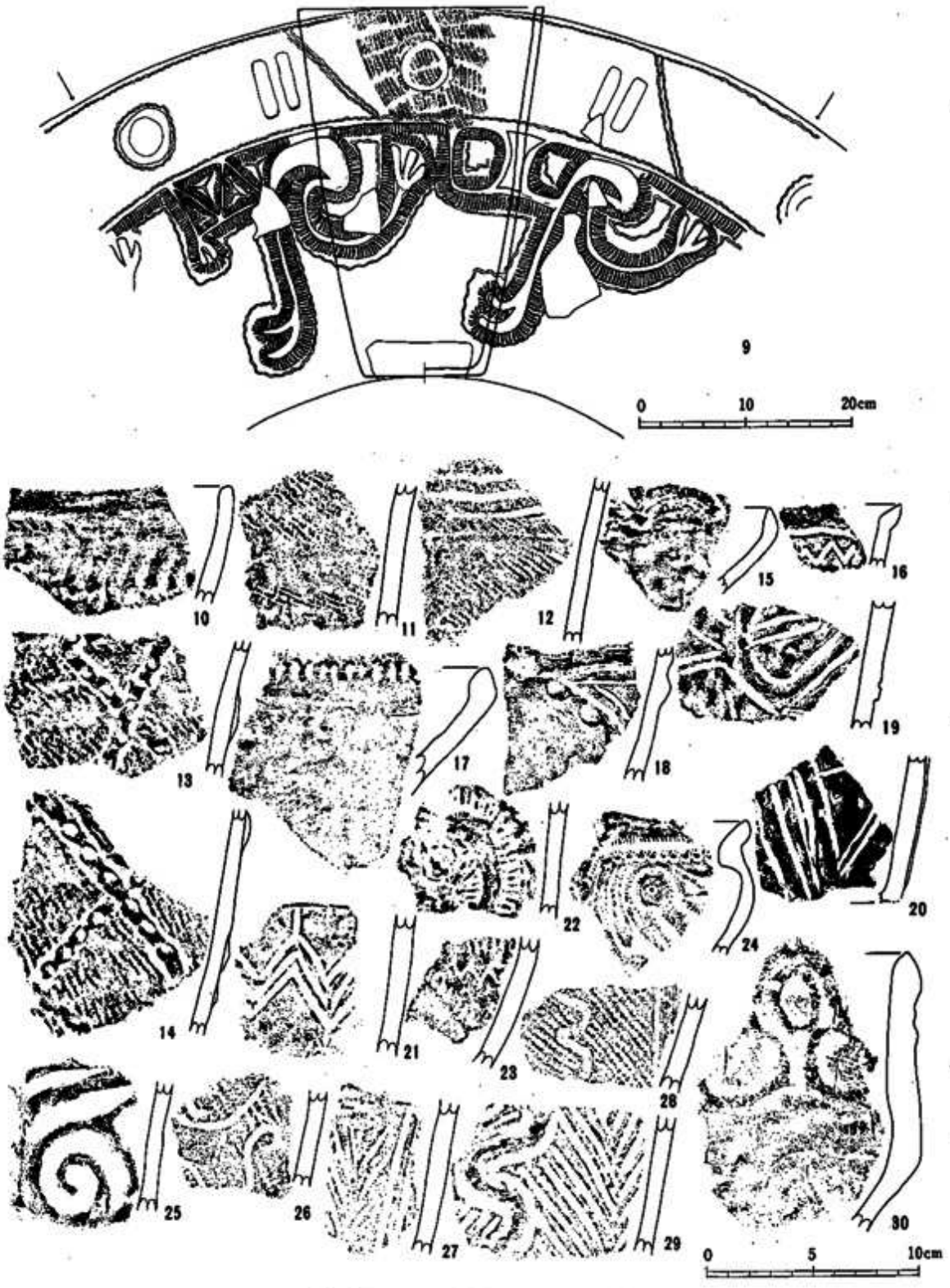
以上1〜9の図示土器、10〜30の拓影のうち1〜24は縄文時代中期中葉、25〜29は後葉、30は終末に比定時期が求められよう。各期の遺物とも出土量は比較的多いが、本址の使用・廃棄の時期は一括品・完形品の多かった中葉の資料の時期をあてるのが妥当であると考えられる。

石器はＡ5号住居址のものと混乱しており、各説明は一覧表で示す。

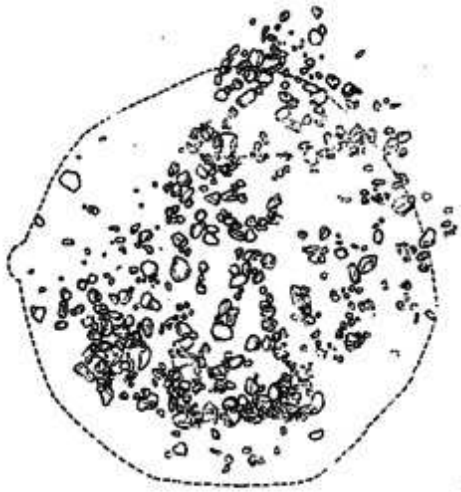
（大久保知巳）



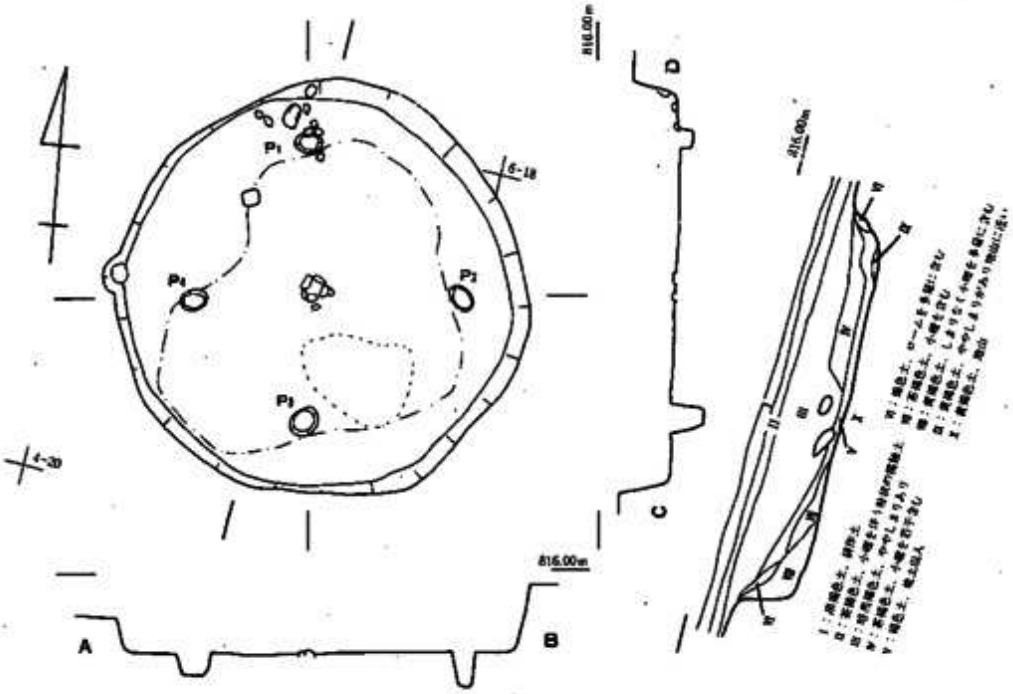
第29図　A６号住居址出土土器(1)



第30図　A６号住居址出土土器(2)



1.上部集石



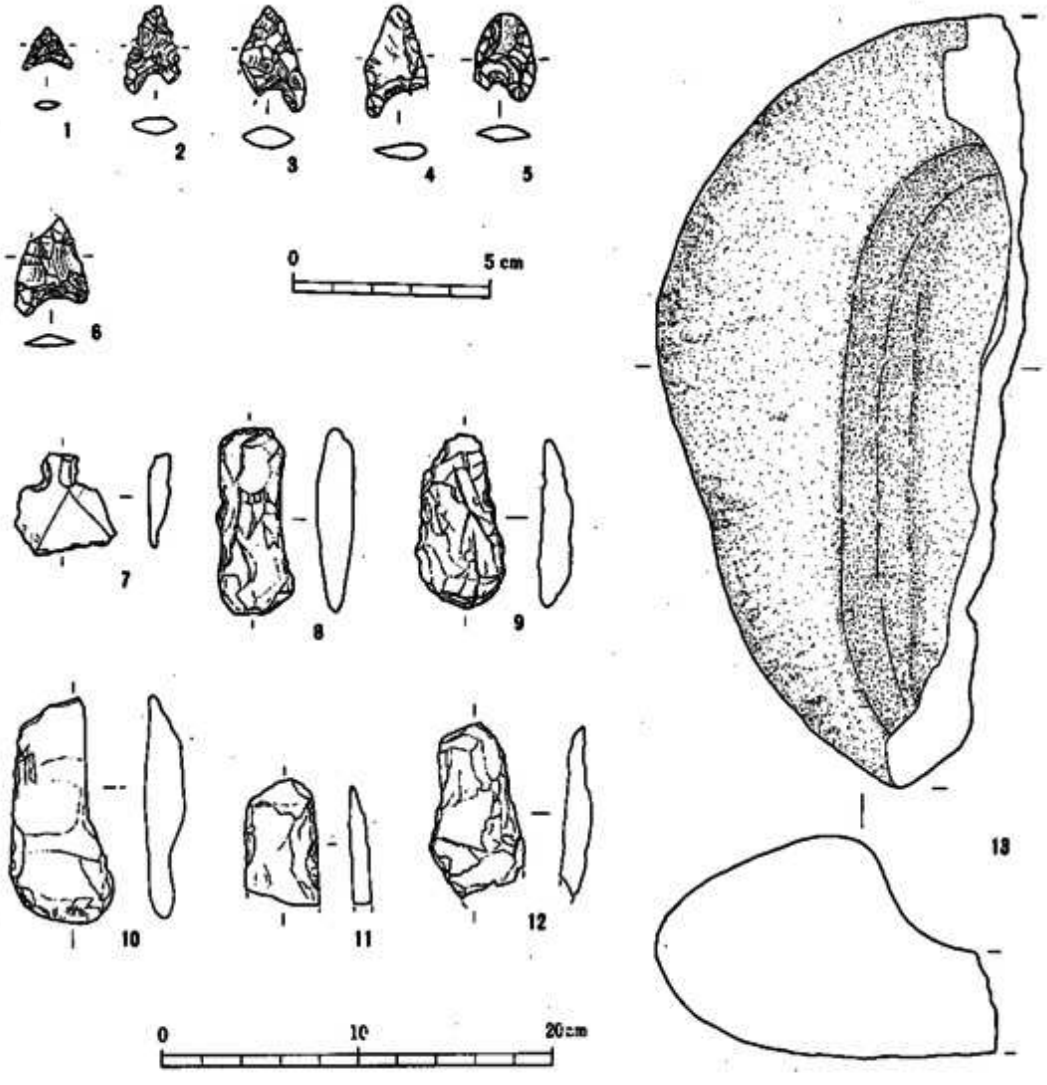
2.掘り上げ図

第31図　　A７号住居址上層集石(上)A7号住居址(下)

7. A７号住居址（第31図、第32図、第63図１）

遺構　A地区４・５・６－17・18・19グリットに位置する。A地区で唯一、他の住居址との重複関係をもたない住居址である。平面形は直径約４.２ｍの円形を呈する。壁は各部とも明瞭に残存し北側で約45㎝、東側で約55㎝、南側で約50㎝、西側で約40㎝を、それぞれ測る。壁の傾斜は各部とも垂直に近い。西部に僅かな張り出しがある。床面は平坦だが北へ向けて緩傾する。図中、一点鎖線で示した部分は特に堅い部分である。炉は住居址の中央、相対する柱穴を結んだ線上に位置し、径30㎝強の小形石囲い炉である。焼土はみられず深さもさしてない。柱穴はP_1～P_4の４ケで、いづれも径30㎝程の円形乃至楕円形を呈し、深さはP_1が20㎝、P_2が40㎝、P_3が40㎝、P_4が25㎝である。

本址で特記すべきことは、その覆土中に存在した集石である。径20㎝から拳大位までの礫が覆土



第32図　　A７号住居址出土石器

上層から中層にかけて多量に存し、その断面形は、本址中央床面へ向かい、摺鉢状になっている。

遺物　本址からの出土遺物は非常に少く、覆土及び床面出土のものを合わせても、石器が13点あるのみで、土器はごく小破片が数点あったが、図示できなかった。石器の説明は一覧表に譲る。

（神沢昌二郎）

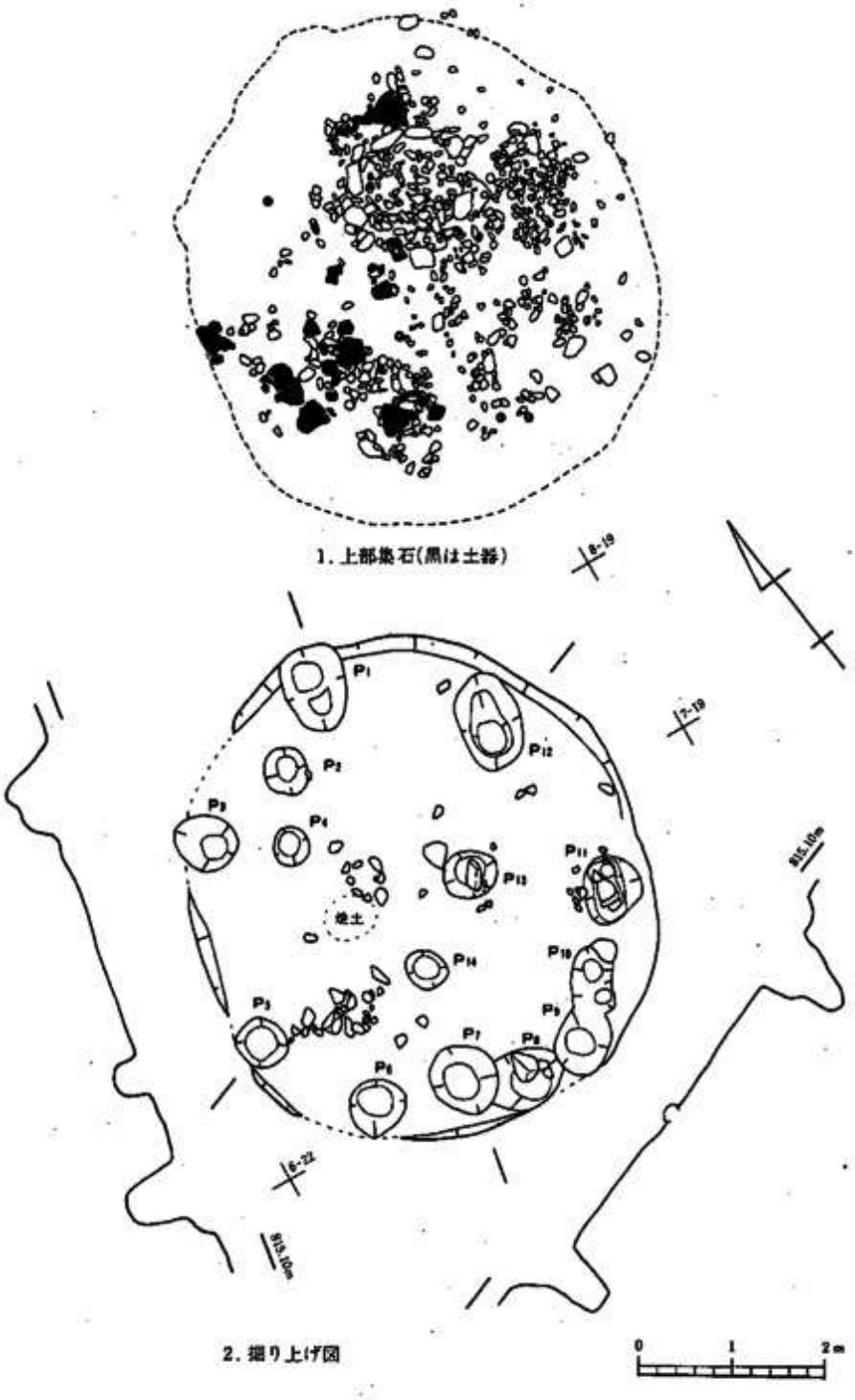
8.　A８号住居址（第33図～第40図）

遺構　A地区５・６・７・８－19・20・21グリッドに位置する。A17号住居址に殆ど全面を貼られている。平面形は、南北約5.2ｍ、東西5.0ｍの、ほぼ円形を呈する。壁は、他遺構に貼られているため残存壁高が少い。東壁20㎝、南壁20㎝、西壁20㎝、北壁28㎝を測る。床面は平坦で堅く良好であるが、本址を貼るA17号住居址の柱穴が所々に穴をあけている。また、部分的に小礫が散布している。炉は本址中央やや北西寄りにあり、小礫８ケを不整円形に配した径50㎝程のものである。ただし焼土は内部にはなく、西に隣接して径50㎝の範囲で薄く残存している。ピットはP_1～P_{14}まで検出されたが、P_2・P_4・P_{14}・P_1の半分・P_{10}は、上部にあるA17号住居址の柱穴関係のものであろう。主柱穴は、P_1・P_3・P_5・P_7・P_{11}・P_{12}の６本とみている。規模はP_1が、径約50㎝、深さ38㎝、P_3が径約60㎝、深さ50㎝、P_5が径50㎝、深さ60㎝、P_7が径60㎝、深さ63㎝、P_{11}が径80×60㎝、深さ50㎝、P_{12}が径100×60㎝、深さ80㎝をそれぞれ測る。

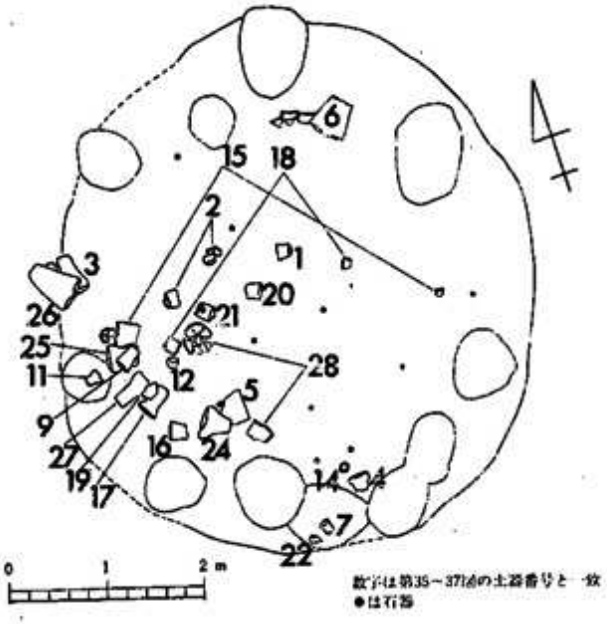
本址を貼るA17号住居址の床面直下及び本址上層には径10㎝程の多数の礫よりなる集石が存在した。礫の集積は部分によってまちまちで、その中心は本址北半にある。この集石は本址覆土の上、中層のみで、下層及び床面までは達していなかった。

遺物　土器と石器があり、覆土中から多量に出土した。特に土器は完形品に近いものが床面よりかなり浮いて、30点近く出土した。

まず土器について概観したい。大小があるが、すべて深鉢形土器として捉えて良いものと考えている。第35図１・２は類似する器形、文様構成をもつもので、２の欠損する口縁部にも１同様環状の把手が附くのかもしれない。器形は、僅かな張り出し底から直線的に開く胴部に続き、頸部から内湾気味に外開して口縁端部に至るもので、口頸部と底部周辺は無文となる。文様は胴部に集中し、環状の突起を伴う隆帯がうねりながら一周し、その上下をヘラ描き沈線や連続する刺突で埋めている。３も同様の器形を呈すがやや背が高い。胴部上半に隆帯をめぐらせて三角形を並べ、内部に三叉文を刻み込んでいる。三叉文の縁辺及び頸部の隆帯上には、細かい櫛歯状工具による列点刺突が連続している。この文様帯及び底部張り出し部以外は、細かい縄文が全面に施文される。施文は細かく、全体的に丁寧に作られた土器である。４は、やや大型だが、器形は１～３に似るものと考えられる。文様は口頸部に無文帯、頸部に隆帯による楕円区画を連続させた横位文様帯を設け、それ以下は、方向がそろう様に転がした縄文の上に、４単位線で隆帯が垂下される。５は、内湾する口頸部が無文帯となる点が１～４に類似するが、胴部がやや張る。胴部上半は隆帯で三角形を横位に連続させその


1. 上部集石(黒は土器)
2. 掘り上げ図
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
焼土
0
1
2m

第33図　　A 8 号住居址



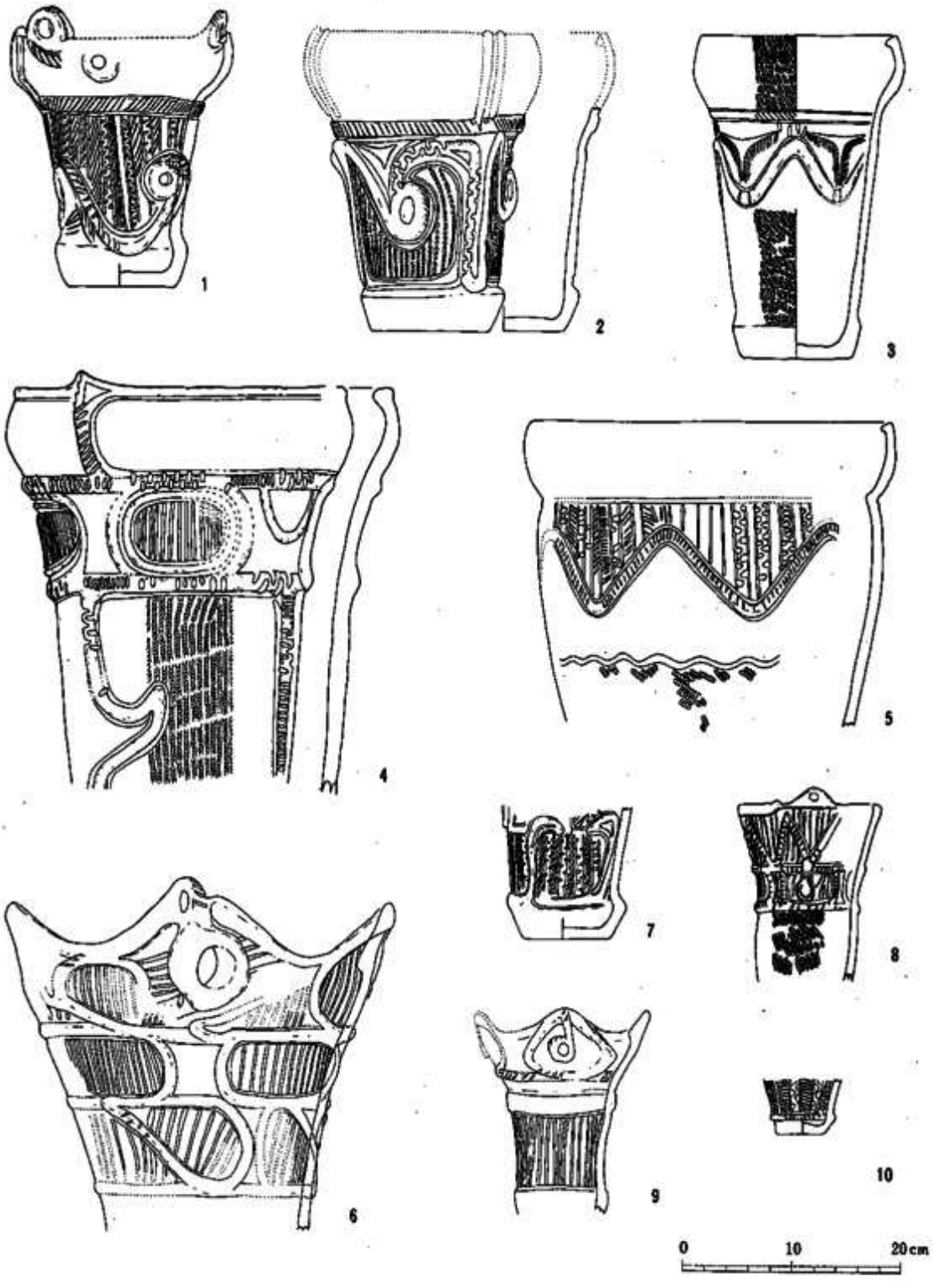
第34図　　A８号住居址遺物出土状態

内部にヘラ描き沈線や交互刺突が施され、下半は縄文が満たされている。７は頸部以上を欠くものであるが、１・２にごく類似する器形と文様構成をとるものと考える。６は４ケの大きな波状突起の口縁をもつ深鉢で、隆帯による横位区画帯の文様構成となる。突起の１つに径４㎝程の貫通円孔がつくられている。８は小形の深鉢形土器で、口縁に小孔を伴う突起を１ケもつ。文様は上半に隆起線で三角形と隅丸長方形を横位に連ね、下半は縄文を充塡する。９も小形の深鉢形土器で僅かに張り出す底部付近から、外反気味に外開する器形を呈し、口縁は大きく４単位の波状となる。10は底径4.5㎝程の土器でミニチュア土器と考えてよかろう。上半を欠損し、外面はヘラ描き沈線や交互鋸刻で飾られる。11は底部から直線的に外開する器形を呈すが、口頸部は僅かに内湾気味で８ケの山をつくる波状口縁となる特徴的なものである。文様は、口頸部に縦のヘラ描き沈線、胴部中位に微隆起帯の上に縄文をつけている。12は小形の深鉢形土器で、底部から若干外開気味に立ち上がり、胴部中位で一旦僅かにくびれたのち大きく外開して、稜をつくって直立する口頸部に至る器形となる。口縁に４ケの波状をもち、その波状部を中心にして菱形の区画をつくっている。口頸部以下は縄文が施文される。13・14は胴部がくびれ腰が張る器形を呈し、櫛形文が並べられる。13の櫛形文内部は施文に変化がある。15は４単位の波状口縁をもつ丈の詰まった感じのする深鉢形土器で

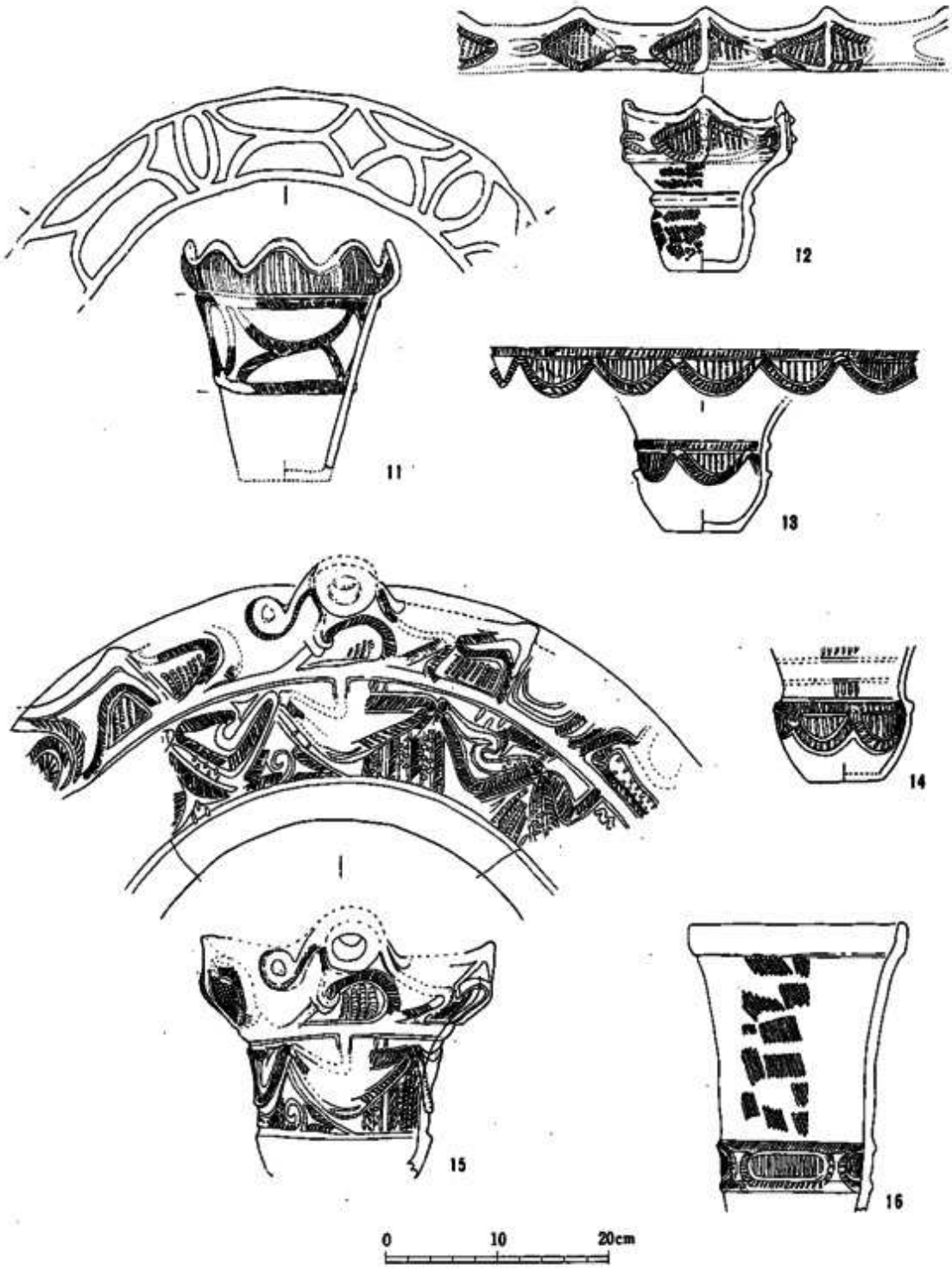
波状の1つに、径3㎝程の貫通円孔がある。文様は、基本的に、口頸部・胴部・底部周辺の3段に分かれ、口頸部・胴部はそれぞれ、ヘラ状工具により沈線・刻み・交互刺突・三叉文等が多彩に施されている。16は、僅かな外反をみせながら胴部が立ち上がる、口径に対して深い感じをうける深鉢形土器である。僅かに肥厚する口縁部は無文、胴部最下部近くに1段の横位の文様帯をもって楕円を連ね、口縁との間は縄文で埋めている。17〜26は、縄文中心の施文となる土器である。17は、底部付近と口縁部に無文帯をつくり、底部付近に僅かながら稜のある器形が特徴となる。19は小形の深鉢形土器であるが、胴部中位から大きく開く器形を呈し、爪形文がめぐらされる口縁部は1ケ波状突起をもつ。24はほぼ完形の優品で、張出底と口縁部の大きな突起に特徴がある。口縁部の突起には、径約2.5㎝の円孔があり、それを抱く様に3叉文が配されて、周囲にヘラ状工具で刻みがつけられている。25は胴部中位で緩かにくびれた後、頸部付近で最大径をとり、再び口縁に向って閉じていく、珍しい器形をしている。施されている縄文は細かい。26は、ほぼ完形の大形深鉢形土器で、4単位の波状口縁をもつ。胴部中位に一条貼りめぐらされた隆帯まで、波状のそれぞれ頂部から隆帯を垂下させ、隆帯上には指頭圧痕状の窪みを連ねている。27は半隆起の平行線により器面を飾られる土器で、4単位の大きな把手が口縁部から胴部中位まで存在したことが窺われる。底部から8㎝位上部まで無文帯となる。器形・施文ともに注目に価する土器と考える。28は底径16㎝を測る大形土器で、底部及びいくつかの大破片からの図上復元である。太く巾広い隆帯や渦巻など文様が他の土器とは異質で、その器形等も加味してみると、有孔鍔付土器の胴部下半になると思われる。

石器も総量60点と、頗る多い。石鏃・石錐・石匙・横刃型石器・打製石斧・磨製石斧・凹石等がある。覆土・覆土中礫群からのものが殆どであるが、一部、本址上層のA17号住居址のものが混じっている可能性がある。各数値は一覧表に示した。

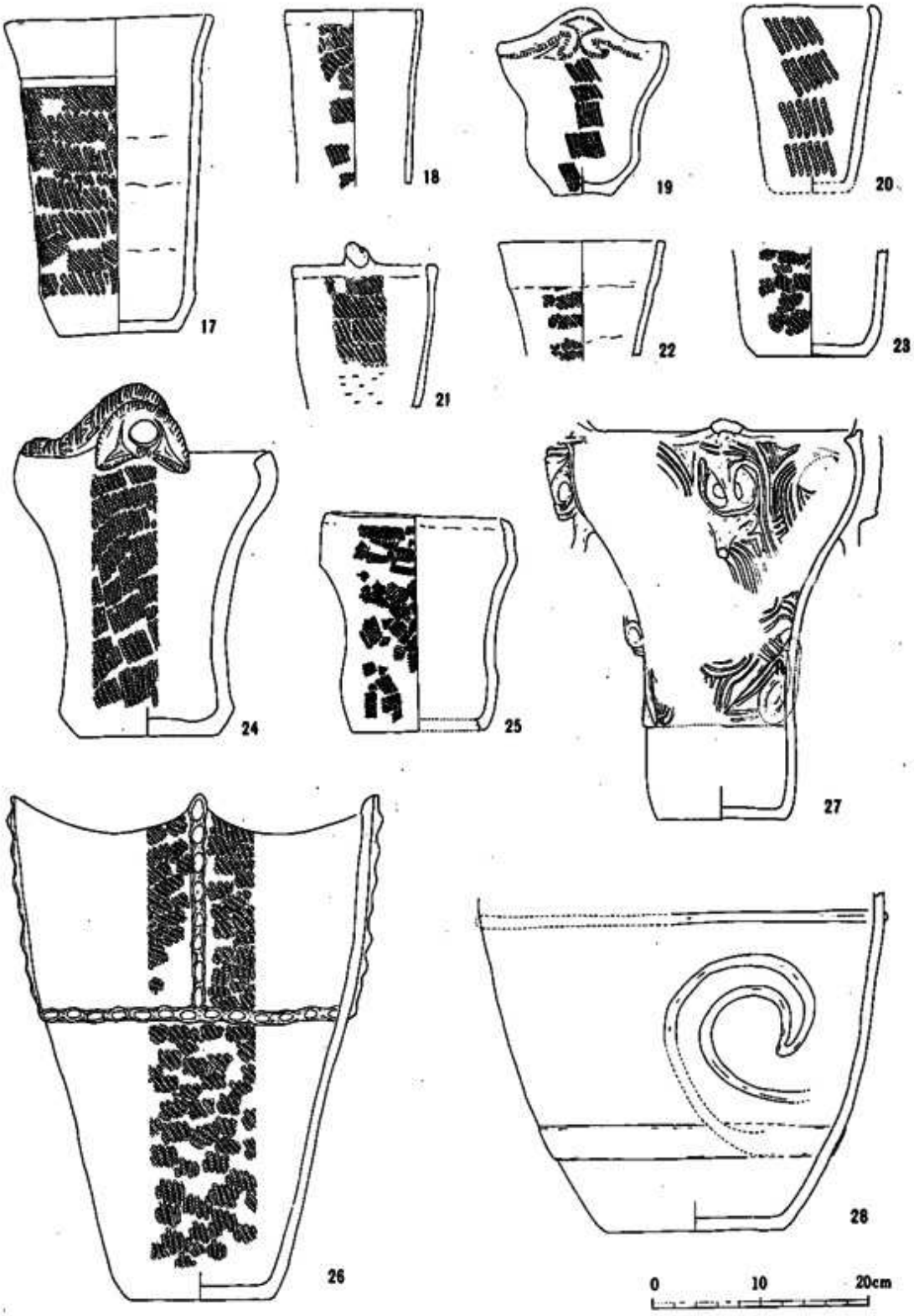
（三村　肇）



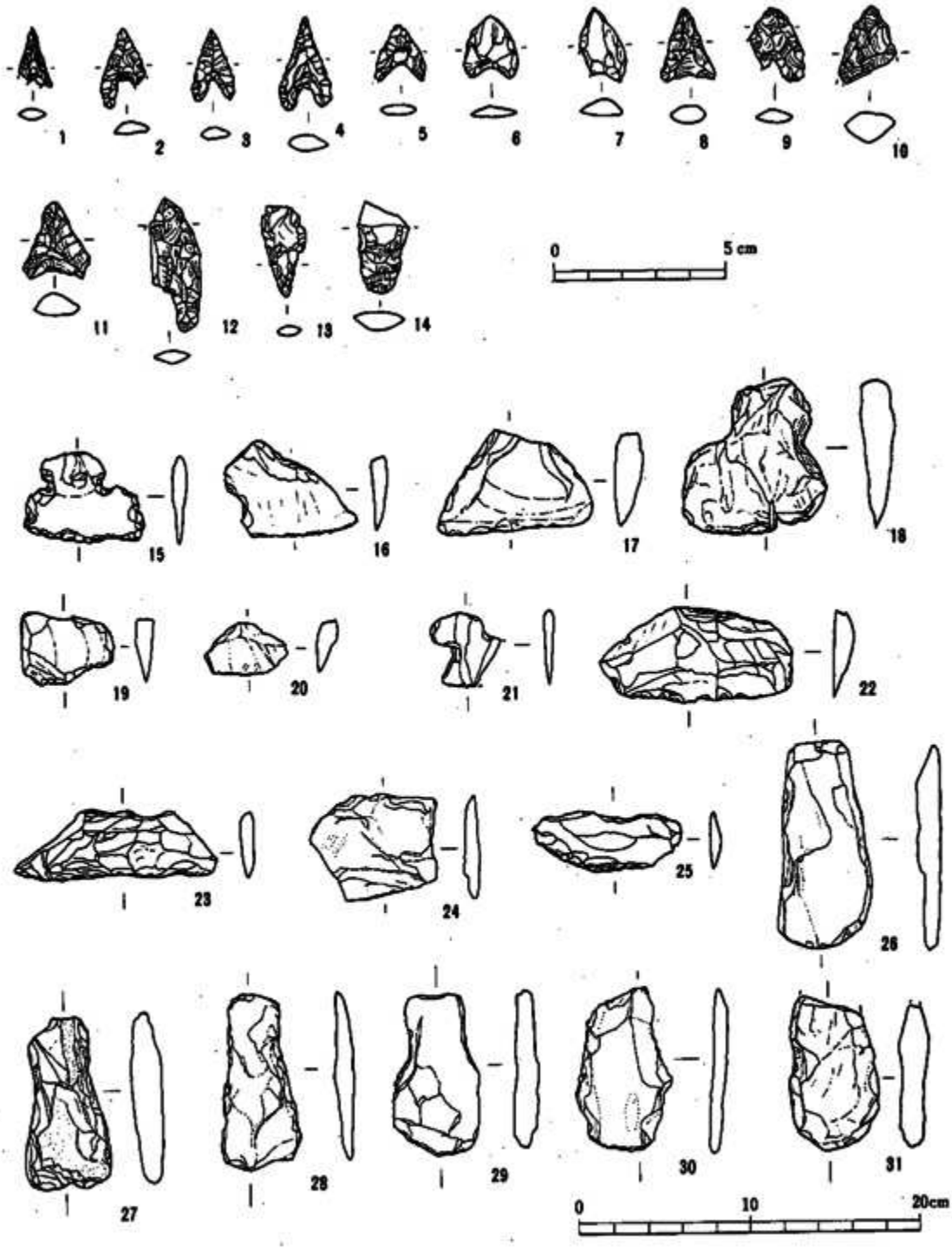
第35図　A８号住居址出土土器(1)



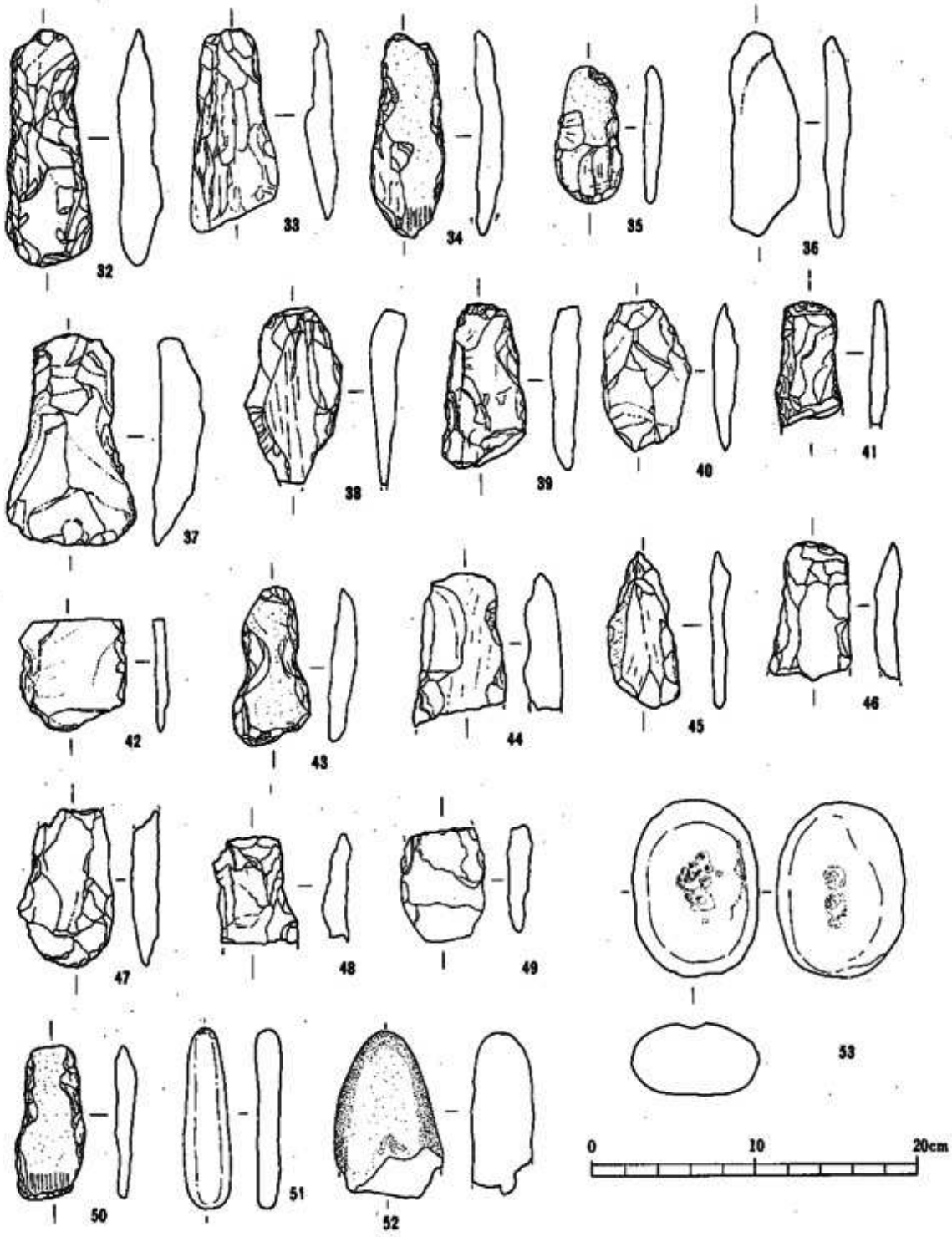
第36図　A８号住居址出土土器(2)



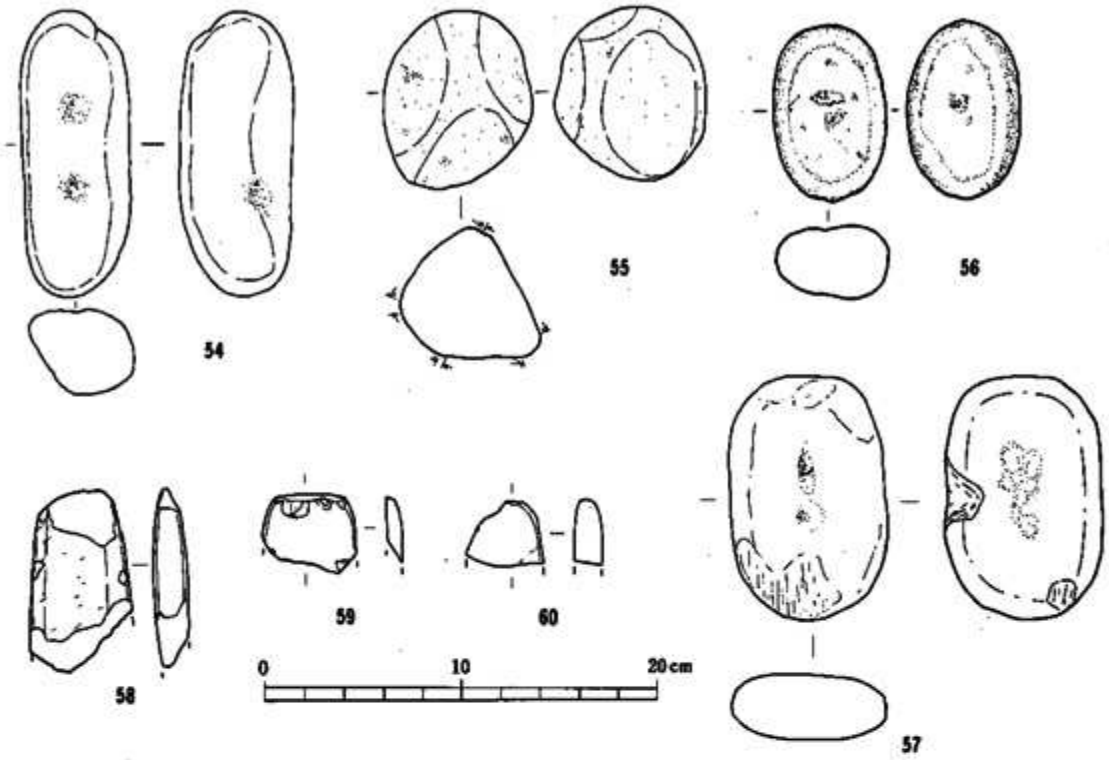
第37図　A８号住居址出土土器(3)



第38図　　A 8 号住居址出土石器(1)



第39図　　A８号住居址出土石器(2)



第40図　　A８号住居址出土石器(3)

9.　A９号住居址（第41図～第45図、第63図２）

遺構　A地区９・10・11－14・15・16グリッドに位置する。東側で10・11号住居址を切り、西側で14・15号住居址を貼っている。

平面形は、東西約４ｍ南北4.1ｍの不整円形を呈する。主軸はＮ－42°－Ｅである。

壁面は住居址の複合が多いため判然としないが、北側及び南側の一部で検出する。ほぼ垂直に落ち込み、落ち込み面からの壁高は北側中央部で約10㎝南側中央部で約30㎝である。

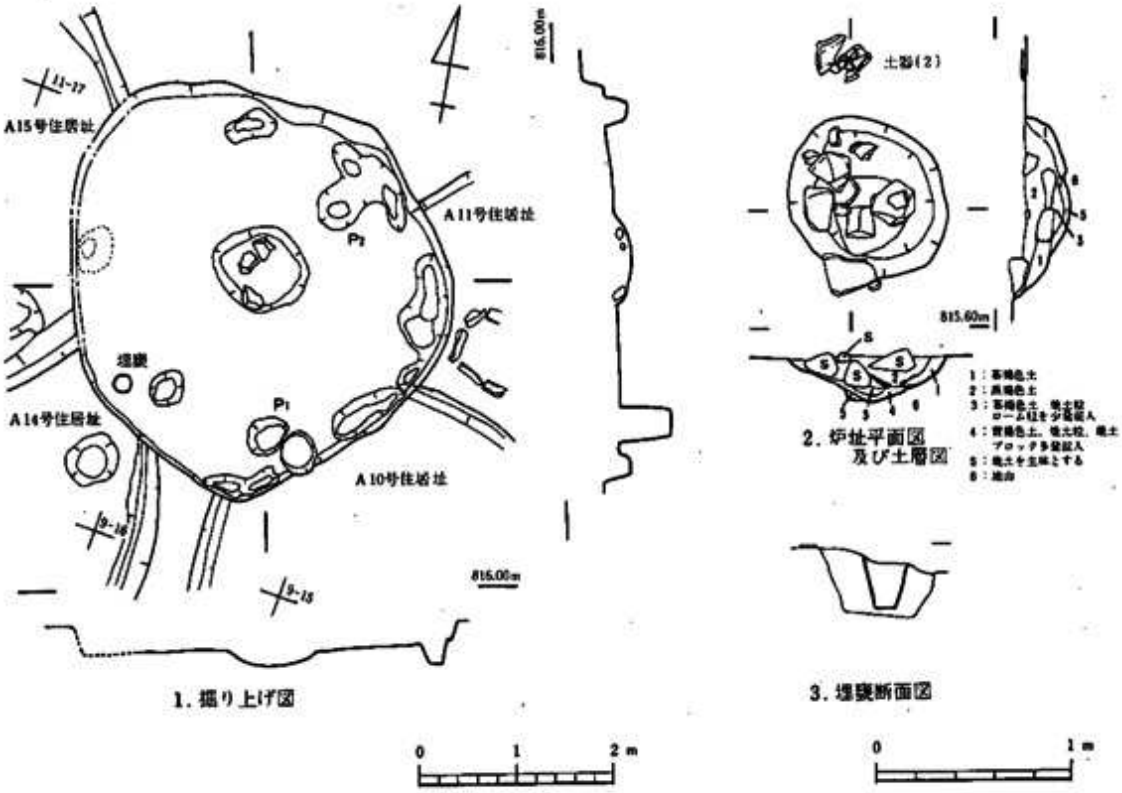
周溝は部分的に検出する。ほとんどが長楕円（約50×15㎝、－15㎝）のピット状となる。

床面はほぼ平坦である。西半では貼り床がみられやや軟弱な感があるが、全体として残存状態は良好である。

炉は住居址のほぼ中央に位置し、径80㎝の円形を呈している。炉の断面形は、所謂摺り鉢状を呈し段を有す。炉の深さは22㎝である。柱穴は、P_1（46×39、－52㎝）、P_2（約48×43、－73㎝）を検出する。主柱穴は恐らく４本になるであろう。

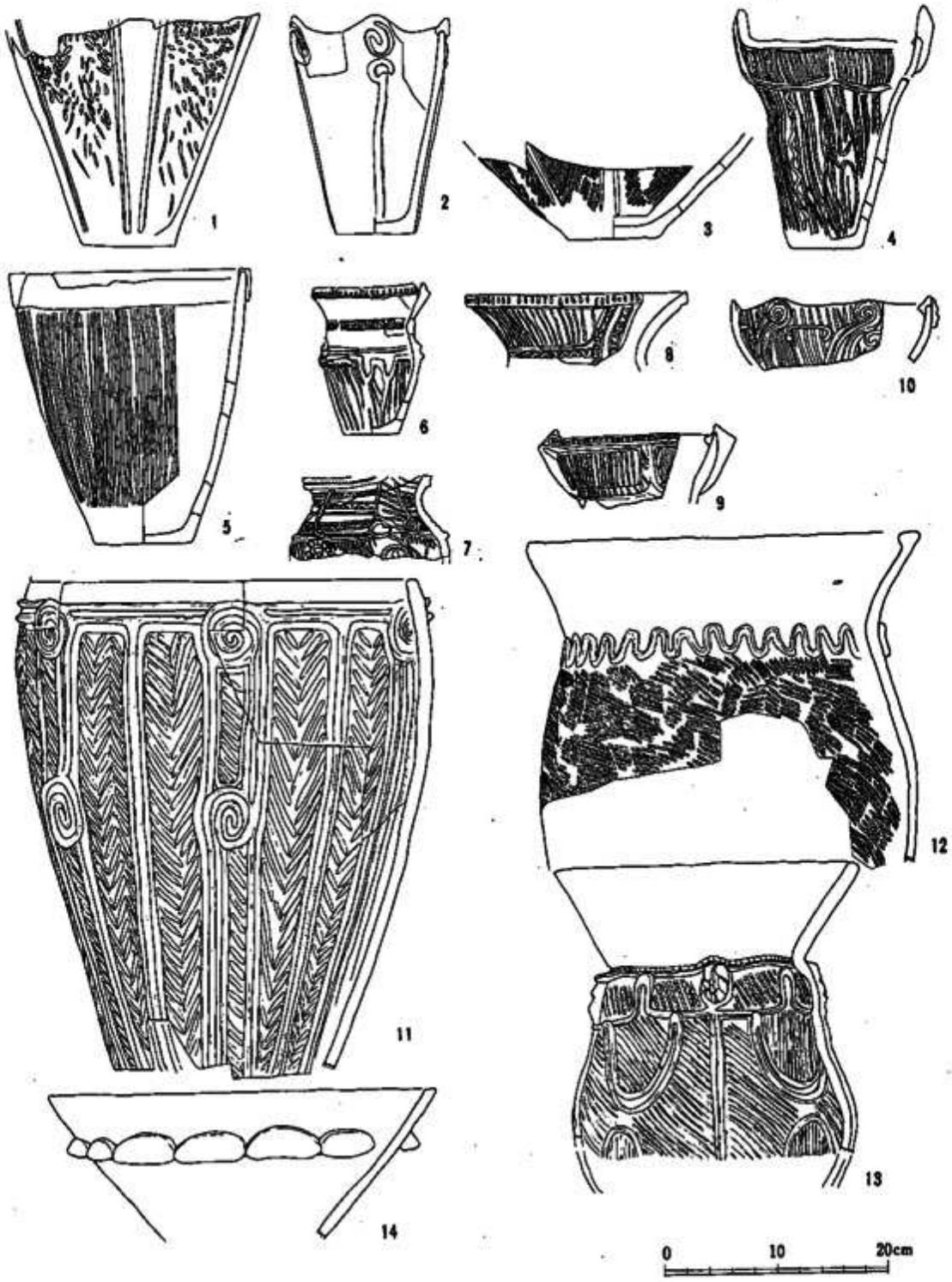
埋甕は１個検出する（第41図３・第42図１）。正位・胴上半部欠損である。

遺物　第42図１は埋甕である。口縁部及び同上半部底部を欠損している。器形はおそらく口縁に向かって単純に開く深鉢であろう。文様は地文に雨垂れ状刺突文を施し、隆帯による懸垂文を施

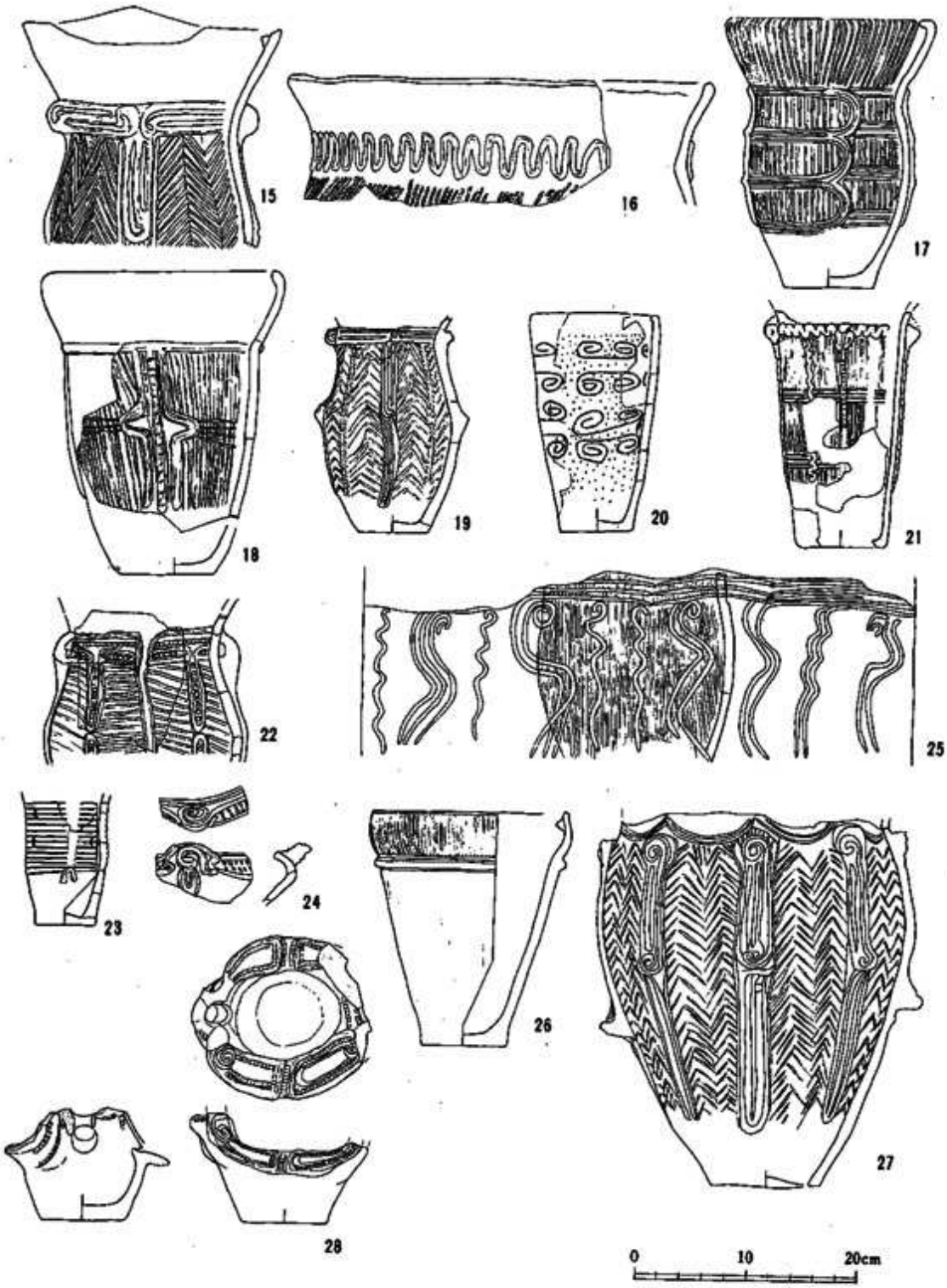


第41図　　A９号住居址

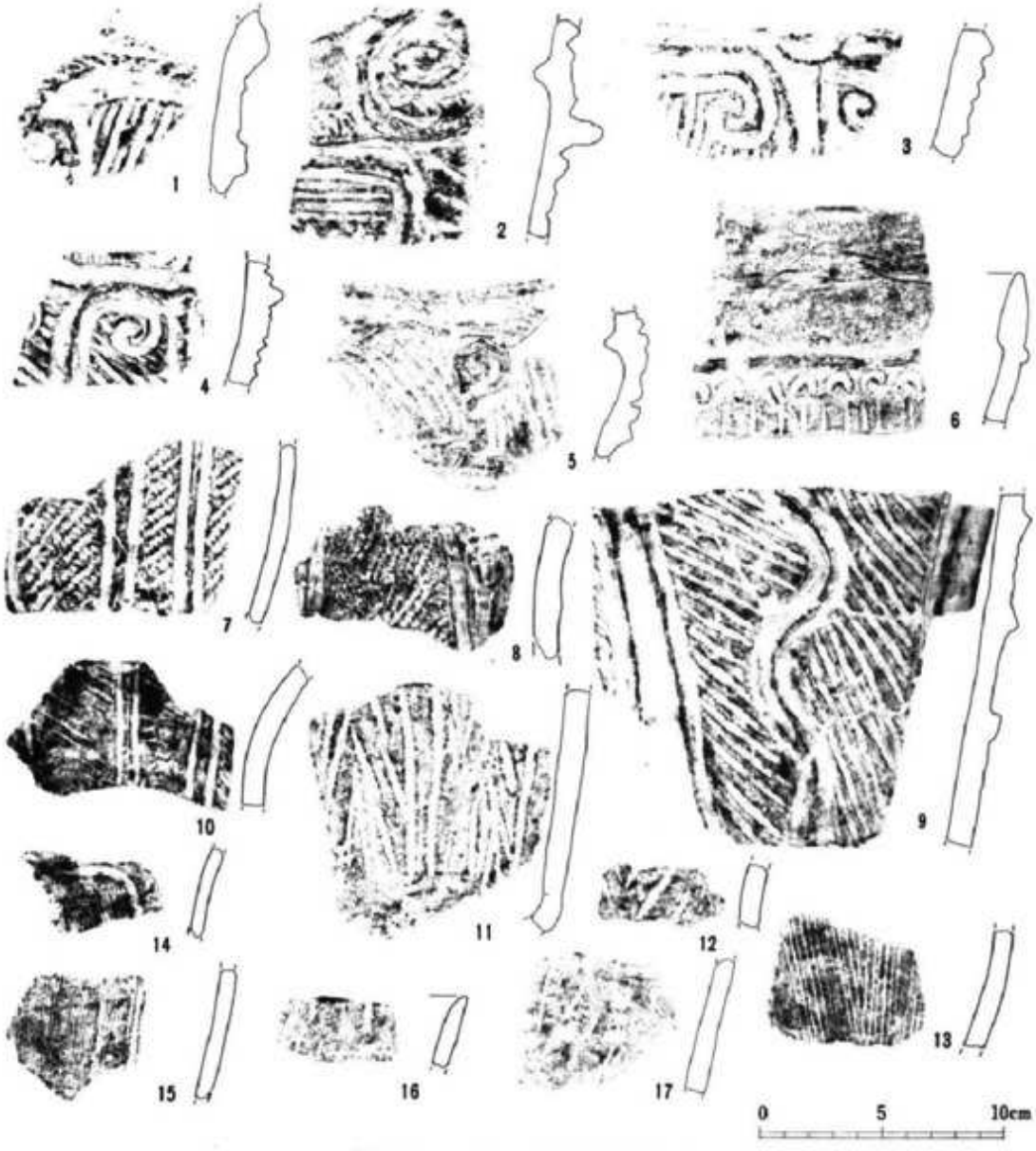
文した後懸垂間を磨消している。色調は茶褐色で焼成は良い。２は炉址南東側床面直上から出土する。ほぼ完形に近く、口径１３.８㎝器高１９.４㎝底部から口縁に向かって単純に開き、口縁は４単位の緩やかな波状を呈す小形深鉢である。文様は口縁部波頂部に沈線で渦巻文を施し、渦巻文直下より隆帯を垂下させる。全体に成形が粗雑で器面に凹凸を残す。色調は茶褐色で焼成は良い。３は炉内より出土する。口縁部胴上部が欠損しているため全体の器形は判別できないが、おそらく口縁に向かって大きく広がる鉢或いは浅鉢である。文様は地文にＬＲ縄文を施し、二条の沈線を垂下させ沈線間の縄文を磨消す。茶褐色で、焼成は良い。第63図２はミニチュア土器である。口縁部は欠損しているが、おそらく円筒形を呈すであろう。文様は棒状施文具により浅い沈線を幾何学的に施文している。色調は褐色で、焼成は良好である。第44図１は刻目を有す隆帯で曲線文や円文を施し、曲線文直下は棒状施文具で沈線を縦走させる。藤内Ⅱ式に比定される。２～４・６は中期後半唐草文系土器である。２は口縁部文様帯を二分し、上部文様帯は隆帯による渦巻文（おそらく４単位）を施している。下部文様帯は複雑である。まず隆帯による横帯区画文を描き、区画内に沈線と交互刺突文による山形文とを横走させる。３・４は胴上半部破片である。地文として３は縦行の条線、４は斜行条線を引き、隆帯を垂下させる。６は口縁部無文で横走する隆帯を境に胴部は隆帯



第42図　A 9～15号住居址 出土土器(1)



第43図　A9～15号住居址出土土器(2)

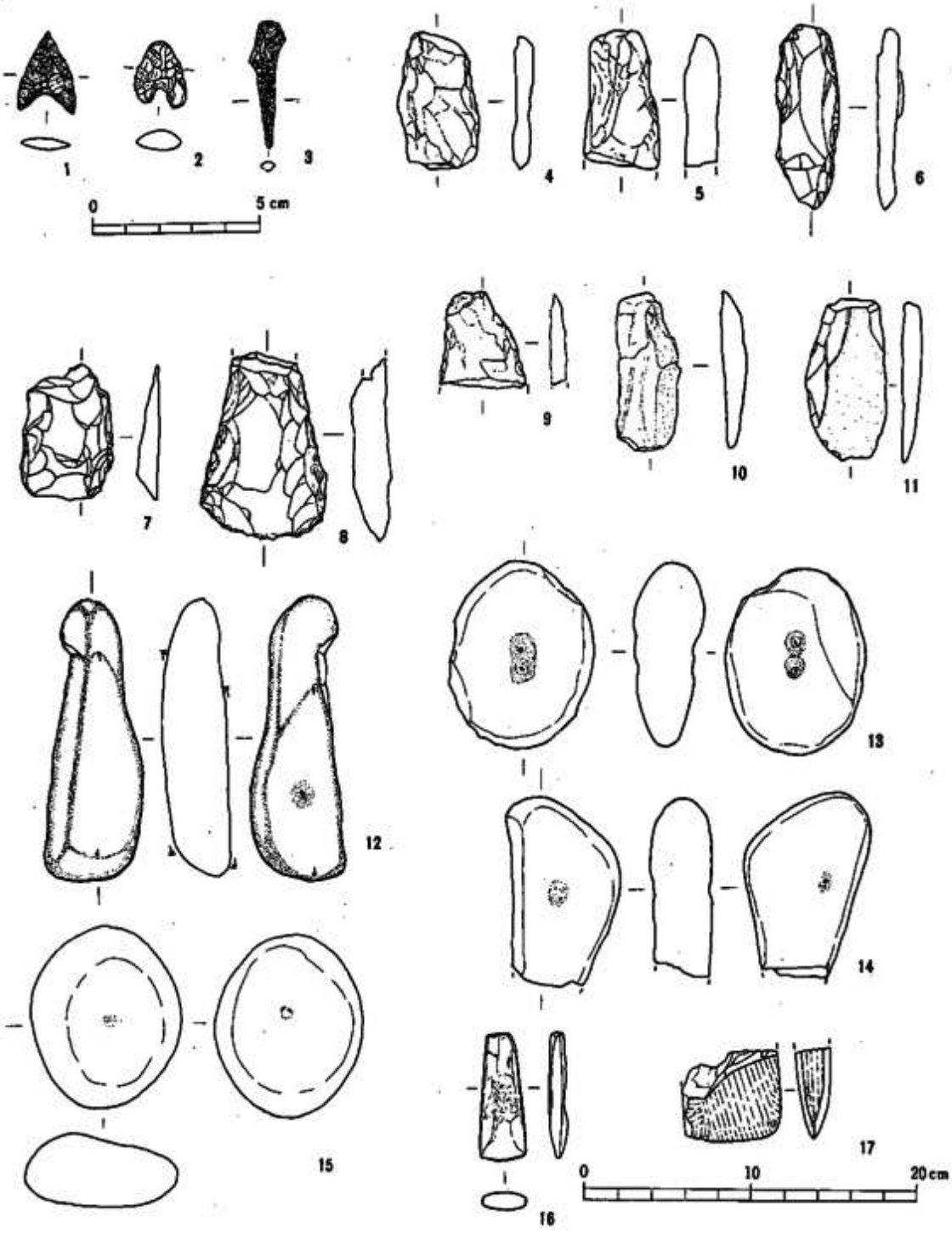


第44図　　A９号住居址出土土器

直下に逆「の」字状刺突を施し、浅い条線を引く。５・９～12は曽利系土器である。５は斜行する沈線を地文として、隆帯による渦巻蛇行懸垂文が施される。９は斜行する沈線を地文に隆帯による蛇行懸垂文及び二条の隆帯懸垂文を施す。10・11は綾杉文と沈線による二条の懸垂文を施す。12は八の字状綾杉文を施す。７・８はＲＬ縄文地に二条の沈線を垂下させる加曽利Ｅ系土器である。

石器は17点出土した。石鏃・石錐・打製石斧・磨製石斧・凹石・横刃型石器等の種類がある。覆土中からの出土が大半をしめる。各計測値は一覧表に示した。

以上より、本址は曽利Ⅳ式に比定される。　　（平林　彰）



第45図　A９号住居址出土石器

10. A10号住居址（第46図～第50図、第42図５～９、第63図３）

遺構　A地区８・９－13・14・15グリッドに位置する。北西側において９号住居址に切られ、北側において11号住居址を、東側において13号住居址を切っている。

平面形は、東西４ｍ南北5.１２ｍの楕円形を呈している。主軸はＮ－82°－Ｗである。

壁面は住居址の複合が多いため判然としないが、西側・南側及び東側の一部で検出する。ほぼ垂直に落ち込み、落ち込み面からの壁高は西側中央部で約７㎝南側中央部で約26㎝である。

周溝は、９号住居址との複合部及び13号住居址炉の撹乱部を除きほぼ全周する。幅は約10㎝深さは約５㎝である。

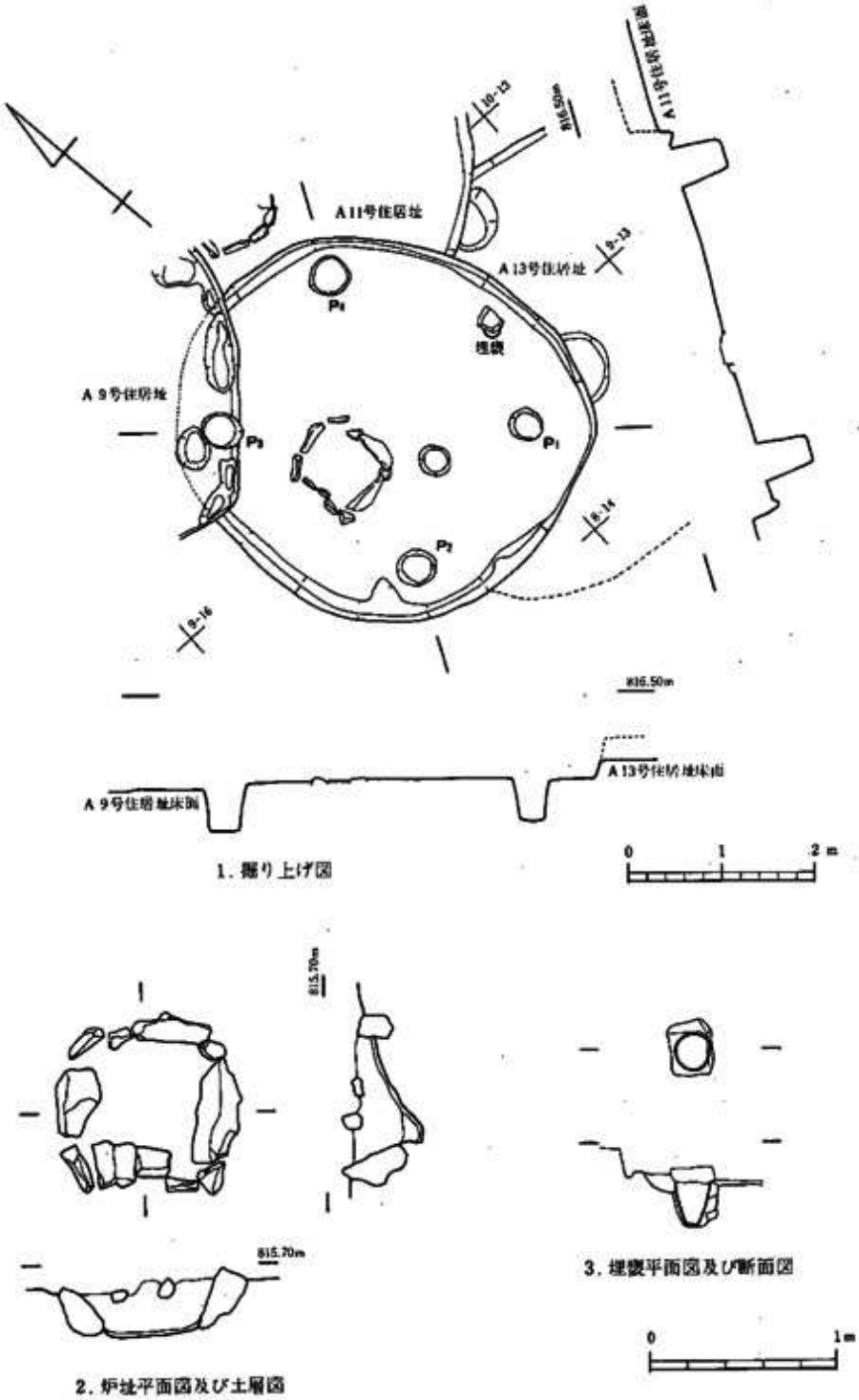
床面は北半は比較的平坦で、良好に残存しているが、南半は砂利混りで凹凸が激しい。

炉は中央やや奥壁寄りに位置する。径96×80㎝の長方形を呈し周囲に大小11個の礫を巡らせた石囲炉である。深さは37㎝で、炉内から縁石に用いられたと考えられる拳大の礫６個、カーボン、土器小片を検出する。炉底は、西側が深く掘り込まれている。

柱穴は、P_1　（35×33、－36㎝）、P_2（42×39、－40㎝）、P_3（38×40、－52㎝）、P_4（44×41、－51.５㎝）の４個検出する。

埋甕は１個検出する（第46図３、第42図４）。正位、口唇部欠損・石蓋付である。

遺物　第42図５は埋甕である。前述のとおり、口縁部を欠損している。器形は底部から口縁部に向かって開く深鉢である。口縁部は無文であり肥厚させている。胴部は10本歯の櫛状施文具により条線を施している。４はP_2内より出土する。器形は底部から口縁部に向かって若干屈曲をもちながら広がる深鉢である。口縁部には２単位の突起を有す。文様は口縁部文様帯と胴部文様帯とに分かれる。前者は隆帯による横帯区画文を施し、区画内は棒状施文具による沈線を縦走させる。胴部は櫛状施文具による条線を地文として、更に沈線による蛇行懸垂文及びU字・逆U字懸垂文を４単位配す。色調は赤褐色を呈し焼成は良好である。胴上部及び器内面に煤の付着がみられる。６は小形の深鉢土器である。器形は「く」の字状口縁を有し、頸部で屈曲し再び胴上部で張り底部に向かう。文様は口縁端部に刺突文を配し、頸部は交互刺突による山形文を横走させる。胴部はまず隆帯を横走させ頸部と一線を画す。隆帯によるW字状懸垂文を配し交互刺突による山形文及び条線を施す。７は本址覆土中より出土する。胴部から底部にかけてと口縁の一部が欠損しているため全体の器形は明確でない。口縁部は一旦内曲し口縁に向けて再び外反する。口縁の欠損部には突起が存在していた様である。文様は複雑である。口縁端部には刺突文を施し、口縁部には隆帯による区画文並びに渦巻文が施されている。区画内には棒状施文具による斜沈線を施す。更に交互刺突による山形文を三条、刺突文を二条それぞれ横走させている。胴部は綾杉文を地文として隆帯（或いは刻目を有す隆帯）によって渦巻文を施している。色調は暗褐色で焼成は良好である。８は本址覆土中より出土する。口縁部のみであるため全体の器形は明確でない。文様は口縁端部に刺突文を施し、刻



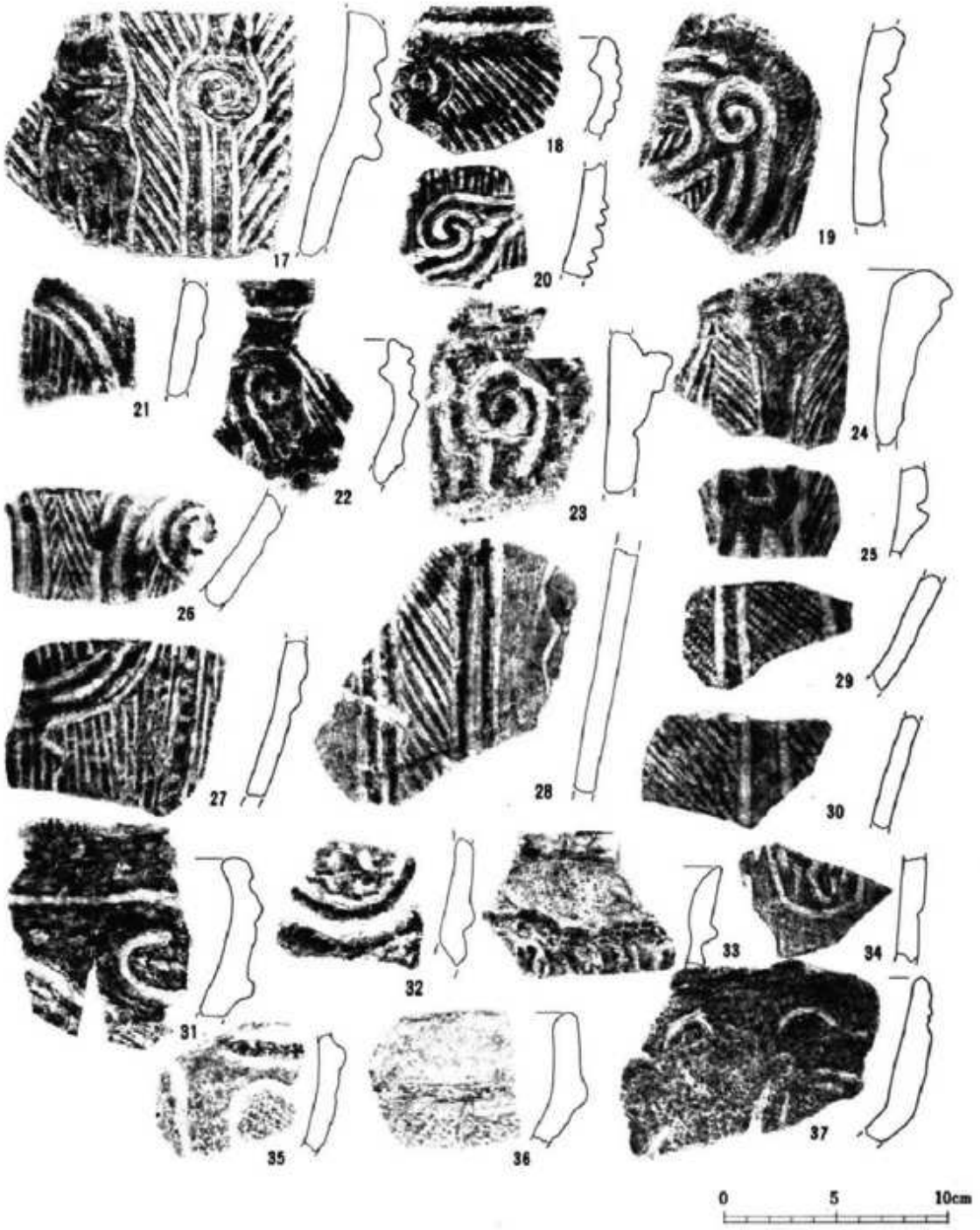
第46図　　A10号住居址

目を有す二条の隆帯文と交互刺突による山形文とが形成した区画内に棒状施文具による沈線に縦走させる。9も覆土中より出土する。口縁部に2単位の突起を有す。口縁端部に刺突文を横列させ、口縁部は刻目を有す隆帯により横帯区画文を施し区画内は縦走する沈線で充たす。8・9共に色調は茶褐色を呈し焼成は良好である。第47図1は隆帯による曲線文・直線文を描き（区画文？）隆帯の両側に半截竹管によりキャタピラ文を施す。隆帯間には押引文が斜行する。新道式に比定されよう。2は所謂櫛形文である。井戸尻Ⅲ式に比定される。1・2とも本址覆土上部出土土器であるため、本址に直接関わるものかどうか疑問が残る。3・10・29・30・35・36・45・46は加曽利E系土器であろう。3は口縁部に横帯区画文を配し、区画内は沈線による渦巻文や条線を施している。頸部には無文部を残す。10も口縁部文様である。横展開の渦巻文間に楕円区画文（区画内はLR縄文）を配している。29・30はいずれも二条の沈線を垂下させ、縄文を施している。35は横走する隆帯で口縁部と区画し、胴部は縄文地に逆U字状沈線を描きU字外を磨消している。36は刻目を有す隆帯が口縁部との区画をし、胴部はRL縄文を施す。45は35と酷似するが、口縁部と画すものは浅い沈線である。46は積極的に加曽利E系とするには疑問が残るが、一応この系列に入れた。横位或いは斜位に縄文が押捺されている。4～8・13・15・19～21・26～27・32・33・38～41は唐草文系土器であろう。4・5は口唇部に無文部を残し、口縁部には沈線及び交互刺突による山形文が横走する。6は二条の隆帯で口縁部無文帯と分かち、胴部は棒状施文具による条線を地文として隆帯で渦巻文を描く。7は5と類似する。胴部には綾杉文が施される。8は隆帯で器面を画し、区画内を縦方向の沈線が埋めている。13は整理の不手際からここに掲載してしまったが、第42図7の破片である。15・20・21・26は胴部破片である。縦行する沈線を地文として、隆帯により渦巻文・曲線文を描いている。19は口縁部であるが、やはり隆帯と沈線で文様を形成している。32は地文にヘラ状施文具による刺突を使用している。33・41は6と類似するが一時期下がるであろう。38は26等と類似する。地文には櫛状施文具を用いており、沈線による蛇行懸垂文も見られる。39はこの系列に入れていいものかどうか疑問が残る。所謂「図」（白石浩之、1978）にあたる文様は沈線による渦巻文が描かれ唐草文風ではあるが、「地」（同）は縄文である。大木系とした方がいいのであろうか。41は15等と類似する。9・11・31は口縁部に円文或いは渦巻文を配し、それらの間に楕円区画文を施す。14・18は口唇が内折する。16・28は懸垂文の間を斜行する沈線が埋める。17・22～25は隆帯による立体的な懸垂文を施し、懸垂間には斜行沈線文或いは綾杉文を施す。34・42～44は沈線による逆U字状・U字状区画内に八の字状綾杉文等を施す。

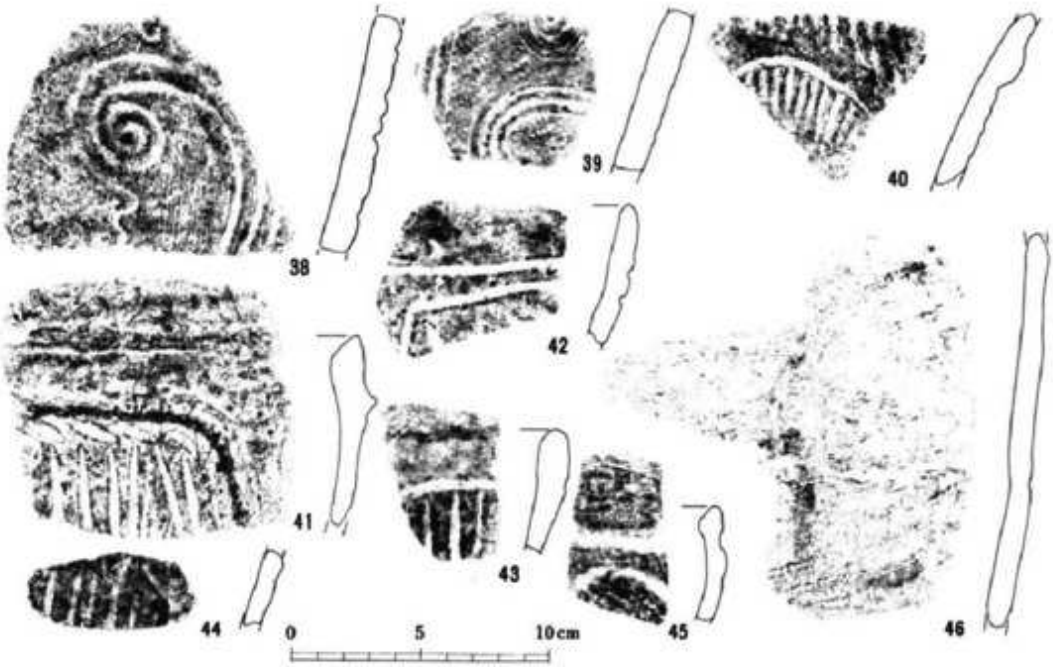
石器は、石鏃3点、石錐1点、石匙3点、打製石斧6点、横刃型石器3点、スクレイパー2点、凹石1点、敲打器1点の計20点出土している。覆土中よりの出土が多い。詳細は一覧表を参照されたい。

第63図 3は土鈴である。一部欠損しているが、形態はたまご形である。縦4.4㎝横6.2㎝、径

第47図　A10号住居址出土土器(1)



第48図　A10号住居址出土土器(2)

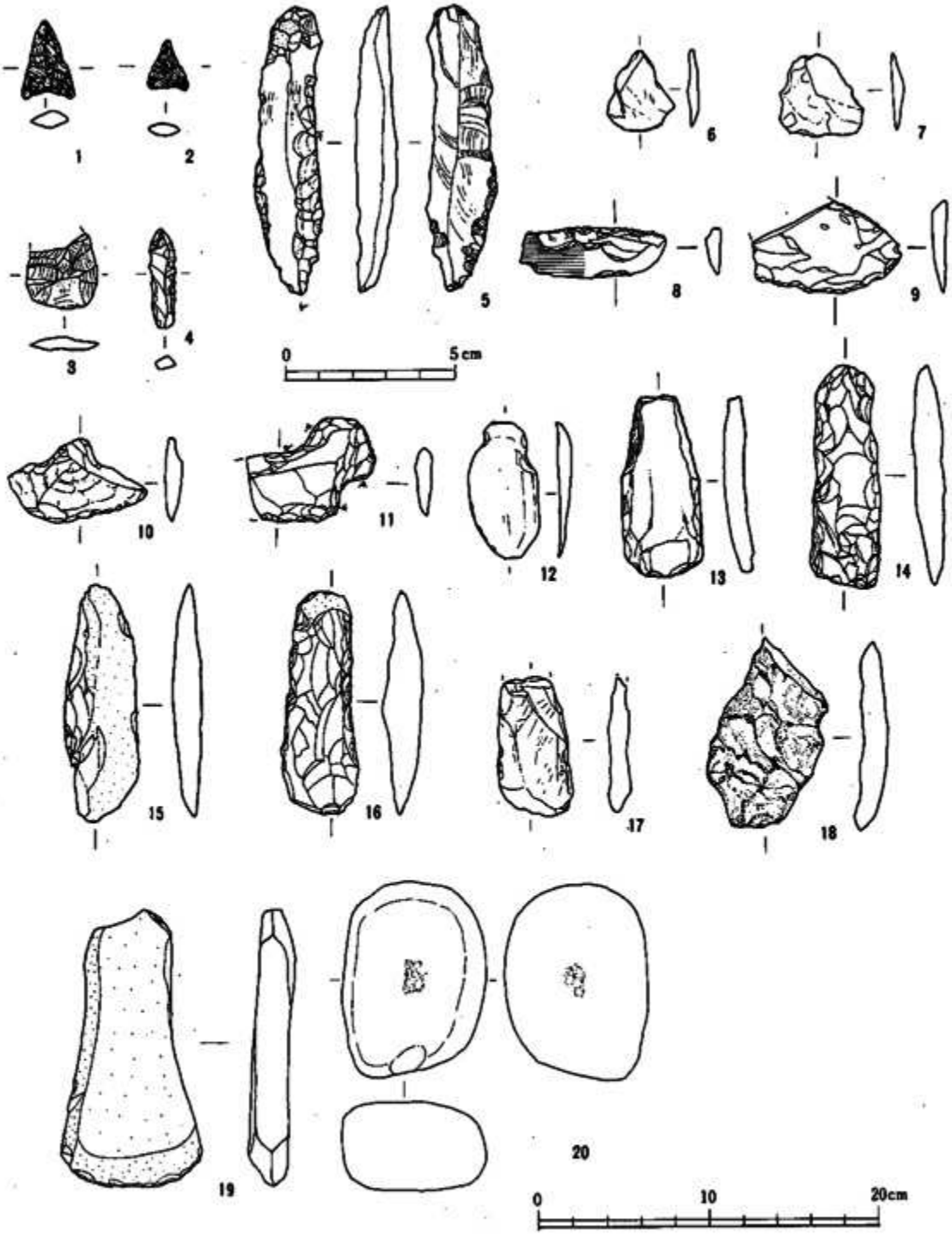


第49図　　A10号住居址出土土器(3)

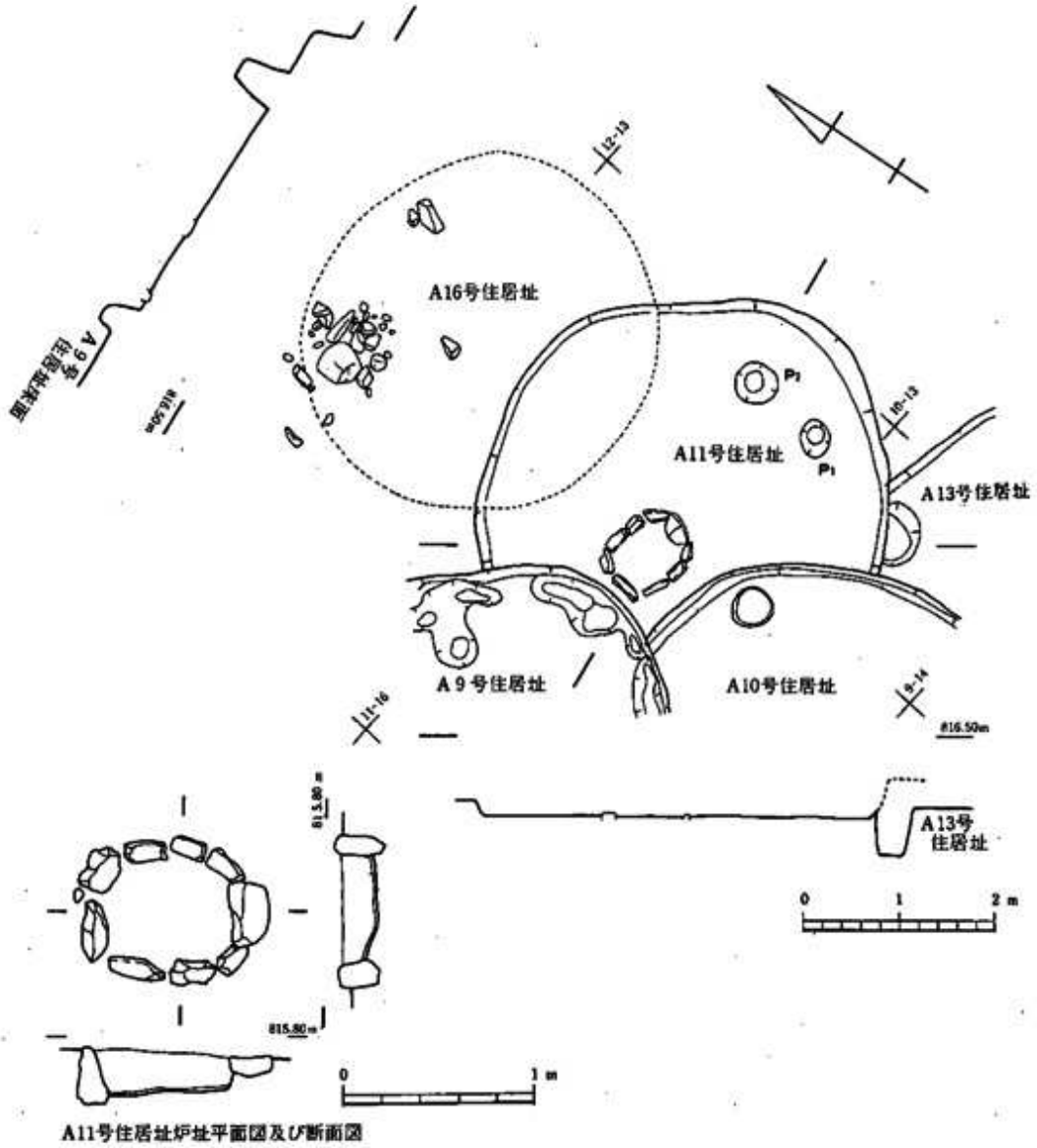
4.0㎝で、内部は空洞になっている。文様は棒状施文具によって不規則な沈線が施されている。色調は淡褐色を呈し、焼成は非常に良い。

本址の時期は出土土器より曽利Ⅱ式から同Ⅴ式に至るまで巾が広く、従って判断に苦慮したが、出土状態や切り合い関係より一応曽利Ⅲ式の古い段階に比定するものと考えられる。

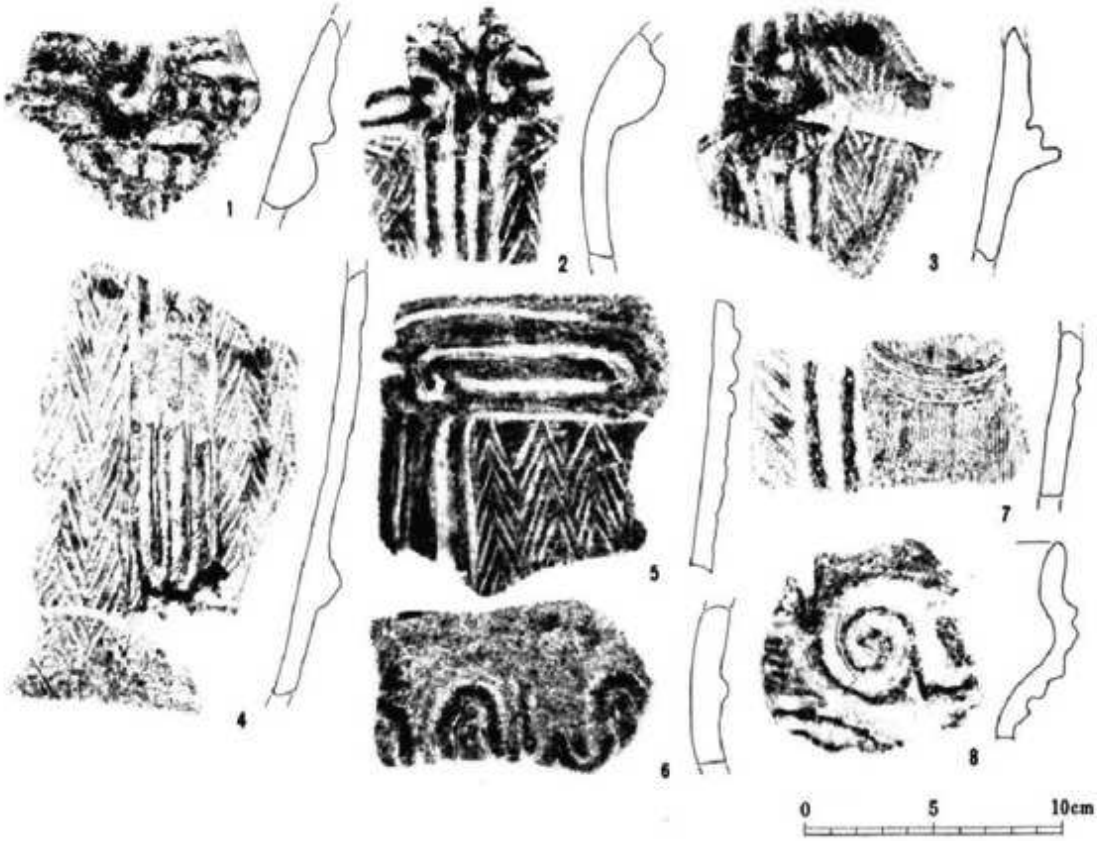
（平林　彰）



第50図　A10号住居址出土石器



第51図　A11・16号住居址



第52図　　A11・12号住居址 出土土器

11. A11号住居址（第42図10、第51～54図、第63図4）

遺構　A地区10・11－13・14グリッドに位置する。西側において9号住居址に、南側において10号住居址に切られ、南東側において一部13号住居址を切っている。北側に落ち込みの痕跡を確認したが、調査日程の都合により未調査である。

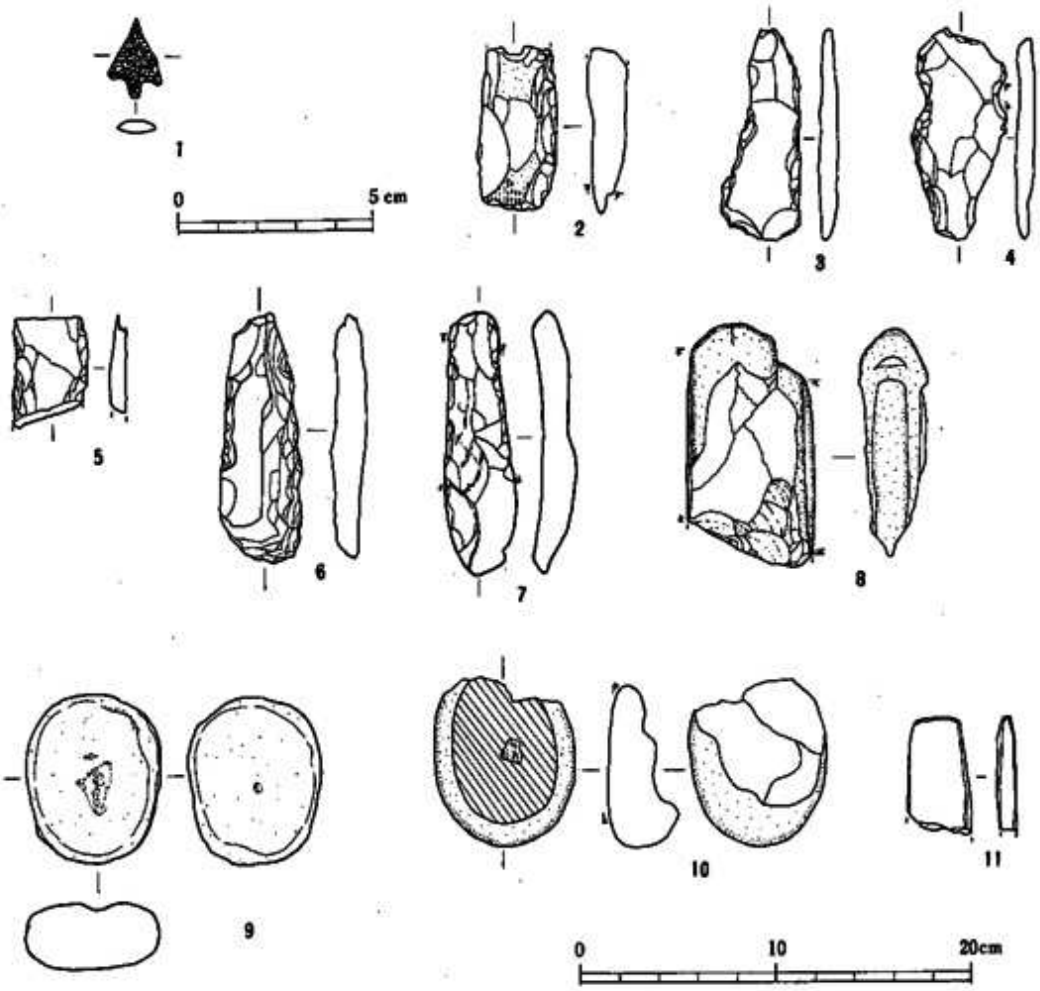
平面形は、東西推定4.5m南北推定4.4mの円形を呈する。主軸はN－82°－Wである。

壁面は東側及び北西側の一部で検出する。垂直に落ち込み、その壁高は東側中央部で37cmである。

床面は全体的に平坦で、南半は比較的よく踏み固められている。北半は貼り床がなされており、若干軟弱な感がある。

炉は中央やや奥壁よりに位置する。径100×76cmの長方形を呈し，周囲に10個の礫を巡らせた石囲炉である。炉の深さは24cmで、炉内からは拳大の礫2個、カーボン、土器小片を検出する。

柱穴は、P_1（38×9、－25cm）、P_2（43×45、－39cm）を検出する。主柱穴は5本程度ではなかろうか。



第53図　A11号住居址出土石器

遺物　本址からは器形の判別できる土器はなく、僅かに図示できたのは第42図10のみであった。口縁部は6単位の波状を呈す。文様は隆帯による横展開の渦巻文を施し、渦巻文間には縦位の沈線を施す。本址は破片の出土数も少ない。第52図1～6は唐草文系土器である。1・2は口縁部を隆帯による渦巻文・横走する直線文によって飾り、胴部には綾杉文を施す。3・4は胴部に隆帯懸垂文と綾杉文とを施している。5も同様であるが、口縁部に隆帯による横位の楕円区画文を配している点が特徴的である。6はおそらく鉢か浅鉢形を呈するであろう。口縁に蛇行文を横走させている。7は地文に綾杉文と櫛状施文具による条線とを併用している。更に連弧文風の文様がみられる。

石器は石鏃1、石匙1、打製石斧5、磨製石斧2、凹石2がそれぞれ出土している。覆土中からの出土が多い。細かい計測数値は一覧表に示した。

以上により、本址は曽利Ⅱ式の新しい段階に属すと考えられる。

（平林　彰）

12．A12号住居址（第42図11、第52図8、第54・55図）

遺構　A地区9・10－12、13グリッドに位置する。規模は不明であるが、円形プランをもつと推定され、主軸方向は、N－47°－E と思われる。

壁は、黒褐色土層中に造っているため、検出不可能であった。

周溝は認められない。

炉は床面ほぼ中央部に多量に焼土が検出されており、炉と推定される。

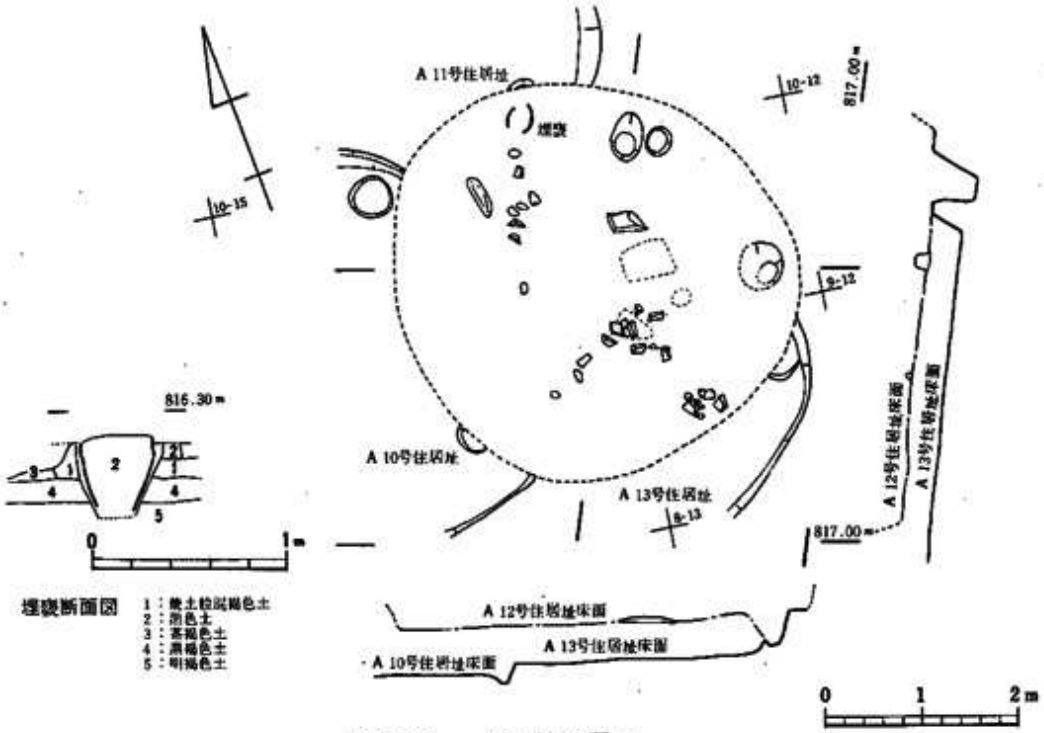
柱穴は、3本検出される。いづれも径40㎝×50㎝、深さ50㎝前後である。

埋甕は、1ケを検出する（第54図）。入口部と推定される位置から床面とほぼ同レベルで埋めている。出土状態は正位であり、口縁部・底部及び一部胴部欠損している。

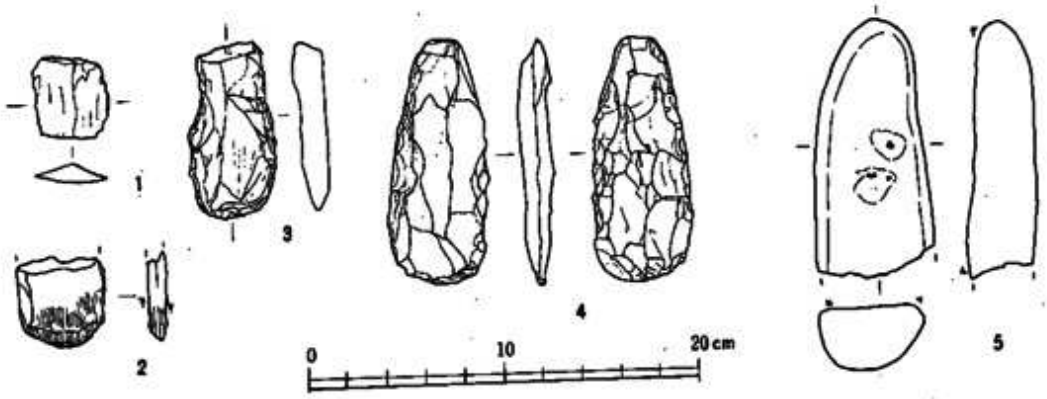
遺物　A12号住居址に属する土器は少なく、唯一器形がわかるものとして埋甕がある（第42図11）。口縁は擬口縁、底部は欠損し、胴部も一部欠損している口縁が内湾する甕形土器である。現存高44㎝、最大径は胴上部にあり37.6㎝を測る。最大径よりやや上部に2本の隆帯と渦巻文を巡らし、胴部は隆帯による懸垂文と渦巻文で区画文を作り、区画内を綾杉文で埋めている。5単位である。内面は丁寧にナデ調整している。褐色を呈し、砂粒を含み焼成は良好である。唐草文系Ⅲに比定できる。

石器は5点出土している。5の凹石は磨石との兼用品であろう。詳細は一覧表に示した。

（篠宮　正）



第54図　A12号住居址



第55図　A12号住居址出土石器

13. A13号住居址（第42図12～14、第43図15、第56～58図、第63図5）

遺構　A地区8・9－12、13グリッドに位置する。

平面形は、東西4.8m南北4.1mの東西に、細長い円形を呈する。主軸は、N－62°－Eである。本址は、A10号住居址、A11号住居址に切られており、A12号住居址・配石址に貼られている。

壁面は、地山を掘り込み形成されており、ほぼ80°で立ち上がる。壁高は、東側で、最高約40cmである。

周溝は認められない。

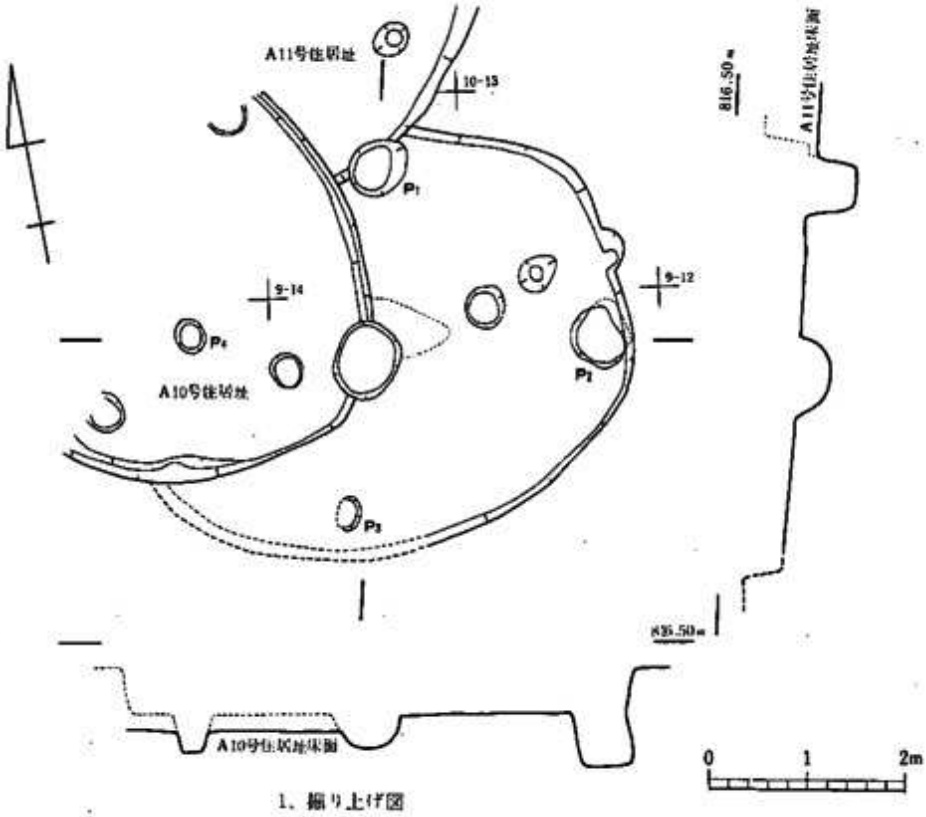
床面は、地山を掘り込み形成され、中央部に位置する炉付近は、堅くしまっている。

炉は、床面ほぼ中央部に位置する。径70cmの隅丸方形を呈し、石は抜かれてはいたが、石囲炉と考えられる。深さは26cmである。焼土が炉北東部の床面に拡がっている。

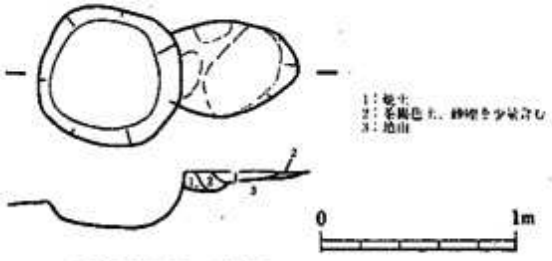
柱穴は4本検出される。P_1（58×57、－47cm）P_2（65×55、－45cm）P_3（30×28、－33cm）P_4（32×30、－33cm）である。

遺物　A13号住居址からは覆土と床面から出土している。

第42図12は胴下半を欠損している。頸部はくびれが強い深鉢形土器である。現存高29.4cm、口径35.2cmを測る。頸部は波状粘土紐を1条貼付けている。口縁部は無文。胴部は縄文で埋めている。赤褐色あるいは暗褐色を呈し、内面にはススが付着している。胎土は雲母、石英を含み、焼成は良好である。同図13は床面東壁から出土した土器で胴下半を欠損している。頸部に弱干ふくらみをもつ深鉢型土器である。現存高25.8cm、口径26.2cmを測る。口縁部は無文で頸部区画帯は組紐文とペン先状工具による押引きで埋めている。胴部は隆帯により区画文、懸垂文を作り、斜線文で埋めている。暗褐色で胎土は砂を含み、焼成は良好である。第43図15は床面東壁から出土した土器で胴下半、口縁の一部を欠損している。形態は頸部でゆるくくびれ、大きく開いている。口縁は波状になると思われる。現存高19.2cm、口径23.0cmを測る。口縁部無文で頸部は隆帯により文様帯を構成している。胴部は腕骨状のH状懸垂文を描き、地文は綾杉文で埋めている。暗褐色で胎土は雲母・砂粒を含み、焼成は良好である。第42図14は床面北東の壁から出土した土器で底部を欠損している。底部からそのまま開く浅鉢形土器である。現存高13.0cm、口径34.8cmを測る。体部に楕円形粘土を貼継いだ隆帯を形成している。内外面ともナデにより平滑に調整している。暗褐色を呈し、微砂を含み、焼成は良好である。第57図1、5～7は隆帯と刺突により文様を構成し、地文は平行沈線で埋めている。2、3、9、10は隆帯により文様を構成し、地文は平行沈線で埋めている。4は口縁部破片で沈線と縄文で文様を構成している。7は褶曲文を持つ口縁である。8は隆帯により文様を構成し、地文は綾杉文で埋めている。12・13は隆帯と平行沈線、三叉文で構成している。14は沈線で区切り縄文を施している。15は逆U字状の中に棒状沈線を施している。14、15を除き唐草文系Ⅱの古い段階に比定できる。

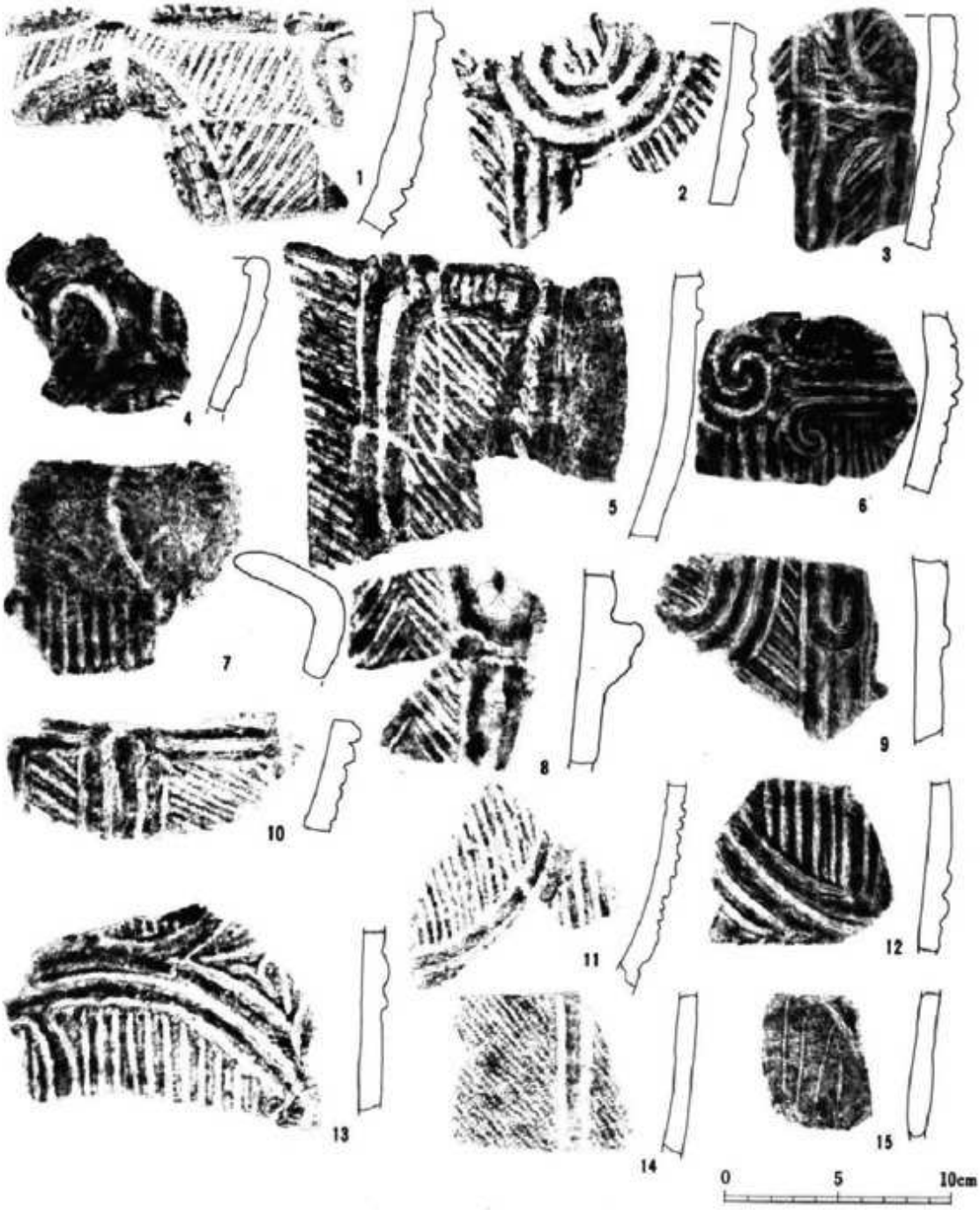


1. 掘り上げ図

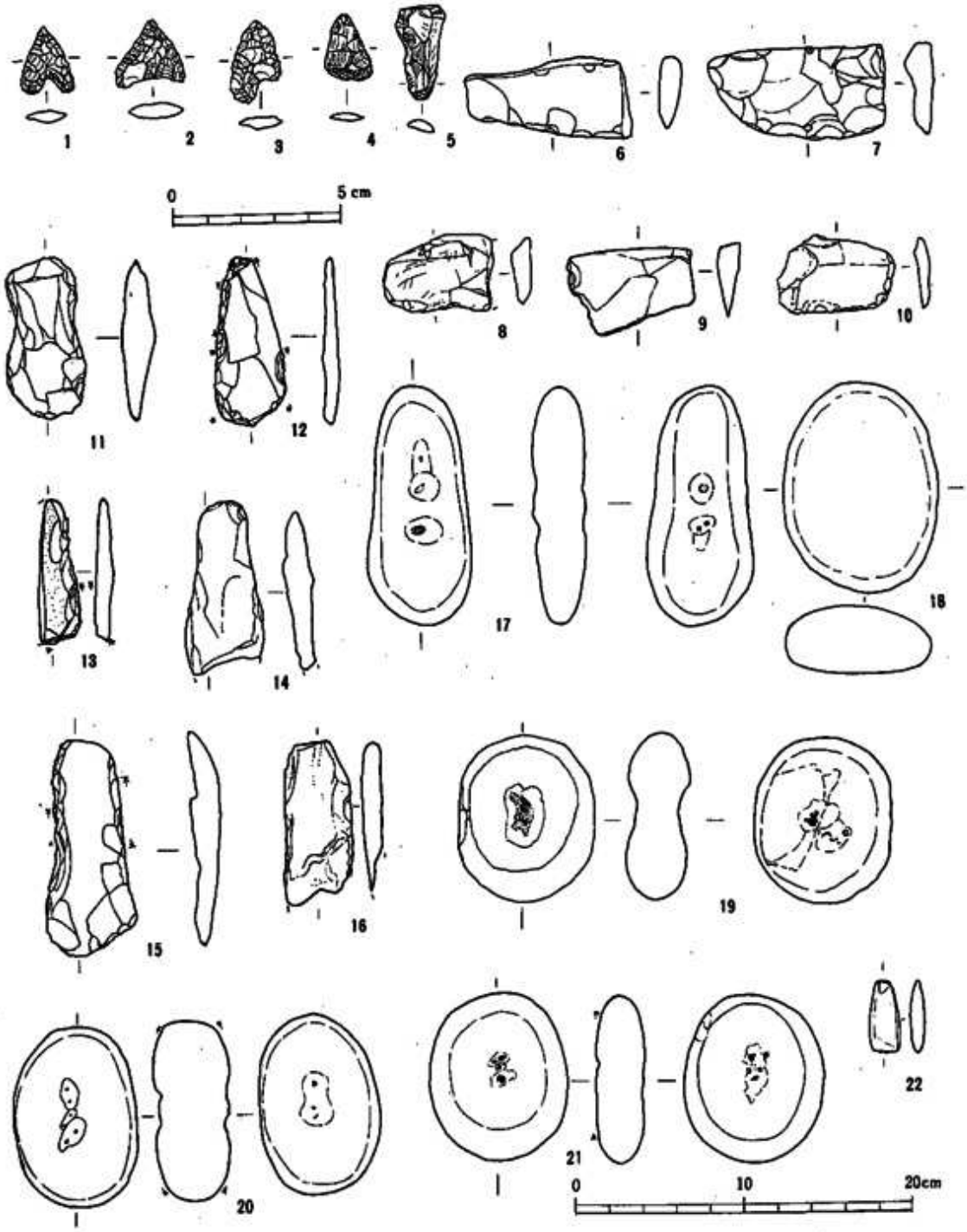


2. 炉址平面図及び断面図

第56図　　A13号住居址



第57図　A13号住居址 出土土器



第58図　A13号住居址出土石器

石器は22点出土し、種類は、石鏃、石錐、横刃型石器、打製石斧、磨製石斧、凹石等がある。各計測値は一覧表に示した。

（篠宮　正）

14．A14号住居址（第43図16～24、第59～62図、第63図６～８）

遺構　A地区８、９、10－16、17、18グリットに位置する。本址は、A15号住居址に切られており、A９号住居址に貼られている。

平面形は、南北6.3ｍ東西6.0ｍの長い円形を呈する。主軸はＮ－82°－Ｗである。

壁面は、地山を掘り込み形成されており、ほぼ80°で立ち上がる。壁高は、東側で、最高約70㎝である。

周溝は、壁面より20～30㎝内側で全周しており、上端幅約20㎝、深さ10㎝の、断面が、逆台形状の溝である。

床面は地山を掘り込んで形成され、全体的に堅くしまっている。

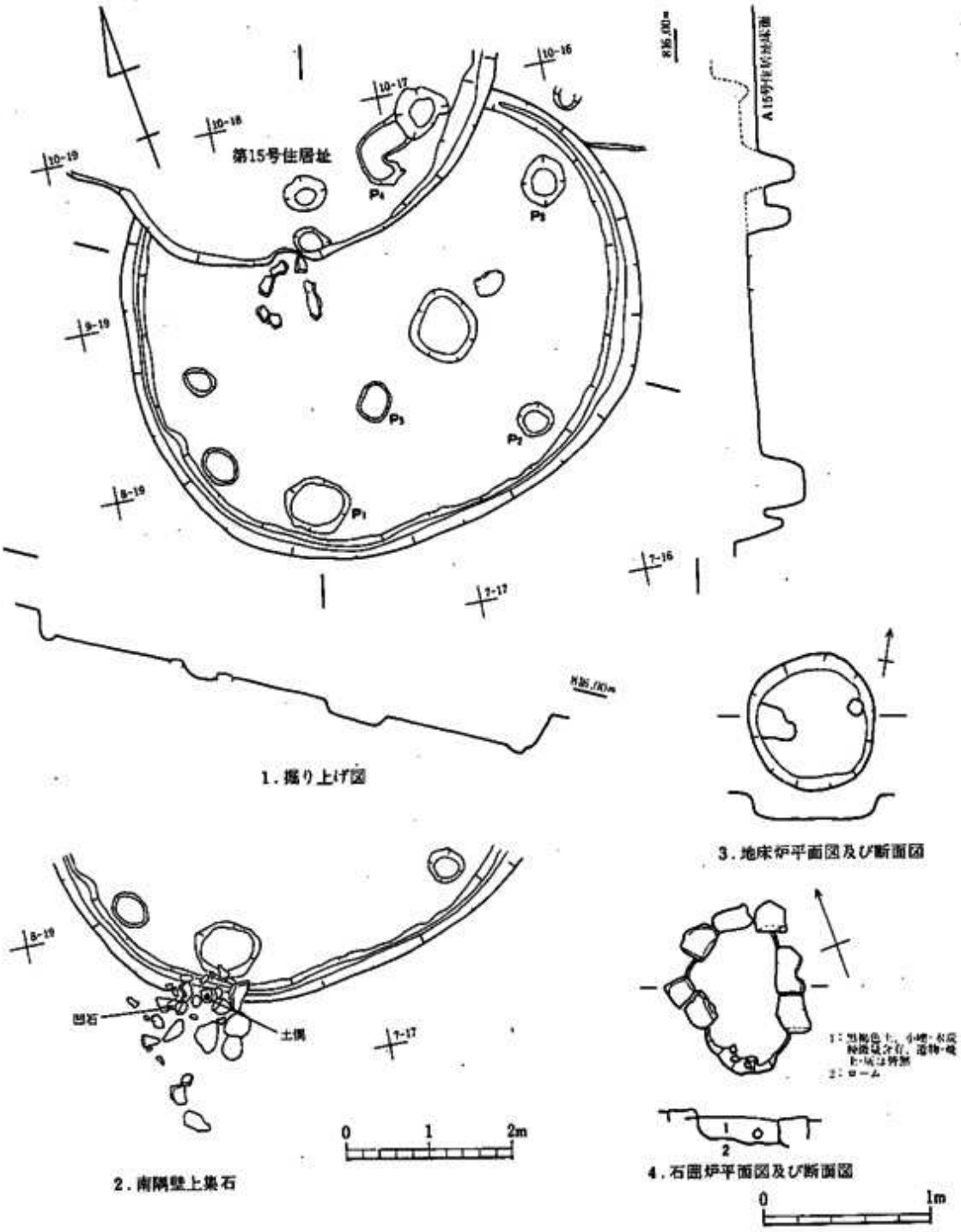
炉は、２ケ所確認される。まず１ケ所は、床面西寄りに、位置し、径92×82㎝、深さ－20㎝の円形を呈す石囲炉であり、一部石が抜かれている。もう１ケ所は、床面南東寄りに位置し、径80㎝の円形を呈す地床炉であり、炉内には石が投げ込まれている。又後者は、炉、内面１部には粘土を貼っている。

柱穴は、主柱は４本と考えられるが、３本しか、検出されていない。P_1（80×65、－30㎝）、P_2（45×40、－26㎝）P_3（55×50、－47㎝）である。

尚、A14号住居址は、住居址が２軒重なっているとも考えられ、その場合１つは石囲炉とP_1－P_2－P_3の柱、もう１つは地床炉とP_3－P_4－P_2－P_5の柱と考えられる。

遺物　A14号住居址は覆土から多量の遺物が出土している。土器・石器・土製品がある。

第43図16は胴上半から口縁にかけての破片で口径３８.０㎝を測る。口縁部は無文で、頸部は波状粘土紐を貼付けている。胴部は縄文で埋めている。赤褐色を呈し、砂粒を含み、焼成は良好である。18はキャリパー形の深鉢で口径20㎝を測る。口縁部は無文で頸部は隆帯がめぐり、胴部は隆帯による懸垂文を施し地文はヘラ状工具による平行沈線で埋めている。黄褐色を呈し、砂粒を含み、焼成は良好である。17はキャリパー形の深鉢で現存高２４.０㎝、口径１８.０㎝、底径１０.１㎝を測る。文様は４単位で、頸部から胴部にかけて隆帯により３段の区画文を作り、口縁と共に縦方向の平行沈線で埋めている。淡褐色を呈し、焼成は良好である。19は頸部がくびれた深鉢である。現存高１９.６㎝を測る。文様は４単位で頸部は隆帯を貼付け、胴部は隆帯による懸垂文を貼付け地文は綾杉文と棒状押引きで埋めている。淡褐色を呈し、焼成は良好である。20は直に開く深鉢形土器である。器高１９.６㎝、口径１１.６㎝が、底径6.8㎝を測る。文様は４単位で棒状施文具により４段の渦巻文、刺突文を描いている。暗褐色を呈し、内面にはススが付着している。焼成は良好である。



第59図　　A14号住居址

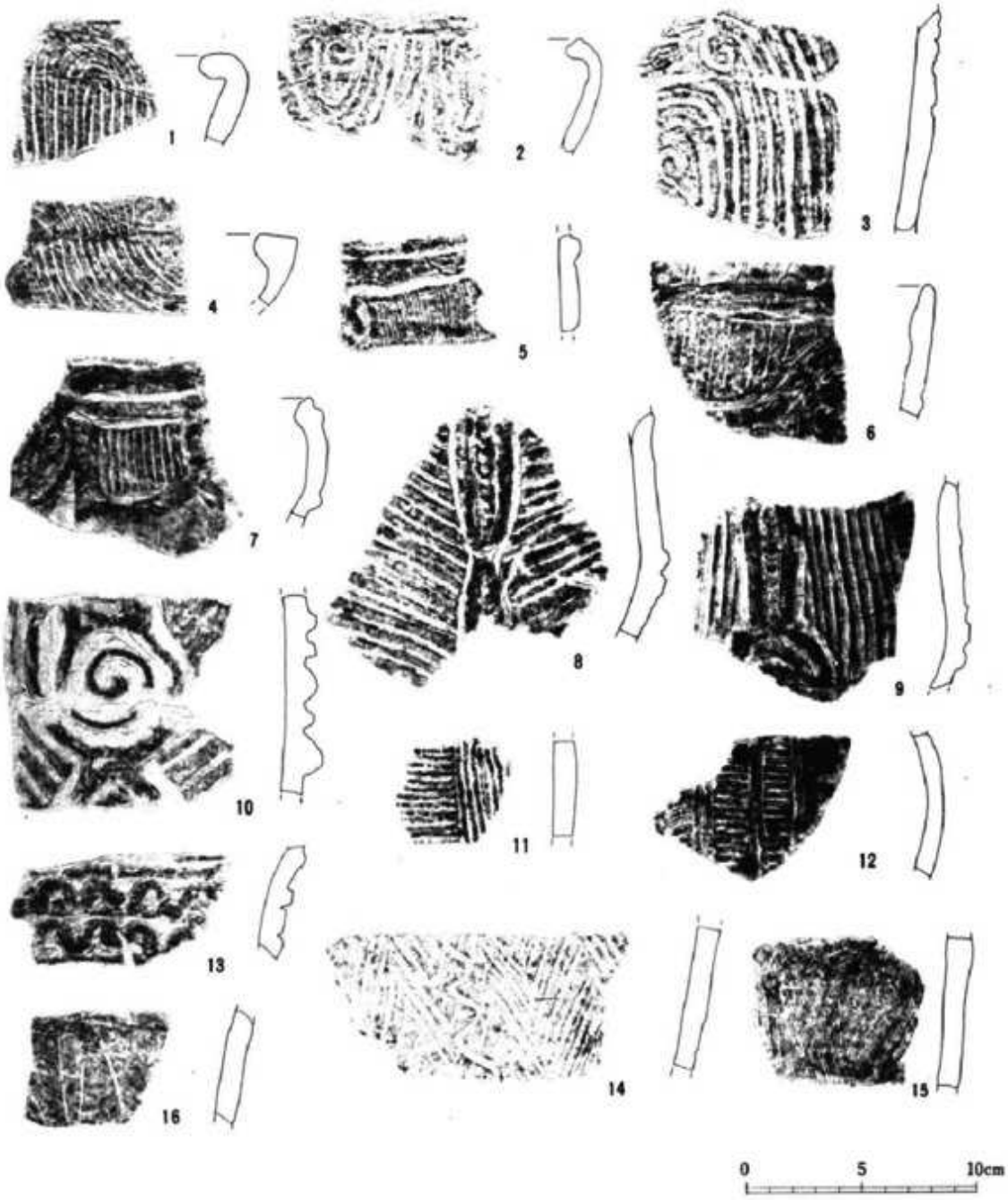
21は直に開く深鉢形土器である。現存高21.2㎝、底径7.4㎝を測る。文様は4単位で頸部に隆帯による波形文を配し、縦の隆帯を等間隔に4本置き、その間を縦の隆帯による波形文と縦の沈線で埋め、更に4本の平行する沈線2ケ所により、上・中・下3段階に分けている。底部は無文である。内面は全面にわたってハケ状工具によるナデ整形痕が残る。底はなく、割れ口の状態は内側から外側に向けて割れたことを推定させる。外面は赤褐色、内面は暗褐色を呈し、胎土は非常に粒子の細かい砂を含み、焼成は良好である。22は頸部から胴部にかけての破片である。頸部は隆帯と竹管による押引きの懸垂文を構成し地文は斜線文で埋めている。暗褐色を呈し、砂粒を含み、焼成は良好である。23は底部から胴部にかけての深鉢形土器である。地文は6単位で半截竹管による平行沈線でめぐらし所々に2本をつなげている。今は剥落してないが縦方向に隆帯があったと思われる。赤褐色を呈し、砂粒を含み、焼成は良好である。24は浅鉢の口縁部破片で口縁は強く内湾している。隆線と沈線により文様を描いている。暗褐色を呈し、焼成は良好である。第60図1～4は褶曲文による構成で、1、2、4は口縁部破片である。5～7は隆帯により区画文を構成し区画内を平行沈線で埋めている。8、9は隆帯と押引きによる懸垂文を施し、地文は平行沈線で埋めている。10は隆帯による渦巻文を描き、地文は指による平行沈線で埋めている。11、12は地文の縦の平行竹管文の中に横の簾状竹管文を施している。13は隆帯と波状粘土紐により文様を構成している。14は地文を綾杉文で描き、後に沈線による懸垂文を施している。15はペン先状工具により器面をひっかいている。16は棒状工具による不定方向への沈線を施している。

14～16を除いて唐草文系Ⅰ～Ⅱに比定できる。

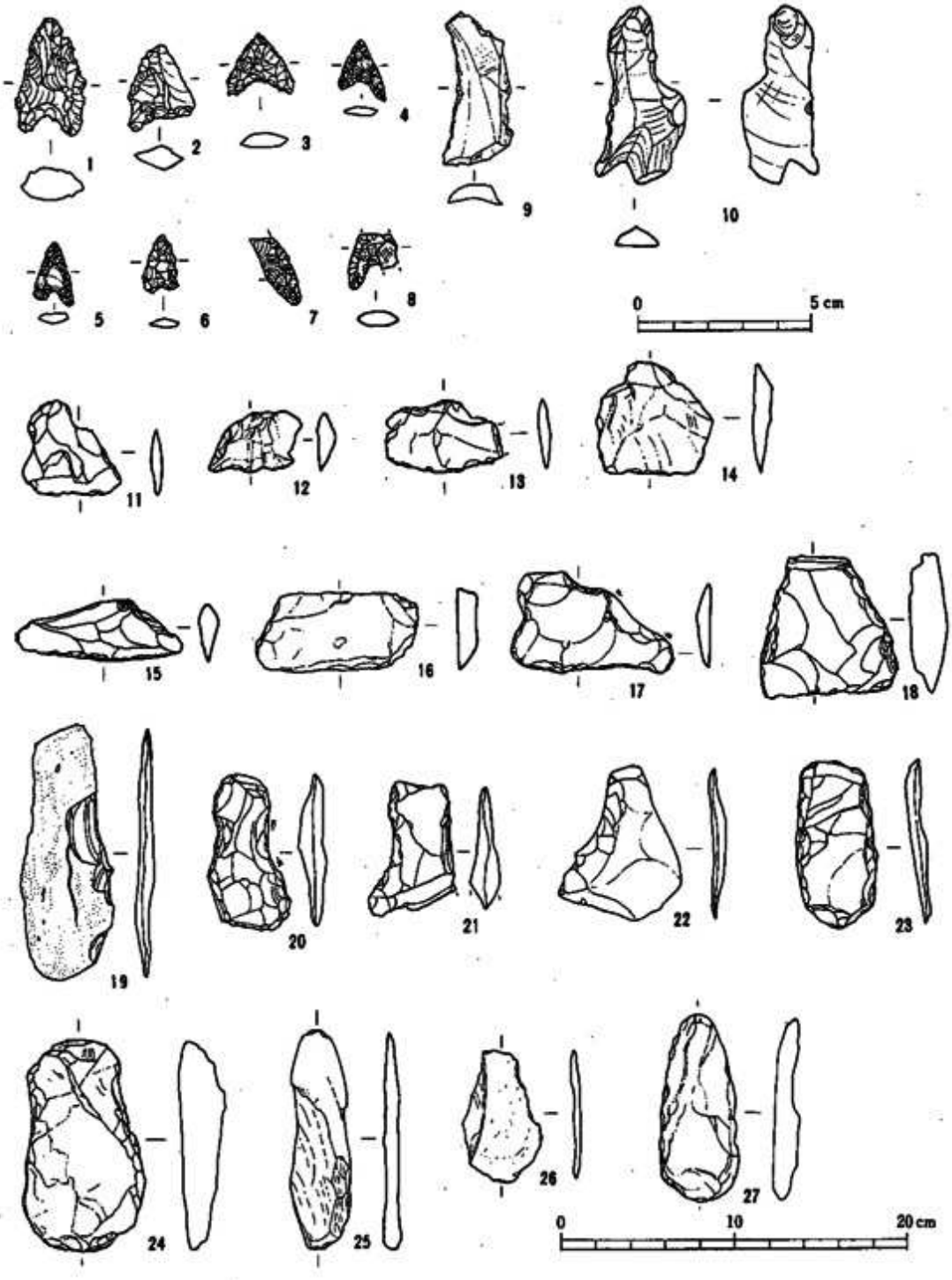
A14号住居址からは3点の土偶が出土している。全て覆土中からの出土で、第63図6は覆土上層の集石下から出土しており、胴上半で頭・両腕・胴下半は損壊している。胸上部に沈線による円文を描いている。両面とも肩上部および両脇に沈線による文様を描いている。中心部に貫通孔がある。明褐色で小砂粒を含み、焼成は非常に良い。7は右腕で沈線による文様を描いている。淡褐色で微砂を含み、焼成は良好である。8は足で先端を欠損している。沈線による文様を描いている。底部は木葉痕があり、中心部に直径4㎜の貫通孔がある。暗褐色で砂粒を含み、焼成は良好である。

石器は33点出土しているが、覆土中からのものが殆どである。石鏃、石匙、横刃型石器、打製石斧、凹石等があり、詳細は一覧表に譲る。

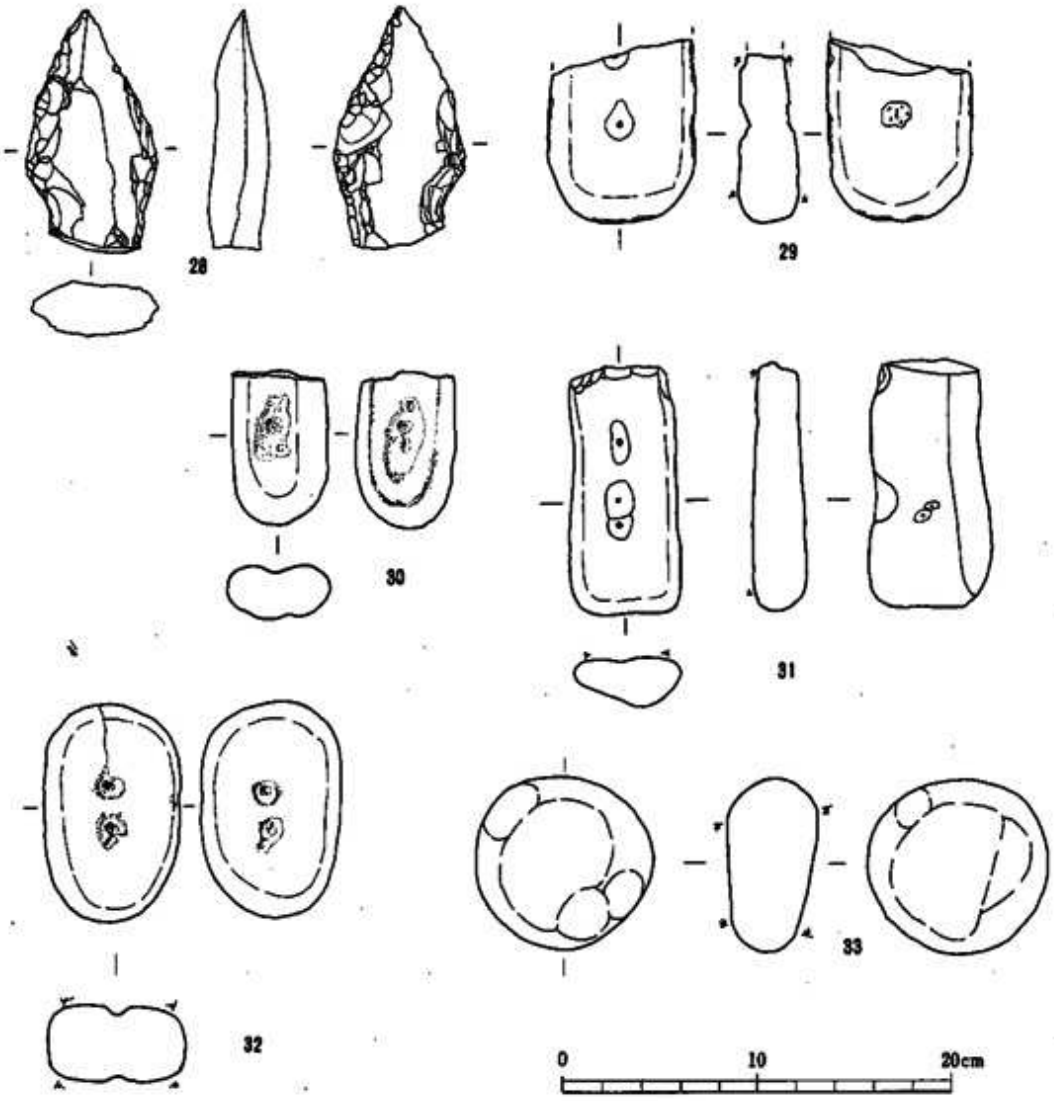
（篠宮　正）



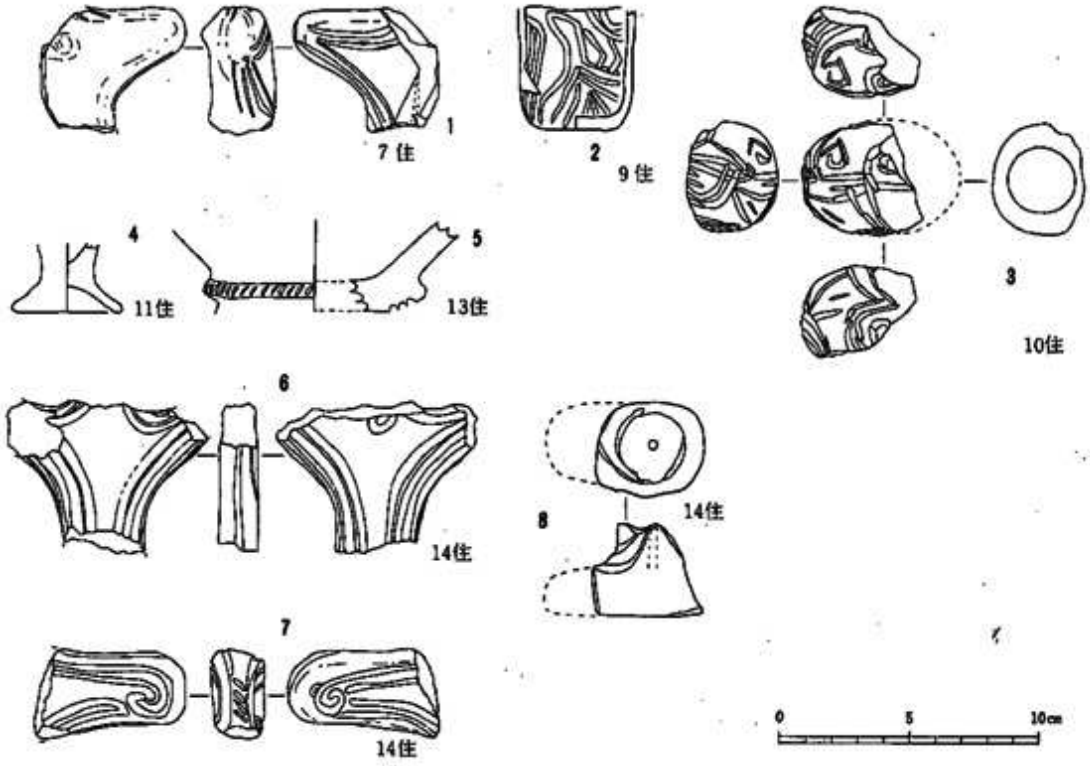
第60図　　A14号住居址 出土土器



第61図　A14号住居址出土石器(1)



第62図　A14号住居址出土石器(2)



第63図　　A7～14号住居址出土土製品

15．A15号住居址（第43図25～28、第64～66図）

遺構　A地区9、10、11～16、17、18グリットに位置する。本址は、A14号住居址を切り、A9号住居址に貼られている。

平面形は、長軸5.1m、短軸5.0mの円形を呈している。長軸が主軸方向であり、N－59°－Eを指す。

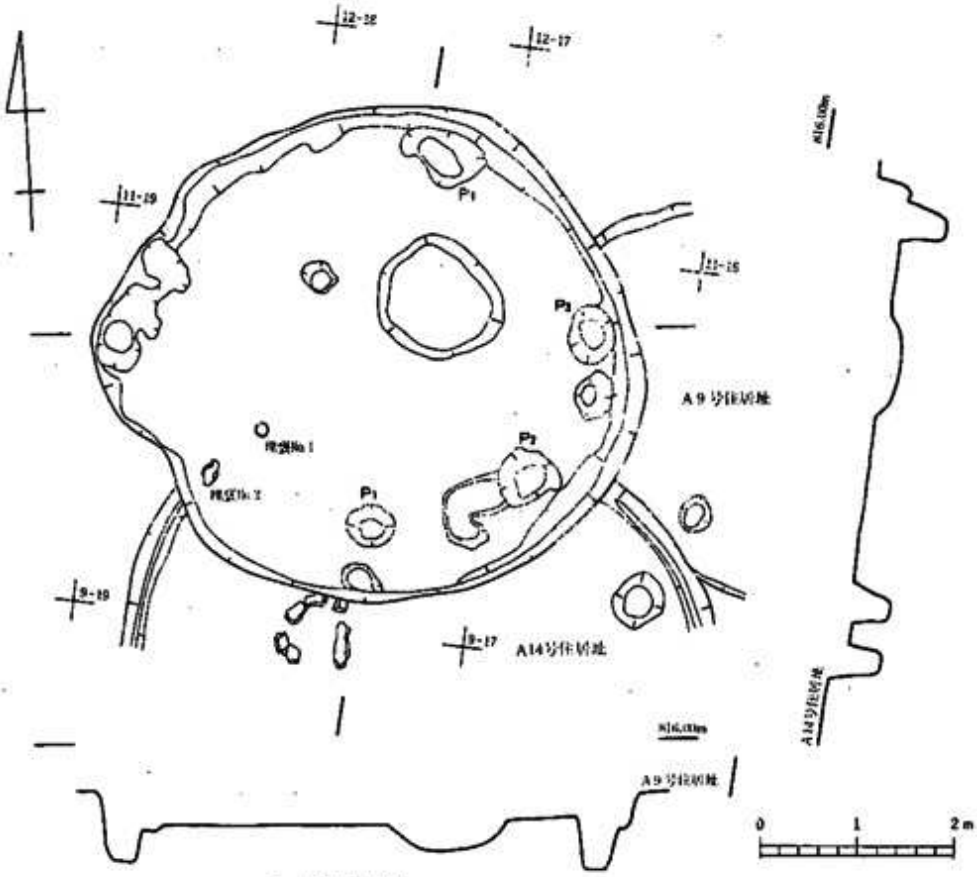
壁面は地山を掘り込み形成されており、ほぼ80°で立ち上がる。壁高は東側で最高54cmである。

周溝は、本址の南半分を除き巡っており、上端幅平均20cm深さ約10cmの、断面が逆台形状の溝である。

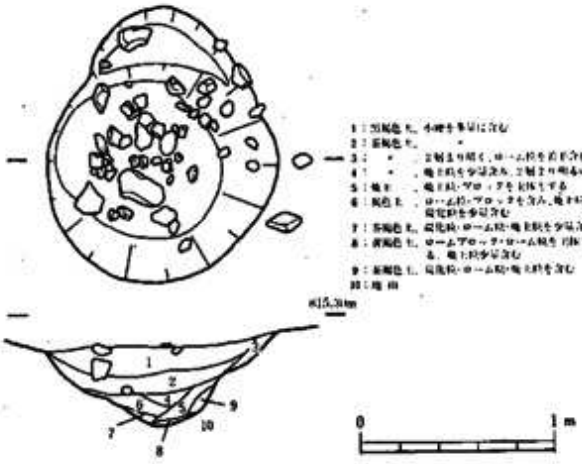
床面は、地山を掘り込んで形成され、炉付近は堅くしまっている。

炉は、床面北東寄りに位置する。径1.4×1.2m、深さ－0.4mの円形を呈し、炉内には、一部テラス状の段を有している。

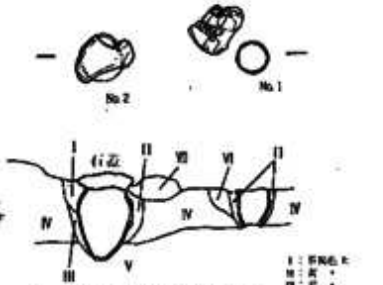
柱穴は、4本検出される。P_1（50×45cm、－48cm）P_2（65×60cm、－43.5cm）P_3（55×45cm、－20cm）P_4（50×24cm、－40cm）である。埋甕は、No.1と、No.2を検出する。（No.1：25、No.2：27）No.1は床面の西南部に位置し、口縁部、底部ともに欠損している。No.2は入口部と考えられる所に



1．掘り上げ図



2．炉址平面図及び断面図



3．堰墓平面図及び断面図

第64図　A15号住居址

あり、石蓋を有し、口縁部・底部ともに欠損している。

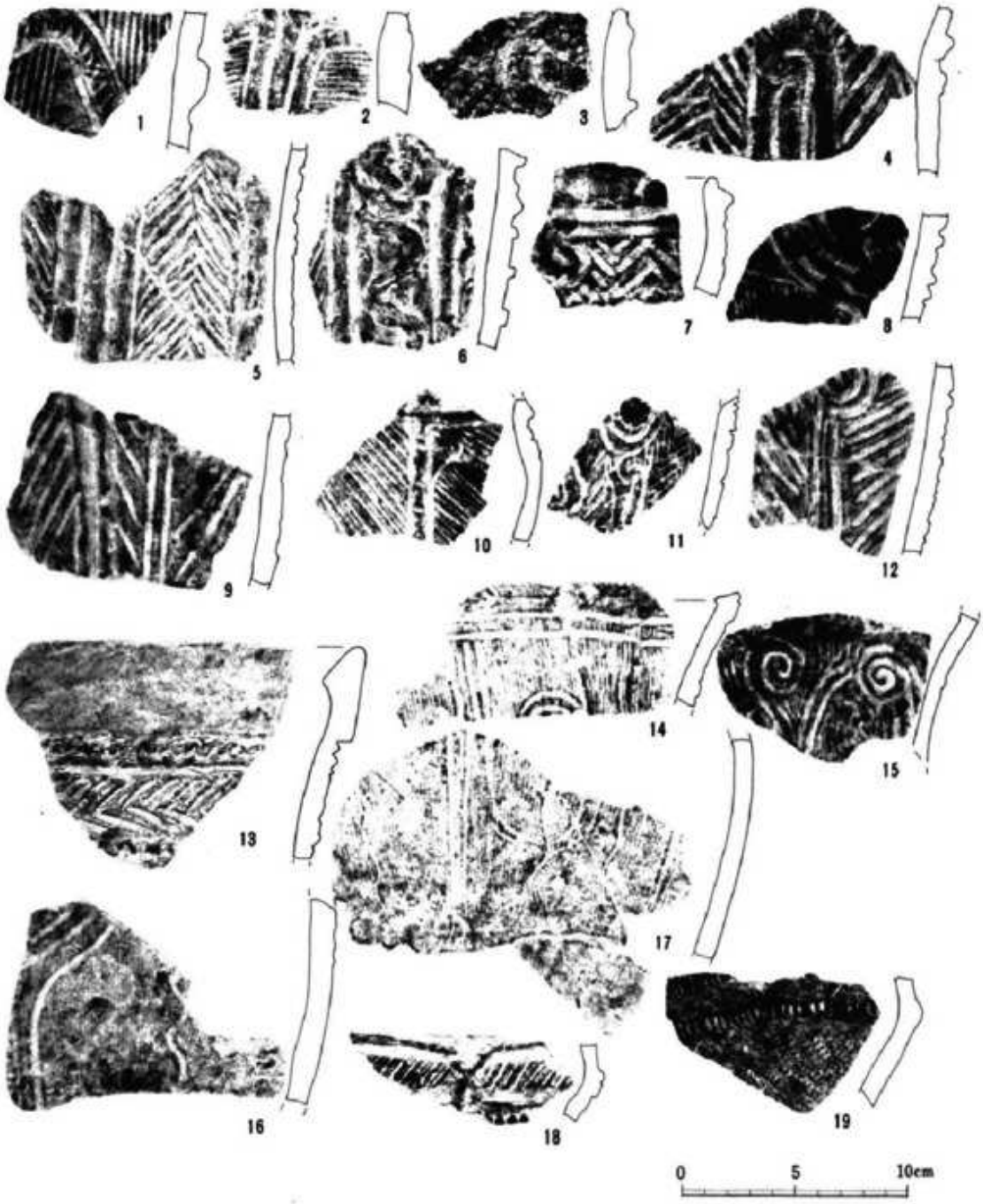
遺物　A15号住居址は覆土、床面から多量に出土している。

第43図26は、埋甕付近の床面から出土している。口縁部が弱干内湾する深鉢形土器である。口縁部文様帯は幅1～2㎜程度の縦の沈線を施す。頸部に横方向の降帯をめぐらし胴上部から胴下部にかけて幅1㎜程度の縦の沈線をめぐらす。沈線の状態から、施文工具は幅1.5㎝程度、歯は8本程度と推定される。口辺部から頸部内面にかけて横ナデ整形痕がある。胴上部から口辺部にかけて淡黒褐色、内面は黒っぽい黄褐色を呈し、焼成は良好である。器高21.2㎝、口径17.5㎝、底径7.5㎝を測る。27は2個ある埋甕のうち外側の埋甕である。口縁部と底部を欠損している。現存高33.3㎝を測る。文様は8単位で頸部は沈線による連弧文、胴部は隆帯による渦巻文と懸垂文で地文は綾杉文で埋めている。上半は黒褐色、下半は茶褐色を呈し胎土は長石、石英を含み、焼成は良好である。25は内側の埋甕である。口縁部と底部を欠損している。現存高17.4㎝を測る。全体にクシ状工具による条線で埋め、後に頸部は横方向に沈線を、胴部は懸垂を沈線で描いている。赤あるいは暗褐色を呈している。火にかけたらしく全体的にもろい。石英、長石の砂粒も含んでいる。28は床面西壁より出土している。釣手部を欠損した釣手土器である。現存高9.6㎝、底径7.8㎝を測る。文様は口縁と釣手に見られ、沈線と半割竹管による押引文を施している。内外とも丁寧にナデている。明褐色を呈し、焼成は良好である。第65図1は刻を持つ隆帯と平行沈線により文様を構成している。2は隆帯により区画し区画文内を横位の平行沈線で埋めている。3は隆帯による渦巻文と棒状工具による押引文で構成している。4、5は隆帯を描き地文は綾杉文で埋めている。6は隆帯の間に縦方向の波状貼付を付けている。7は口縁部破片で1条の隆帯の下に渦巻文、綾杉文を構成している。8は隆帯と平行沈線により構成している。9は2本の隆帯と沈線の間を斜めの平行沈線で埋めている。10は隆帯、刻を付けた隆帯と平行沈線によって構成している。11、12は沈線による渦状懸垂文を施し、地文は綾杉文で埋めている。13は口縁の破片で口縁は無文で下に交互刺突文、綾杉文を構成している。14～17は地文にクシ状工具による条線を施し、沈線による懸垂文を施している。18はふくらみを持った頸部破片で隆線により区画内を平行沈線で埋めている。19は浅鉢の破片で刻を持つ低い隆帯と縄文で構成している。

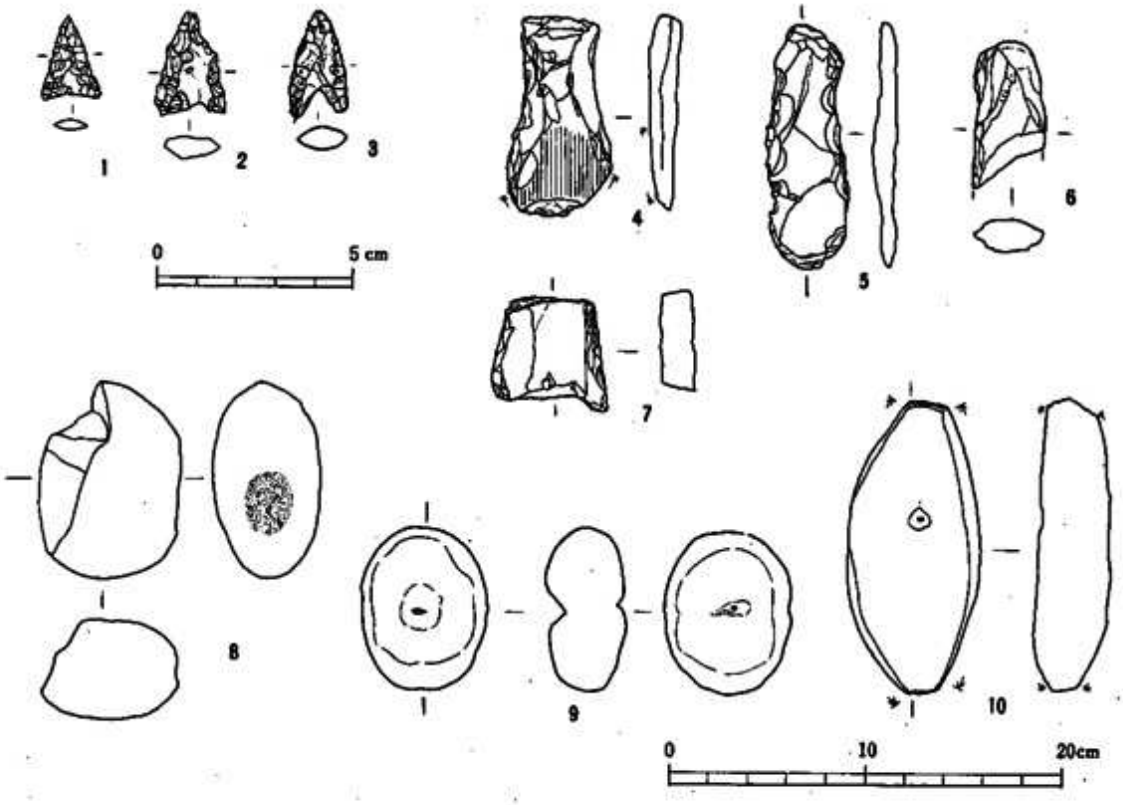
唐草文系Ⅱ、曽利Ⅱ式新しい段階に比定できる。

石器は10点出土する。内訳は石鏃3、打製石斧4、凹石3である。各計測値は一覧表に記した。

（篠宮　正）



第65図　A15号住居址出土土器



第66図　　A15号住居址出土石器

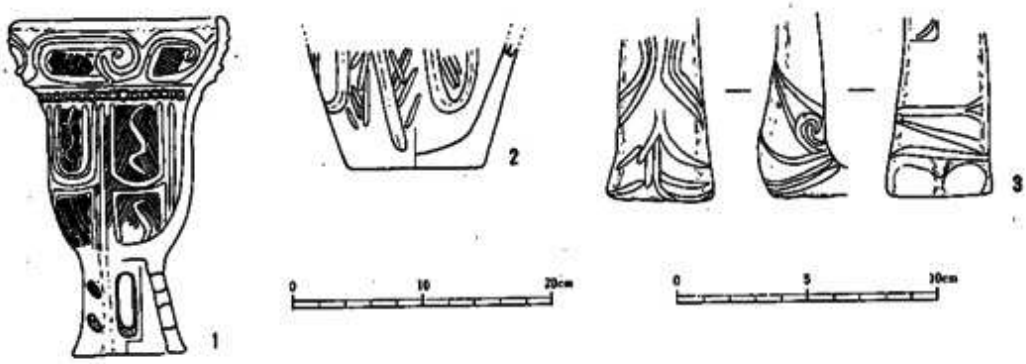
16．A16号住居址（第51図、第67・68図）

遺構　A地区11・12－13・14グリット付近を中心に位置すると推定している。A11号住居址の北側に広く黒褐色の落ち込みらしき部分があり、上面検出によりほぼ円形を呈したため、住居址として扱った。覆土北西部にとりわけ黒色の部分があり、そこをまず掘り下げたところ小規模な礫群（集石）が現れた。しかしその他の部分は日程の都合で調査不可能となってしまい、結局、本址はその存在が推定されたにすぎないものとなった。

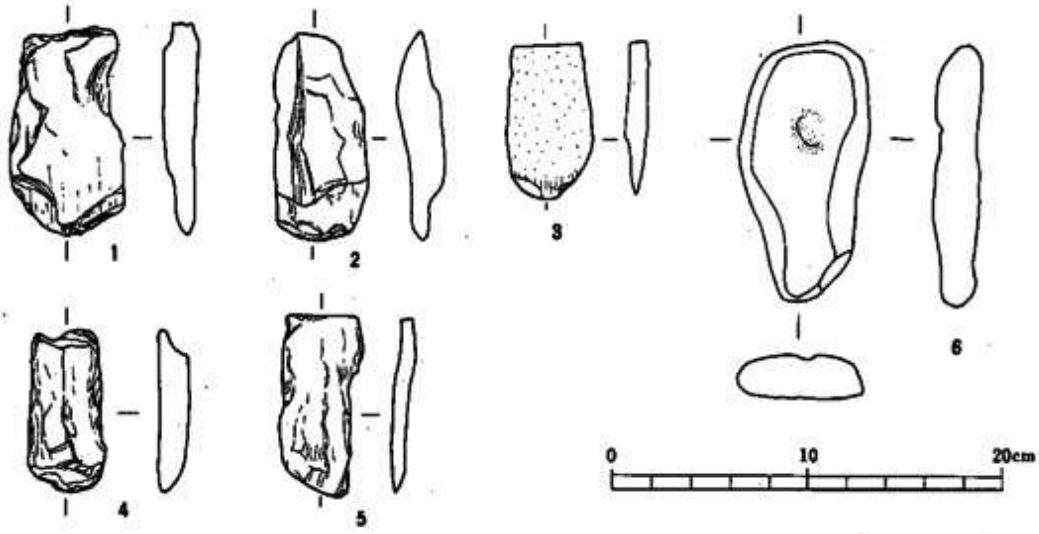
遺物　本址は完掘に至らなかった事情もあり、出土遺物は非常に少い。土器・石器・土製品があり、図化できたものは計９点のみである。

第67図１は小形の台付土器である。深鉢形土器を基本とし、４方向に１乃至２ケのすかし窓のあく背の高い台がつく。文様としては、地文に櫛歯状工具で引かれた条線をもち、専らヘラか棒状工具による沈線で構成されるが、頸部にめぐる刺突状の窪みは珍しい。２は深鉢形土器の底部付近である。貼りつけられた隆帯の間に雑な綾杉状沈線がみえる。３は土製品で、上半及び下端の一部を欠損している。何を表わすのか俄かに決し難いが、正坐形の土偶の一部と考えてみたい。

石器について詳しくは一覧表に譲るが、内訳は打製石斧４点、凹石１点等である。（熊谷康治）



第67図　A16号住居址 出土土器・土製品



第68図　A16号住居址出土石器

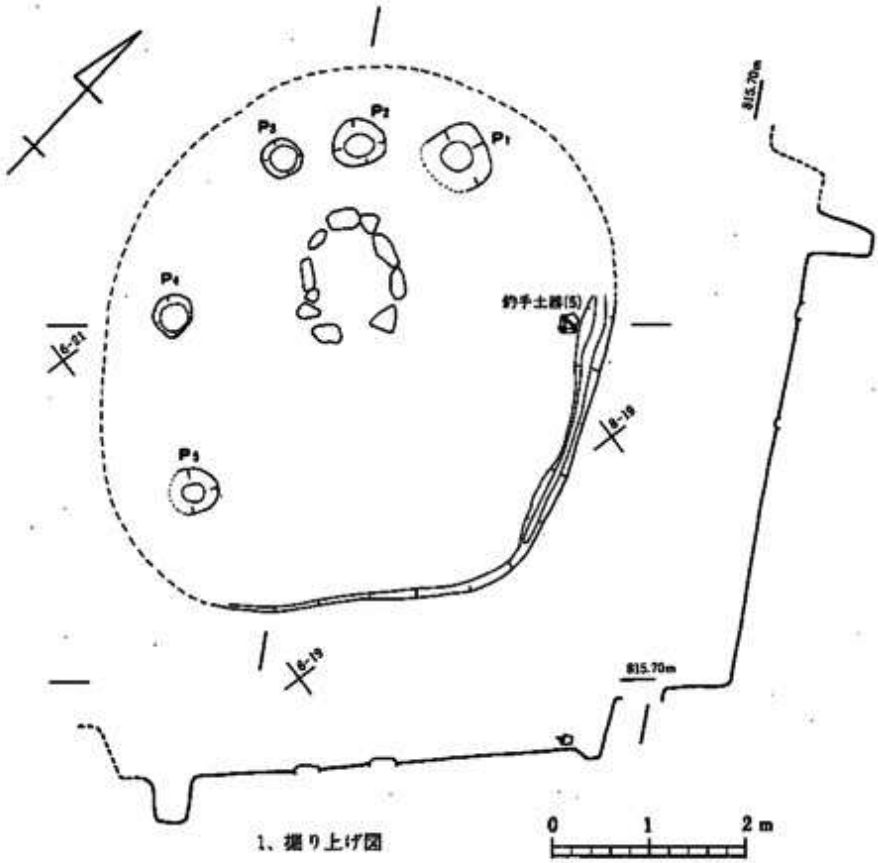
17. A17号住居址（第69・70図）

遺構　A地区6・7・8－19・20・21グリットに位置する。A8号住居址の大部分を貼って構築している。当初、A8号住居址との切り合い部分がはっきり識別できず、東側半分以外を掘り過ぎてしまった。このため平面形は不明であるが、壁残存部と本址柱穴と思われるピットとにより、径5mくらいの円形乃至は隅丸方形と推定している。壁は東側部分が良好に掘り上げられ壁高50cmを測る。壁際には一部に周溝もみられる。床面についても、A8号住居址との重複部分がよく捉えられず、A8号住居址上層礫群と入り混じってしまった。このA8号住居址上層礫群も或いは本址下層にその一部が存在した可能性も考えられる。炉址は本址中央部西寄りと思われる位置にあり、長径20～30cm程の石で囲まれた、1.2×0.9mの不整楕円形を呈す。深さは23cm程あり、下部に焼土粒を多量に残している。ピットは5ケあるが、上面で検出できたものは少く、さらにA8号住居址のピットと重複してしまっているものもある。東壁側のピットはかなり掘り残しがあると危惧している。ピットの深さは、P_1：66cm、P_2：61cm、P_3：63cm、P_4：55cm、P_5：48cmをそれぞれ測る。

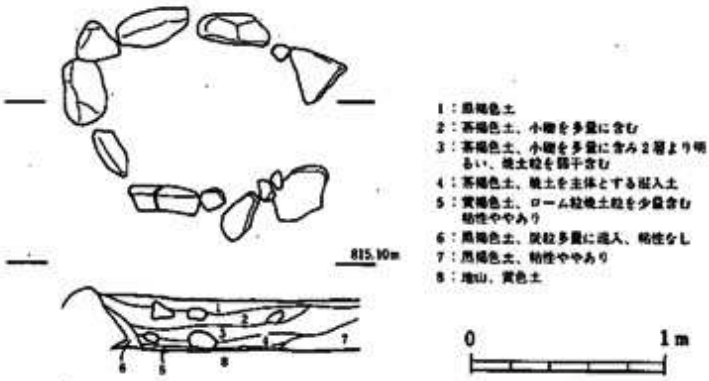
遺物　前記の様な調査の経緯により、明瞭に本址に属すると判定できるものは少ない。提示できたのは土器・土製品のみであり、石器は本址下層のA8号住居址出土品と混じってしまっていると考えられる。

第70図1～4は覆土中から得られた大形破片よりの復元実測である。1は大形深鉢形土器の胴部で、隆帯や粘土紐の貼りつけの間をヘラ描きの沈線で埋めている。2は深鉢形土器の頸部以上で、口頸部に渦巻をともなった隆帯をめぐらし、ヘラ描きの沈線を刻みこんでいる。3は小形の深鉢形土器片で、直立する胴部と無文で大きく開く口頸部という器形をもつ。頸部の横位隆帯から2本一組で4単位の隆帯が下され、その間はヘラで沈線が刻まれる。隆帯上にも刻みが施される。4も小形の深鉢形土器片で、直線的に外開する胴部と内湾気味に大きく開く口頸部をもち、口縁内側には凸帯が附されている。頸部の横位隆帯から垂下する4本の縦隆帯により胴部器面をほぼ4分割し、その間や口頸部に縦のヘラ描き沈線を満たしている。各縦隆帯の中位あたりは大きく盛り上がっている。5は、北東部壁際の床面上から僅かに浮いて出土した釣手土器である。鉢部のテラスが欠けているが、ほぼ全形をとどめている。鉢部内面上半にスス状の黒色附着物がかなりみられる。6・7は覆土中から出土した土偶片である。6は胴上半身だけ残るが、かなり大形になると思われるもので、正面から側面にかけて沈線で文様を描いている。幅3mm程の貫通孔が縦にあいている。7は手・足・頭部を欠く、胴部だけのものである。臀部が大きく張り出し、乳房とヘソを表現すると思われる貼りつけを有する。

（三村　肇）

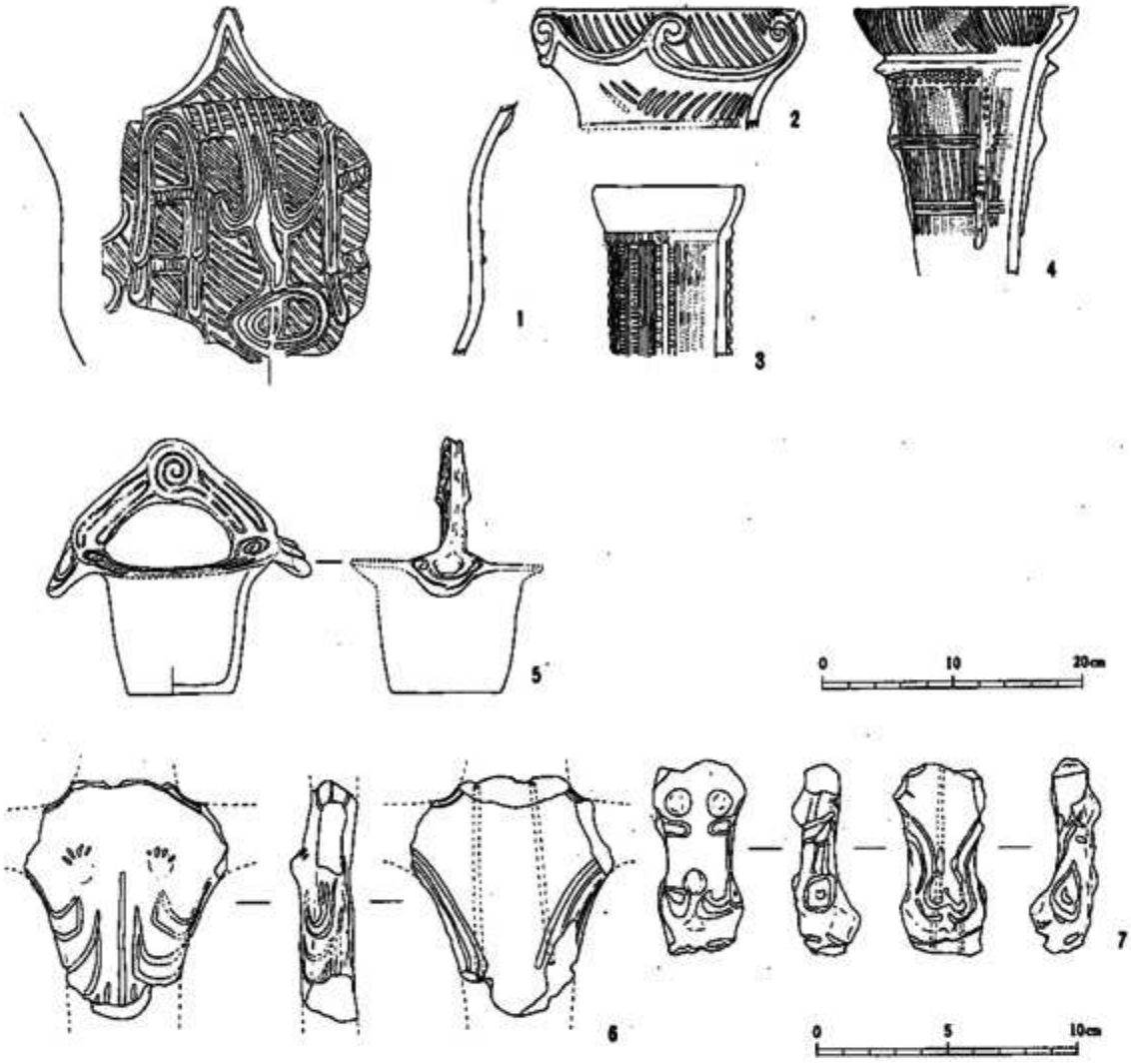


1、掘り上げ図

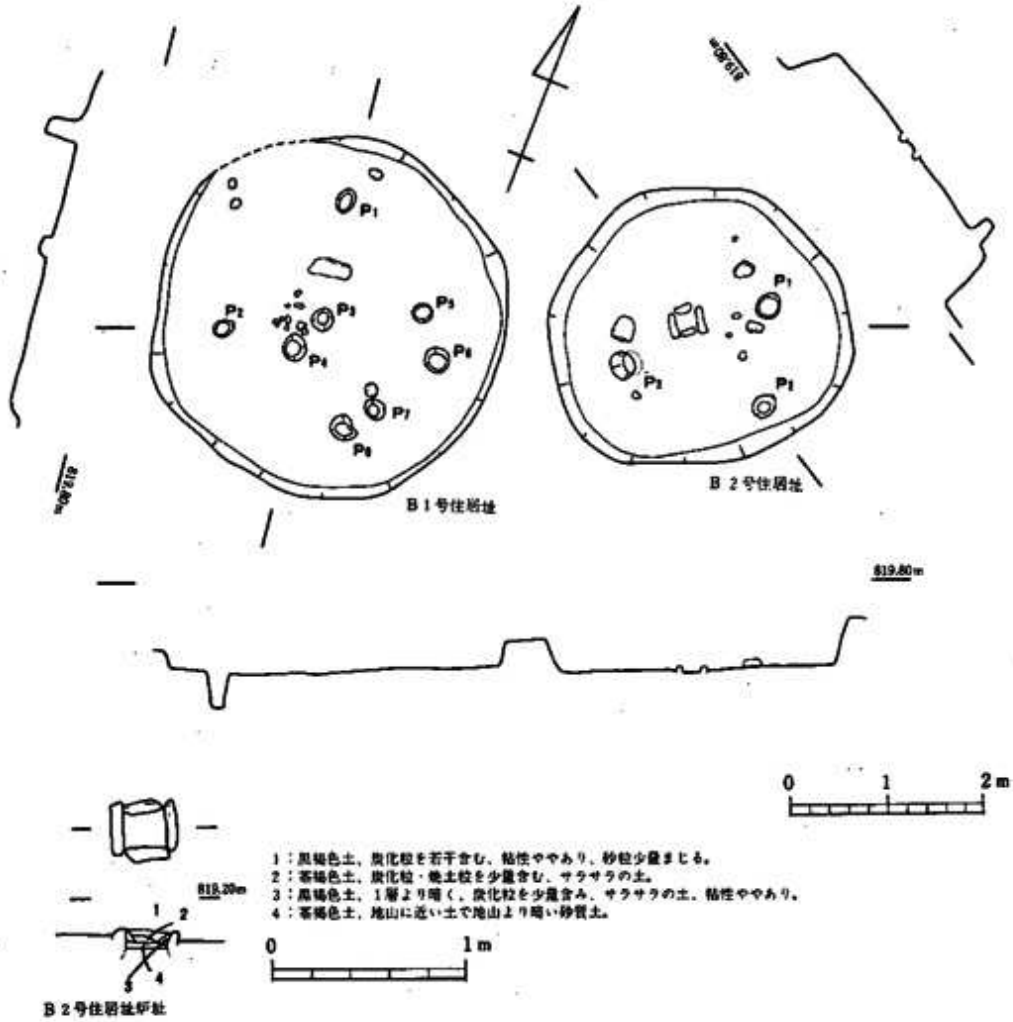


2．炉址平面図及び断面図

第69図　　A17号住居址



第70図　　A17号住居址 出土土器・土製品

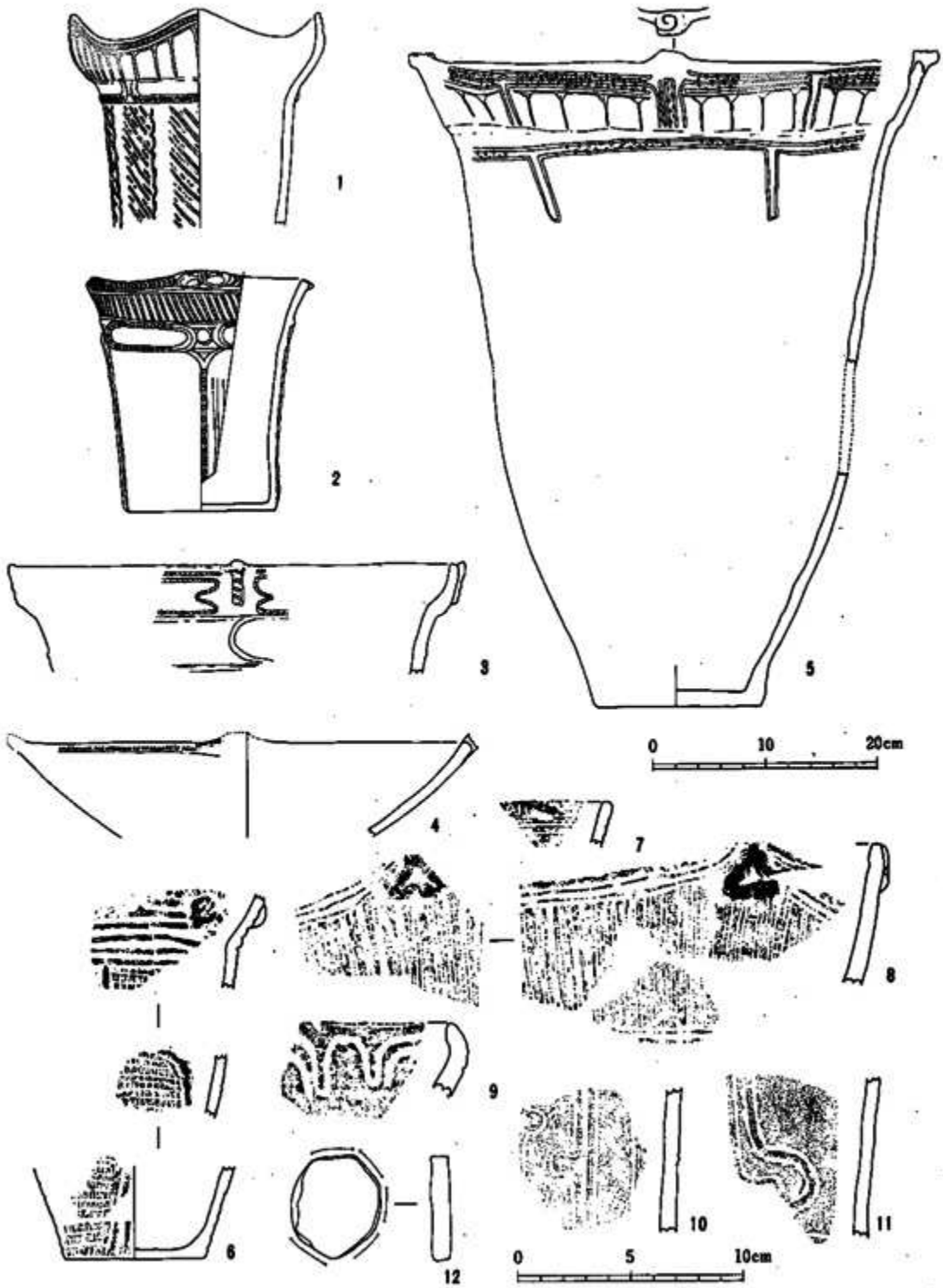


第71図　B１･2号住居址（左B1号住居址 右B2号住居址）

18. Ｂ１号住居址（第71・72図）

遺構　堀の北側にあり、Ｂ地区４・５・６－17・18グリットに位置する。東北0.5ｍにＢ２号住居址が隣接している。本址の遺構検出にあたっては、地山のローム土に黒褐色土の円形の落ち込みが明瞭に現れ、容易であった。特にその落ち込みの中央部には黒味の強い土が堆積していた。

平面形は径約3.6～3.8ｍのやや不整な円形を呈す。壁は大部分が良好な状態で残存し、北側、東側で25㎝、南側で12㎝、西側で30㎝の壁高を測る。北西の一部分が不明瞭となっているのは、壁外を削り込み過ぎたためである。床面はほぼ平坦で東半分は良好だが西半分は軟弱で、南東から北西へ向けて緩傾する。炉については、床面中央部及びその上層に僅かな焼土・炭化物があったが、それをもって炉址にあてるにはいささか貧弱であり、他に明確に認定できるものもない。ピットは



第72図　　B1号住居址 出土土器

小規模な窪みを除き8ケあるが、それぞれ深さは、P_1：32㎝、P_2：38㎝、P_3：7㎝、P_4：12㎝、P_5：10㎝、P_6：32㎝、P_7：25㎝、P_8：38㎝を測る。このうち深さ20㎝以上のP_1、P_2、P_6、P_7、P_8は、位置的にも床面外周付近にならび、主柱穴にあてることができると考えている。中央部北寄りの床面上には、長辺40㎝以上ある扁平な石が存している。上面が平らな石で、本址に直接伴う何らかの施設または遺物とみられる。

遺物　土器、石器、土製品が出土している。これらのうち、床面及びその付近からのものは少く、殆どが覆土中央部の黒味の強い土層内からの、床面よりかなり浮いた位置での出土である。

まず土器について触れる。図化できたもの5点、拓影6点で、総量はさほど多くない。第72図1は、口縁が大きく4単位の波状となる深鉢形土器である。口頸部文様帯に横位沈線と交互刺突、楔形沈線をならべ、胴部には縄文及び結節をもつ縄文を縦位に施文している。焼成よく、赤褐色から暗褐色を呈す土器である。2は、僅かに波状口縁となる、やや丈のつまった感じをうける器形の深鉢形土器である。口縁部などを少々欠くのみで、ほぼ完存している。文様は、口頸部に斜位の結節沈線を並列充塡し、胴部は垂下するY字形隆帯で4分割されている。胴部外面の無文部分は縦方向にミガキ様の調整痕が観察できる。色調は灰黒色から黒褐色を呈し、焼成が良く堅緻なものである。3は、大形の深鉢形土器の口頸部破片である。平縁で、文様は口頸部を縦隆帯で4分割した中に結節沈線を施し、以下は弧状、横位の隆帯を描いている。4は、体部が僅かに内湾気味に開く浅鉢形土器で、口縁には4単位で小突起があがるようだ。内面はよく磨かれて、口唇部に一条の爪形状の竹管文を連続させている。5は、器高58㎝を測る大形の深鉢形土器である。覆土中央部の黒色土中に横倒して潰れた形で一括出土したもので、各部の破片をかなり欠いてしまっている。口縁に4単位で小突起をもち、文様は、交互刺突と楔形沈線が口頸部にめぐっているだけで、それ以下は全く無文でミガキ様の調整がなされている。6は小形薄手の深鉢形土器片で、提示した3片の他にも同一個体と思われる破片が数点あったが、接合復元できなかった。半隆起平行沈線を横位や区画状に配し、区画内は格子目状沈線を満たしている。7も薄手の深鉢形土器と思われるものの口縁部破片である。横位の平行沈線と縦の僅かな刻みが施されている。8は4単位の波状口縁になると思われる深鉢形土器片で、波状部に対応する様に三角形の隆帯を貼りつけている他は、半截竹管を用いた平行沈線で施文されている。9は弧状の沈線をつらねている口縁部破片で、深鉢形の器形をとるものと思われる。10・11は深鉢形土器の胴部片で、いづれも半截竹管を用いた平行沈線で施文をしている。10には地文に縄文がみえる。12は土器片利用の土製円板である。表面無文でよく磨かれた土器片を用いてあり、外側にはすった面が認められる。

石器は石錐、石匙、打製石斧、凹石等が出土しているが、詳しい観察は一覧表に譲る。

（神沢昌二郎）

19　B２号住居址（第71図、第73・74図）

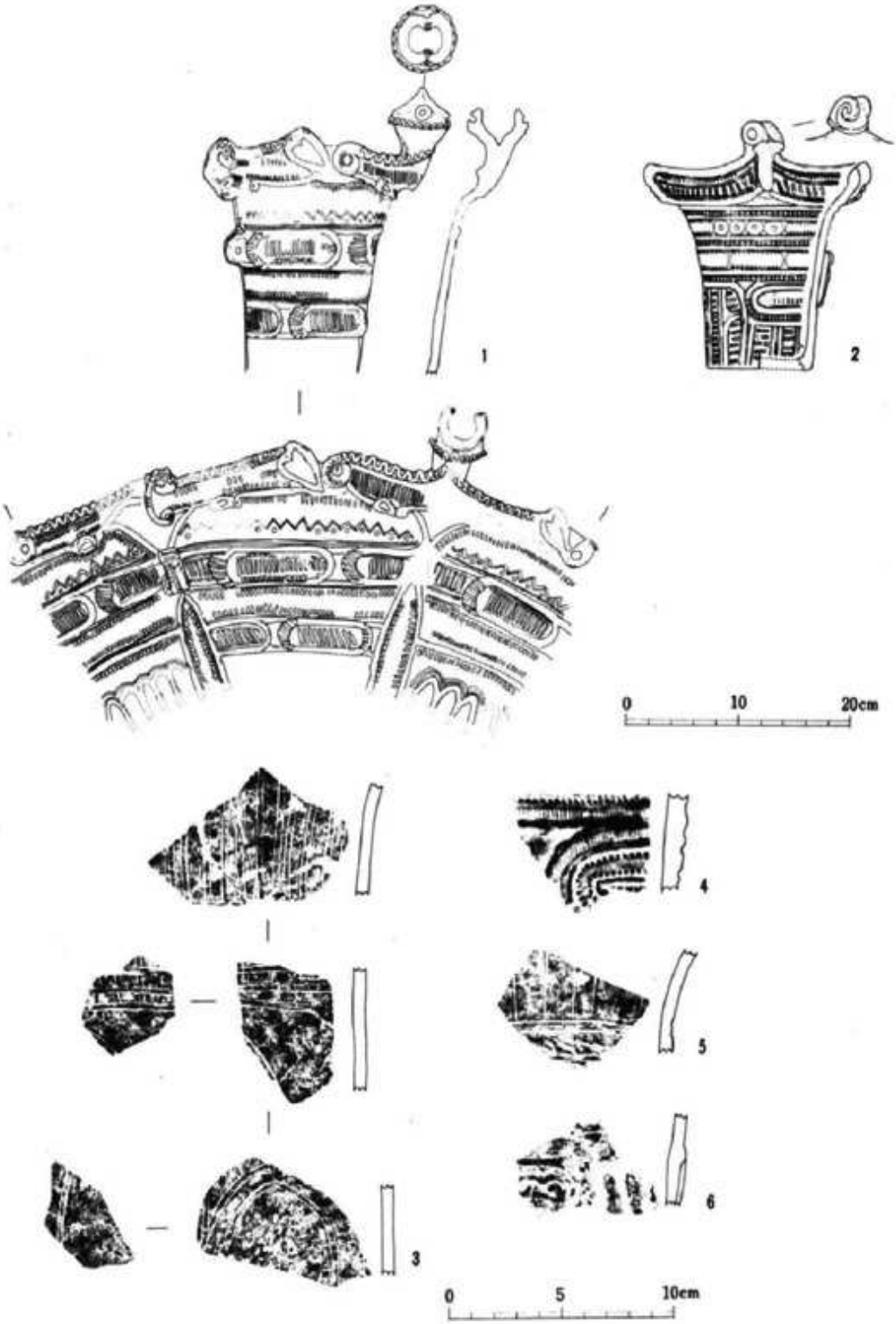
遺構　堀の北側、B地区６・７－16・17グリットに位置する。すぐ西隣りにはB１号住居址がある。本址もB１号住居址同様、遺構検出にあたっては、ローム土に黒色土が単純明瞭に落ち込んでおり、輪郭が容易に捉えられた。

平面形は径2.8～3.2ｍの不整円形を呈す。壁は全体的に良く残存しており、傾斜は概して急である。壁高は北側で40㎝、東側で56㎝、南側で47㎝、西側38㎝を測る。床面は堅く良好だがかなり凹凸があり、総じて中央部へ向ってゆるく窪んでいくようになる。炉は床面中央に位置し、細長い４ケの石を用いた一辺30㎝ほどの方形石囲炉である。内部にはごく僅か焼土・炭化粒が混じているのみであった。ピットは３ケ検出され、深さはそれぞれP_1：50㎝、P_2：24㎝、P_3：52㎝を測る。柱穴としては配置に問題があり、壁外にも関連するピットの存在を想定して検出に心を配ったが、それらしいものは全く発見できなかった。中央部北寄りの床面上には、一辺20㎝ほどの扁平な石が存していた。本址に何らかの関連があるものと思われる。

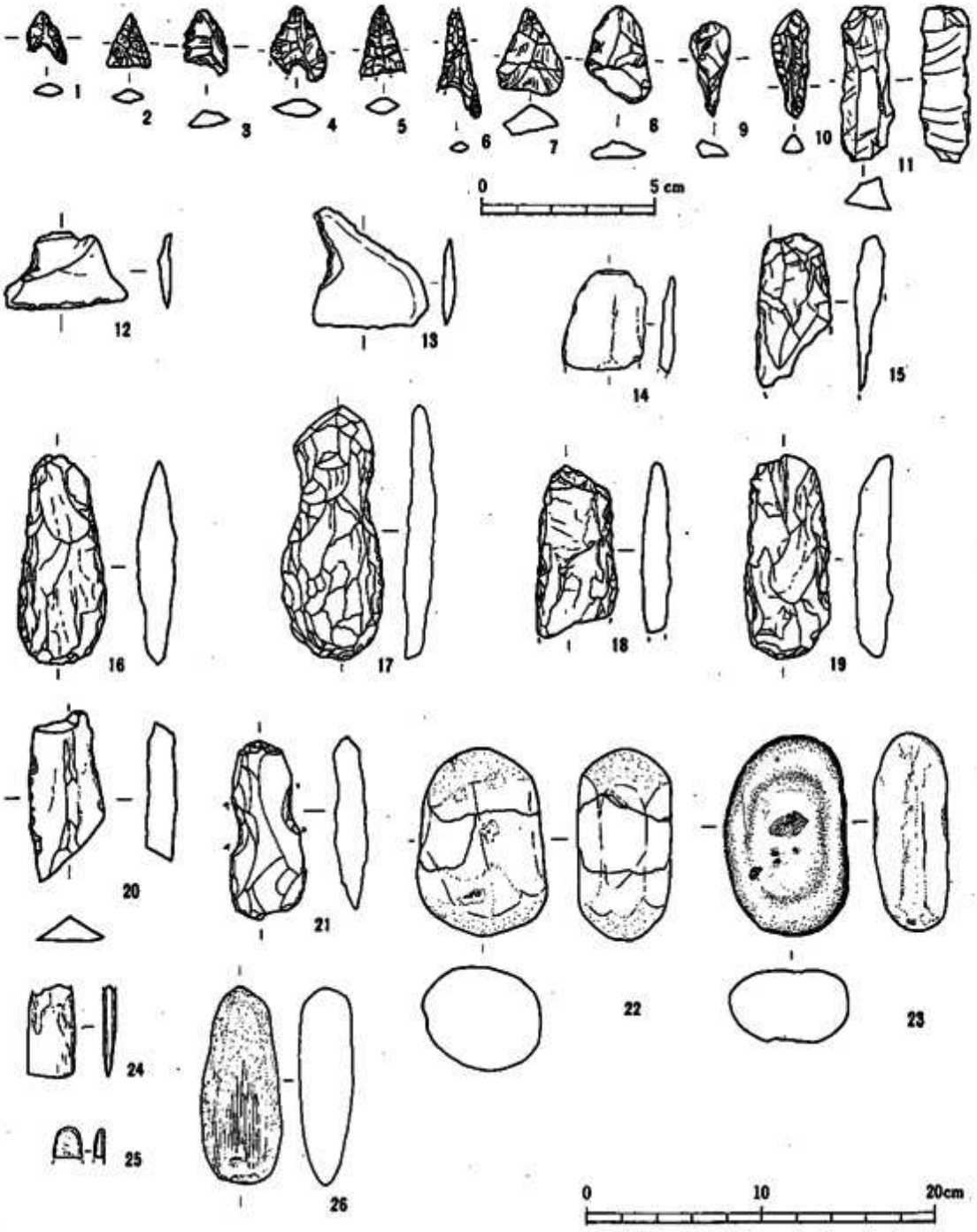
遺物　土器、石器が少量出土した。特に土器については他のものがすべて小破片での出土である中で、第73図１・２の２ケは、本址中央部の床面よりやや浮上し、潰れながらもほぼ完存して遺存するという特異な出土状態を示した。

土器は図化２個体、拓影４個体が提示できたのみである。１は底部を欠くが他はほぼ完存する深鉢形土器で、波状口縁に大きな１ケの突起の立ち上がる優品である。文様は基本的に横帯で６段に分かれ、それぞれに連続刺突・短沈線・結節沈線・楕円区画隆帯を配している。突起は高さが約６㎝、平面形が5.5㎝くらいの円形となり、あたかも蛇頭が天に向かって大きく口をあけた如くである。内面は横位のヘラミガキ様に丁寧に調整されているが、外面の施文や突帯・隆帯の貼りつけはいたって雑である。色調は赤橙色を呈し、焼成よく堅緻なあがりとなっている。２はやはり底面が抜けているが他は完存している小形の深鉢形土器で、口縁が４単位の波状となりその１つが捻りを加えて大きく立ち上がる器形をとる。文様は口頸部と胴部上半が横帯構成で、平行沈線や連続爪形ドーナツ形の陰刻が横位に連ねられるが、胴部下半は平行沈線による縦方向の長方形区画内に幅の狭い爪形状の刺突を横走させている。施文は非常に丁寧である。色調は赤褐色から赤橙色を呈し焼成が良好な土器で、胴下半部内面に３㎝程の幅で黒変部分がまわっている。３は深鉢形土器片で、色調、胎土、文様等から同一個体と推定した。文様はすべて幅の狭い半截竹管を用いてつけられ、上段が口頸部、中段が頸部から胴部上半、下段が胴部上半にあたると思われる。４は深鉢形土器の胴部破片である。横位や楕円区画に連続爪形が施文され、楕円区画の中には刻みを伴った沈線が輪郭に沿って描かれる。胎土が精製された非常に焼きの良い土器で、施文も丁寧端正である。５・６も深鉢形土器の破片で、５は平行沈線、６は縄文をもった縦隆帯や斜位・弧状の沈線が配されている。

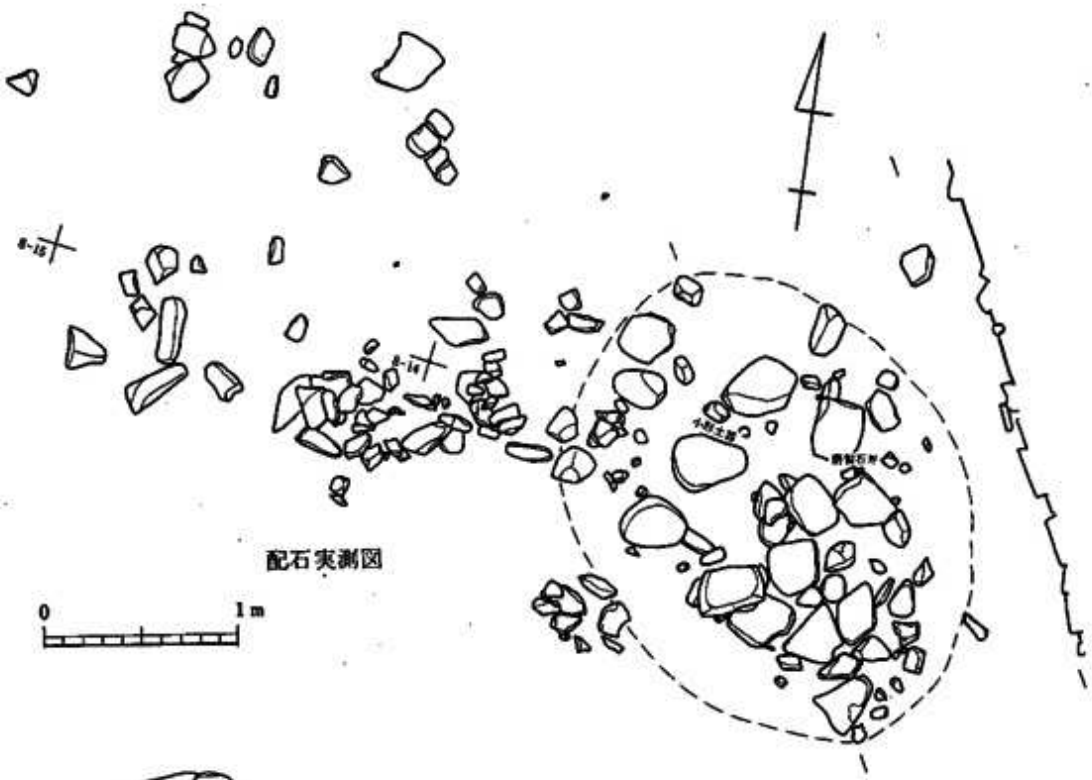
石器については、一覧表を参照されたい。　　（神沢昌二郎）

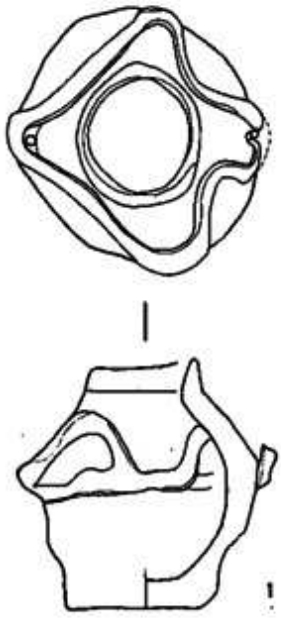


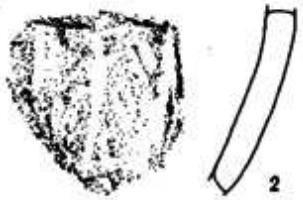
第73図　B2号住居址出土土器



第74図　B１号・２号住居址出土及び表採石器







0 5cm

第75図　配石・配石出土土器

第2節　配石址（第75・76図）

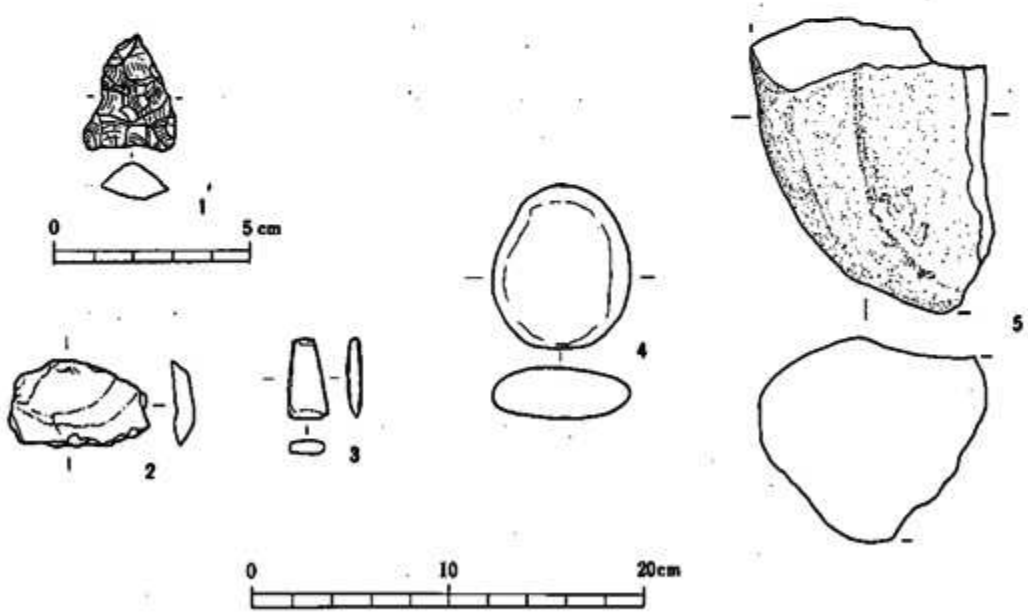
遺構　A地区7、8－11、12グリットに位置する。周辺一帯には、同レベルで石が散在しているが、遺構範囲は、長軸2.5m、短軸1.8m、面積約4㎡の平坦な面を持つ石が集中している地点と思われる。尚、この配石は、黒褐色土層中に設けられている。

遺物は、配石中心部やや北西寄りの地点から、小形土器の完形品、土器片数片と、小形の磨製石斧が出土している。

遺構の性格は、平坦な石を並べてある点、特殊な小形土器を置いている点から極めて祭祀的色彩の強いものであろう。

遺物　本址遺構面に接し、或いは周辺から土器・石器が少量出土している。1は配石と同じレベルで、口縁を上に向けて出土した完形の小形土器である。器高6.3㎝、口径2.7㎝、底径3.5㎝、胴部中位で最大径6.6㎝を測る。胴上半に粘土紐を波状に貼りつけ、耳には一対の孔があけられている。色調は淡褐色で胎土は微砂を含み、焼成は良好である。2・3は深鉢形土器の胴部破片で、縄文を施した後棒状工具により沈線を描き磨消しを行っている。淡褐色を呈し焼成は良好である。石器は石鏃1点と磨製石斧1点等が得られている。磨製石斧は小形の完形品で配石の間から出土している。

（篠宮　正）



第76図　配石・列石出土石器

第３節　列石状遺構（第77図）

遺構　Ａ地区北東寄りに地表下30㎝長径20～50㎝大の列石状遺構が検出された。その主軸はほぼＮ－45°－Ｅで最大巾 2.8ｍ、長さ７ｍであり、礫は塩沢川のやや角ばった石で、粘板岩、砂岩が多い。礫列の横断面はほとんど平面的であるが、やや中央部分が厚い。主軸についてみると、西傾する地形どおりに西側が低い。礫下部は東側はロームになるが、中央より西側部分は黒色土が混在しており、上層よりは若干の縄文中期の土器片が、礫中からは石皿片が出土している。

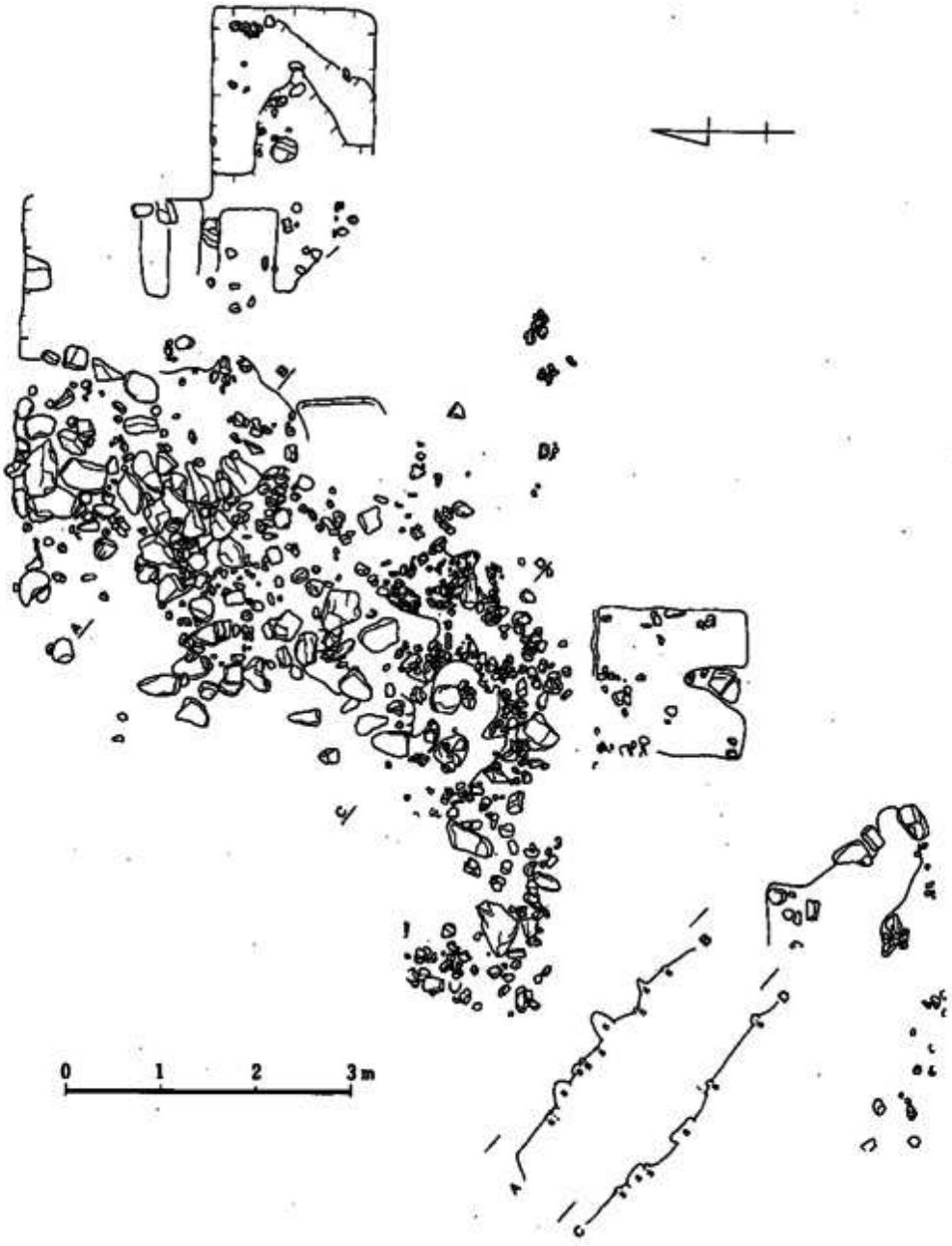
本址の性格づけであるが、人為的なものであることは明らかであるが、他は不明である。現状から推定すれば次のことが考えられる。①一つの区切り、境を示すもの②防御的な意図を含むもの、③単に石を集めたものなどである。

①、②については列状という見方が働き、③については集石という塊状という見方が根底にある。①ではＡ地区に広がる縄文時代の集落を囲繞するもの、②については①に関わるが、集落を守るもの、河川の氾濫に備えた土手、外敵を守る土手、柵などとも想像できる。特に本址周辺は三郎城とも言われる地域を包含しており、本址東方１㎞の崖の湯北には八間長者といわれる中世館址の遺構があるなど、本址を中世遺構と考える見方もある。③では上記の先入観を捨て、単に検出面の現状のみで見た場合で、その時期を縄文期におくものである。

しかし、いづれもが推測の域を出ないことであるならば、②の考えをとりたい。

遺物　前記のように覆土より若干の縄文中期土器片、東側ロームに接して縄文中期土器片、礫中に石皿片（第76図５）を検出。なお過去の表採では中世陶器片を採集している。

（神沢昌二郎）



第77図　列石遺構実測図

第４節　遺構外出土の遺物

1.　０地点出土品（第78～80図）

０地点は本遺跡Ａ地区の北側で、現在水の流れていない沢（堀）の中に設定した。遺構の検出はなかったものの後述する土器・石器が出土した。

土器は多量に出土し、図化・拓影あわせて32点を提示した。１は小形の深鉢形土器で、底部を欠くがほぼ器形はわかる。外面は褐色で二次焼成を受けたのかザラザラしている部分もあるが、全体的にはほぼ良好な焼成である。内面は黒褐色で焼きしまっている。胎土に多くの砂を含む。口唇は「冂」を呈し、一対の突起をもつ。口径14㎝を測る。外面には粘土帯と数種類の半截竹管による施文がある。２は口縁部の大破片。焼成は良好で茶褐色を呈す。胎土に砂を含む。口縁が大きく４単位に上方へ突出する器形をなすと思われ、粘土帯と沈線により施文してある。３は、底部を欠くもほぼ形がわかる。焼きは良好で、外面は茶褐色を呈す。胎土に砂を含む。口縁部は内湾し、下部方向へ徐々にすぼまるものである。口縁部と、胴部の２列の粘土瘤に特徴がある。３つの突出部を１つの組みとしたものを４組口縁に配し、３つの突出部の真中より粘土帯を垂下させている。その粘土帯は胴部をめぐる一条の粘土帯に結ばれている。また胴部をめぐる粘土帯よりは２列の３㎝程の粘土瘤を斜行させている。口縁より胴部下部まで縄文で埋めている。４はやや深めの浅鉢である。口縁部径17㎝、底部径11㎝、器高11㎝を測ると推定する。焼成良好で茶褐色を呈す。胎土に砂を含む。器厚は１㎝内外。口縁部に区画文を配するが以下は無文である。拓影で示した５～32は大別すると、端正な連続爪形や半截竹管による平行沈線をもつ縄文中期中葉の古い時期のもの（５・６・12・13・15・18・19・21～24・30）、中期中葉の終末ないしは後葉初頭のもの（８～10・25）、後葉後半のもの（11・14）等になると思われる。

石器は14点出土した。石鏃、打製石斧、凹石等がある。詳しい計測値は一覧表に譲る。

（浅輪俊行）

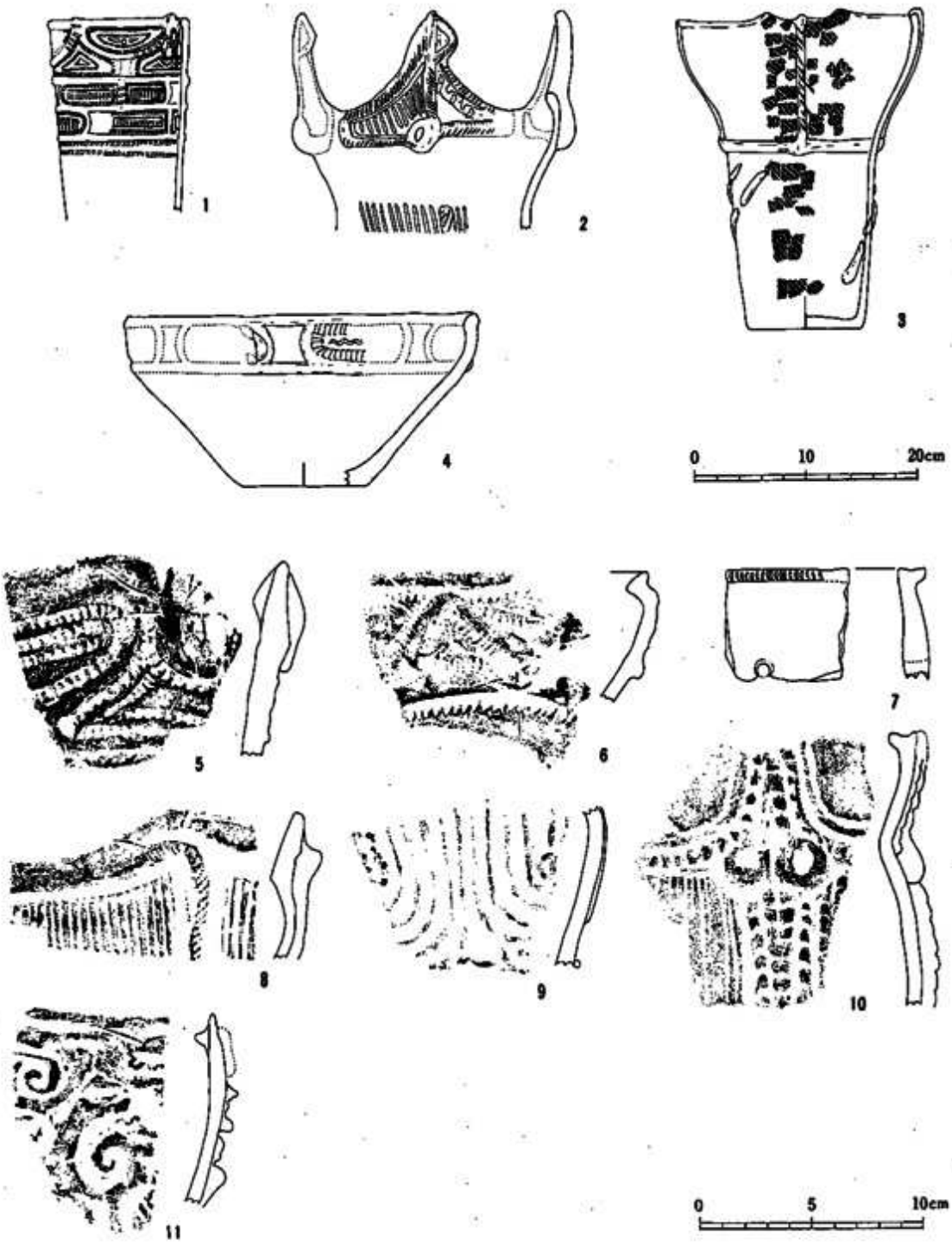
2.　Ａ地区出土品（第81～83図）

住居址以外の表土耕作土中や遺構検出面からも土器片、石器、土製品が出土している。

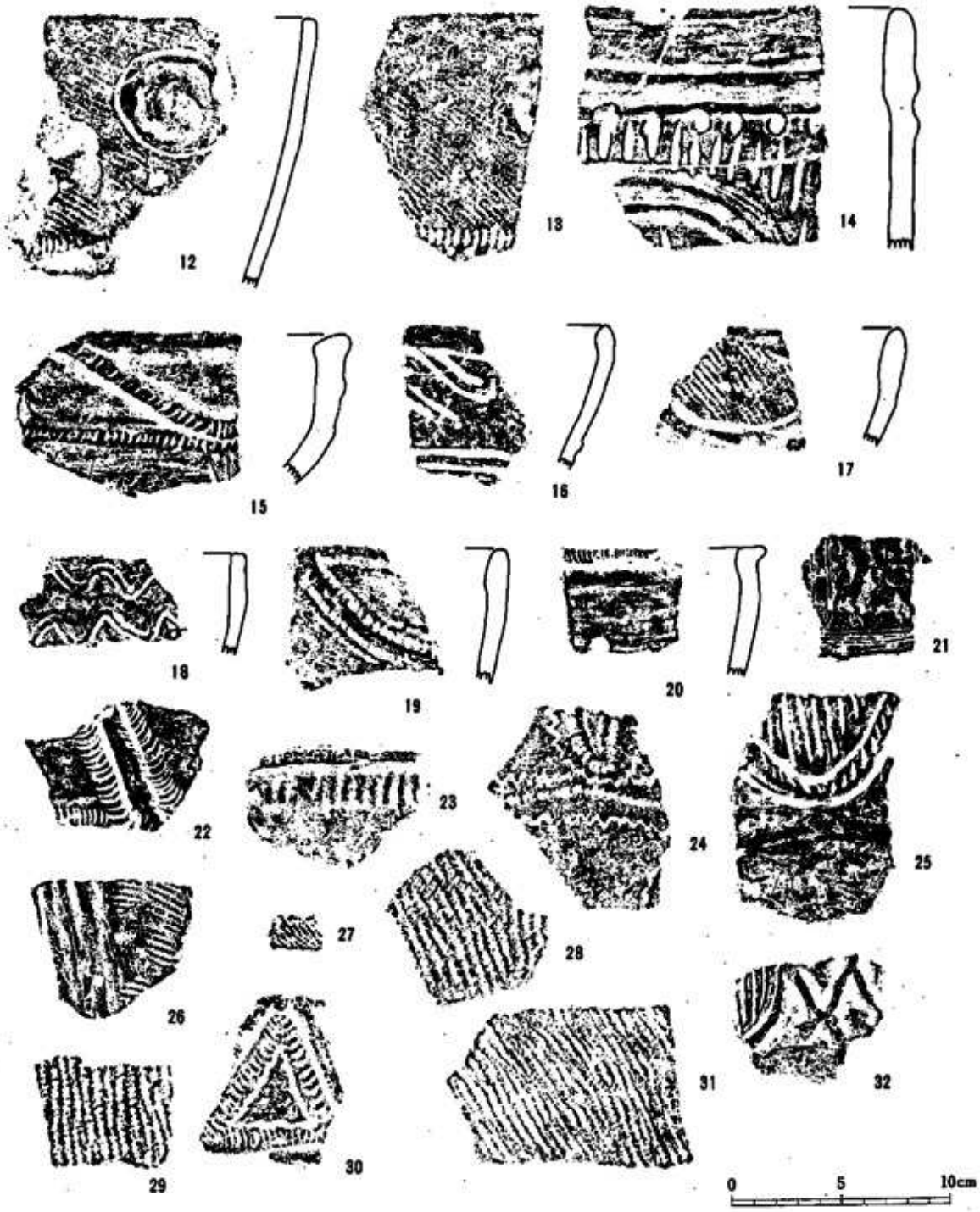
土器は小破片のものがほとんどで、時期的にも各住居址で代表されるため、１点図化したのみである。第83図５は一対の把手をもつ小形のカップ形になると思われる土器片で、12－１グリットから出土した。暗橙色を呈す焼成の良いものである。

石器は、石鏃・石錐・打製石斧等37点出土している。出土地点、各種計測値等の説明は一覧表に譲る。

土製品では土偶の各種部分が４点出土している。１は５－18グリットから出土した頭部片である。



第78図　　O地点出土土器(1)



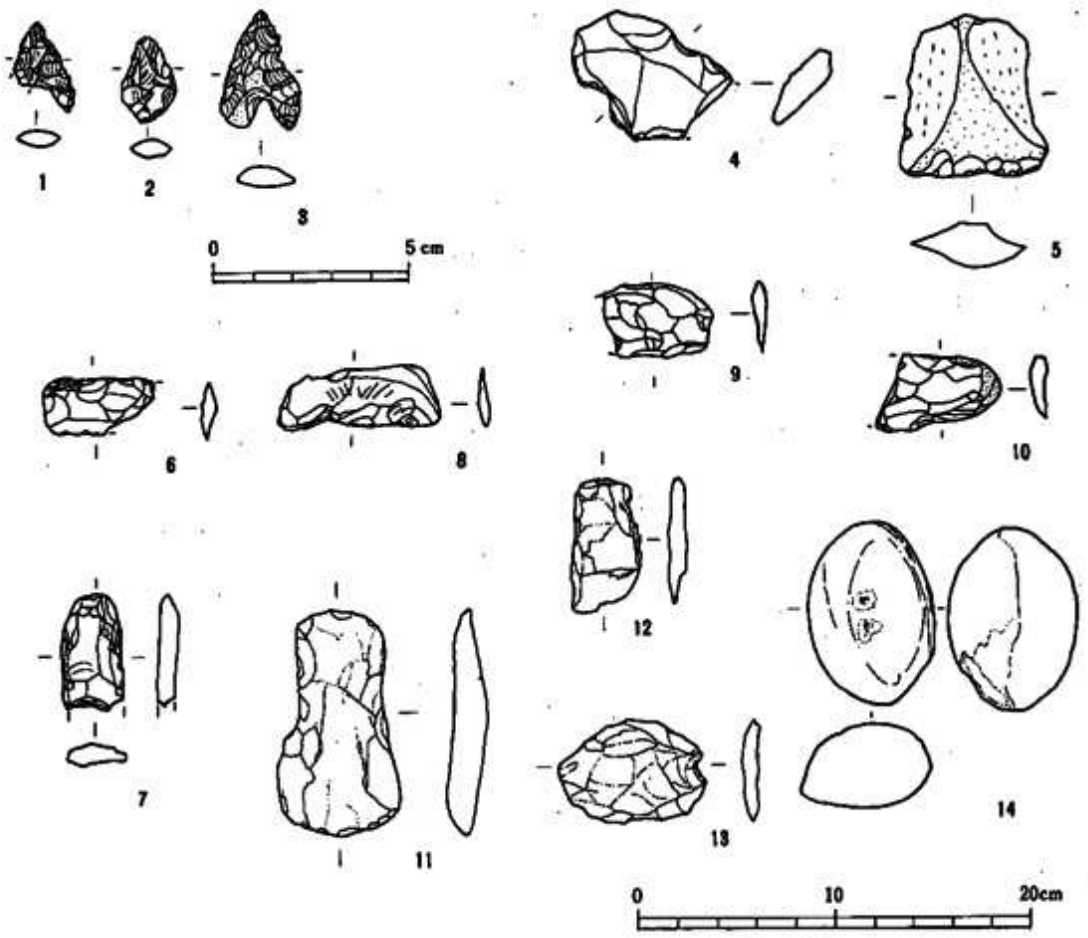
第79図　　O地点 出土土器(2)

頭上面に三孔があったようで、また内部は中空になっている。色調は暗赤褐色から暗黄褐色を呈し焼成良好で、胎土には石英と雲母が著しく多い。2は一見、脚部の如くみえるが底面に、何物からか剥離した痕跡が残っている。黄灰色を呈している。7－10グリットから出土した。3は6－15グリットから出土した頸部以上である。頭部は平らで、三孔が穿たれている。外面はヘラミガキが施され、黄褐色を呈す焼きの良いものである。4は3－17グリットから出土した脚部である。棒状工具で縦位の沈線を外面に描いている。水平断面の中央部に小孔がある。色調は暗黄褐色を呈し焼成はよい。

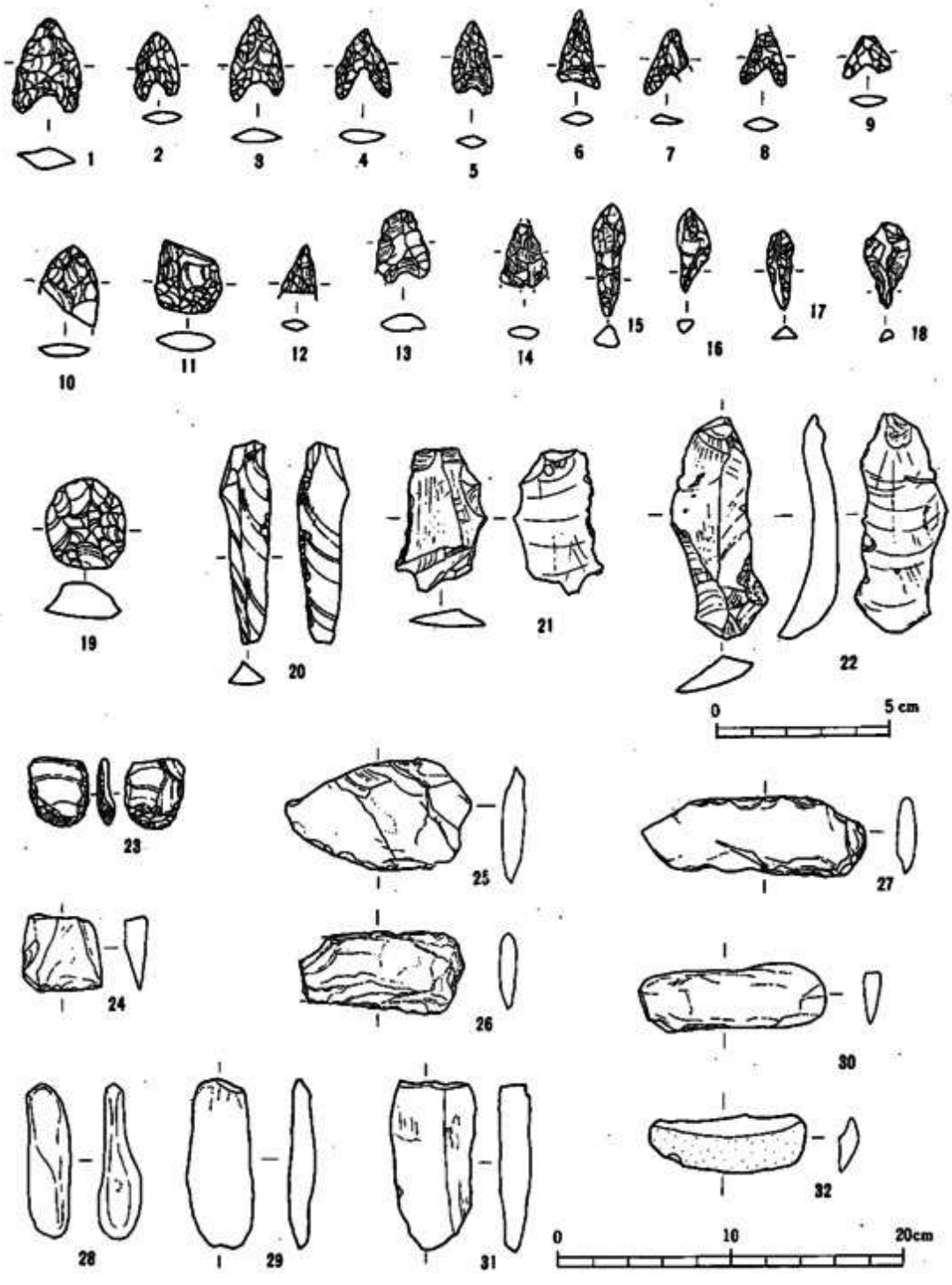
3. B地区出土品（第81・82図）

土器・石器があるがいづれも量が少く、土器は小破片で図示し得なかった。石器は16点あり、表土層中より主に出土した。出土地点はグリット単位でとらえた。細部計測値等は一覧表を参照されたい。

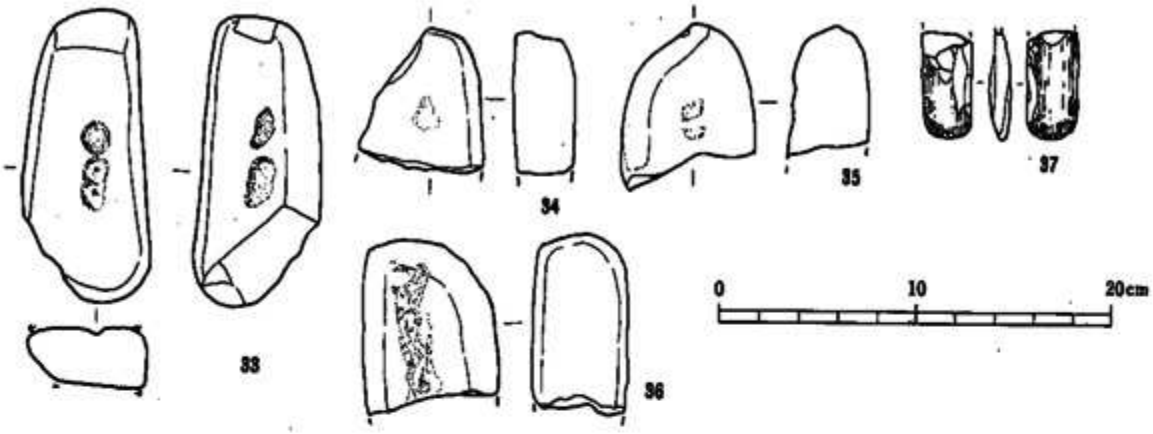
（浅輪俊行）



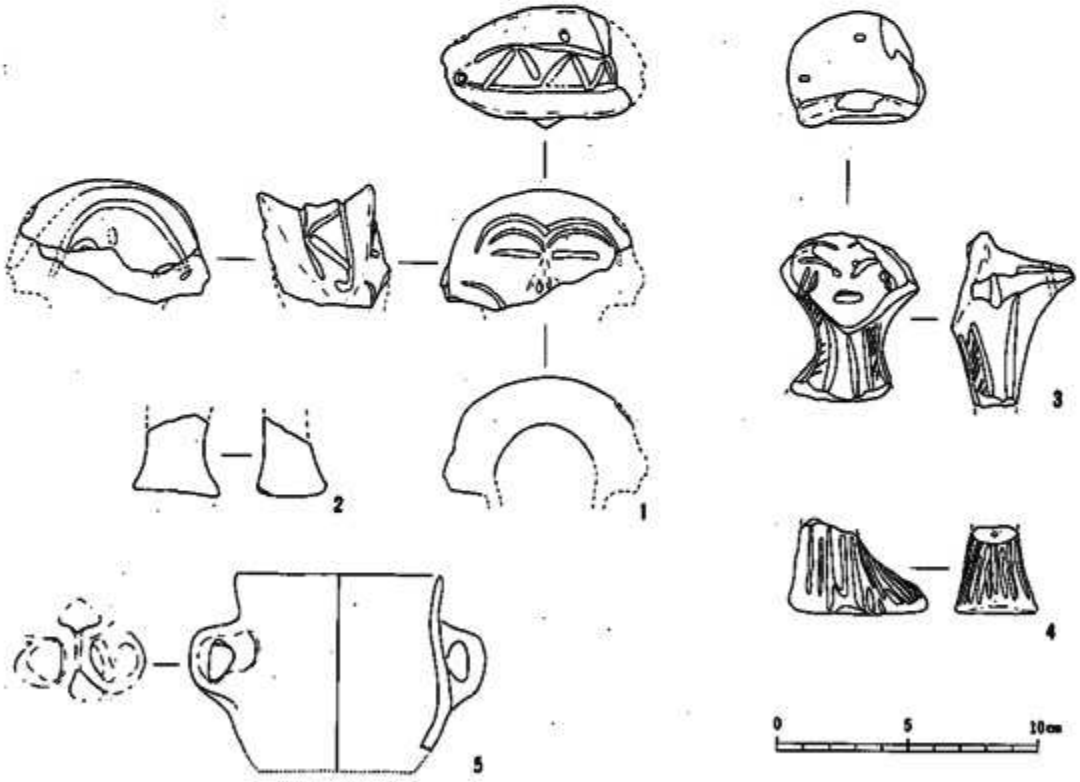
第80図　O地点出土石器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
0
5 cm
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
10
20cm

第81図　表採石器(1)



第82図　表採石器(2)



第83図　遺構外 出土土製品

第5節　雨堀遺跡出土の骨類について

出土した骨類はすべて火焼を受けて白色化、細片状となり、種名や部位の同定は極めて困難であった。しかし各土拡などから少量ながら、比較的散在して検出されたことや、骨の遺存の程度や形状などにも、やゝ斉一的な傾向が認められる。当時の集落の存り方とともに、縄文人の生業活動を示唆する上での、資料の蓄積の一助となるものであろう。

以下、骨類の遺存の状態について略記する。

1.　動物骨

(1)　1号住居址内及びその周辺

ニホンシカ－中手骨の骨幹部（前面にみられる細く浅い縦溝はシカ特有のものである）。長骨の骨幹部分（最大現存長7.5㎝～5.0㎝程度のもの数片）で、いずれも頑丈で厚い緻密質部を有し、骨の長軸に対して平行に縦割されたものとみられる断片が数片残存している。これらの骨の上・下端は横折状をなしている。指骨部分の関節の形態を残すものがあるが、正確な同定は不可能である。頭骨の頭頂部分で、やゝ方形に断片化したものが数片みられる。その他に微細な骨片が10数片残存する。

(2)　その他の遺構に遺存した骨類

ニホンシカ－頭骨の破片と四肢長骨が大部分である。わずかながら形状を止めるものに、中手・中足骨の遠位関節部（滑車部分）、膝蓋骨、指骨、足根骨の一部等がある。いずれも火焼のため亀裂や変形が生じた細片で、経時的な崩壊も著しい。長骨に螺旋状の割面を残す破砕骨がみられる。

その他、やゝ小型の動物の長骨が類別されるが、種名や部位は確認できない。

以上が遺存した動物骨の内容であるが、すべては髄腔まで火熱の達した焼骨であり、局所的な焼痕などは見当らないが、食料残滓として破砕され、遺棄された動物骨と見なされる。

2.　人骨（2号住居址、覆土中に包含。）

すべては火焼を被った細片状の破損骨である。しかし骨の部位によってはその形状を残している。覆土中からの出土であり、火葬された後世の埋葬人骨であろう。

遺存の概要は以下の通りである。

頭骨：主として脳頭蓋の部分の破片で、約35片が算えられる。小片で2×2㎝、大きな破片で1辺数㎝のものまである。骨厚な薄く、縫合が癒着せず、離開した部分がみられる。脳底の微細な個所が破損されながらもよく保存されている。すなわち側頭骨では両側の椎体（岩様部）、上顎骨の

口蓋突起部が細片状となりながらも残っている。歯槽も部分的に残り、一部に歯根が残置されているが、他の歯はすべて脱落している。ただし2本の脱落歯の歯根部のみが検出された。下顎骨の右側下顎小頭が残る。下顎骨では下顎骨体の中央部分が残り、歯槽を欠くが下縁辺が保存される。下顎小頭は残された下顎窩と接合する。

脊椎骨：数片の脊椎骨が残存する。特に軸椎の歯突起、上関節突起の部分が認められるが、いずれも繊細な形状を示すようである。

上腕骨、その他：上腕骨の骨頭部分の破片。骨体は約6㎝残るものが最大であり、長骨の中で細い部分の骨が数点あるが、正確な部位は不明である。

以上、わずかに1個体分の人骨であると確認できる程度で、詳細は不明である。

（西沢寿晃）

第4章　結　　語

雨堀遺跡の今回における調査は、7月半より9月半まで2ケ月間にわたったが、結果において、広大な遺跡の全容を明らかにすることは至難のこととなり、その片鱗を知るにすぎなかった。然し、当初の予想に反し検出された遺物、遺構は極めて豊富であり、変化に富んだ内容を得ることができた。今それらの主なる事項につき、ここに要約し、縄文中期の東山山腹地帯に立地した1遺跡の、明らかにされた部分の実態を記してみたい。

まずA地区において確認された住居址は、都合17例を数える。そのいづれもが縄文期所属で、A7号住居址を除き、他はすべて上下、深浅の差こそあれ、切り合い状態を示し、せまい範囲内に複雑密集するかたちで存在する。従って遺構の在り方も、単純な姿相として把握することは難かしく相互にからみをもちながら複合する有様であった。A1号住居址は4－11グリットを中心にして、3、4、5－10、11、12グリットに及び、その下層にはA2号住居址が、4－9、10グリットを中心にして、3、5－9、10グリットに及んでいた。この様にしてA4号住居址はA5号住居址と、A5号住居址は4号、6号住居址と、6号住居址は5号住居址と、9号住居址は10号、11号、14号、15号住居址と、10号住居址は9号、11号、12号、13号住居址と、11号住居址は9号、10号、12号、13号住居址と、12号住居址は10号、11号、13号住居址と、13号住居址は10号、11号、12号住居址と、14号住居址は9号、15号住居址と、15号住居址は9号、14号住居址と、それぞれ切り合い関係にあり、特に、8～11－12～18グリットには、9号～15号の7住居址が左右相互にひしめき合い、ほぼ同一箇所に何回も住居が構築された形跡を残している。又、単独に住居址がつかめたA3号、8号住居址も、同じ住居址が建てかえられたり、張り床による文化の相異する生活面をもつという、多様さがうかがえた。年代的には、A6号、7号、8号住居址が縄文中期前半の藤内期に属するものとみられ、他のA1号～5号・9号～17号住居址は、いづれも縄文中期後半の、曽利Ⅰ～Ⅴ式併行期に該当するものであることが明らかにされる。又、各住居址共、その址内には、集石が必らずといってよい程存在した。竪穴内の外周に周溝の伴うものとしては、いづれも曽利併行期のA2、3、10、14、15各号住居址に設けられていた。

本遺跡検出の竪穴住居址は、最終的には都合19例を数えるが、表土より住居址検出にいたるまでの過程で、址の上層部の各所に集石遺構の存在を認めた。換言すれば、集石遺構の下部には必らずといってよい程、竪穴住居址が検出されたのである。これら集石は、木炭粉末、骨粉などを含む、光沢のある濃黒色土に包まれており、その内部からは多少濃薄の差を認めながら、いづれも土器片類や完形を示す石器類が混在して発見された。集石の用材は、地元産の砂岩類が殆んどで、角のと

れて丸みをおびた自然石が使われ、角礫、割石等は少なかった。大きさは人頭大のものが主体をしめ、それより大きな石や、こぶし大程度の礫が集められていた。これらの集石は、結果的には廃絶された住居址の竪穴内に、投げ込まれたかの様な感じを与えるものであり、必ずしも一定の秩序をもったり、整然さを具備している形のものではなかった。然し、何故、遺物をも混在させる、多数の石礫が存在するのかについては、それ自体大きな問題として論ずるに、十分な意味を内包しているかの如くである。すでに廃棄された住居址の竪穴内や、下部にある古い住居址の一部を切ってその上層部に新らしい住居址を構築するとき等、穴の中に石を投げ込んで床面の乾燥を良くし、はり床によって再度活用したという様な人工の跡はみられず、当時における民俗的な風習による、行事の所産ではないかと考えられるのである。例えば、流行病その他で一族に死者が出た場合等、その関係した家屋を意識的に破壊し、悪霊封じのため石を投げ入れたり、生前、故人らの使用した土器とか石器などの用具類が共に埋納されたなどの見方も、可能ではないかと思われるのである。今後、この種の集石と住居址との関係について、更に多面的な分野から追求される必要を感ずる。

検出された住居址の中、縄文中期の前半に所属するＡ６号、８号住居址内には、概して完形に近い土器が、多数残存しているのを認めた。この様な事例は、他遺跡の同時期の住居址についてもいえることであるが、縄文中期の後半に入ると、完形土器を示すものは極くまれとなり、おびただしい土器片がこれにかわって存在する様になる。この様な遺構については、吹上パターンあるいは蝟集という言葉で、先学者が注目されているところであるが、縄文中期の前半に特に顕著であることが、ここでも証明づけられる。

検出された住居址等遺構は、年代的な前後関係を示しながらも、すべて縄文中期に所属するものであった。これらの住居址の縁辺に１箇所ではあるが、７、８－12、13グリットに、配石遺構がやや崩れた輪郭を示し、その一部を残存させていた。縁辺の竪穴住居址の床面より、比較的高い位置に検出されたが、石のたいらな面を上面にして敷きならべた感じであり、その敷石上より、ミニの完形土器、流紋岩製の小形磨製石斧（玉器）等、注目される遺物の検出をみる。多分に祭祀場的なにおいを感じさせたが、その全容が住居址との切り合いでつかめなかったのは、性格を知る上においても残念であった。

住居址内の炉址の在り方について一言ふれるならば、縄文中期の中でも、前半に相当する藤内式期の住居址に伴うものと、縄文中期後半の曽利式併行期に相当する住居址に伴うものとでは、その規模の点で、後者の方が全体的に大形化する。中でも雨堀の場合、藤内期に属するとみられるＡ７号、８号住居址の炉址は、有るか無しかわからぬ程度の小形なもので、用材としてこぶし大程度の礫を、30㎝円形に浅く配列しており、炉というより火壷的な構えをのこしていた。逆に曽利併行期の炉址は、整然とした重量感のある大形の石囲炉をもつか、掘り込みの深い、大きな地床炉（竪穴炉）を伴なっていて、その相異は至極顕著であった。長期にわたる自然環境の条件が、かかる要因を微

妙に生み出しているものであろう。又、往々にして、炉址内に火熱を受けて、ぼろぼろに風化している花崗岩質の焼石が所在するのを見かけるが、火種の保存上何らかの役目を果したものかも知れない。又、A３号住居址の地床炉内には、底部に四角な方形を示す黒色土（木炭化土）の輪郭が検出され、その方形内部に曽利Ⅱ式相当の大形土器片が敷き並べてあった。これは地床炉が活用された後、同所に方形の石囲炉が構築され、更に後年、炉石が抜きとられて残存したものと理解される。この様な事例は、土器片の敷きならべこそなかったが、A５号住居址にもみられ、やはり地床炉が先行した後、同所上面に石囲炉が設置されている。又、A５号、８号住居址の石囲炉内や、15号住居址のすり鉢状の地床炉内には、焼灰除去後、意識的なこぶし大の礫がぎっしり詰め込まれていた。

住居址内に埋甕を伴った関係分を挙げると、A２号住居址に地点を異にして２個、A３号住居址に南側と東側に２個、A９号住居址の西側に１個、A10号住居址の東側に１個、A12号住居址に１個、A15号住居址の南側に１個を数えることができる。１住居址内に埋甕を２個伴なったものとしては、A２号、３号住居址が該当するが、これらはいづれの場合も建て替えによって、それぞれの生活面に破壊されることなく、残されたものとして理解される。又、雨堀の場合埋甕は、その上面に平らたい石蓋を伴うものと伴なわないものがあり、いづれも直立するものばかりで、伏せ甕状のものは検出されなかった。更に埋甕の器形や大小に相異があり、必ずしも様態を同じくするものではなかった。そんなところから、埋甕としての施設、機能、使用目的にも多様なものを感じさせる。埋甕を伴う住居址の所属時期としては、曽利Ⅰ～Ⅲ式併行期にほぼわたるが、一般的には更に下降して、縄文後期初頭にかけてが、その盛行期かと思われる。

遺物の面では、量的に最も多いのは各種土器片である。A地区からは、各住居址の竪穴内に、それぞれ年代決定の足がかりとなる土器類が包蔵されていた。それらは縄文中期に所属するものが殆んどで、上限は前半の藤内Ⅰ式よりはじまるが、主体をしめるものは何んといっても、中期後半の曽利併行期に該当するものであった。又、12－５グリットからは、縄文後期初頭の称名寺式類似土器片が出土する。未掘部分におそらく、後期相当の住居址等遺構や遺物が、埋蔵されているであろうことが想像された。

釣手土器がA17号住居址およびA15号住居址より、２個体が検出された。いづれも縄文中期の曽利Ⅱ式文化に伴うものと考えられ、釣手部の形をほぼ同じくする。燈明としての機能を果したものと思われるが、これらは各住居に１個づつ存在したものではなく、集落内でも特殊な施設で、その役目を果したものであろう。この釣手土器を検出後、水洗いの段階で油脂が若干浮上したことは、興味あることであった。

土偶は完形品がなく、いづれも欠損された部分のみであった。都合10例を数えるが、これら土偶に施文された文様から推察する限り、縄文中期の後半に所属している。その中で、５－18グリット出土の土偶は、頭部のつくりに特色のうかがえるもので、あまり類例を知らない。偏平な顔面と後

頭部面を連接する、小鼓状の内部が空洞となる立体部があり珍しい。土偶は総じて小形な土製品にもかかわらず、完形を示すものはまれで、いづれの遺跡でも欠損された部分のみの検出事例が多い。これは土偶本来の秘める、製作以前からの目的によるものなのかも知れない。例えば脚部のみの場合は、足に何等かの故障を生じた人が、一旦完形の土偶をつくった後、自身の身代りとして、患部である脚部を、意識的に欠落させ全治を願う等の、呪術が行われたものかも知れない。

A10号住居址より欠損品ではあるが、土鈴が1点検出された。完形品ではないので、全体をうかがい知ることはできないが、縄文中期における呪術及至は祭祀に深いかかわり合いをもつものであろう。松本周辺地区における類例としては、塩尻市焼町、塩尻市中島、東筑摩郡波田町麻神、南安曇郡梓川村荒海渡の各遺跡より、各1例づつ4例を数えるが、いづれも縄文中期後半に所属する事実は、この期における精神文化の変化を想わせる。

6号住居址内より1点、石棒の欠損品が出土している。集石内よりの出土であるが、集石の在り方は整然さを欠いており、然も壁の深い竪穴内の南部辺に、その堆積の厚さ約50㎝を示し、石棒はその上部に立たった状態であったが、集石そのものは人工にしても、意識的な構築ではなかったところから、それ自体は即祭祀とはみられない状態であった。いづれにしても本址及び周辺の遺構内に、石棒を伴なった施設があったことは事実の様である。

石器では、石鏃、打製石斧、磨製石斧、凹石、石錐等々得られたが、発掘に依って得られた石鏃が、他遺跡に比し意外に多かった。これは広大な山地を背後にひかえての、狩猟が盛んであったことを想像させる。又、その殆んどが黒曜石製であって、チャートや硅岩質製のものがみられなかった点は、用材と交易の面で注意される。大形の石鏃が1点、8－15グリット（ロームマウンド）より出土した。他遺跡にはあまり出土例をみないが、狩猟上、特に必要あってのことか、あるいは武器としての表象的な性格を主張したものなのかわからない。打製石斧、磨製石斧は総じて小形づくりであり、凹石、石錐と共に出土量及び形態は一般的で、他遺跡と特に差異を認めない。石錘・土錘は本遺跡では全く検出されず、その立地条件からいっても、およそ漁撈には無縁な場所ではなかったかと想像せしめる。

いわゆる雨堀の溝の北側に、今回発掘調査されたB地区からは、遺構として竪穴住居址が2箇所に検出される。両者は近接しており、縄文中期初頭から前葉に所属する土器類を内包し、いづれも小形円形プランを示すものであった。内部施設の炉も、B1号住居址のものは明瞭でなく、B2号住居址の石囲炉も、その内径が17×22㎝という申し訳程度の炉であり、前期的な形態を残すものだった。B地区全般からは、微量の土器片や黒曜石フレイクなどが得られた。

雨堀遺跡の発掘調査は、盛夏酷暑の中で連日行われた。松本と塩尻の両市境である内田地区の山腹という、参加するには地理的にやや条件の悪い場所であったが、ここに無事発掘調査を遂行し、所期の目的を達成して、上記の如く数々の成果をおさめることができた。これも一重にこの調査に

対し、終始、現場へたたれた市教委の関係者、調査員をはじめ、多勢の作業協力者の賜であり、深甚なる謝意を各位に表する次第である。

（大久保知巳）

参考文献

藤森栄一『井戸尻』中央公論美術出版　1965

小池正美他「北丘B遺跡」『長野県中央道報告書（伊那市西春近）』1972

武藤雄六他『曽利』富士見町教委　1978

白石浩之「加曽利E式土器の変遷」考古学研究第25巻1号　1978

中島豊晴他『荒海渡遺跡発掘調査報告書』梓川村教委　1978

長崎元広他『中部高地縄文土器集成』第1集　1979

小林康男他『小段遺跡』塩尻市教委　1979

小林康男他『中島遺跡』塩尻市教委　1980

神奈川考古同人会他「土器資料集成図集」神奈川考古第10号　1980

第3表　雨堀遺跡出土石器一覧表

（単位　cm・g）

A 1号住居址

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
1	石鏃	無、凹(鋭、普)、直、鋭、片脚欠	2.5	(1.2)	0.4	(0.53)	黒曜石	黒色土層より
2	〃	無、凹(円、浅)、突、鈍、完	1.8	1.1	0.4	0.41	〃	
3	〃	無、凹－、直、普、両脚欠	(2.3)	(1.5)	0.5	(1.25)	〃	
4	石錐	棒状、片面、完	2.1	1.0	0.4	0.90	〃	床面
5	横刃型石器	刃部外湾、片面、完	4.0	7.8	0.8	19.62	緑色凝灰岩	
6	打製石斧	撥、円刃、完	11.2	4.8	1.4	85.0	粘板岩	
7	〃	分銅、直刃、完	9.3	5.7	1.5	126.0	〃	
8	凹石	2面、敲	11.4	8.0	3.8	647	砂岩	凹浅い
9	〃	2面、敲	16.4	6.4	3.2	468	〃	凹浅い
10	〃	2面、敲	15.8	5.2	3.0	308	粘板岩	凹浅い
11	〃	2面、敲	14.3	7.6	2.5	372	砂岩	両面浅い敲打

A 2号住居址

1	石鏃	無、凹(円、浅)、外湾、鋭、完	1.8	1.5	0.3	0.72	黒曜石	覆土
2	〃	無、凹(鈍、浅)、片側内湾、普、完	2.3	1.8	0.5	1.15	〃	
3	〃	無、凹(鋭、普)、直、普、片脚欠	2.5	(1.6)	0.3	(0.47)	〃	
4	〃	無、凹(鈍、深)、直、普、完	2.8	1.5	0.3	0.65	〃	板状の黒曜石を剥離している
5	〃	無、凹(円、普)、直、鈍、完	2.2	1.5	0.4	0.98	〃	
6	〃	無、円基、外湾、鈍、完	2.5	1.8	0.4	1.86	〃	
7	使用痕ある剥片	剥片、外湾、刃こぼれ、完	3.9	1.5	0.3	2.68	〃	
8	〃	剥片、外湾、刃つぶれ、完	3.0	1.5	0.4	1.35	〃	
9	スクレイパー	内湾、外湾、片面加工、完	2.6	3.7	0.7	4.35	〃	
10	〃	外湾、半欠	(3.0)	(3.8)	1.0	(12.59)	〃	覆土
11	打製石斧	撥、－、下欠	(7.6)	(4.6)	(1.4)	(59.05)	粘板岩	覆土
12	〃	撥、直刃、上欠	(6.0)	5.4	(1.8)	(71.25)	〃	
13	〃	短冊、偏刃、上欠	(7.4)	5.4	0.7	(48.44)	〃	
14	〃	撥、円刃、上端欠	(9.6)	5.4	1.2	(72.91)	砂質頁岩	
15	〃	撥、直刃、完	15.4	6.8	1.6	230	泥岩	
16	凹石	2面、敲	(13.4)	4.8	3.6	(320)	砂岩	凹一面は浅い
17	磨製石斧	両刃、完	7.6	2.4	1.0	29.42	緑泥岩	

A 3 号住居址

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
1	石鏃	無、凹(鋭普、外湾、普、完	1.8	1.1	0.3	0.26	黒曜石	
2	〃	無、凹(鈍普、外湾、普、完	2.1	1.6	0.4	0.85	〃	
3	〃	無、凹(円普、外湾、一、先端欠	(2.0)	1.8	0.4	(0.84)	〃	
4	〃	無、凹(円浅、片側外湾、鈍、完	2.1	1.9	0.5	1.51	〃	
5	〃	無、凹(鋭普、外湾、鋭、片脚欠	2.2	(1.7)	0.4	(1.05)	チャート	
6	〃	無、凹(円普、(片内片外湾、鋭、完	2.4	1.7	0.4	0.78	黒曜石	
7	〃	無、凹(鈍深、外湾、一、先端欠	(2.4)	1.7	0.4	(0.71)	〃	
8	〃	無、凹(鋭普、直、一、片脚先端欠	(2.3)	(1.5)	0.5	(0.62)	〃	
9	〃	一、一、外湾、普、下半一部欠	(2.8)	(1.7)	0.5	(1.40)	〃	
10	〃	無、凹(鋭浅、直、鋭、片脚欠	(2.5)	(1.7)	0.4	(0.70)	〃	
11	〃	一、一、直?、平ら、下半部欠	(1.5)	(2.0)	(0.5)	(1.14)	〃	鉄分を帯びた黒曜石でポイント片とも思われる
12	〃	一、一、片側突出、鈍、下半部欠	(2.1)	(1.9)	0.4	(1.23)	チャート	
13	石錐	棒状、両面、完	3.8	1.1	0.4	1.92	黒曜石	
14	小型石匙	横、直、完	2.4	3.8	0.7	3.39	〃	
15	横刃型石器	刃部直、両面、完	5.0	7.4	1.2	43.96	泥質頁岩	
16	〃	刃部外湾、両面加工、完	4.2	8.2	1.1	44.3	粘板岩	
17	〃	刃部直、両面、一部欠	(8.0)	4.4	0.8	(33.9)	泥質頁岩	黒褐色土
18	大型石匙	縦、外湾、完	9.0	3.9	0.8	134.1	〃	
19	打製石斧	短冊、一、下欠	(8.2)	(4.4)	(1.4)	(51.55)	粘板岩	集石群中
20	〃	撥、偏刃、完	10.8	5.2	2.6	138.89	砂質頁岩	
21	〃	撥、円刃、完	8.6	4.8	1.5	72.41	泥質頁岩	
22	〃	短冊、円刃、完	10.0	4.4	1.4	73.97	砂質粘板岩	
23	〃	撥、円刃、完	9.4	5.6	1.4	44.32	砂質頁岩	
24	凹石	2面、敷	(12.8)	5.5	3.4	(288)	粘板岩	凹一面は浅い
25	〃	2面	(11.8)	9.7	6.2	(788)	砂岩	覆土
26	石皿	大半欠	(6.6)	(8.0)	(6.7)	(284)	安山岩	炉内石

A 4 号住居址

1	石鏃	無、凹(円浅、片側外湾、普、片脚欠	(2.3)	1.2	0.4	(0.64)	黒曜石	
2	〃	一、一、外湾、鈍、下半欠	(1.7)	(1.7)	0.3	(0.99)	〃	
3	〃	一、片側内湾、普、下半欠	(2.0)	(1.4)	0.3	(0.46)	〃	

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
4	石鏃	無、凹(鈍、普)、外湾(?)、一、上欠半	(1.2)	1.4	0.2	(0.33)	黒曜石	
5	〃	無、平基、外湾、丸、完	3.0	2.8	0.6	0.82	〃	
6	〃	無、凹(鈍、普)、直、普、完	7.6	5.6	0.8	2.57	〃	
7	〃	無、平、内湾、一、先端片脚欠	(3.0)	(2.1)	0.5	(2.41)	〃	
8	石錐	棒状、両面、完	2.8	1.1	0.4	1.14	〃	
9	〃	棒状、片面、完	4.8	1.0	0.4	1.95	〃	
10	使用痕ある剥片	内湾、直、刃こぼれ、完	4.2	1.8	0.5	4.49	〃	
11	〃	内湾、刃こぼれ、完	15.3	2.1	0.5	4.74	〃	
12	横刃型石器	刃部直(?)、両面、半欠	(4.0)	(4.0)	(0.6)	(15.08)	粘板岩	
13	〃	刃部外湾、片面、完	5.4	7.2	1.5	45.3	砂質頁岩	
14	大型石匙	縦型、直、完	5.7	3.6	0.5	14.0	粘板岩	
15	横刃型石器	刃部直、両面、完	6.3	8.7	1.0	85.0	砂質頁岩	抉りあり
16	〃	刃部外湾、両面、半欠	(3.8)	(3.8)	(0.7)	(14.97)	頁岩	
17	打製石斧	短冊、一、下半欠	(6.0)	(3.8)	(1.4)	(39.55)	砂質頁岩	
18	〃	短冊、偏刃、完	9.6	4.0	1.8	86.2	頁岩	
19	〃	撥、円刃、完	11.8	5.6	1.8	122.15	粘板岩	
20	凹石	2面、磨	10.9	9.0	4.6	620	安山岩	
21	すり石	2面、磨面、下欠	(12.7)	(4.6)	(3.2)	(355)	砂岩	凹浅い
22	〃	2面、敲、磨	(10.7)	8.0	3.6	(540)	〃	
23	磨製石斧	定角 片刃、完	4.3	2.1	0.6	10.25	蛇紋岩	
24	〃	定角、下欠	(5.5)	(4.6)	(2.3)	(86.2)	〃	
25	〃	定角、刃部欠	(6.0)	(3.0)	0.8	(29.7)	〃	

A5、6号住居址

1	石鏃	無、凹(鈍、浅)、突出、鈍、完	2.3	1.7	0.4	1.56	黒曜石	床直
2	〃	無、凹(鋭、浅)、外湾、鋭、完	2.4	1.2	0.3	0.86	チャート	覆土
3	〃	無、凹(丸、普)、直、鈍、完	2.2	1.7	0.6	1.32	黒曜石	覆土
4	〃	無、凹(鈍、普)、突出、普、完	2.2	1.4	0.4	0.70	〃	
5	〃	無、凹(鋭、深)、外湾、鈍、片脚欠	(2.7)	(1.7)	0.4	(1.12)	〃	
6	〃	無、平基、直、鋭、下半一部欠	(2.2)	(1.6)	0.6	(1.32)	〃	床上
7	石錐	有、片面、完	4.2	1.2	0.5	3.12	〃	
8	〃	棒状、両面、完	4.3	1.6	0.3	3.17	〃	

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
9	打製石斧	撥、円刃、完	9.0	4.2	1.6	92.24	砂質頁岩	
10	〃	分銅、偏刃、完	11.3	3.6	1.5	86.4	泥質頁岩	床直上
11	大型石匙	縦、外湾、完	12.6	6.1	1.3	130.2	砂質頁岩	
12	打製石斧	撥、偏刃、完	12.1	4.1	2.1	118.18	〃	
13	〃	撥、円刃、完	10.5	4.3	1.9	118.28	粘板岩	
14	〃	短冊、直刃、完	9.7	4.0	1.6	81.71	〃	覆土
15	〃	撥、円刃、完	9.0	4.4	1.4	87.7	砂質頁岩	
16	〃	短冊、円刃、完	8.8	4.2	1.2	78.6	泥質頁岩	
17	〃	短冊、円刃、完	9.1	4.0	1.0	63.42	緑色凝灰岩	
18	〃	撥、直刃、完	8.5	4.6	1.2	48.28	泥質頁岩	覆土
19	〃	分銅、円刃、完	10.0	5.5	1.4	117.87	〃	床面
20	〃	短冊、偏刃、完	10.2	4.1	1.8	84.3	〃	
21	〃	ー、直刃、上部欠	(4.5)	6.1	1.4	(63.3)	砂質頁岩	
22	〃	撥、ー、上下欠	(10.6)	(5.8)	(3.6)	(28.65)	頁岩	黒色土
23	凹石	2面、敲	(9.0)	3.4	1.6	(107)	砂岩	凹浅い
24	石棒	上下欠	(23.1)	(12.6)	(11.5)	(5000)	花崗岩	

A 7号住居址

1	石鏃	無、凹(普浅)、突、普、完	1.1	1.2	0.2	0.23	黒曜石	
2	〃	無、凹(鈍普)、外湾、平、完	2.2	1.4	0.4	0.97	〃	側辺鋸歯状
3	〃	無、凹(円普)、外湾、鈍、片脚欠	2.7	(1.8)	0.5	(1.58)	〃	
4	〃	無、凹(円普)、突、円い、片脚欠	2.8	(1.6)	(0.4)	(1.15)	チャート	
5	〃	無、凹(円普)、外湾、円い、完	2.2	1.5	0.4	1.29	黒曜石	
6	〃	無、凹(鈍浅)、直、ー、先端欠	(2.5)	1.9	0.3	(1.13)	〃	
7	大型石匙	横型、直、完	5.2	5.2	1.0	19.9	砂質頁岩	
8	打製石斧	短冊、円刃、完	9.2	3.8	1.8	90.08	泥質頁岩	7住上
9	〃	撥、円刃、完	8.8	4.6	1.4	74.72	〃	7住上
10	〃	撥、円刃、完	11.4	5.0	2.0	132.18	砂質粘板岩	7住上
11	〃	短冊(?)、ー、下半欠	(6.3)	(3.7)	(0.9)	(44.11)	粘板岩	覆土
12	〃	撥、ー、下欠	(9.0)	4.8	1.4	(65.38)	〃	
13	石皿	約½欠	(38.2)	(19.0)	(11.0)	(9300)	安山岩	たてに半分

A 8号住居址

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
1	石鏃	無、凹一、内湾、鋭、両脚欠	(1.8)	(1.0)	0.3	(0.39)	黒曜石	
2	〃	無、凹(鈍深、外湾、普、片脚欠	2.3	(1.4)	0.3	(0.69)	〃	
3	〃	無、凹(鈍普、外湾、普、完	2.0	1.2	0.4	0.55	〃	
4	〃	無、凹(円普、内湾、鋭、完	2.6	1.5	0.5	1.08	〃	
5	〃	無、凹(鋭普、外湾、鈍、完	1.6	1.5	0.3	0.49	チャート	
6	〃	無、凹(鋭浅、外湾、鈍、完	1.8	1.6	0.3	0.74	黒曜石	
7	〃	無、凹(鋭浅、外湾、普、片脚欠	(2.3)	(1.4)	0.5	(1.06)	〃	
8	〃	無、凹(鈍浅、直、普、完	2.1	1.6	0.5	1.19		
9	〃	無、凹(円普、外湾、鈍、片脚欠	2.2	(1.8)	0.3	(0.91)	黒曜石	
10	〃	無、一、直、鈍、下半部欠	(2.3)	(1.8)	(0.9)	(2.05)	〃	
11	〃	無、凹(鈍浅、内湾、鈍、完	2.3	2.0	0.6	2.06	〃	
12	〃	無、凹(円深、外湾、普、片側辺欠	(4.0)	(1.4)	0.4	(2.64)	〃	
13	石錐	有、両面、完	2.7	1.3	0.3	1.00	〃	
14	スクレイパー	直、両面加工、欠損	(5.4)	(3.0)	(1.0)	(1.81)	〃	
15	小型石匙	横、直、完	5.2	7.0	5.2	29.5	チャート	
16	〃	斜、直、完	5.4	7.6	5.4	33.09	泥質頁岩	
17	大型石匙	横(?)、直、つまみ部欠	6.0	9.4	5.8	92.81	硅質細粒砂岩	
18	〃	横、外湾、完	8.8	8.4	8.8	113.3	泥質頁岩	
19	スクレイパー	内湾、片面、完	4.2	5.4	4.6	28.4	チャート	
20	〃	直、片面、完	3.0	4.8	1.2	15.50	〃	
21	石匙	斜(?)、刃部欠	(4.2)	(4.2)	(1.2)	(9.3)	砂質頁岩	
22	横刃型石器	刃部直、両面、完	5.6	11.2	1.2	94.1	〃	
23	〃	刃部内湾、両面、完	11.8	3.8	0.8	65.3	泥質頁岩	
24	〃	刃部外湾、両面、両側欠	(7.6)	6.2	0.8	(60.67)	〃	
25	〃	刃部(外湾内湾、両面、完	8.8	3.6	1.2	28.82	〃	
26	打製石斧	撥、円刃、完	12.0	5.4	1.4	121.91	〃	
27	〃	分銅、直刃、完	10.0	4.8	1.8	108.8	〃	
28	〃	撥、直刃、完	10.2	4.6	1.2	50.49	〃	
29	〃	分銅、偏刃、完	9.4	5.0	1.4	74.18	〃	
30	〃	胴張、直刃、上欠、$\frac{1}{2}$剥落	(9.6)	(5.6)	(0.8)	(56.93)	〃	

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
31	打製石斧	撥?)、円刃、上欠	(9.0)	5.2	1.8	(131.4)	砂質頁岩	
32	〃	撥、円刃、完	14.2	5.2	2.6	224.6	粘板岩	
33	〃	撥、偏刃、完	12.0	5.4	1.6	154.63	泥質頁岩	
34	〃	短冊、円刃、完	12.1	4.4	1.4	102.8	粘板岩	
35	〃	撥、円刃、完	8.2	4.2	1.0	51.7	〃	
36	〃	撥、偏刃、完	12.1	4.2	1.4	88.7	〃	
37	〃	撥、直刃、完	12.8	8.0	2.6	320	泥質頁岩	
38	横刃型石器	刃部直、完	10.6	6.2	2.4	119.2	〃	
39	打製石斧	撥、偏刃、完	9.8	5.2	1.8	137.7	〃	
40	〃	胴張、偏刃、完	9.0	5.6	1.4	77.6	粘板岩	
41	〃	撥？ ー、下半欠	(7.6)	(4.0)	(1.0)	(40.6)	〃	
42	横刃型石器	刃部直、両辺、1/2欠	(6.6)	(6.6)	(0.8)	(49.67)	〃	
43	打製石斧	分銅、偏刃、完	9.6	4.8	1.6	69.6	泥質頁岩	
44	〃	撥、ー、下半欠	(9.6)	(5.8)	(2.4)	(136.5)	砂岩	
45	〃	撥、偏刃、完	9.4	4.2	1.2	55.5	泥質頁岩	
46	〃	撥、ー、下半欠	(8.1)	(5.0)	(1.4)	(91.5)	〃	
47	〃	撥、円刃、上欠	(9.6)	5.8	1.6	(130.4)	粘板岩	
48	〃	ー、ー、下半欠	(6.6)	(5.0)	(1.4)	(75.7)	〃	
49	〃	胴張、円刃、上半欠	(7.0)	(5.2)	(1.4)	(68.7)	泥板岩	磨耗
50	〃	短冊、偏刃、完	9.2	4.2	1.2	58.2	粘板岩	
51	その他の石器	両端に研磨痕	11.0	2.8	1.4	80.78	〃	
52	凹石	2面、敲、磨	(11.2)	(6.6)	(1.8)	(320)	砂岩	覆土
53	〃	2面、敲、磨	10.8	7.6	4.4	495	礫岩	覆土
54	〃	2面	14.4	5.6	4.2	507	砂岩	
55	磨石	1面	8.8	7.6	6.6	512	安山岩	
56	凹石	2面、敲	8.8	5.6	3.6	237	〃	
57	〃	石ケン状、2面、敲、磨	12.2	(7.8)	3.2	(508)	砂岩	凹浅い
58	磨製石斧	定角、刃部欠	(9.2)	(5.0)	(3.6)	(165.5)	蛇紋岩	再利用？
59	〃	定角、大半欠	(3.8)	(4.8)	(0.6)	(28.25)	緑色凝灰岩	
60	〃	定角、大半欠	(3.2)	(4.0)	(1.4)	(23.23)	〃	

A 9号住居址

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
1	石鏃	無、凹〔鋭、普、外湾、普通、完	2.5	1.7	0.3	0.75	黒曜石	
2	〃	無、凹〔円、普、外湾、円い、完	2.0	1.5	0.6	1.42	〃	稜線不鮮明
3	石錐	棒状、両面、完	3.8	1.1	0.3	1.17	〃	
4	打製石斧	肩張、直刃、完	8.0	4.8	1.0	58.05	粘板岩	表土－30 cm
5	〃	短冊、－、下半欠	(8.2)	(4.4)	(2.0)	(96.7)	砂岩	
6	〃	短冊、偏刃、完	10.8	3.8	1.4	72.7	粘板岩	覆土
7	〃	短冊、直刃、完	8.0	5.4	1.2	52.54	砂質頁岩	
8	〃	撥、円刃、上欠	(11.0)	7.6	2.4	(242.27)	泥質頁岩	
9	〃	撥(?)、－、下半欠	(12.0)	(6.0)	(1.0)	(26.88)	〃	
10	〃	短冊、円刃、完	9.2	3.8	1.4	50.43	〃	
11	横刃型石器	外湾	9.6	4.8	1.2	67.4	緑泥片岩	未製品
12	凹石	2面	16.6	3.8	3.8	555	砂岩	凹浅い
13	〃	2面、敲	11.2	(8.8)	4.2	(498)	〃	
14	〃	2面、半欠	(18.0)	7.0	(3.8)	(417)	砂岩	
15	〃	2面、敲、磨	11.0	9.0	4.2	583	砂岩	凹浅い
16	磨製石斧	定角、両刃	7.6	2.8	1.0	36.5	緑色片岩	
17	〃	定角、両刃、上半欠	(11.0)	(5.8)	(2.0)	(95.85)	流紋岩	覆土

A 10号住居址

1	石鏃	無、凹〔鈍、浅、片側突、普、完	2.3	1.5	0.5	0.97	黒曜石	
2	〃	無、平基、内湾、普、完	1.4	1.2	0.4	0.46	〃	
3	〃	無、円基、－、－、上半部欠	(3.0)	2.1	0.4	(1.93)	〃	覆土
4	石錐	棒状、両面、完	3.3	0.8	0.4	0.96	〃	
5	スクレイパー	内湾、外湾、片面、両面、完	8.3	1.7	1.2	14.63	〃	
6	〃	外湾、片面加工、一部欠	(4.6)	4.0	(0.6)	(10.05)	チャート	鋸歯状刃部
7	横刃型石器	刃部直、片面加工、完	4.8	5.0	0.6	10.45	泥質頁岩	
8	〃	刃部外湾、両面、完	3.0	8.6	1.0	33.17	〃	片面は一部研磨
9	〃	刃部、両面、一部欠	(5.2)	(8.8)	0.8	(40.34)	〃	
10	大型石匙	横、外湾、完	4.8	8.2	1.0	32.3	泥質砂岩	
11	〃	斜、直(?)、下半欠	(6.2)	(7.7)	1.0	(89.44)	泥質頁岩	覆土
12	石匙	縦、外湾、完	8.0	4.2	0.8	37.85	〃	覆土

A10号住居址

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
13	打製石斧	撥、円刃、完	10.6	4.8	1.2	93.12	緑色凝灰石	覆土
14	〃	短冊、偏刃、完	13.2	4.0	1.6	124.15	砂質粘板岩	
15	〃	胴張、偏刃、完	14.0	4.4	1.6	110.89	粘板岩	
16	〃	短冊、円刃、完	13.1	4.4	2.4	153.77	泥質頁岩	
17	〃	撥、偏刃、上半欠	(8.2)	4.6	(1.4)	(71.3)	〃	
18	〃	胴張、偏刃、完	11.2	7.0	1.6	103.79	泥板岩	
19	敲打器	片端	16.2	8.6	2.4	465	硬砂岩	
20	凹石	2面、敲	11.6	8.6	5.2	(775)	砂岩	凹浅い

A11号住居址

1	石鏃	有、凹(鋭浅)、片側突出、鋭、完	2.0	1.4	0.3	0.51	黒曜石	
2	打製石斧	短冊、直刃、上欠	(9.0)	4.0	(2.0)	(90.0)	泥質頁岩	
3	〃	撥、円刃、完	10.6	4.0	1.0	48.42	粘板岩	炉外
4	大型石匙	縦、直、完	10.6	4.8	1.0	66.65	泥質頁岩	覆土
5	打製石斧	短冊？ ー、下半欠	(12.0)	(3.6)	(0.8)	(26.90)	粘板岩	炉石
6	〃	撥、偏刃、完	12.6	4.2	1.8	142.61	緑色凝灰岩	
7	〃	〃、円刃、〃	13.4	3.6	1.8	93.6	粘板岩	
8	敲打器	片端	(18.0)	(6.4)	(3.4)	(362)	砂岩	
9	凹石	石ケン状、2面、敲、磨	8.6	6.8	3.4	268	安山岩	
10	〃	磨、半欠、	(10.0)	(7.2)	(3.6)	(228)	〃	覆土
11	磨製石斧	定角、下欠	(8.0)	(3.2)	1.0	(34.89)	蛇紋岩	

A12号住居址

1	スクレイパー	外湾、片面加工、完	4.2	3.9	1.3	19.9	チャート	
2	打製石斧	ー、円刃、上半欠	(9.0)	(4.6)	(1.0)	(31.94)	粘板岩	覆土
3	〃	撥、円刃、上欠	(9.0)	4.4	(1.6)	(83.1)	泥質頁岩	
4	〃	撥、円刃、完	12.6	5.4	1.6	139.36	粘板岩	覆土
5	凹石	2面、下欠	(16.0)	(6.0)	(3.2)	(400)	砂岩	凹浅い

A13号住居址

1	石鏃	無、凹(円普)、外湾、普通、完	2.0	1.6	0.3	0.60	黒曜石	
2	〃	無、凹(鋭浅)、外湾、鈍、完	1.6	2.0	0.4	1.33	〃	
3	〃	無、凹(円普)、外湾、鈍、完	2.4	1.7	0.4	1.26	チャート	再加工あり

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
4	石鏃	無、円基、直、円い、完	1.9	1.4	0.2	0.81	黒曜石	覆土
5	石錐	有、片面、完	2.7	1.4	0.3	1.92	〃	
6	横刃型石器	刃部直、両面、完	4.6	9.6	1.2	79.11	粘板岩	
7	〃	刃部外湾、両面、完	5.4	10.4	1.6	106.61	泥質頁岩	覆土
8	スクレイパー	刃部内湾、両面、完	4.4	6.6	1.1	48.6	チャート	
9	〃	直刃、片面加工、完	4.2	7.4	1.3	49.1	砂質頁岩	
10	横刃型石器	刃部直、両面、完	4.5	7.0	0.8	28.6	粘板岩	
11	打製石斧	分銅、円刃、完	9.2	4.6	2.0	90.90	砂質頁岩	
12	〃	撥、偏刃、完	9.6	4.2	1.0	43.63	泥質頁岩	
13	〃	分銅？ 一、約$\frac{1}{2}$欠	(8.4)	(2.4)	(1.0)	(31.35)	粘板岩	
14	〃	撥、一、刃部欠	(9.3)	(4.6)	(1.8)	(79.2)	泥質頁岩	覆土
15	〃	撥、偏刃、完	12.6	5.4	1.8	137.51	粘板岩	
16	〃	短冊、一、下欠	(8.6)	(4.0)	(1.2)	(56.2)	泥質頁岩	
17	凹石	2面	13.9	6.2	3.0	400	砂質頁岩	
18	磨石	1面	12.3	6.3	4.0	663	砂岩	
19	凹石	凹4面、磨	9.7	8.1	3.6	400	〃	覆土
20	〃	石ケン状、2面、敲、磨	10.6	7.3	4.6	482	安山岩	
21	〃	石ケン状、2面、敲、磨	9.9	8.2	2.8	419	砂岩	
22	磨製石斧	定角、両刃	4.2	1.6	1.8	10.6	蛇文岩	

A14号住居址

1	石鏃	無、凹(丸普、突、円、完	3.3	2.0	0.9	4.29	黒曜石	側辺鋸歯状
2	〃	無、凹(鈍浅、片側突、平、完	2.5	1.9	0.7	2.22	〃	
3	〃	無、凹(鈍浅、直、普、完	1.8	1.9	0.4	0.79	〃	
4	〃	無、凹(鋭普、直、普、完	1.8	1.4	0.2	0.36	〃	
5	〃	無、凹(鈍普、直、普、完	1.8	1.2	0.3	0.41	〃	
6	〃	無、凹(鈍浅、外湾、普、完	1.8	1.1	0.2	0.38	〃	
7	〃	無、凹(二、一、一、大半欠	(2.3)	(0.8)	(0.4)	(0.69)	〃	
8	〃	無、凹(鈍深、外湾？、一、片脚上半欠	(2.1)	(1.5)	0.4	(0.66)	〃	
9	使用痕ある剥片	内湾、刃こぼれ、完	4.4	1.9	0.5	4.02	〃	覆土
10	スクレイパー	内湾、片面加工	5.0	2.2	0.5	9.26	〃	覆土
11	石匙	斜、直、完	5.4	5.6	0.6	21.71	砂質頁岩	覆土

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
12	スクレーパー	刃部内湾、両面、完	3.2	5.4	1.0	16.0	チャート	覆土
13	横刃型石器	刃部外湾、両面、一部欠	(4.0)	6.6	0.6	(20.5)	泥質頁岩	地床炉内
14	〃	刃部直、片面、完	6.4	6.8	1.0	48.01	粘板岩	覆土
15	〃	刃部外湾、両面、完	9.6	3.4	1.0	27.07	泥質頁岩	
16	〃	刃部直、片面、完	9.4	4.5	1.2	94.53	〃	覆土
17	〃	刃部内湾、両面、完	9.4	5.8	1.0	48.91	〃	覆土
18	打製石斧	撥、直刃、上欠	(8.0)	8.1	2.1	(161.64)	粘板岩	覆土
19	〃	撥、偏刃、完	14.6	5.2	1.0	80.05	〃	
20	〃	分銅、偏刃、完	8.8	4.8	1.4	62.95	泥質頁岩	
21	大型石匙	斜、刃部欠	(7.6)	5.1	1.7	(59.0)	〃	
22	横刃型石器	刃部内湾、片面、完	8.8	7.1	0.8	55.68	粘板岩	
23	打製石斧	胴張、円刃、完	9.6	4.6	0.8	48.56	砂質頁岩	
24	〃	分銅、円刃、完	12.2	7.0	2.6	256.5	〃	
25	横刃型石器	内湾、片面	12.6	3.6	0.9	60.0	粘板岩	
26	〃	外湾、片面	7.6	4.6	0.5	18.9	泥質頁岩	覆土
27	打製石斧	撥、円刃、完	10.6	4.6	1.4	93.25	〃	
28	大型石匙	縦、直、つまみ欠	(12.2)	6.7	2.8	(255.98)	凝灰岩	
29	凹石	2面、敲、磨、半欠	(13.0)	7.4	3.0	(359)	砂岩	覆土
30	〃	2面、敲、半欠	(10.0)	4.9	2.6	(184)	〃	
31	〃	2面、敲	12.6	5.7	2.4	317	〃	覆土
32	〃	石ケン状、2面、敲、磨	11.0	7.0	3.8	465	〃	
33	磨石	2面	8.8	9.2	4.6	635	安山岩	

A15号住居址

1	石鏃	無、凹(鋭浅)、直、鋭、完	2.2	1.5	0.2	0.59	黒曜石	
2	〃	無、凹(鈍浅)、突、鈍、完	2.6	2.3	0.5	2.26	〃	
3	〃	無、凹(鋭普)、外湾、普通、片脚欠	(2.7)	1.5	0.6	(1.48)	〃	
4	打製石斧	分銅、偏刃、完	10.0	5.2	1.6	95.85	泥質頁岩	
5	〃	短冊、円刃、完	12.2	4.0	1.2	73.43	粘板岩	
6	〃	撥?、一、下半欠	(8.4)	(3.6)	(1.6)	(53.95)	泥質頁岩	
7	〃	一、一、下半欠	(5.6)	(5.8)	(1.8)	(73.55)	粘板岩	両側欠損
8	凹石	2面、敲	9.8	(7.2)	(5.0)	(560)	砂岩	凹浅い

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
9	凹石	石ケン状、4面、敲、磨	8.2	6.4	4.0	260	安山岩	
10	〃	2面、敲	14.8	6.8	3.6	680	泥質頁岩	凹浅い

A 16号住居址（土坑）

1	打製石斧	短冊、円刃、完	10.6	5.8	1.8	123.42	泥質頁岩（片岩）	
2	〃	撥、円刃、完	10.5	4.8	2.2	127.18	粘板岩	表採
3	〃	短冊？、円刃、上欠	(7.7)	4.4	1.2	(48.64)	緑色凝灰岩	
4	〃	短冊、円刃、上欠	(8.2)	4.0	1.4	(71.74)	泥質頁岩	
5	横刃型石器	刃部直、両面、完	9.2	4.2	4.0	36.47	粘板岩	上層
6	凹石	2面、敲	13.2	6.4	6.6	338	安山岩	上層

B 1.2号住居址

1	石鏃	無、凹（鈍深）突、鈍、完	1.5	1.3	0.3	0.35	黒曜石	
2	〃	無、平基、直、鋭、完	1.5	1.2	0.3	0.47	〃	
3	〃	無、凹（鋭浅）外湾、鈍、完	1.9	1.3	0.4	0.63	〃	覆土
4	〃	無、凹（円普）外湾、鈍、片脚欠	(2.2)	(1.6)	0.5	(2.51)	〃	
5	〃	無、凹（二）直、鈍、両脚欠	(2.0)	(1.3)	0.4	(0.72)	〃	
6	〃	無、凹（円深）直、一、先端片脚欠	3.1	(1.3)	0.3	(0.78)	〃	
7	〃	無、平基、片側、外湾、鈍、完	2.5	1.9	0.7	2.51	〃	
8	〃	無、円基、外湾、円い、完	2.7	1.8	0.5	2.50	〃	落込内
9	石錐	有、両面、完	2.7	1.1	0.4	1.23	〃	
10	〃	棒状、両面、完	3.1	1.0	0.5	1.35	〃	
11	使用痕ある剥片	直、刃こぼれ、完	4.4	1.5	0.9	6.48	〃	
12	横刃型石器	刃部直、両面、完	4.4	7.0	0.7	19.77	粘板岩	覆土
13	〃	刃部直、両面、完	6.8	6.6	0.7	25.08	砂岩	
14	〃	刃部外湾、片面、一部欠	(5.6)	(4.6)	(0.8)	(23.8)	粘板岩	覆土
15	打製石斧	短冊？ 一、下半欠	(8.6)	(4.2)	(1.8)	(50.30)	泥質頁岩	
16	〃	撥、円刃、完	12.0	5.0	1.1	121.75	〃	
17	〃	分銅、円刃、完	14.4	5.8	1.6	162.0	砂質頁岩	
18	〃	短冊、一、下半欠	(9.8)	(4.6)	1.6	(99.65)	泥岩	
19	〃	短冊、円刃、完	11.6	4.8	2.0	158.32	粘板岩	
20	〃	撥、一、下半欠	(9.6)	(4.2)	(1.6)	(65.98)	泥質頁岩	覆土
21	〃	分銅、円刃、完	10.0	4.4	1.8	90.37	〃	

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
22	凹石	1面、敲	10.5	7.4	5.8	738	安山岩	覆土
23	〃	2面、磨	11.2	6.8	4.0	481	〃	
24	磨製石斧	両刃	5.4	2.6	0.7	20.77	流紋岩	再加工
25	〃	定角、下半欠	(1.7)	(1.6)	(0.6)	(2.85)	〃	表採
26	〃	乳棒、完	1.2	4.6	3.0	269.34	不明	

配石址

1	石鏃	無、平基、片側内湾、完	3.0	2.3	0.9	4.38	黒曜石	
2	横刃型石器	刃部外湾、片面	4.3	3.6	0.5	36.13	泥質頁岩	
3	磨製石斧	定角、両刃、完	4.2	2.0	0.7	10.92	流紋岩	
4	磨石	片面	8.2	7.0	2.4	212.7	砂岩	
5	石皿	一部残	(30.0)	(15.0)	(5.1)	(179.5)	安山岩	

O地点

1	石鏃	無、凹〔鋭、普〕、外湾、普、片脚欠	(2.3)	(1.7)	0.4	(0.81)	黒曜石	
2	〃	無、円基、直、鈍、完	2.2	1.4	0.5	1.24	〃	
3	〃	無、凹〔鈍、普、片内、片外〕湾、普、完	3.1	2.0	0.5	2.00	〃	
4	大型石匙	斜、下半欠	(6.5)	(8.2)	(1.4)	(87.6)	粘板岩	
5	横刃型石器	刃部直、両面、完	8.2	7.6	2.2	158.4	砂岩	
6	〃	直刃、片面、半欠	(5.6)	(2.8)	(0.8)	(13.8)	泥質頁岩	
7	打製石斧	―、―、下半欠	(5.8)	(3.0)	1.2	(33.2)	〃	
8	横刃型石器	刃部内湾、両面、完	8.2	3.1	0.6	18.1	〃	
9	〃	刃部直、片面、半欠	(8.0)	(3.8)	(0.7)	(17.8)	〃	
10	〃	刃部外湾、両面、半欠	(6.4)	(3.8)	(0.9)	(32.7)	〃	
11	打製石斧	分銅、円刃、完	11.4	6.2	1.8	148.1	砂岩	
12	〃	撥、偏刃、完	6.8	3.5	0.8	21.4	泥質頁岩	
13	横刃型石器	外湾、片面、完	7.6	5.0	1.0	44.7	〃	覆土
14	凹石	3面、敲	9.2	(6.4)	(4.2)	(325)	砂岩	

表採

1	石鏃	無、凹〔鈍、普〕、外湾、鈍、完	2.6	2.0	0.6	2.45	黒曜石	
2	〃	無、凹〔鈍、普〕、外湾、普、片脚欠	(1.9)	1.3	0.3	(0.60)	〃	
3	〃	無、凹〔鋭、普〕、外湾、普、完	2.4	1.5	0.4	1.06	〃	
4	〃	無、凹〔鈍、深、片外湾、片突、普〕、完	2.1	1.5	0.3	0.70	〃	

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
5	石鏃	無、凹〔鈍普、外湾、普、完	2.2	1.1	0.3	0.94	黒曜石	
6	〃	無、凹〔鈍浅、直、鋭、片脚欠	(2.3)	(1.2)	0.3	(0.72)	〃	
7	〃	無、凹〔鈍深、直、円い、片脚欠	1.9	(1.5)	0.2	(0.27)	〃	
8	〃	無、凹〔鈍普、直、一、先端欠	(1.8)	1.3	0.3	(0.42)	〃	
9	〃	無、凹〔鈍普、直、一、先端片脚欠	(1.5)	(1.5)	0.3	(0.37)	チャート	上土
10	〃	無、一、外湾、鈍、下半部欠	(2.3)	(1.7)	(0.3)	(1.18)	黒曜石	上土
11	〃	無、平基、突、一、上半部欠	(3.0)	1.9	(0.5)	(2.20)	〃	
12	〃	一、一、直？、鋭、下半部欠	(2.2)	(1.4)	(0.4)	(0.39)	〃	
13	〃	無、凹〔円浅、外湾、円い、片脚欠	(2.1)	(1.6)	0.5	(1.50)	〃	
14	〃	無、凹〔一 直？、一、先端両脚欠	(2.0)	(1.3)	0.3	(0.91)	〃	
15	石錐	棒状、両面、完	3.1	0.9	0.6	1.76	〃	
16	〃	有、両面、完	2.4	0.9	0.3	0.94	〃	
17	〃	棒状、両面、完	2.2	0.7	0.3	0.72	〃	
18	〃	有、両面、完	2.4	1.3	0.3	1.38	〃	
19	スクレイパー	円刃、両面加工、完	2.5	2.3	1.0	5.66	チャート	ラウンドスクレーパー
20	使用痕ある剥片	外湾、刃こぼれ、完	5.7	1.4	0.6	4.52	黒曜石	上土
21	〃	内湾、刃つぶれ、完	4.1	2.5	0.5	5.21	〃	
22	〃	内湾、刃こぼれ、完	6.3	2.8	1.0	11.65	〃	
23	スクレイパー	刃部外湾、両面加工、完	(4.0)	(3.3)	1.0	(11.3)	頁岩	
24	横刃型石器	刃部直、両面、一部欠	(4.2)	(4.4)	(1.2)	(31.8)	緑泥片岩	
25	〃	刃部外湾、両面、完	10.8	6.2	1.6	101.1	泥質頁岩	
26	〃	刃部直、両面、完	8.1	4.2	1.2	354.6	〃	
27	〃	刃部直、両面、完	(9.4)	4.6	1.2	(71.6)	緑色凝灰岩	打斧？
28	敲打器	両端、敲	(13.0)	4.4	1.4	(90.3)	泥質頁岩	
29	打製石斧	短冊、円刃、完	8.8	2.4	2.4	81.3	砂岩	
30	横刃型石器	刃部直、両面、完	9.5	3.8	1.5	91.3	泥板岩	打斧？
31	打製石斧	短冊、偏刃、完	10.8	3.6	1.1	56.9	泥質片岩	磨耗
32	横刃型石器	刃部円、片面、完	9.6	4.8	1.7	106.4	緑色凝灰岩	
33	凹石	2面、敲	9.0	3.3	1.1	43.4	砂岩	
34	〃	2面	14.6	6.2	3.0	482	細粒砂岩	
35	〃	2面、敲、磨、半欠	(7.2)	(6.4)	(3.2)	(193)	砂岩	

遺物番号	器種	型式	長さ	巾	厚さ	重さ	石質	備考
36	凹石	2面、磨、半欠	(8.4)	(6.8)	(4.0)	(261)	安山岩	
37	磨製石斧	片面、上欠	(9.2)	(2.4)	(1.0)	(23.7)	緑泥片岩	

本表は「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　諏訪市その4」を参考とし、各器種の型式は次の順序で記した。

石　鏃一茎の有無、基部の形状〔逆刺の状態 抉りの深さ、側辺の形状、先端部の状態

石　錐一つまみ部の有無（無は棒状）、二次加工

スクレイパー一刃部形状、刃部加工

使用痕ある剥片一使用痕部の形状と状態

打製石斧一平面形状、刃部形状

横刃型石器一刃部形状、刃部加工

石　匙一つまみと刃部の関係、刃部形状

※　これらの中には打製石斧の分銅型に近いものもあるが、器厚をみて薄手のものは石匙として扱った。

凹　石一凹部をもつ全てをこれに含め、凹の見られる面数と他に敲打痕→敲、研磨痕→磨と記した。

敲打器一敲打痕の残る位置

磨　石一"すり"のみられる面数

磨製石斧一定角式石斧→定角、乳棒状石斧→乳棒とし、刃部の型態により片刃、両刃とした。

以上の分類に含まれないものを"その他の石器"として扱った。

付　松本市立明善中学校三年生感想文

雨堀を訪ねて

長野県松本市立明善中学校
三ノ一　岡　村　芳　生

九月五日、第六時間めに、ぼく達は、遺跡が見つかったという雨堀を訪ねた。

その遺跡付近はまわりにあまり家もなく、ずっと下は松本盆地が一望できるような、景色のいい場所だった。

そんな場所で発掘していた。

まず住居あとが、三つ四つあり、その中でも住居地が造られた時代は二〇〇年ほど、差があるものが偶然となりに合ったりして時代の流れを感じた。

まだまわりを探せばいっぱい住居あとが出てくるかもしれない。ここらに住んでいた人々は狩りをして生活していただろうが、動物がとれなくなると、また他の地に移動する。

しかし、何年かたつとまたここにちゃんと住む人がいる。

何となく不思議に思った。

きょうは、とてもためになり良かった。

雨堀遺跡を訪ねて

長野県松本市立明善中学校
春　日　隆　幸

僕の住んでいる内田。そこにも遺跡があったのか、と初めは驚いた。

現地へ行って土偶など見せていただいたが、四千年も前に本当にあのような美しい物を作っていたのかとこれまた驚いた。

言葉もしゃべれたかわからないような時代に、美術の表現力に富んでいるとは……。

まだまだ感心することがある。

いくら石器などを利用したといっても、よく狩猟生活を続けてこれたなということだ。矢を射っても、正確にとんでいったかわからないのに。古代の人々はなにか神秘的だ。そしてまた、その人たちの住居がすぐそばにある。なんともいえない喜びがこみ上げてくる。

僕も古代の人のように、精一杯生きよう。良好の道具がなくても生きれるそんな古代の人のように。

雨堀史跡を訪ねて

長野県松本市立明善中学校
小林直樹

円形に掘られた住居跡。破片と化した縄文土器、女の人を型取ったという土偶。そういった古代の遺物を目前にして、最初に感じたことは、

「彼ら（縄文時代の人々）はここで、どんなことを話し、何を考えどういう生活をしていたのだろうか」

ということだった。遠い昔、縄文人達が猪などの獣を狩った場所、火をたいて一家で楽しい一時をすごした場所、病気で死んだ仲間を葬った場所、そこに今、何百何千年の年月を経て自分が立っているのだ、と思うと、なんだかとても不思議な気持ちになった。

土器、土偶の破片も見せてもらったが、なかなかの芸術品であった。

これを機会に、縄文時代の文化等を振り返って勉強してみたいと思う。

雨堀遺跡を見学して

長野県松本市立明善中学校
三年一組　松田裕治

雨堀遺跡のほとりに立って感じたことは、自分も発掘してみたかったということだ。それは、縄文時代にそこに人が住んでいたということに時間の重みみたいなものを感じたからだ。縄文時代、今から四千年くらい以前の気の遠くなりそうな時代。その長い長い年月を経て、今、よみがえったのだ。何とすばらしいことだろう。それを目の前にすることができたのだ。そして、それを発掘することができたらどんなにすばらしいだろう。どんなに楽しいだろう。いつかやってみたい。また、土ぐうなど学校の教科書の復習だけにならず、どうして、今、こんなものがあるのだろうと不思議に思えたことも事実である。

近日、この遺跡は埋められるというのでとてもさびしく思う。

雨堀遺跡を訪ねて

長野県松本市立明善中学校
三ノ一　渡　辺　道　生

雨堀へ学活の時間に行き、初めて内田の高台は生活しやすかったことを知った。

住居の跡が、丸くなっていたのはきっと、大家族などで人数が多かったから、火を囲んで住むには丸形がよかったのだろう。当時の人々の話題は、どのようなことだったのだろう。今、ぼくの家で食事時の話題と言えばニュースとか学校のできごとだ。しかし、古代の人々は自分のきょう射止めた獲物の話や、やっと出来上がった器の話。なんといっても楽しみだったのは、おじいさんの話だったろう。

テレビやスーパーなどなくても生活していた彼らには、見習う所が多いと思う。今、獣を捕えて生活しろと言われても、どうやったらよいかわからない。やはり時代・時代にあった生活が一番であろう。そういう昔のことを知るのにためになった見学であった。

雨堀遺跡

長野県松本市立明善中学校
三ノ一　石　田　かおる

この平に立って　人は何を考えたろう
自分たちの生活のことだけだった？
未来のことは？
自分たちの子孫のことは？

あれから……
人は　狩猟生活をやめ
低地に住みつき
農耕を営み　機械ができた
あかりがつくようになって
夜も明るくなり
文明も進み　現在にいたっている

昔　住んでいた環境とは　大ちがいだね
でも―残っていますよ
生活の跡が…
住居の跡が…
不思議だね　本当に
何百年　何千年と　年月を隔てた今
私達の前に　姿を見せる。

雨堀遺跡を訪ねて

長野県松本市立明善中学校
三一三九　小・島　由美子

先生が「内田に遺跡がある」とおっしゃったとき「そんな、信じられない」と思った。内田といえばこの学校も内田にあるのだし、見に行きたいな、と思った。

六時間目に「雨堀遺跡」に行けることになった。内田の風景は、寿台と違ってとってもいい感じだった。四十分ほどもかかってやっと着いた所では住居跡が掘ってあって、「何これ？」と不思議に思った。そういう所を見学したことがなかったからだ。

説明を聞きながら疑問に思ったことは、どうやって元の形に掘れるのだろうか、ということだった。後で見せてもらった「土偶」、「かめ」など近くで見ることが出来、なんだかどきどきしてしまった。直接昔の人たちと触れあえたような気がした。

少し残念なことは、私も掘って土器などを見つけたかった、ということだ。

「雨堀遺跡」に立って

長野県松本市立明善中学校
尾　上　真由美

今、私は遠い昔の人達が住んだ家の跡にいる。今からずっと昔、今私が立っている所にだれか古代の人が立っているのかもしれないと思うとむねがわくわくした。

そうだ、もしかしたら遠い昔に、ここで、昔の人は、何かを作っているかもしれない、けんかをしているかもしれない。

もしかしたら、自分の先祖かもしれないと、考えると、とっても楽しいような感じだ。もしかするとこれから先の時代、つまり未来でも、この場所にだれか立っているかもしれない。でもその時は、建て物が立っているだろう。

昔の人達は、今この場所で、未来の時代の人が立っているかもなんて考えもしないだろう。でもなぜか、昔の人達の、住んでいた所に立つと、昔の人がよびかけてくるようだ。

雨堀遺跡に立って

長野県松本市立明善中学校
丸　山　美　雪

その、壊れた壺を見ていた私は、突然目眩を覚えた。

次の瞬間、肩を小突かれてはっと我に帰った。見ると、私の前には見た事もない人々がとても変わった服を着て立っているのだった。その中の一人の男の人が私にこう言った。

「これで八人目だ。皆、病気で死んだ。お前の家族はけがれているに違いない」

「待って!!　貴方達は、いったい誰なの？　私、けがれてなんかいないわ」立ち去ろうとする人々をふり返った。そして、私がそこで目にした物は―。少数のたて穴式住居が立ち並ぶ光景だった。私は驚きのあまり、声が出なかった。

私の声に気づいた人々は一斉にふり向いた。そして刺す様な視線を投げかけ口々に言った。

「お前はけがれているんだ！」

「けがれているんだ！」と。私は耳をおさえて座り込んだ。その時友達の声が聞こえた。顔を上げると、心配そうに私の顔をのぞき込んで、

「どうしたの？　気分悪い？」と聞いた。

「説明聞いていたら急に座り込むんだもの」

「なんでもない。大丈夫」私はそう言って立ち上がり、説明を聞き始めた。

しかし、私の耳にはまだ「お前はけがれているんだ！」という声が響いていた。

―フイクション―

雨堀遺跡を訪ねて

長野県松本市立明善中学校
三ノ一　吉池恵美子

九月五日。崖の湯口の雨堀遺跡を見学に行った。学校から、歩いて約三十分の所にあって、行きは、上りだったので、少しつかれた。遺跡を見て思った事は、まさか、実物の遺跡が、こんなに近くにあると思わなかったので驚いた。そして、住居あとを見ながら、いろいろ考えてみた。このころの生活といえば、主に狩猟をしていたと思うけれど、鉄砲も、やりもなかったあの時代どうやって、えものをつかまえたのか不思議に思ったし、また、土偶なども、とてもきれいで、あれと同じ物を作ってみたいとも思いましたが、むりだと思う。それから、病死者が出た家をこわした石。彼らに、そんな知恵があったのだろうか。

なんだか、わからないことばかりで、まさに、神秘といえると思う。

雨堀遺跡を見学して

長野県松本市立明善中学校
三一四七　吉江正代

学指の時間を利用して、内田方面の雨堀遺跡を見学してきた。その場所についたとたん、なんだ、こんな所にあったのか……。と思った。しかし、自分の住んでいるすぐ近くであり、歩いてでも行ける所に、この様な遺跡が残っているのを見ていると、うれしく思った。朝日新聞の写真にもあったのだが、女の人の土偶、昔の人が使っていた石器などが出てきている。今まで、昔の人（アウストラロピテクス人）などがいて、石器などを使っていた……などと言う話は、本当のこと言って信じられなかった。実際に、そこの場から出てきたもの……の様に、出てきた場所と物とを見たことがなかった。今日、雨堀を見学して、今までとは少し違った学習がいろいろな面でできたのではないだろうか。又、いつか、自分で石器を探してみたいと思う。

図　版

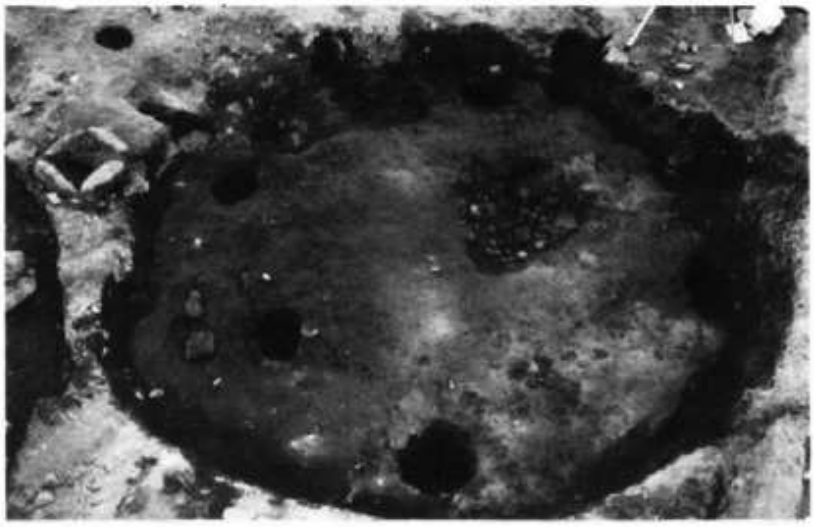
調査地遠景

調査地遠景

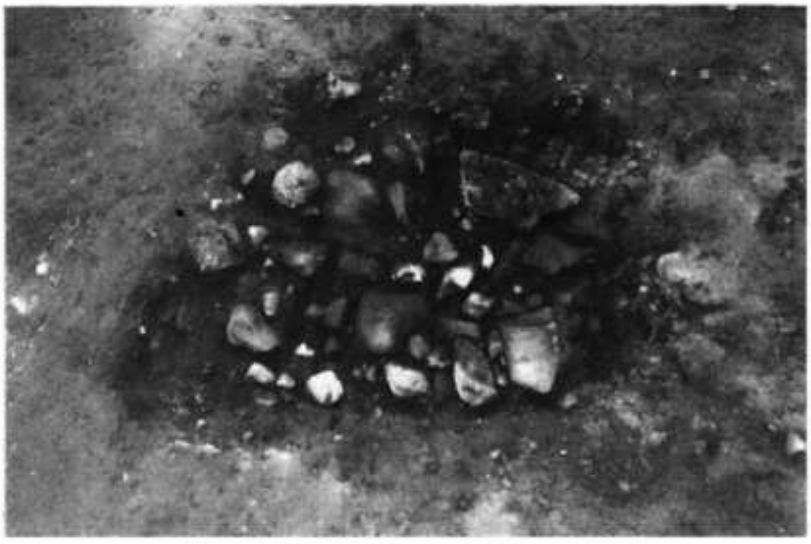
「雨　堀（あんぼり）」

図版1　調査地

A 1 号住居址炉址



A 2 号住居址



A 2 号住居址炉址

図版 2　A 1 ・ 2 号住居址

A 2 号住居址埋甕
（左）1　（右）2

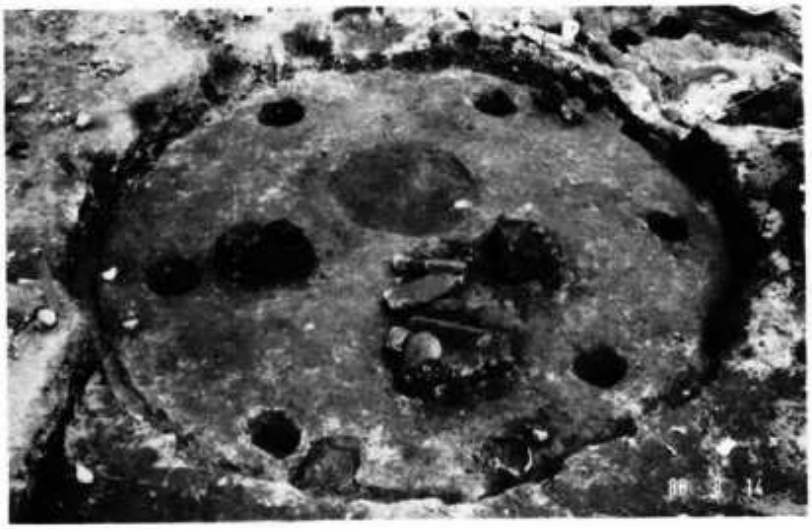
A 2 号住居址
遺物出土状態（4）

A 2 号住居址
遺物出土状態（3）

左から
A 2 号住居址
A 1 号住居址炉址
A 3 号住居址

図版 3　A 2 号住居址遺物出土状態

A 3 号住居址

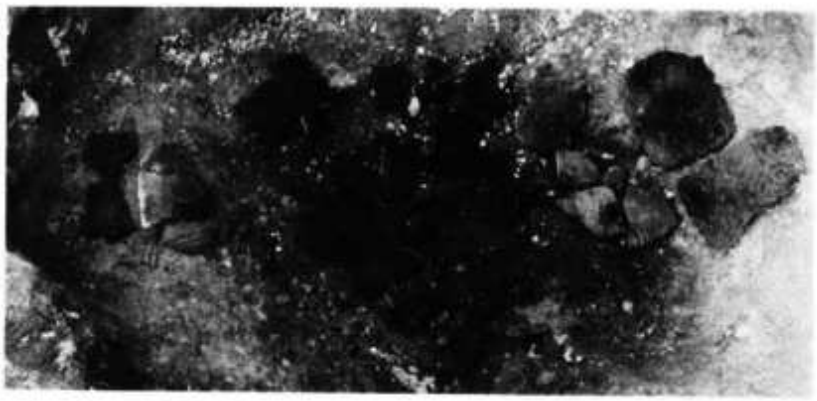


A 3 号住居址
土器・礫出土状態

A 3 号住居址炉址

図版 4　A 3 号住居址

A３号住居址炉址底面
（伏せてあるのは土器片）



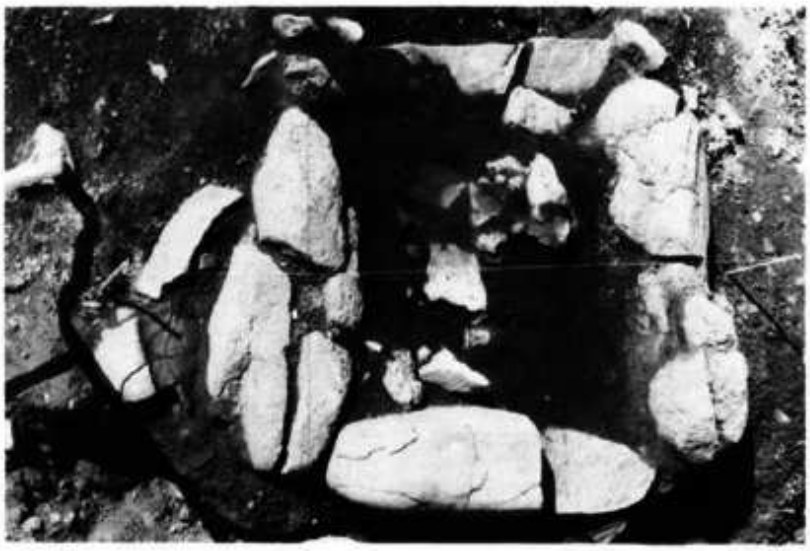
同　　上
（伏せてあった土器片を
表におこしたところ）

A３号住居址埋甕 (2)

A３号住居址埋甕 (1)

図版５　A３号住居址炉址・埋甕

A 4 号住居址
（中央炉址）

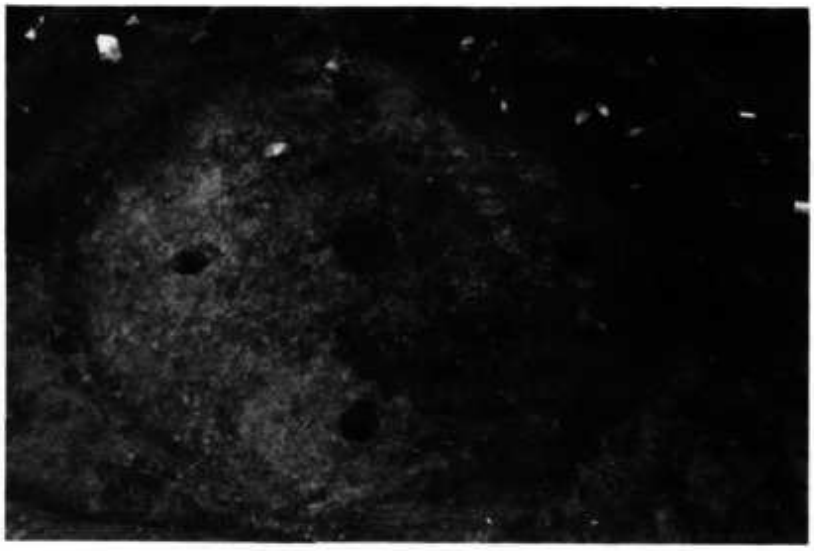


A 4 号住居址炉址

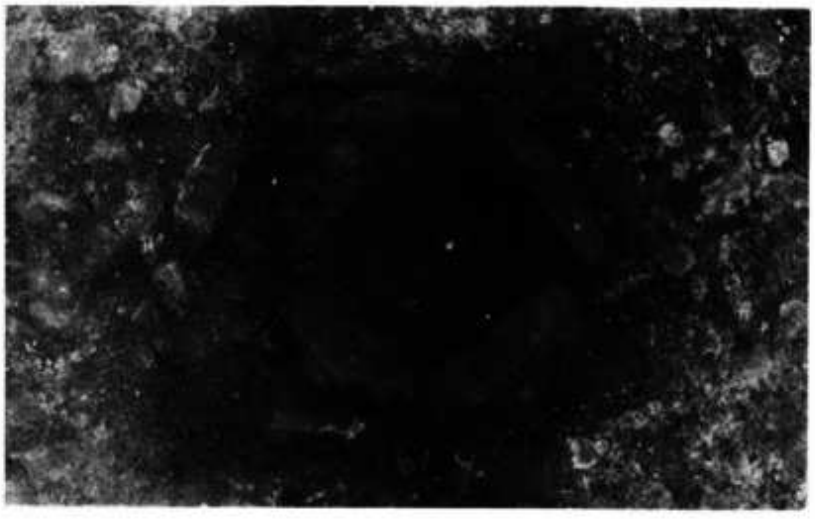
A 5 号住居址炉址

図版 6　A 4 ・ 5 号住居址

A 7 号住居址上部礫群

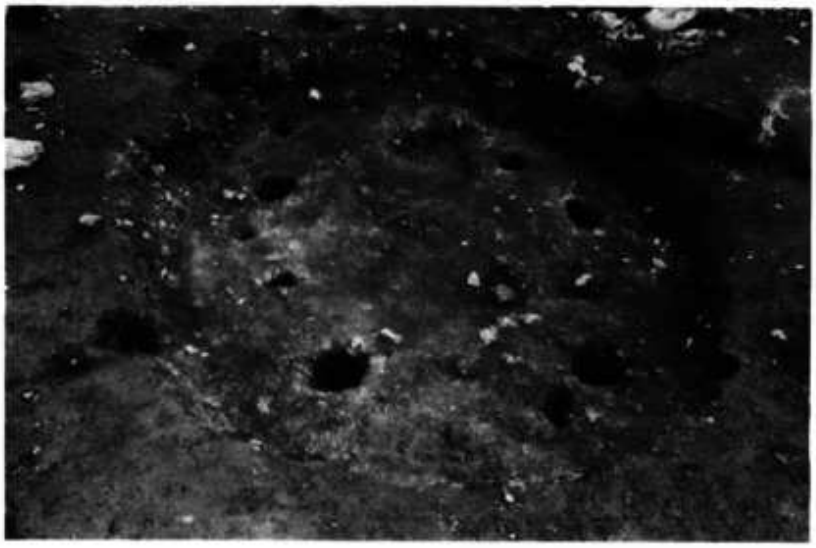


A 7 号住居址



A 7 号住居址炉址

図版 7　A 7 号住居址



A 6 号住居址

A 6 号住居址
土器、礫群出土状態

A 6 号住居址
礫群、石棒出土状態

図版 8　A 6 号住居址

8

7

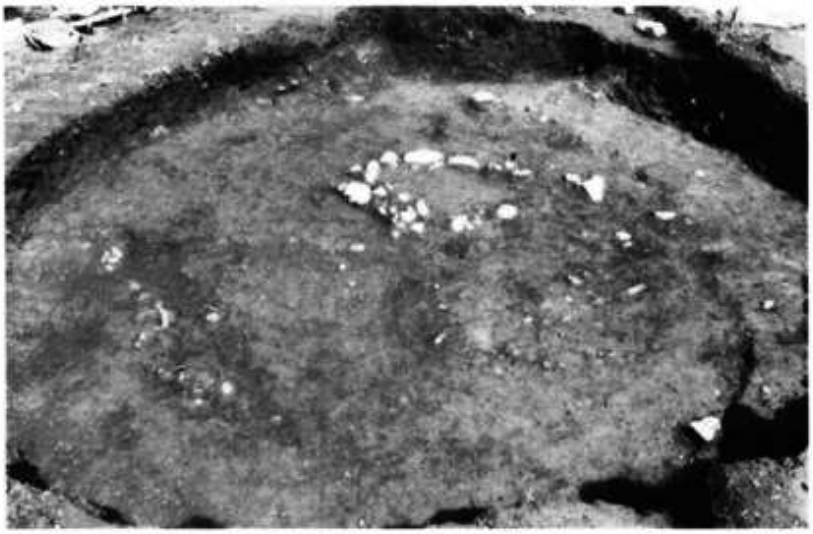
3

9

石棒

6

図版 9　A 6 号住居址遺物出土状態



A１７号住居址

同
釣手土器出土状態

同　炉　址

図版10　A17号住居址

A８号住居址
掘り下げ状態
（上方の炉はA17号のもの）

A８号住居址

A８号住居址炉址

図版11　A８号住居址

2

3

7

15

6

11

28（左）と24（右）

8

図版12　A 8 号住居址土器出土状態

17（左下は27）

21

16

24（左）と22（右）

26

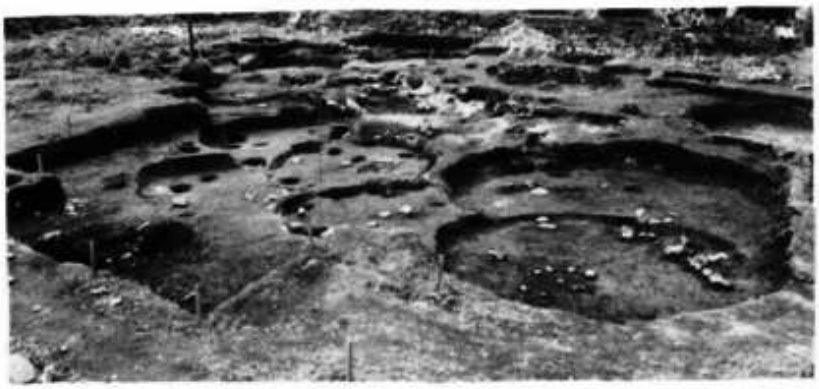
27

28（中央）と24（右）

図版13　A 8 号住居址土器出土状態

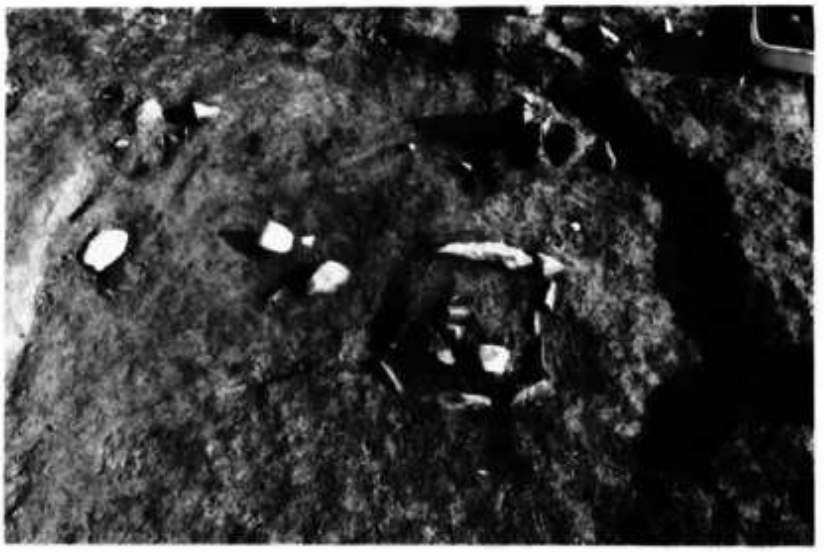
A 9～16 号住居址

A 9～16 号住居址



A 9～16 号住居址及びA地区全景

図版14　A 9～16号住居址

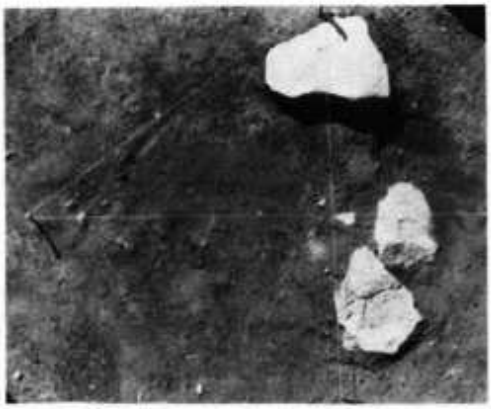


A 10号住居址

A 13号住居址
(右下はA10号住居址)

A 15号住居址
(左はA14号住居址)

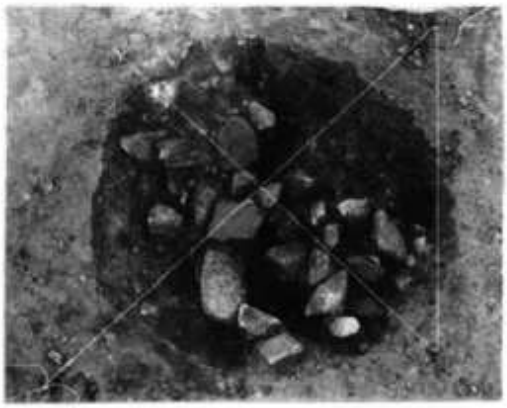
図版15　A10・13・15号住居址



A 9 号住居址炉址上面

A 14 号住居址炉址

A 10 号住居址炉址



A 14 号住居址炉址(1)

A 11 号住居址炉址

A 14 号住居址炉址(2)

図版16　A 9 ～11・14号住居址炉址

A 9 号住居址埋甕

A 13 号住居址土器出土状態(1)

A 10 号住居址埋甕

A 13 号住居址土器出土状態(2)

A 10 号住居址土器出土状態

A 15 号住居址埋甕（左）、土器出土状態

図版17　A 9 ～15号住居址土器出土状態

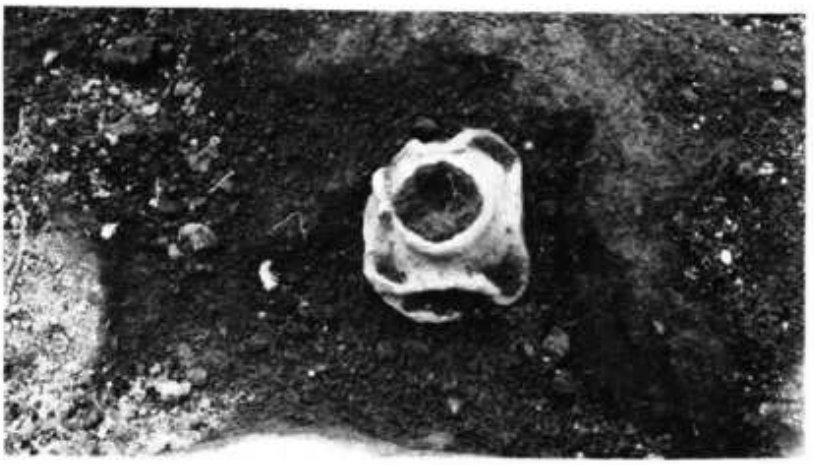
B 1 号住居址

B 2 号住居址

B 1 号住居址
掘り下げ途中

図版18　B 1 号住居址

配石



配石土器出土状態

列石

図版19　配石、列石

遺構外　土偶頭部

A 14 号住居址　釣手土器

A 10 号住居址　土鈴

0 地点　土器、石鏃

配石　磨製石斧

A 16 号住居址　土器

図版20　遺物出土状態

1－1

1－3

2－4

2－5

2－2

2－3

3－10

3－9

図版21　出土土器(1)　(以下左側数字は住居址番号　右側数字は遺物番号を表す)

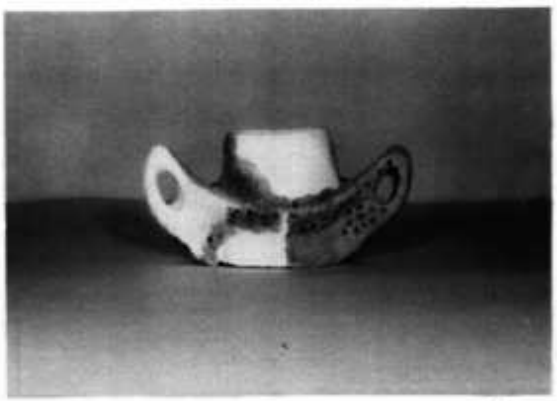
3－1

3－2（逆位）

3－8

3－4

3－5

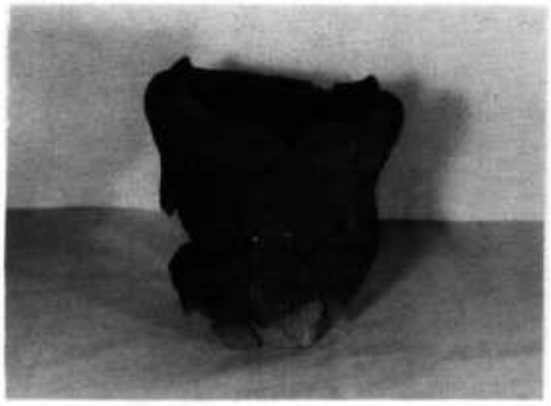


4－23

4－22

6－6

図版22　出土土器(2)



6－7

6－9

6－8

6－2

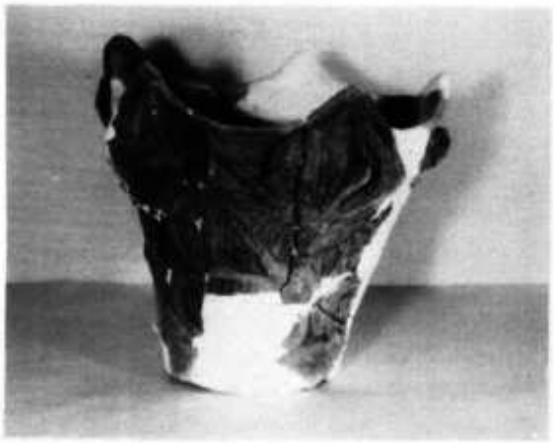
8－3

8－1

8－2

8－9

図版23　出土土器(3)



8－6

8－4

8－14

8－8

8－11

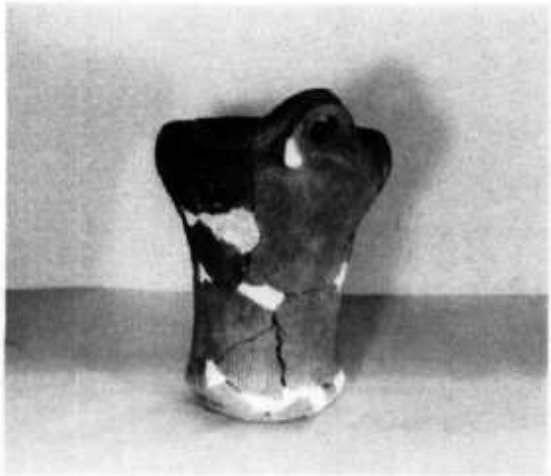
8－15

8－25

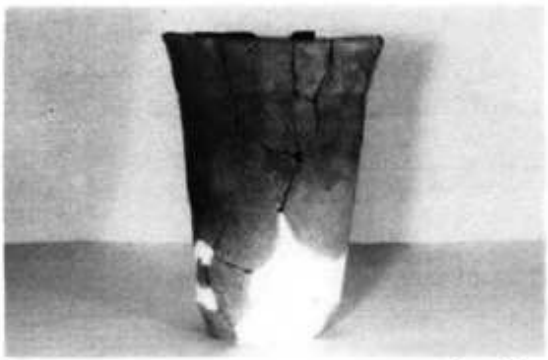
8－19

図版24　出土土器(4)

8 −26



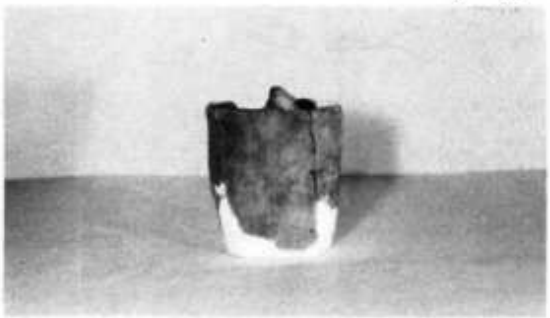
8 −24



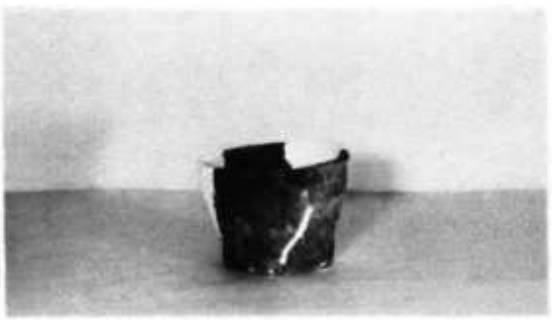
8 −17

8 −16

8 −18



8 − 21



8 −22

8 −12

図版25　出土土器(5)

9－1

9－2

10－5

10－4

10－6

13－15

12－11

(逆位)　13－12

図版26　出土土器(6)

13－13

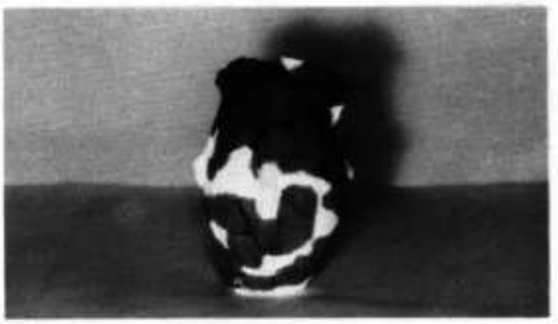
13－14

14－18

14－17

14－21

14－20



14－19

14－23

図版27　出土土器(7)

15－27

15－26

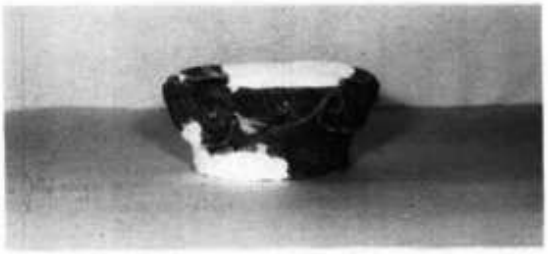
15－25

15－28

15－28

16－1

17－4

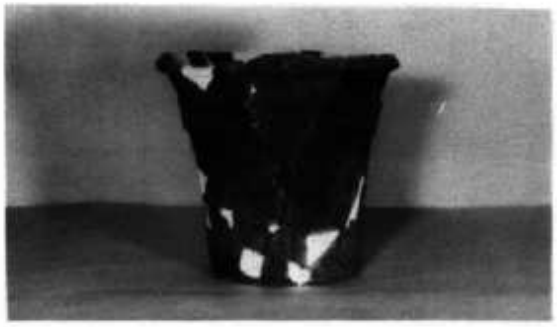


17－2

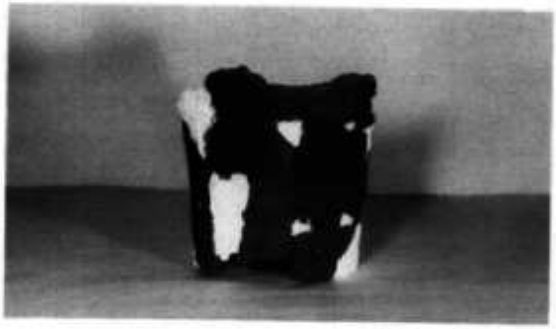
17－5

17－3

図版28　出土土器(8)



B1－2



B1－1

B2－2

B2－1

配石

8－7

遺構外

0地点－3

0地点－1

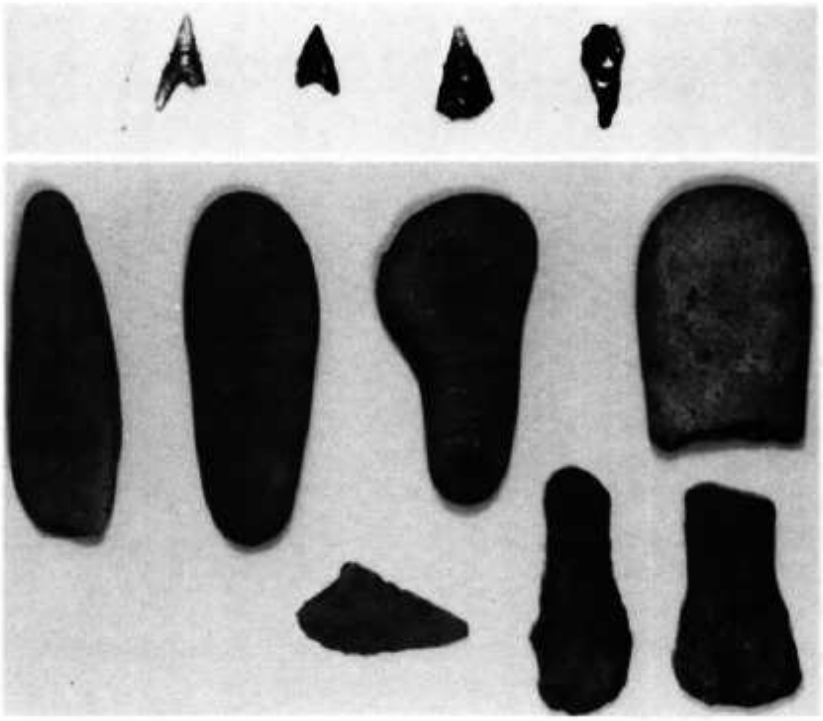
図版29　出土土器(9)

A 8 − 24

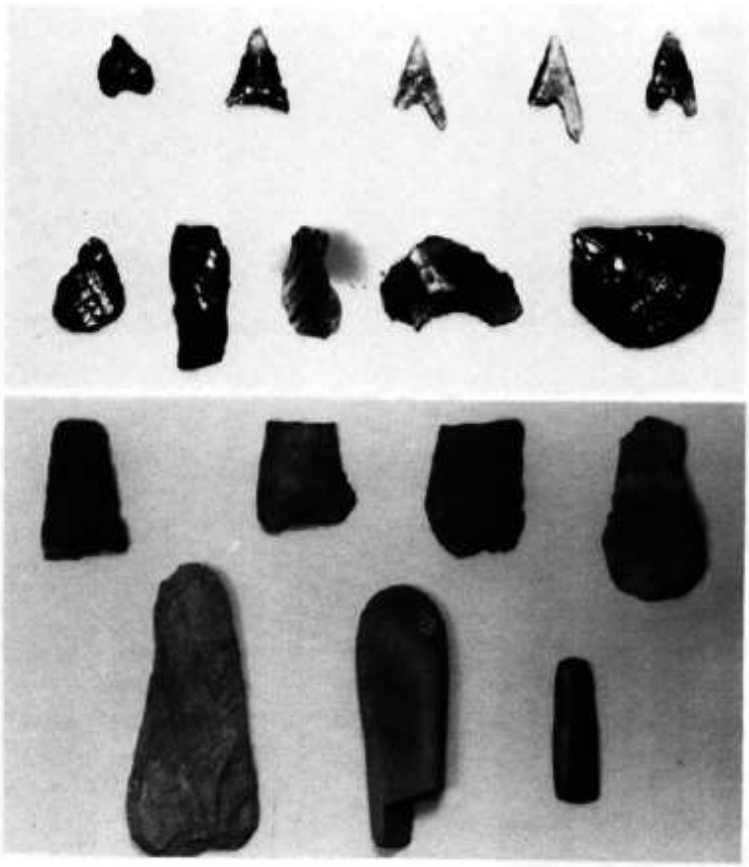
A17 − 5

B 2 − 1

図版30　土器細部

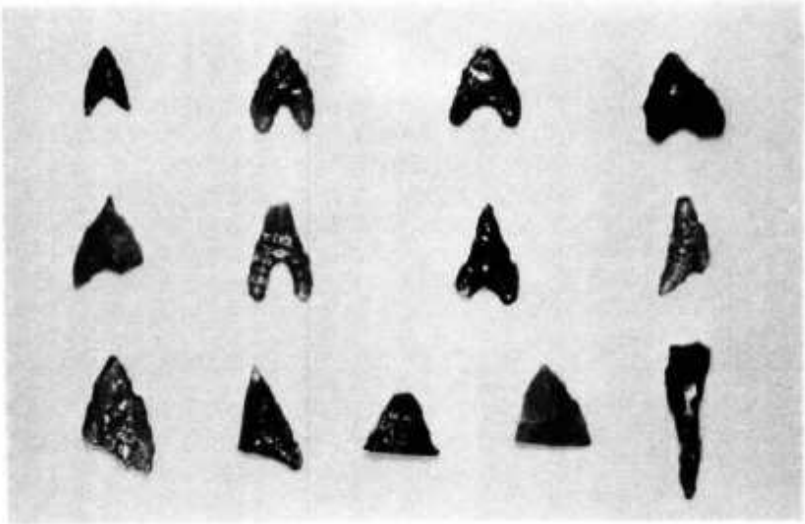


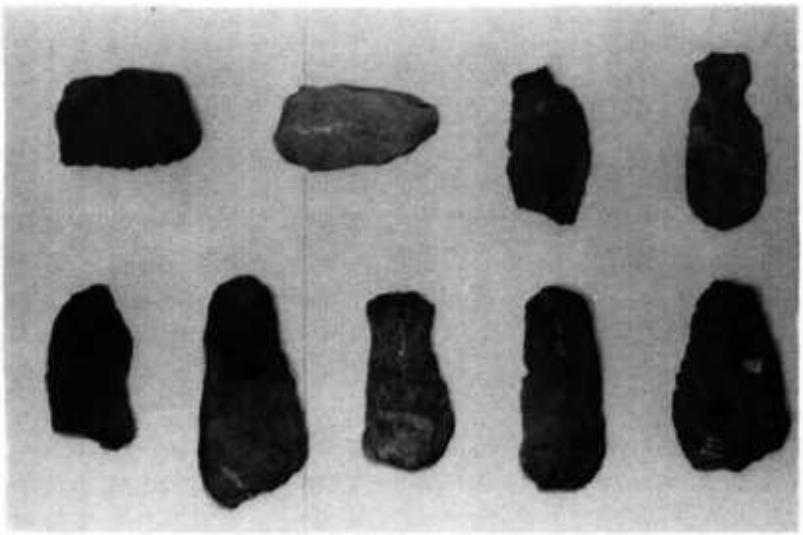
A 1 号住居址出土石器



A 2 号住居址出土石器

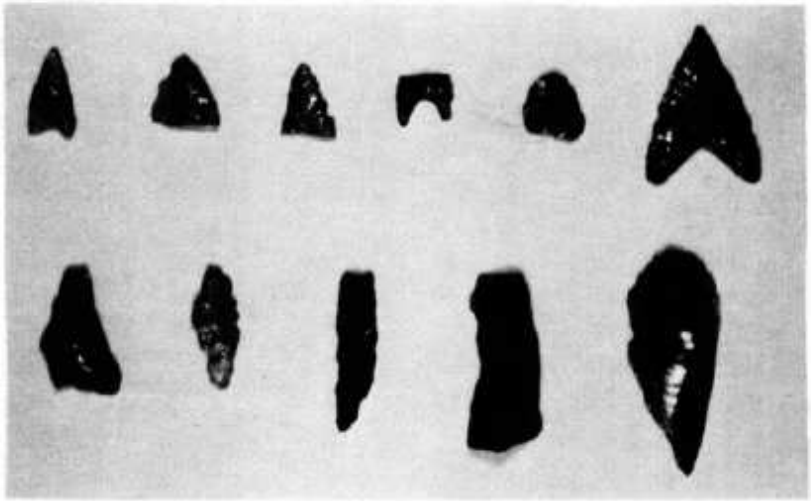
図版31　出土石器(1)

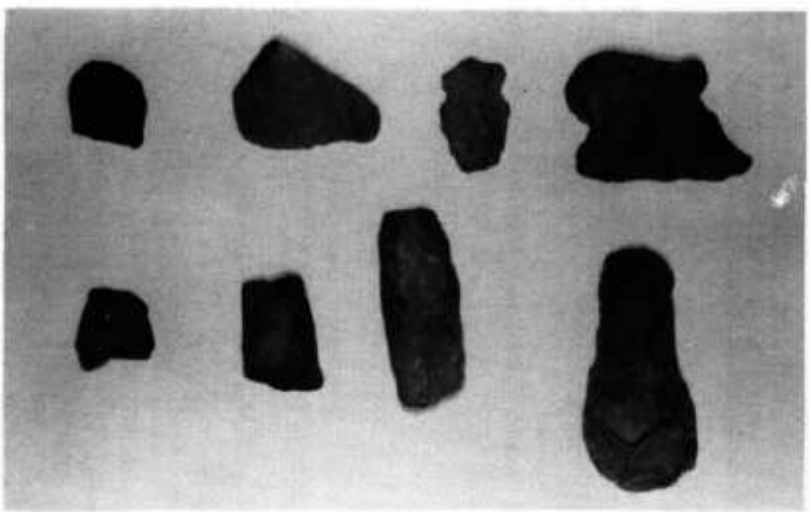


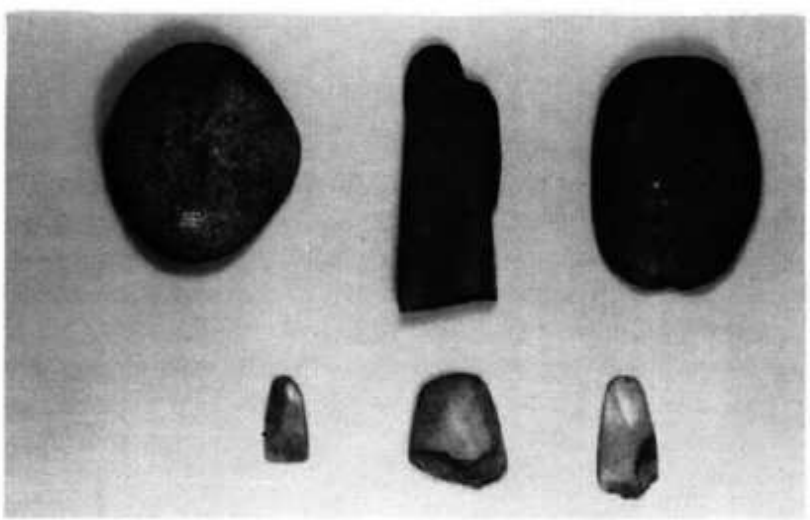


A 3号住居址出土石器

図版32　出土石器(2)

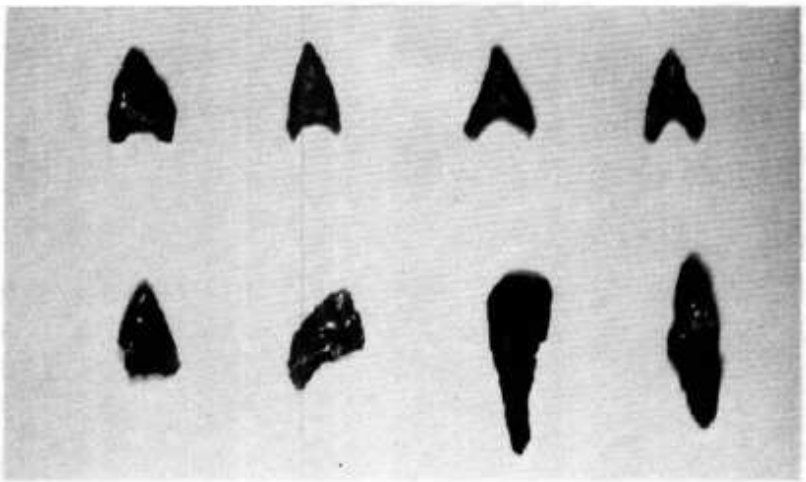


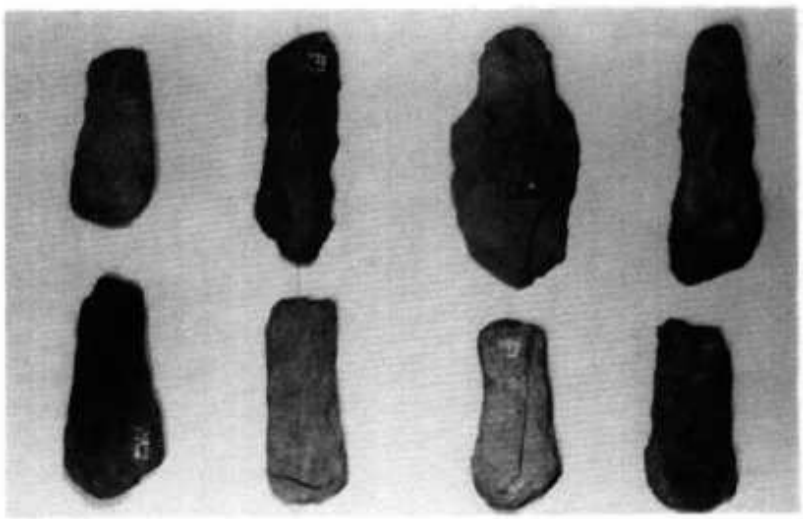


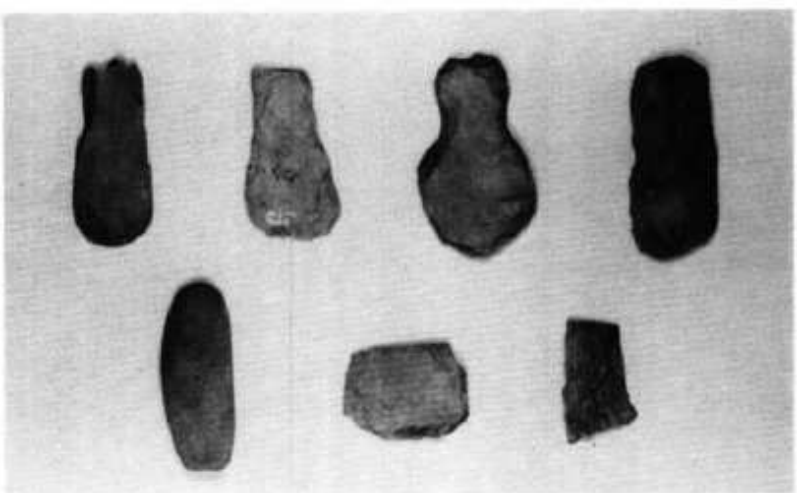


A 4 号住居址出土石器

図版33　出土石器(3)

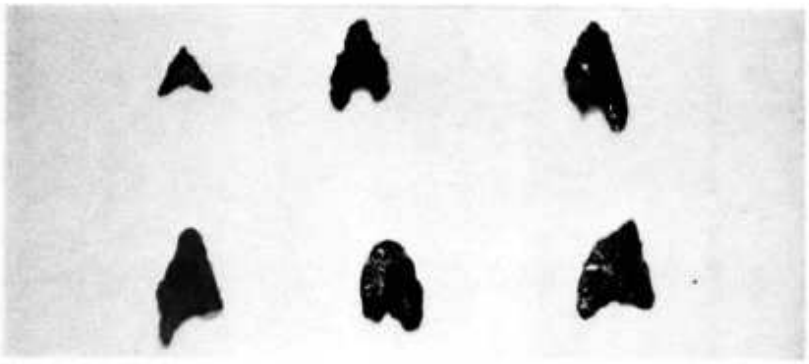


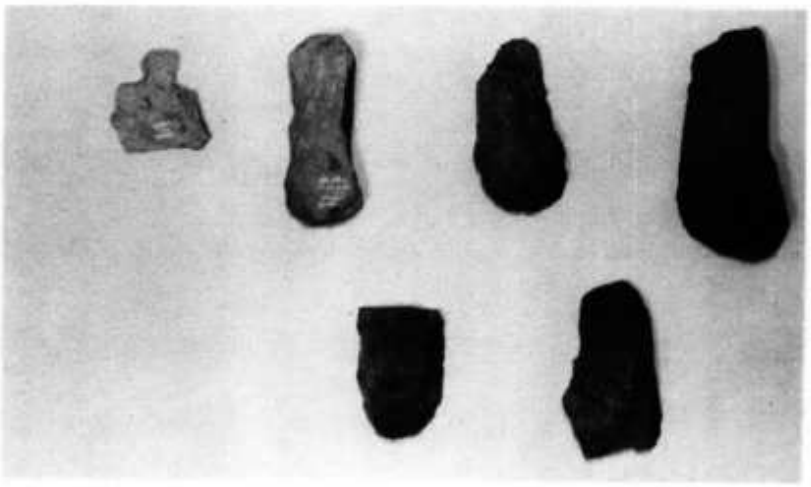




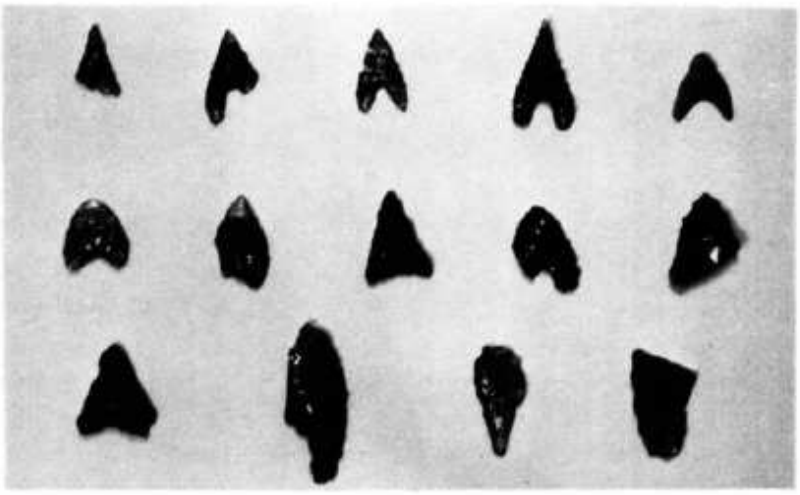
A５・６号住居址出土石器

図版34　出土石器(4)



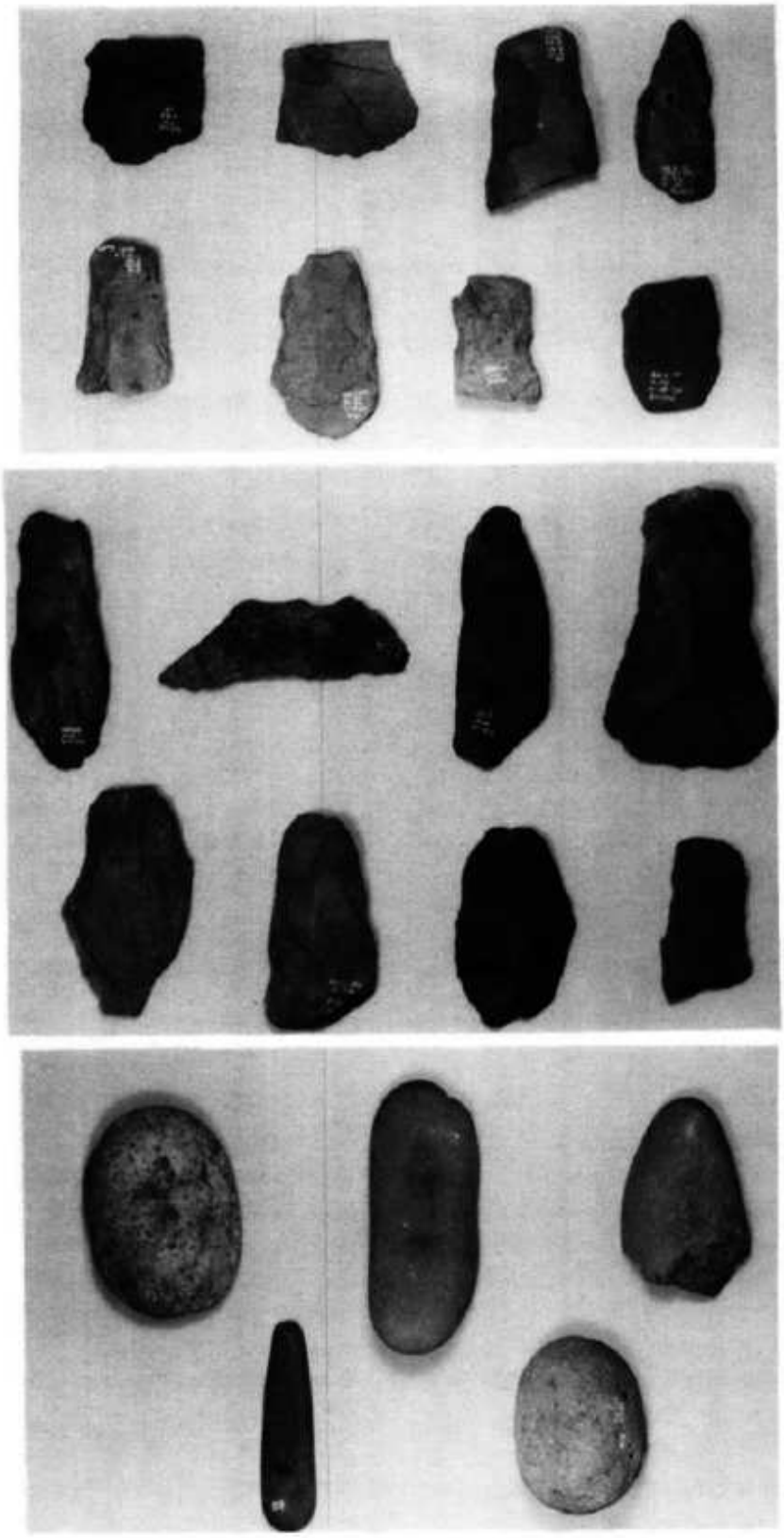


A 7号住居址出土石器



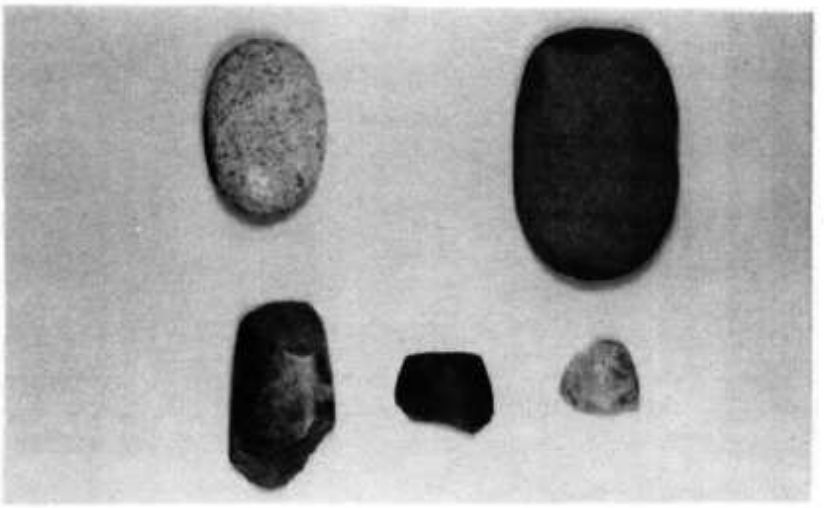
A 8号住居址出土石器(1)

図版35　出土石器(5)

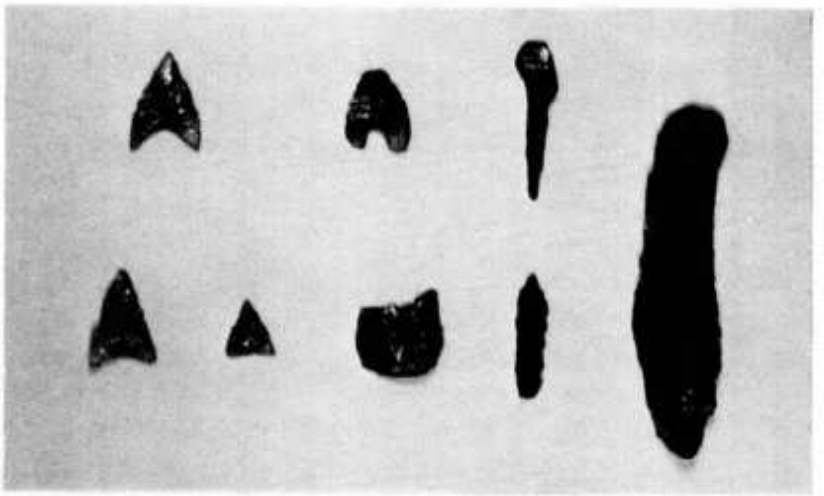


A 8 号住居址出土石器(2)

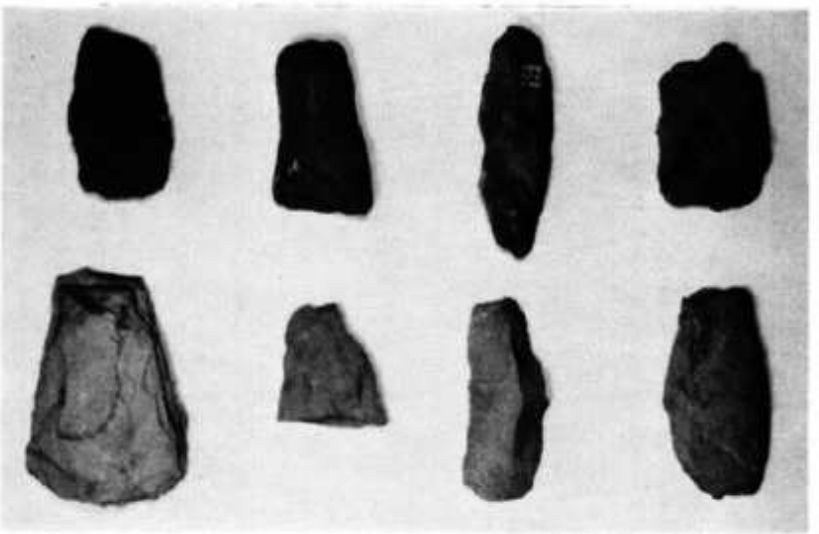
図版36　出土石器(6)



A 8 号住居址出土石器(3)

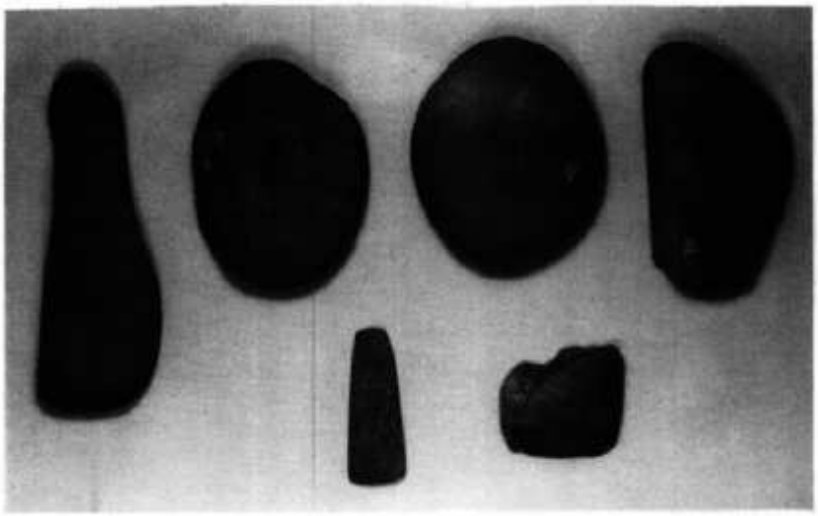


A 9・10号住居址出土石器

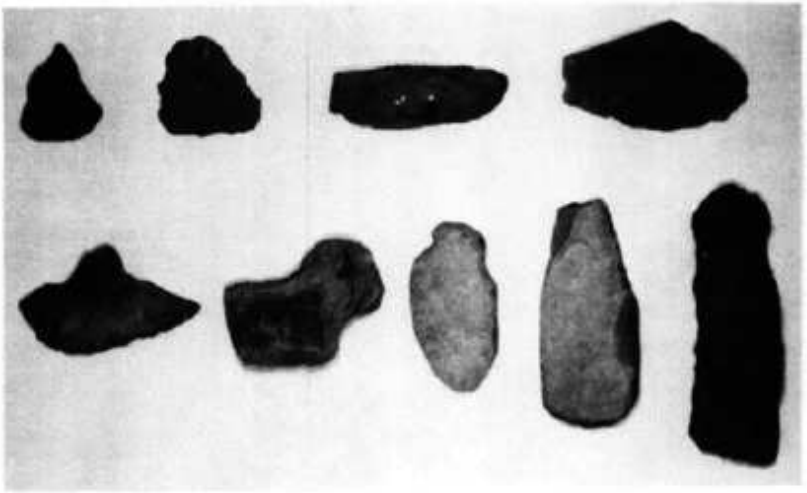


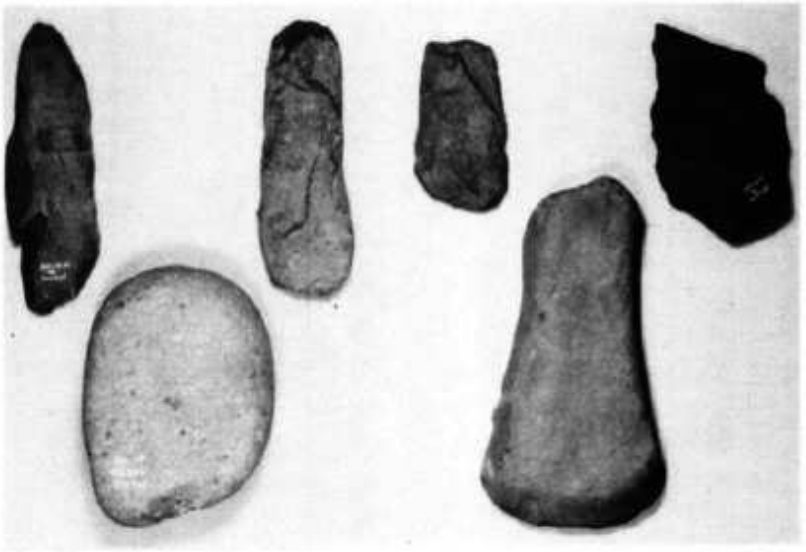
A 9 号住居址出土石器(1)

図版37　出土石器(7)



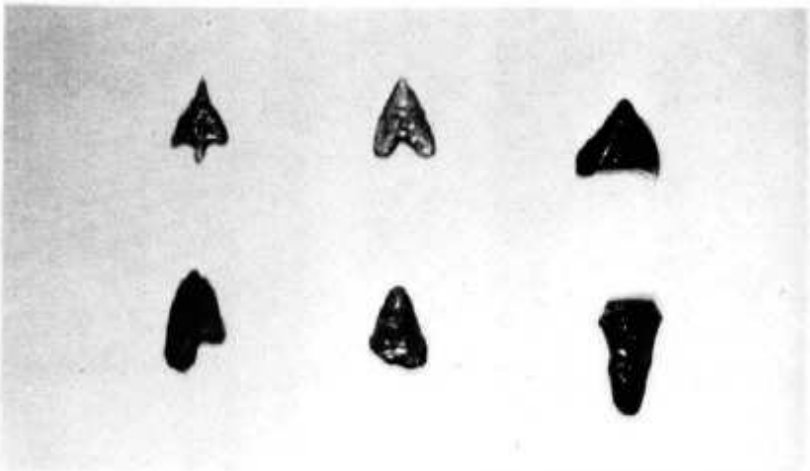
A 9号住居址出土石器(2)



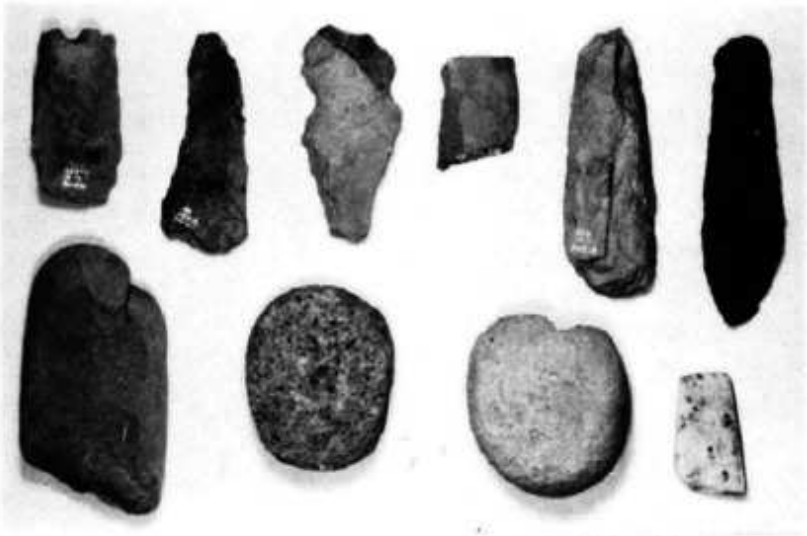


A 10号住居址出土石器

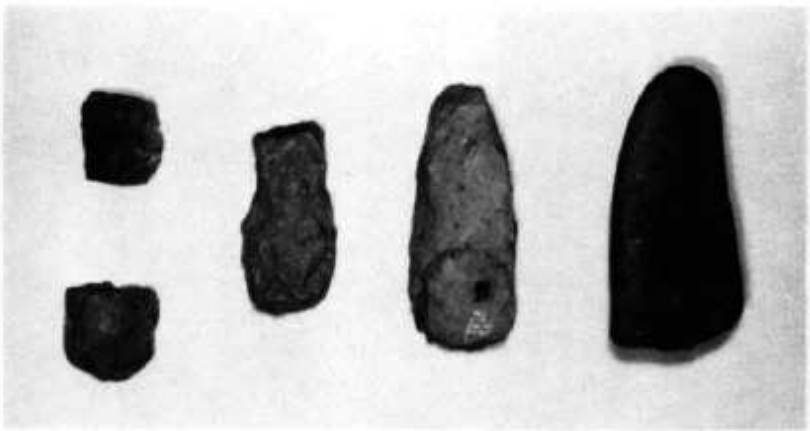
図版38　出土石器(8)



A11・13号住居址出土石器

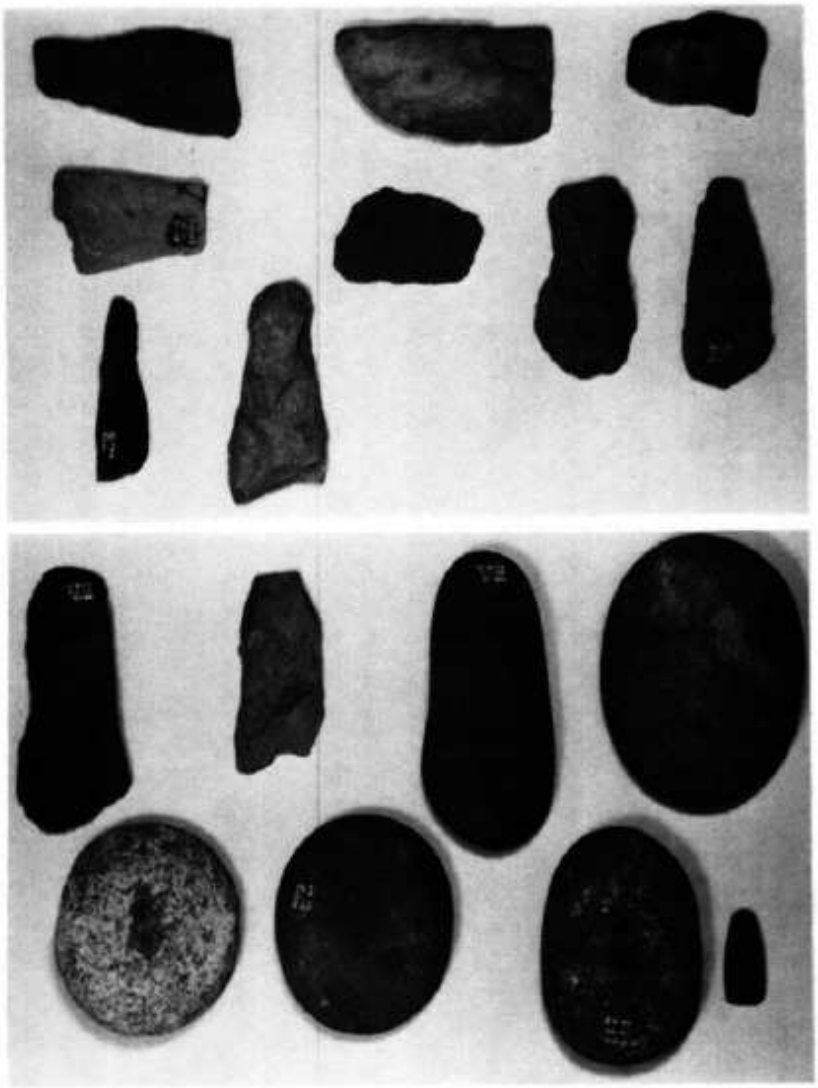


A11号住居址出土石器

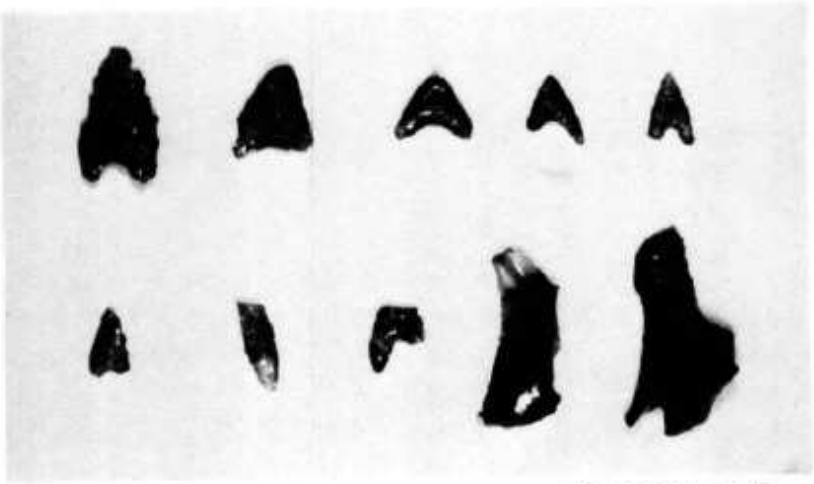


A12号住居址出土石器

図版39　出土石器(9)

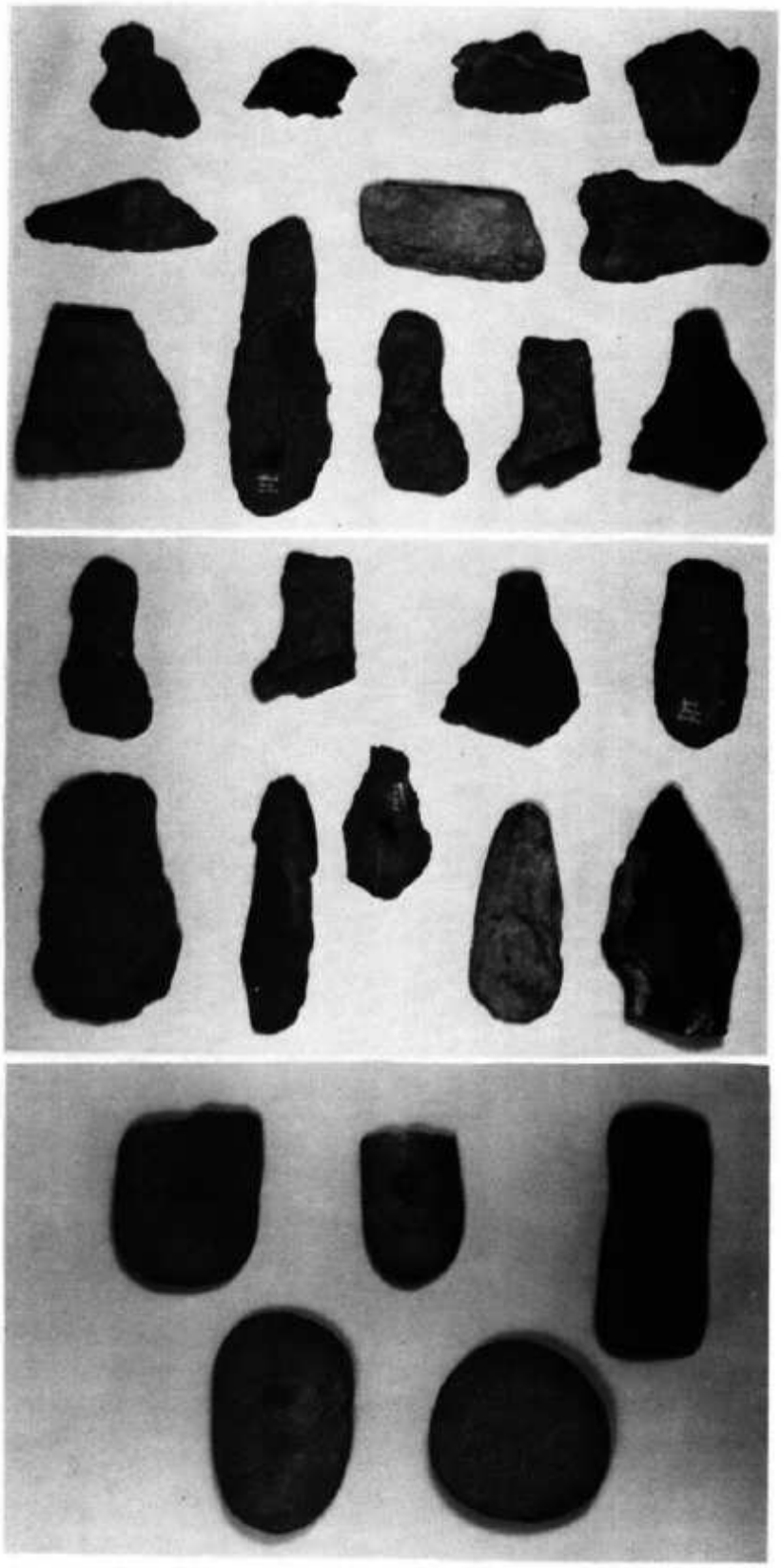


A13号住居址出土石器



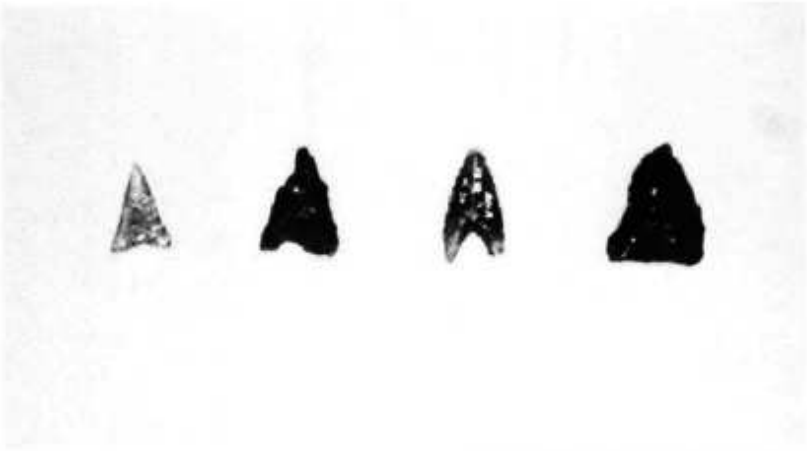
A14号住居址出土石器(1)

図版40　出土石器(10)

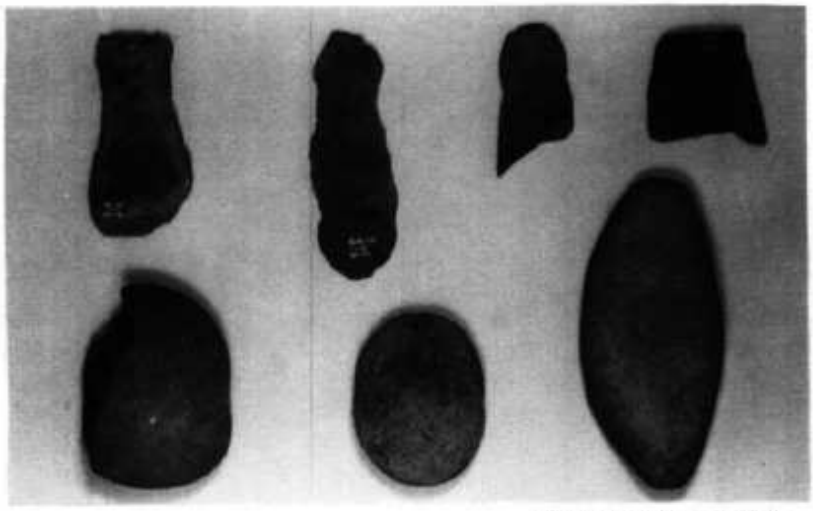


A14号住居址出土石器(2)

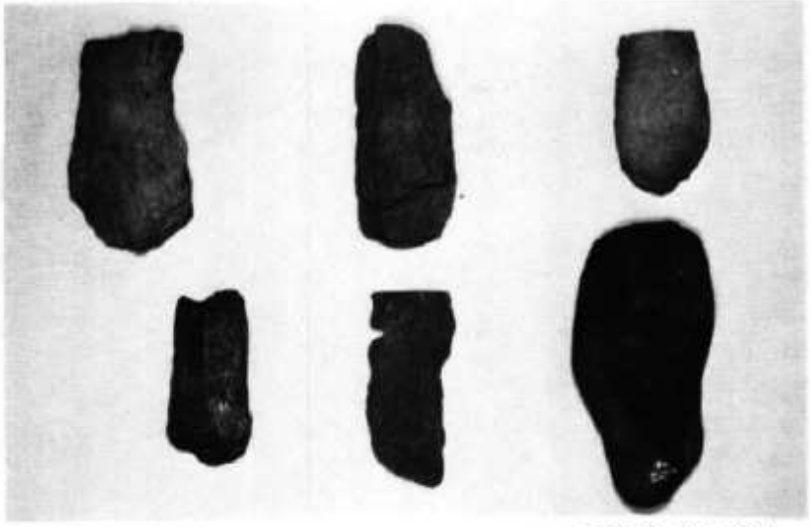
図版41　出土石器(11)



A15号住居址　配石出土石器

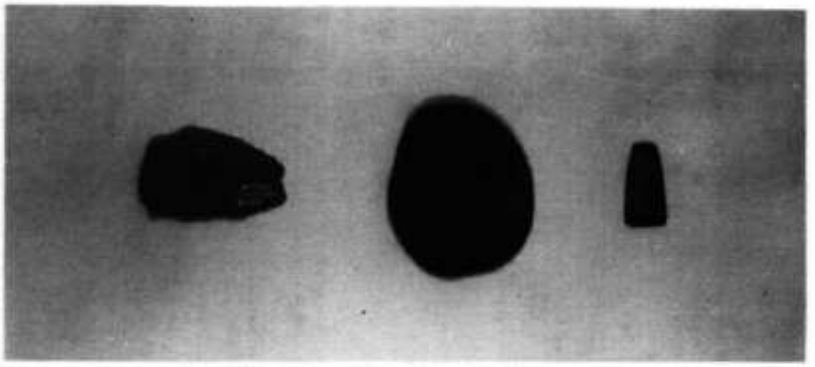


A15号住居址出土石器

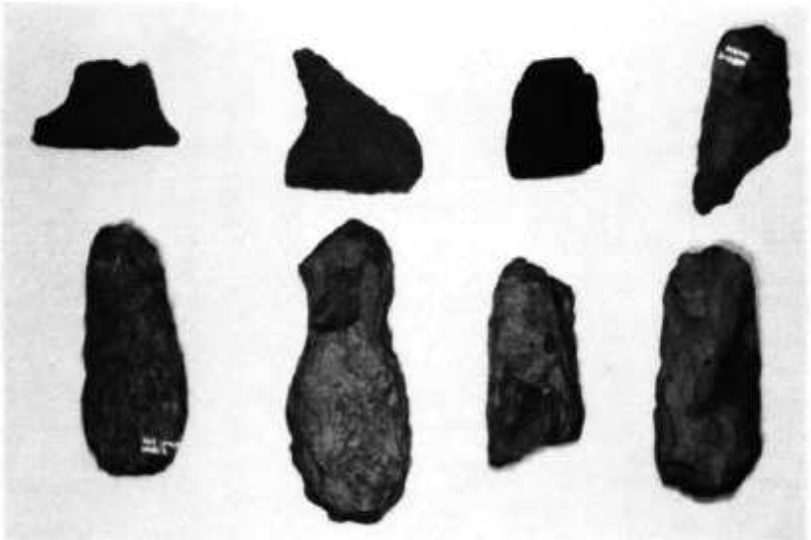


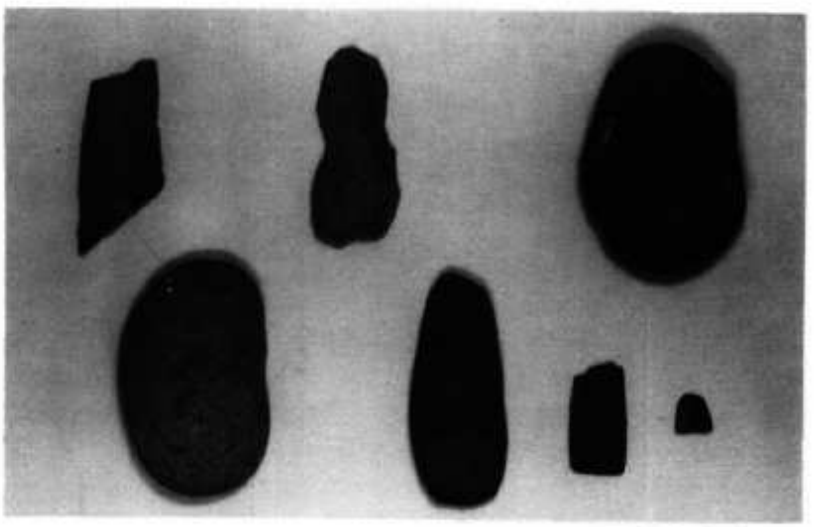
A16号住居址出土石器

図版42　出土石器(12)



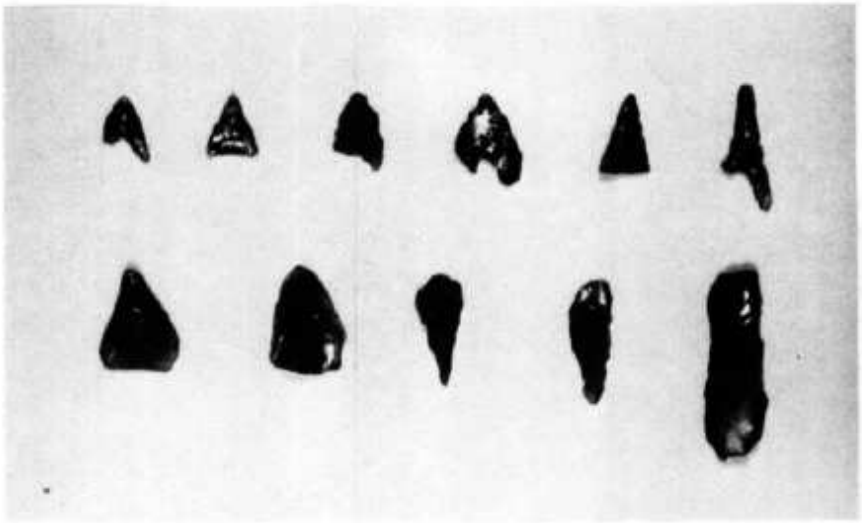
配石出土石器



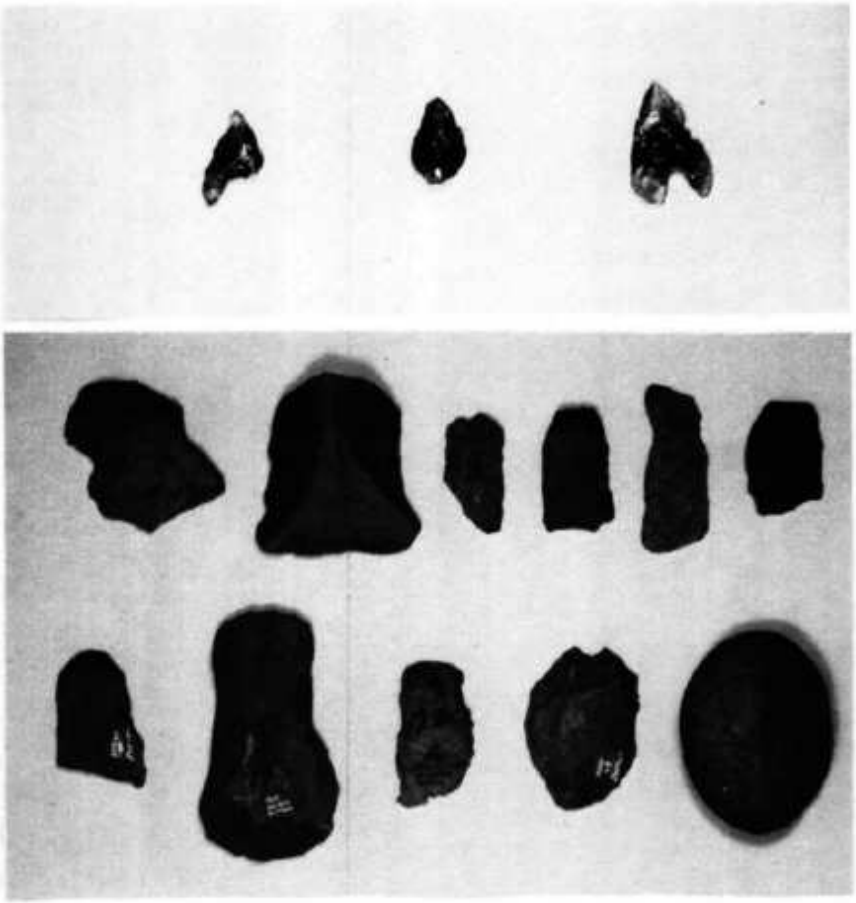


B地区出土石器(1)

図版43　出土石器(13)

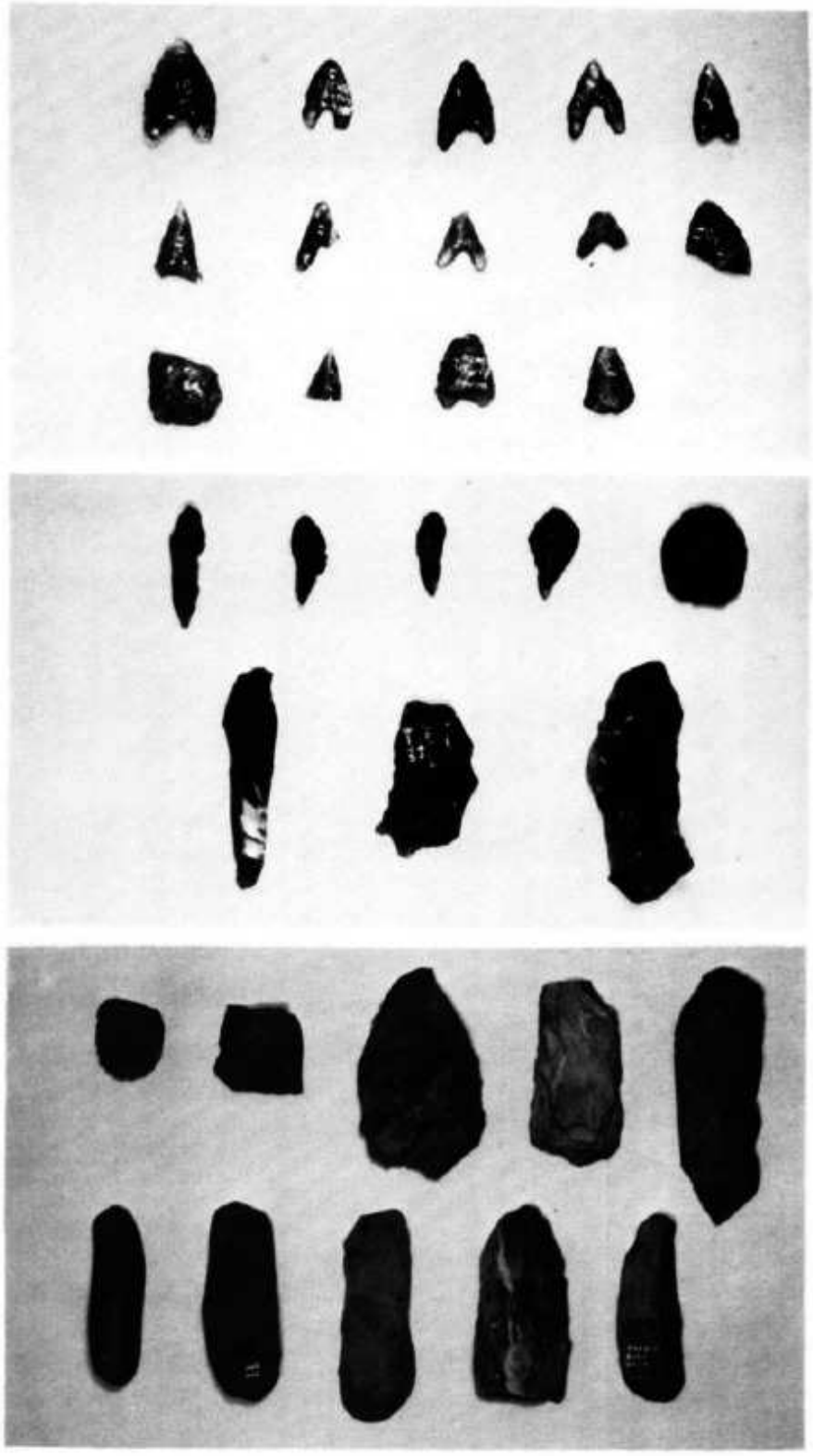


B地区出土石器(2)



0地点出土石器

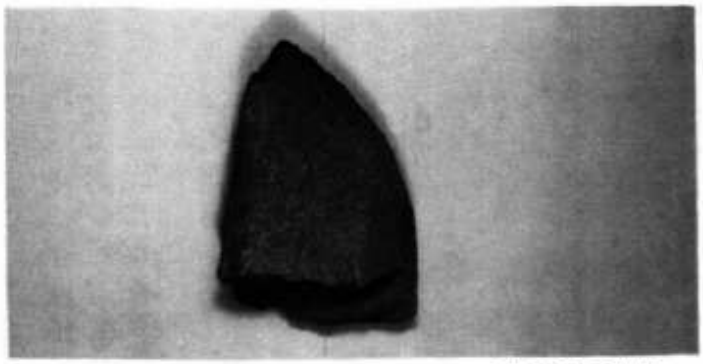
図版44　出土石器(14)



表採石器

図版45　表採石器

表採石器

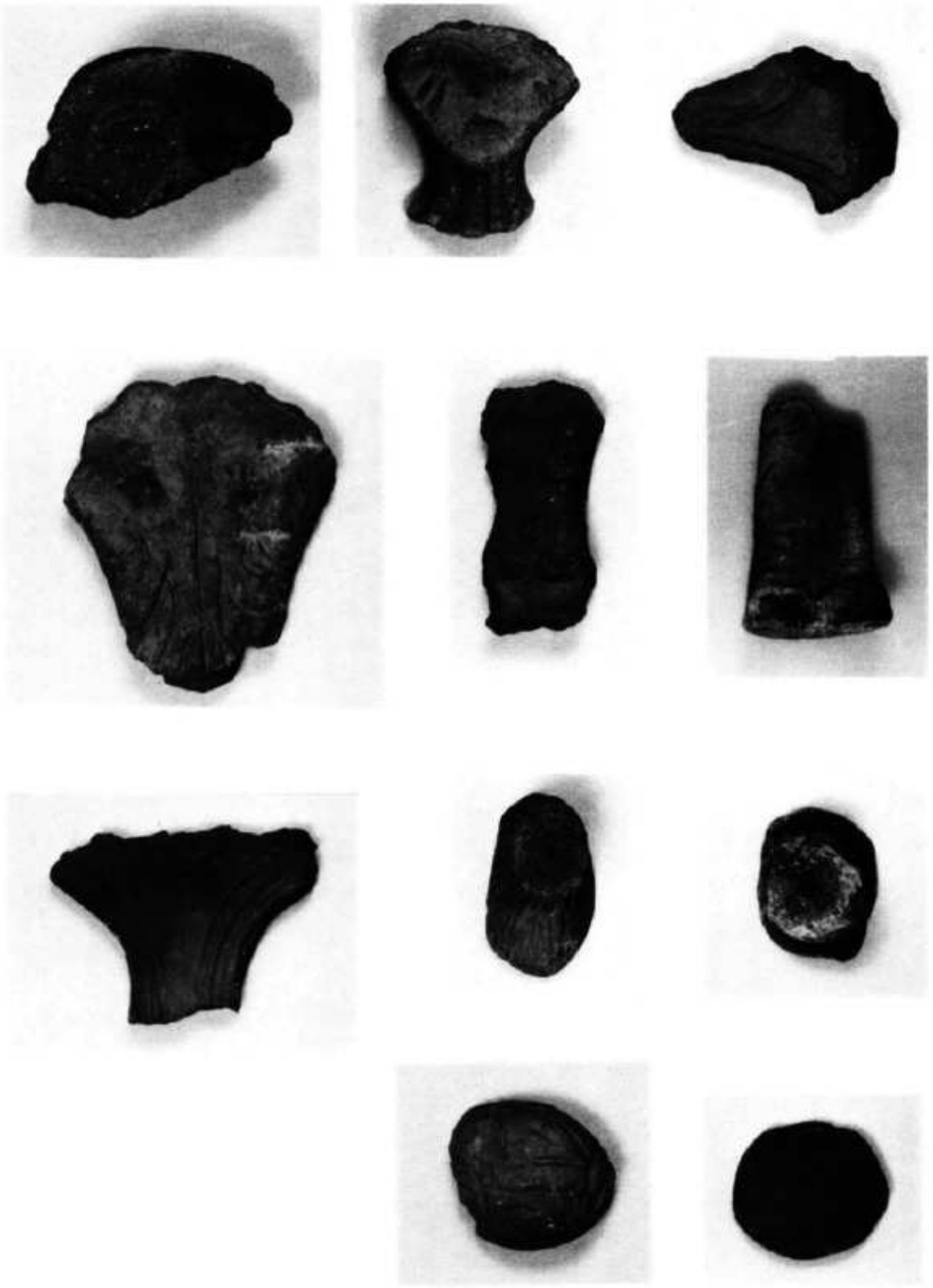


列石出土石皿片

A 7 号住居址出土石皿

A 6 号住居址出土石棒

図版46　出土、表採石器



図版47　出土土製品

西から

南東から

南から列石と堀を見る

図版48　調査地（A地区）近景

図版49　調査スナップ

松本市文化財調査報告 No. 20
－松本市内田雨堀遺跡－

昭和56年3月20日　印刷
昭和56年3月31日　発行
発行　松本市教育委員会
印刷　㈲　福　岡　印　刷　所